

連載専門誌

対人援助学マガジン



vol. 14 No. 4

第56号

March 2024

対人援助学会

No.56 *M O K U J I*

目次		002
ハチドリの器	見野 大介	004 -
執筆者@短信	執筆者全員	005 - 016
付け加えることができる価値は何か？	千葉 晃央	017 - 021
臨床社会学の方法 (44)	中村 正	022 - 031
解放の心理学 (4)	藤 信子	032 - 034
カウンセリングのお作法 (38)	中島 弘美	035 - 037
晩年D・A・N通信	団 士郎	038 - 045
幼稚園の現場から (56)	鶴谷 圭一	046 - 052
福祉系対人援助職養成の現場から (56)	西川 友理	053 - 058
ああ、相談業務 (16)	河岸 由里子	059 - 063
帰ってきた心理学の縦横無尽 (復活連載)	サトウタツヤ	064 - 081
きもちは言葉をさがしている (52)	水野 スウ	082 - 092
路上生活者の個人史 (10)	竹中 尚文	093 - 094
男は痛い！ (51)	國友 万裕	095 - 102
役場の対人援助論 (47)	岡崎 正明	103 - 107
臨床のきれはし (24)	浅田 英輔	108 - 109
発達検査と対人援助学 (15)	大谷 多加志	110 - 112
講演会&ライブな日々 (37)	古川 秀明	113 - 119
立場が変わると何かが見える (8)	坂口 伊都	120 - 126
周辺からの記憶 - 東日本大震災家族応援プロジェクト - (42)	村本 邦子	127 - 161
精神科医の思うこと (32)	松村 奈奈子	162 - 164
馬渡の眼	馬渡 徳子	165 - 168
東成区の昭和 やぶにらみ日記	柳 たかを	169 - 177
心理コーディネーターになるために	山下 桂永子	178 - 181
そうだ、猫に聞いてみよう (32)	小池 英梨子	182 - 190
先人の知恵から (43)	河岸 由里子	191 - 196
うたとかたりの対人援助学 (28)	鵜野 祐介	197 - 202
ああ結婚 (29)	黒田 長宏	203 - 206
PBLの風と土 (28)	山口 洋典	207 - 212
接骨院に心理学を入れてみた (27)	寺田 弘志	213 - 218
現代社会を『関係性』という観点から考える (27)	三浦 恵子	219 - 225
保育と社会福祉を漫画で学ぶ (23)	迫 共	226 - 229

「余地」―相談業務を楽しむ方法― (26)	杉江 太朗	230 - 232
統合失調症を患う母とともに生きる子ども	松岡 園子	233 - 235
原田牧場Note (16)	原田 希	236 - 237
サイコロジー (4)	川畑 隆	238 - 242
応援、母ちゃん (16)	玉村 文	243 - 245
HITOKOMART (15)	篠原ユキオ	246 - 249
川下の風景 (13)	米津 達也	250 - 252
こころ日記『ぼちぼち』PartⅢ	脇野 千恵	253 - 254
父が自分の身を呈して教えてくれたこと	高名 祐美	255 - 257
幾度となく会い、語り合うことの意味	本間 毅	258 - 275
一語一絵 (13)	畑中 美穂	276 - 278
対人援助をリポートするこの一冊 (23)	二階堂 哲	279 - 280
対人援助をリポートするこの一冊 (24)	渡辺 修宏	281 - 284
島根の中山間地からWork as Life (12)	野中 浩一	285 - 291
かぞくのはなし	きむらあきこ	292 - 293
ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ! (8)	高木 久美子	294 - 303
こかげのにちじょう (7)	鳴海 明敏	304 - 304
私はここにいる ―現象学としての書道-(7)	櫻井 育子	305 - 306
コソダテノシンリ (6)	中谷 陽輔	307 - 314
教室の窓から	來須 真紀	315 - 316
社会科の授業を対人援助学の視点から	内田 一樹	317 - 319
ある訪問看護師のアタマの中	山岸 若菜	320 - 326
人生は対応のバリエーション	宮井 研治	327 - 333
新連載 けふばあちゃんからの手紙	乾 京子	334 - 335
編集後記	編集長&編集員	336 - 337
編集長からの号外	編集長	338

ハチドリの器 39

見野 大介

Mino Daisuke



左上：焼成前の器たち

右上：デザートカップの削り仕上げ

右下：波紋丸皿のタタラ成形

左下：3寸鉢のロクロ成形

ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ
ψ

第 5 6 号



執筆者 @ 短信

高名 祐美

令和 6 年 1 月 1 日。1 年の始まり。16 時 10 分、スマホがいつせいに鳴り響く。そしてこれまでに体験したことのない大きな揺れに襲われた。震度 7。大津波警報が発生される。2 回目の大きな揺れで動くことができず、道路に座り込んでいた。今何が起きたのか。起きているのか。眼の前の光景と地面の揺れに思考が停止する。自分は夫と二人で、次女夫の実家から自宅に帰ろうとして屋外に出たところだった。

私の令和 6 年は、こうしてスタートした。道路の亀裂・陥没・隆起、断水、屋外のブロック塀やフェンスの陥没、廊下や壁、天井の損壊・・・日常生活は不便を極めた。水のありがたさを痛感し、日々給水に通う。しかしなんとか自宅で生活できることを喜びつつ、仕事も再開。最近はボランティアにも取り組んでいる。我が家は 40 日目にして通水し、不便が解消されているが、能登復興への道のりはまだまだ遠いと感じる今日このごろ。

父が自分の身を呈して
教えてくれたことⅢ

P255～

水野スウ

元旦の能登半島地震から 2 ヶ月がたちました。30 年余り前、反原発の集まりでよ

く能登に行っていたので、能登にはその時以来の親しい人たちがいっぱいいます。心配でたまりませんでした。今号は、大きな地震を体験した能登の友人たちのこと、能登を応援するいろいろさまざまなつながりのこと、それが私にはまるで能登曼荼羅みたいにみえること、などなど綴っています。

つい先日、若いお父さんからこんな話を聞かせてもらいました。元旦の日の夕方、彼は家族と一緒に奥能登の妻の実家に向かう途中、震災にあつてその先に行けなくなりました。金沢に引き返そうにも、通ってきたばかりの道路は寸断されて通行不可。

ネットも通じず情報のほとんどない中、彼は元旦の夜と 2 日の夜、親子 4 人で奥能登の避難所の横で車中泊したそうです。避難所はすでに地域の人たちでいっぱいだったので。

2 日の真夜中、7 歳の息子さんが急に目をさまして、オシッコ！と言うので、今夜だけ特別だよ、といって、お父さんは坊やと一緒に車から出て、避難所になっている中学校の校庭のすみで、親子で並んで立ちションを。「その時ね、しながら見上げた夜空がね、もう、もう、満天の星で！ すっごくきれいだったんです、息子と見れてよかったなあ～！ あの星空、俺は絶対に、忘れないです」

どこの学校か聞いたら、柳田中学校。柳田は能登でも特に星がきれいである有名な星空のまちなんです。とびきり非日常の体験の中で、父と子で並んで見あげた満天星の夜空、それはそれはきれいだったろうなあ。

この話、私も忘れたくなくて FB に投稿したらコメントがたくさんつきました。その中に、本文にも登場する、珠洲で年越しをして地震にあった金沢の友だちの書き込みもありました。彼女も元旦の夜、友人たちと車中泊をしていたのです。珠洲もきれいな星空で、流れ星まであったとか。そしてこんなことも書いてくれていました。

「女子 3 人で野シッコしました、人のいないところに行つて雪を掘つて、、、。1 人がしてる時、2 人は壁になってガードして、かわり交代でおそわれないように、ってことも注意していました」ほんとにリアルな、こ

れもきつと忘れられない、震災の夜のできごと。

きもちは言葉をさがしている
P82～



馬渡 徳子

先ずはじめに、元旦の能登半島地震に対し、団士郎さん、早樫一男さんのご指導の下で 20 年継続してきた「いしかわ家族面接を学ぶ会」と、マガジン執筆者でもある水野スウさんと共催 16 年目の「松浦幸子さんと学ぶ SST」に集う全国の仲間の皆さんより、沢山の応援メールやお電話、お手紙、支援活動支援金や支援物資を賜りましたことを、事務局の一人として心より御礼を申し上げます。

日を追う毎に、ニュースや新聞等で報道されていない県内広域に及ぶ家屋や道路、様々な生業の甚大な被害状況が明らかになっています。上下水道の復旧が 6 月にまで及びそうな市町もあり、休止中の原子力発電所においては後出しの情報ばかりで、直近二週間の震度 4 を超える地震が全て所在地にて不安が募ります。

被災から 1 ヶ月半、過去の大災害のように社会経済的格差が如実に現れてくる時期でもあり、県民の多くが先の見えない不安な日々を過ごしています。

その様な中、私は、金沢大学教育系教職員の指揮下で、セーブ・ザ・チルドレンとともに、1・5 次避難所に設置したキッズスペースの立ち上げから運営に関わり、具体的には県学童保育連絡協議会指導員会と県保育士会とともに子どもたちの日中のケアにあたっております。

本文では、震災を経て、子ども食堂としてどのような取り組みをしているのかについてご報告したいと思います。

馬渡の眼
P165～

乾 京子 新連載

はじめましてのご挨拶

今回、初めての投稿です。マンションで10年、引っ越して自宅で30年、毎週木曜日の3時半から7時、「こども文庫」(まあ、本のある遊び場とでも申しましょうか?)をしています。この間、いろんな子どもたちや、本や、大人たちとの出会いがありました。ちいさな事件や大きな成長の場面もありました。このマガジンの常連さんからも「そんな文庫の話、書いてみたら?」と勧められながら、なかなか踏み出せませんでした。このお正月、能登の地震から、(何が起るかわからないなあ。)そう思って、文庫の日誌を広げていたら、いろんな子どもたちの顔が浮かんできました。そんな顔を思い出しながら、これからお手紙を書いてみようと思います。どうなりますか?いつまで続くかわかりませんが、お付き合いいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

じゃりんこ文庫
P334～

山岸 若菜

前回の短信で、訪問看護に必要にせまられてチョコボールを買っているのに、エンゼルが出たためしがない!と書きましたが、その直後に銀のエンゼルが出ました!!でも、銀のエンゼルって5枚も集めないともらえないんですよ。20000円近くつぎ込んでやっと1枚出たというのにまだ4枚も必要とは…。こうなったら意地になって頑張ります。

ところで精神科訪問看護を13年経験しましたが、4月から転職することになりました。看護師になりたい学生さん達に関わる仕事です。今は仕事内容というより、職場の文化になじめるかどうかの不安の方が大きいです。何とかなるのですが、久しぶりに全然違う仕事をするのは緊張しますね。同僚には「山岸さんは宇宙人枠なので大丈夫です。」と励ましてもらいました。いや、ディスられました。新しい職場でたくさん面白いネタを見つけてこようと思って

います。

ある訪問看護師のアタマの中
P320～

宮井 研治

今回の本編は、前回からの続編「支援の資源としての音楽」についてです。私の個人な支えとしての音楽について、2回連続で書かせていただきます。書きながら、過去の音楽との様々な出会いが思い出され、少々取っ散らかってしまいました。

前回も、執筆中にブレディみかこさんの著書に触発されたエピソードをこの通信欄に書きました。今回も、ザ・ビートルズのことに触れまっせ!みたいな前振りをして執筆をしておりましたところ、あら不思議、NHKのBSで「映像の世紀 バタフライエフェクト」というシリーズ物で「ビートルズとロックの革命」という番組が放送されたではありませんか!何たる偶然!(このように単なる偶然を人は「共時性」と呼ぶのでしよう、わたしユング派ではありませんが)ほんとによくできた番組で、ビートルズは単なる音楽ユニットではなく、音楽以外の文化、思想までも変革していった革命であったという事実が映像としてまとめられていました。その番組を視聴して何が嬉しかったって、私もバタフライエフェクトの端のまた端の隅っこに居たんだという認識でした。ビートルズと繋がってた～!ってことです。では本編をどうぞ。



人生は対応のヴァリエーション
P327～

内田 一樹

初めて担任したクラスが今度の3月に卒業する。まだあまり実感が湧いていないということが正直なところである。日々の忙しさとそのことに気持ちを向けられていないのかもしれない。ふと時間が空いたと

きにぼんやりと卒業のことを思う。3年間クラス替えがないと、3年間で環境が大きく変わることがなかった。途中で様々な場面には直面したが、私自身は大きく体調も崩すこともなく送り出すことができそうだ。そのことに今は一つ、安堵をしている。

社会科の授業を
対人援助学の視点から
P317～

中谷 陽輔

長男がこの春に小学校に入学します。ここ最近、就学前健診やら、入学説明会やら、体験入学やらが毎月のようにあり、しかもそれがすべて平日なので、共働きの我が家は仕事を夫婦で工面し合って参加したり、各書類の準備に追われたり、学童の申し込みをしたり、持ち物にひたすら名前を押したりして準備をしています。これも「小1の壁」か…と思いつつ、何かと忙しい年度末を乗り切ろうとしています。

とりあえず、名前スタンプを発明した人には、心の底から感謝しています。デジタル庁さん、個人情報保護とか後で考えてもらいたいので、予防接種歴を何度も手書きしなくていいような、ピッと読み込める何かしらを早く開発してほしいです。あとついでに文部科学省さん、安くて軽いランリュックを全国でデフォルトにしてほしいです。

…子育てをしていると、こんな風にさまざまな要望を胸に抱くようになります。少なくない数の大人が子育てをしているはずなのに、これらのことを改善するムーブメントが起きにくいのはなぜだろう、とすら思います。

コソダテに忙しすぎて、喉元をどんどん過ぎてしまい、その都度の熱さを忘れてしまうからでしょうか。制度を作ったり制度に影響を与えるような人たちがコソダテしていないからでしょうか。…とりあえず私は、喉元過ぎて熱さを忘れることのないよう、こちらに書き留めておこうと思います。

引き続きよろしくお願いいたします。

コソダテノシンリ
P307～

櫻井 育子

1月に誕生日を迎えて、今まではSNSなどで自分の誕生日をいうことも躊躇って

いたのに、「祝ってください！」とあつかましくもお願いした。こういうことも、「良し悪し」とか「好き嫌い」とかがある世界。快く受け入れてくださる方もいれば、なんかそういうのって自己顕示欲が強そうで嫌、みたいな反応もある。そう思えば、自分の見たい世界を生きているだけだから、えーい、やってみよう！と、「祝ってもらう」を選択する。結果、本当にありがたいことに皆さまからお祝いの言葉や、アマゾンのお買い物リストで買っていただくなど、まさに予想していないギフトをいただいた。書道で使うあれこれなのだが、なかなか届かない。調べてみるとこうしたトラブルも他にもあったようで、どうやら住所の連携がうまくいっていない。問い合わせするも、毎回担当者が異なる。しかも、話をしてみると明らかに海外の方で、日本語のイントネーションが違う。(話は伝わるんだろうか)と自分の思い込みが発動する。複雑な状況について説明するが、そのうち相手の「聞き方」がとても上手であることが分かってきた。それに沿って説明しているうちに、話の内容を的確に伝えられないのは自分自身の方であることが見えてきた。相手のペースで話を伝えよう。そう思ってから、やりとりが楽になった。ああ、本当にほとんどが思い込みの世界。そして自分中心の世界で生きている。実は伝わるはずがないとあきらめながら伝えてしまっていることや、相手を信頼して伝えていない、なんてことも多いにあるのかもしれない。無事にすべてのことが解決したのだが、この騒動にお付き合いいただいた皆さま、いつも見守ってくださる皆さまに、あらためてこの場を借りて感謝と愛を伝えたいと思います。

shukou0122@gmail.com

<https://ikuko-sakurai.com>

わたしはここにいる

P305～



鳴海 明敏

県庁職員を定年退職した翌月に新規開設された、情緒障害児短期治療施設(現在は、児童心理治療施設)の園長を引き受けてから、14年目に入っています。

園長室には「こかげ」という名前がつけられています。ということで、サブタイトルは「こかげのにちじょう」とします。紹介する子どもたちについては、それなりのカモフラージュを施しています。

児童心理治療施設は、現在全国で53か所が運営されています。少しずつ施設数が増えてここまで来たのですが、ここ3年くらい新設がなく、来園度も53か所のままのようです。その全児心協議会の全国施設長会議が、2024年2月15日～16日広島市で開催され、私も参加しました。

この機会に、ようやく原爆記念公園を訪れることが出来ました。14日に前泊し、15日の午前中に一人で行って来ました。巡回バスで、原爆ドーム前のバス停で降りたら、すぐ目の前にテレビなどで見慣れたドームがありました。映像を見て想像していたよりは小ぶりな建物でした。傍らを元安川が静かに流れていました。

ドームを2周回ってみました。ドームの姿はこれまで映像で見た通りだなあという印象でしたが、地面に崩れた瓦礫がそのまま放置されていたのは意外でした。その日のままだに散乱している瓦礫を見て、胸がざわつき、原爆の悲惨さを思いました。原爆の悲惨さは、戦争の悲惨さということです。ウクライナにしてもガザにしても、もう少しなんとかならんものかと思いました。

それから、原爆記念館の方に、だんだんに歩いて行って見て、ああこつちを正面にしてこの公園は整備されているんだと気が付きました。記念館も見たいと思ったのですが、展示物の配置換えとのことで、見学することは出来ませんでした。

児童心理治療施設の園長室から

～こかげのにちじょう～

P304～

高木 久美子

遷延性意識障害者高木久美子

今回は、前号投稿からの3か月の間の指筆談ヨミトリと意思疎通支援装置ヨミトリ

君に関する出来事を団士郎編集長のご投稿のスタイルをお借りして時系列で書いてみました。スタイルをお借りするにはあまりに底が浅くて申し訳ないですが…。

とにかくそれらの出来事を通して一番言いたいことは、「全身の麻痺で身体が動かせなかったり言葉を発することができない＝意識がない」ではないということです。病気や事故でそういう遷延性意識障害と呼ばれる状態になった方々の中で、実はいわゆるロケットインシンドローム(閉じ込め症候群)の状態である方がどれだけたくさんおられるか。その書かれる言葉を読み取って対話をし、なんとしてもお伝えしていかなければいけないと思います。ミニキーターとして全身全霊で取り組みを続けます！

ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！

P294～

原田 希

牧場の両親が近々仕事を引退することになり、引き継ぎやシフトの組み直しをして、新たな雇用を段取りしています。父さん80歳、母さん75歳まで現役バリバリで頑張ってくれました。生活のサイクルは変わるけど、牛さんを含めた大きな家族の父さん母さんであることは変わらずです。牧場のゆく先を見守って欲しいと思います。そんなことで、私は仕事の分担が増え、テンパっており、今月の原稿は短めになってしまいました。が、新体制への不安や挑戦はどんどん原稿のネタになっていくだろう！と期待もふくらむ春です。

原田牧場Note

P236～

野中 浩一

私の周りだけだろうか。車で道を走っている中で、「停止線」がほとんど消えていて、近づくまで見えない場所があった。そうかと思えば、今日は道路上の「止まれ」の表示が消えかかっているのを見た。なにも業者がさぼっているわけではないだろう。

小さな変化に不安を覚える中、私が運営するフリースクールの卒業式が近づいている。今年も高校3年生8名が卒業する。受付・司会、音響・映像、道具管理、贈答と飾りつけ、生徒30名が各担当に分か

れて準備に取り組む。その中には、これまで卒業式に参加した経験がない子もいる。活発に話し合う生徒たちを見て、元気をもらう。

「島根の中山間地から Work as Life」 P285～

畑中 美穂

この季節に、毎年、誕生日のお祝いのメッセージを贈る方がいる。御年なんと、90 歳。数年前のカードには、バースデーケーキを描き、そこに歳の数のろうそくを描き込んだ。「ちょっと待って、一体いつ、描き終われるんや…」。そうしているうちにだんだんとたのしくなってきた、出来上がった“作品”を前に思わず笑みが出た。

なんてすてき！

そして今年はさらに上をゆく。ケーキの絵は描かなかったけれども、心のなかでは Happy Birthday の歌でいっぱい。日々の事ごとのなかで、その方に教えてもらったことが“私の言葉”に訳されて、言葉として、また行いのなかで現れてくることを感じる。

M 先生、おめでとうございます。この一年もどうぞお元気で！

一語一絵 P276～

渡辺 修宏

以前より、疲れやすい。疲れがとりにくい、と感じることがある。単純に「年」「老化」のせいになると、なにも対応しようがないので、ちょっと筋トレをはじめてみた。あれから1年。ちょっとだけ筋肉が増え、確かに疲れにくくなったような気がしないでもない。でもなぜか、お腹はまったく引き締まらない。やっぱりこれは「年」のせいかな？

対人援助実践をリポートする この一冊 P282～

米津 達也

三島有紀子監督の『一月の声に飲びを刻め』を京都のミニシアターで観た。最初からこれと決めていたわけでもない。芝居の稽古の帰りに、折角京都に来たのだから、と立ち寄ることにしたのだ。良い映画と巡り会えた。人は皆、罪と赦しを背負って

生きている。そんな声にならないほどの小さな声にきちんと耳を傾ける。それは大阪湾に迷いこんだクジラが存在でもあるような気がしてならない。



川下の風景 P250～

本間 毅 退院支援研究会

語りの「心理的ムーブメント」

前号で報告した「広島大会 企画ワークショップ1」のなかで、中村正先生に私には見たり聞いたりできない私を説明していただいた。村本邦子先生は、東北の民話の語りや焼き物の絵付け、津波への漁師達の対処「沖出し」を例に、『土着の知』を「身体化」という視点でコメントされた。そして先日の「第22回ものづくり質的研究センター読書会」では、森岡正芳先生が「何故、語りでクライアントが変わり、聞く側も心を動かされるのか、本当のところは私にも分らない」という趣旨で発言されていた。

19世紀半ばの生物学者エルンスト・ヘッケルは、「系統発生(生物が進化した道筋)を繰り返して個体は発生する」という『反復説』を唱えた。この説を踏襲した『アルタドステーツ』という映画を観た医学生は、主人公の科学者が外界の刺激を遮断する水槽に身を横たえ、メキシコ先住民の幻覚剤を用いて意識や記憶のみならず、身体も退化させて原始人の姿で暴れるさまに驚き新宿ミラノ座を後にした。

夢野久作は、怪作『ドグラ・マグラ』において「胎児は受胎に続く発生の過程で原始からの夢を見る」と九州帝国大学精神科正木教授に語らせ、『押し絵の奇蹟』では死に臨むピアノ教師トシ子は母に瓜二つの歌舞伎役者へ「恋愛のような心理的クレーゼにおいて、精子や卵子の記憶は揺さぶられ、肉体的交接がなくとも相手に似た子が生まれる」旨の手紙をしたた

めた。

語るものやそれを聞く側に生じる「心理的ムーブメント」は、無からではなく予め仕掛けられた何かに呼び起こされるとしたら…。話が伝わらない相手は単に違う進化の道筋を辿ってきただけのこと。なればこそ、敬意を払い仲良くするにしくはない。

幾度となく会い、 語り合うことの意味 P258～

玉村 文

2024年の幕開けは、子どもたちを連れて恒例の温泉旅行へ。昨年も泊まったホテルで勝手もわかる安心感と、1年ぶりの温泉という非日常感を味わえました。4歳と2歳になる子どもたちは広くて熱いお風呂が苦手。出発前から「怖い～」と不安そうでしたが、露天風呂なら熱すぎなくて楽しいと克服でき、成長を感じました。今年は温かく、ホテル近くの海辺で延々と遊んでご満悦の子どもたちでした。美味しい料理や芯まで温まる温泉にわたしもリフレッシュできました。3人目が生まれたら、家族旅行ではこんなにリフレッシュできないのかもしれないと、先々を考えてしまうのでした。

応援 母ちゃん！ P243～

川畑 隆

もしかして『人生は対応のバリエーション』を連載している宮井研治さんもこの短信に書くかもしれませんが、恩師の山本昭二郎先生のお墓参りに行ってきました。山本先生については以前にもこの短信で書きましたが、大阪市の児童相談所の判定係長や児童院長、神戸松陰女子学院大学の先生をされていたかたで、3年前に93歳で亡くられました。お墓は天橋立近くの与謝野町にあって、この3月まで峰山乳児院長をされていた先生の姪御さんが案内してくださいました。

実はこのお墓参り、総勢8名の墓参ツアーになりまして、お墓参りのあと、姪御さんを囲んで山本先生の想い出話に花が咲きました。8名のうち6名は大阪市の児童相談所のOBや現役でした。この姪御さん、山本先生と喋り方が一番ですが、お声もお顔もよく似てらっしゃるのです。それ

はご本人も自認されていて、私たちも山本先生ともお喋りしている感覚でとてもいい時間を過ごさせてもらえました。姪御さん、そして山本先生、ありがとうございました。

その時間が終わってからは「グラン・リゾート・天橋立」で、ゆっくり温泉の湯に浸かったあとカニをいただき、11時半くらいまで二次会、男性部屋は5人、女性部屋は3人で修学旅行みたいいに枕を並べ、翌日は観光船に乗って天橋立ビューランドから股のぞき(前々日に股のぞき中に押されて転落した事故のあった笠松公園が遠くに見えていました)する人はして、「カフェ・ド・パン」というカフェから廻転橋を見ながらオイルサーデンサンド、地ビール・地ワインを飲む人は飲んで、天気も二日間結構よかったので、コンパクトなよい旅行になりました。列車に乗る前に姪御さんにお電話しましたが、姪御さんのお声のうしろで山本先生が笑顔で手をふってくださいました。

サイコロジー P238～

松岡 園子

今年も確定申告の時期がやってきました。今回初めて、freee会計というアプリを使って申告の準備をしています。スマホでレシートを読み取り、銀行口座のデータ読み込みや申告書の作成まで完結でき、昨年よりもだいぶ楽。昨年のこの時期は、申告書類の整理とマガジン原稿の締切が重なり、もう何を書いていたんだか……覚えていません。今年はあともう少し！ 楽しみながら済ませます。

統合失調症を患う母とともに 生きる子ども P233～

杉江 太朗

子どもの分野で働く杉江と言います。我が社では、4月から新しい支店が出来るため、私のいる支店も分散化され規模が小さくなる可能性があります。過去の短信でカフェドウスギエを営業していると書きましたが、顧客の減少に伴い、売上に影響するのではないかとヒヤヒヤしています。コーヒーチェーン店でも、コーヒーが値上がりしているそうです。カフェドウスギエでも値上がりを余儀なくされましたが、それ

でも1杯60円。まだコンビニより安いので営業は継続です。今、困っていることは小銭の取り扱い。今までは郵便局に持っていけば手数料なしで入金が出来ましたが、今は手数料がかかります。ただでさえ赤字経営。手数料をかけてまでと思っていたら小銭ばかり貯まってきました。さてさてどうするかな。

「余地」-相談業務を楽しむ方法- P230～

浅田 英輔

県庁にきて9年目が過ぎようとしている。いろいろな出会いがあったが、特に今の仕事は他部や他課とのやりとりがとて多く、今まで出会っていないタイプの方々とつながりができた。どこがひっかかったのかわからないけれど、Web雑誌の取材を受けて掲載されました！ニヤけ顔を送ったらそのまま採用されちゃった。

<https://wellulu.com/active-participation/12979/>

世界が広がると、面白いことも増えるなあ。

臨床のきれはし P108～

三浦 恵子

文末でも少し言及していますが、毎年1月17日になると毎年読み返す書籍があります。安克昌氏の「心の傷を癒すということ」です。私事ですが、報告者は初めての現場に入った1年目に阪神淡路大震災に遭遇しました。

安克昌氏の「心の傷を癒すということ」は、実際に被災地で奮闘する精神科医師の記録が産経新聞に連載され、後に書籍化されたものですが、一番最初の版はサントリ文芸賞を受賞、その後阪神淡路大震災の後に増補版、そしてNHKテレビシリーズの際に増補改訂版が出版されています。

私はこの本で心的外傷について具体的に学び、「社会は心的外傷に満ちている」という言葉と、「これまで日本の社会は、人間の『力強さ』や『傷つかない心』を当然としてきた。しかし今後、傷ついた人が心を癒すことができる社会を選ぶのか、それとも切り捨てて厳しい社会を選ぶのか」という問いかけを、常に考えるようになりま

した。

安医師が38歳で夭折されてからも、大きな災害は絶えず、そのたびに「絆」といった美しいワードが世の中に溢れるようになりました。トラウマという言葉も日常的に使われるほどの概念になっています(ただその使用方法が間違っていることも往々にしてありますが)。

その一方で、インターネット上での匿名性を悪用して人を叩くことが増え、なかには「詩人逮捕系」と称する動画が注目を集めてもいます。批判も様々にあり逮捕者も出ながら、それらが好まれる一端には、閉塞感のある時代のなか、「我こそ正義」「落ちた犬は叩け」的な空気があるように感じています。

「心のケア」には寄り添うこと、そして今でいうなら「伴走型支援」も無論大切ですが、安医師が言われたような「品格」をどのように我々が保っていくのか、それが問われていると考えています。

更生保護官署職員

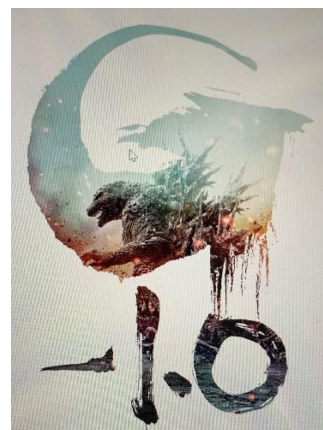
(認定社会福祉士・認定精神保健福祉士)

現代社会を『関係性』という 観点から考える P219～

迫 共

年末年始に、映画館で立て続けに「ゴジラ-1.0」と「窓ぎわのトットちゃん」を見た。

「ゴジラ-1.0」は特殊効果がうまくできていて、大画面で没入できる作品。海外の評価も高いのはうなづけた。戦争トラウマも少し描かれているものの、ゴジラと戦うために幻の国産戦闘機で特攻をしかけるなど、「お国のために命を懸けて戦うのが美德」に傾きながら、なんとか「生きて抗え」に戻した作品だ。



精神科医の思うこと

P162～

柳 たかを

重曹クエン酸水

先日、2月下旬、育てていた大根が収穫の適期になった。5ヶ月前9月下旬に種から植えたもの。小さな家庭菜園なのでぜんぶ合わせても40本程度だ。同じようなサイズが並ぶスーパーのものと違い、太さ5センチ、細くて長さが30センチもないのものから50センチ超の長さで太さ10センチ越えの立派なものまで実にいろいろあって楽しい。僕は化学農薬は使わない、ただネットで教えてもらったアブラムシ避けになるアブラ石鹸水は自作して散布している。好物は毎朝欠かさず納豆と大根おろし、ご飯(前夜の取り置き)にねった納豆に大量の大根おろしをかけて食します。大根の辛い部分のすりおろしと納豆が実によくあいます。冷たい蕎麦にも大根おろしを大量にかけ、刻みネギを散らし自作のツユをかけて食します、これがまた美味しい！蕎麦には薄揚げのあぶったものをのせます、薄揚げは揚げ油でずいぶん旨みに差があることを知りました。そしてできれば国産大豆使用のもの。そして重曹クエン酸水を日に2回は摂ります。昔、日本医師会の偉いさんが重曹クエン酸水の効果を聞かれて、あんなものを庶民が摂るようになると病気になる人が減って医者はメシの食いあげになると、嘘かまことか言ったという話があります。血液がアルカリ性になり、腸の調子も良くなるようです。私も愛飲するようになってから全く便秘なくなりました。毎日食べるもので身体はつくられるので、農薬や添加物の少ないものを選んで摂る努力はできる範囲とするのは健康な老後人生の助けになるのは間違いないと思いますね。

東成区の昭和 思い出ほろほろメモ
P169～

団 遊

冬はスキーを楽しみます。

スキーに明け暮れた大学時代を経て、社会人になってから20年ほどは、仕事に必死でスキーのことは頭から飛んでいたのですが、5年ほど前からまた、始めることにしました。

以前とは道具がかなり変わっていて、ゲレンデに立つと期せずしてオールドスタイルな滑りを披露する羽目に。「これじゃあ格好がつかないな」と師事する先生を見つけて、学び直すことにしました。



当時とは違い「ワーケーション」や「リモートワーク」が常識の世の中になったことも追い風です。Wi-Fiがばっちりの定宿を見つけ、早々に女将と仲良くなり、仕事環境を整えてくれるようになりました。昼までZOOM会議をした後、夕方まで滑ってまた仕事、そんなスタイルで滑走時間を稼ぎました。

かくして先日、大学時代に取得した資格の再取得に成功。あの頃の自分に追いつき、なんとも晴れやかな気持ちになりました。

私が取った資格にはもうひとつ上があって、そこが最高峰。「自分越え」を目指して、未踏の道の開拓が始まります。

団遊の脱線的経営言論

休載

村本 邦子

1月11日に沖縄滞在から帰り、20日からは熊本・鹿児島に行っていた。2月15日から26日はニュージーランドに行き、3月3日から東北に行く。15日からは台湾だ。こんなに自由に行きたいところに行ける1年は人生最初で最後かもと、意欲的にあちこち動き回ったサバティカルだった。研究テーマは「トラウマの世代間連鎖と土地の力」。異なるものと出会う時に己を知れる。たとえば、沖縄戦で甚大な被害を与えた責任者である牛島満が薩摩出身でチェスト部隊と呼ばれていたということを知り、自分の一部を成しているものを理解する。あちこちで沖縄戦の痕跡を肌身で感じてきたことに基づく理解である。そうやって己

「窓ぎわのトットちゃん」は黒柳徹子氏の幼少期のアンソロジーだが、小学校を退学させられたトットちゃんを受け入れたトモエ学園の校長が、日本にリトミックを普及させたひとり、小林宗作であることは意外と知られていない。トットちゃんを「君は、本当はいい子なんだよ」と受け入れてくれた小林先生は、米軍の空襲で学園を焼かれても、「次はどんな学校をやろうか」とつぶやく。

今年は元旦からの地震、羽田空港の飛行機事故と不穏な空気ではじまった。心穏やかに過ごせるといのだが。

保育と社会福祉を漫画で学ぶ
P226～

黒田 長宏

本文のあらすじになるが、1月23日に心筋梗塞を発症してしまい、カテーテル手術してもらい、いったん退院したが、もう一か所手術が残っており、心配中。

<https://konnankyujotaijimdoofree.com/>

あぁ結婚
P203～

松村 奈奈子

ちょっと前に高校生の診察で、「卒業旅行で鹿児島に行ってきた」「特攻隊の資料館とロケット打ち上げのこ」「よかったで、先生も行ってきたら」と勧められたので、今年のお正月は鹿児島旅。有名なのは知覧特攻平和会館ですが、万世特攻平和祈念館・鹿屋航空基地資料館なども訪問しました。もちろん特攻隊については教科書的には知っていましたが、沖縄戦のために、鹿児島など九州に特攻基地が集中していたんだと再認識させられました。実は年末に静かな瀬戸内の小島、大津島(山口県)を訪ねて、「人間魚雷(回天)」の訓練基地の遺構と回天記念館にも行きました。いずれも場所にも、たくさんの若い人の遺書の展示がありました。

生まれて初めての鹿児島、大人の修学旅行的にJAXA内之浦宇宙空間観測所や桜島を楽しみましたが、鹿児島名物かき氷「しろくま」を食べながら、いろいろ考えさせられました。

を耕し、耕された己でもって新たな何かを語ることができるのだと思う。脱植民地化、新たな知の創出の方法を考えている。

周辺からの記憶

—東日本大震災家族応援プロジェクト—

P127～

國友 万裕

この原稿がアップされる時には、僕は60代になっています。

誕生日が2月27日なので、この原稿を書いている時点ではかろうじて50代のんだけど、いよいよ還暦の台にのります。

今は人生100年時代なので、60歳なんて、まだ若いよと言ってくれる人が多いのですが、しかし、これから先、人生が大きくブレイクするとも思えません。

ただ、確かに今は60代くらいまでは元気で入れる可能性が高いので、これから60代マッチョを目指そうと思い、次回からはそれをテーマに新たなタイトルの連載を始めたいと思います。したがって、今まで書いてきた「男は痛い！」は今号で終わります。

幸いなことに、今回が連載の50回目で、数字的にもキリがいいですし、この後、『インセル時代の男たち 弱者男性で読む日米映画』という本を出す予定でいます。この本は、これまで「男は痛い！」に書いてきたことからの抜粋の部分がたくさんありますので、出せるのは対人援助マガジンのおかげです。残念ながら、まだはつきりとした発売日や表紙などが決まっていないので、ここでは発表できないのですが、決まり次第またお伝えします。

これから60代。僕としては、一日一生。日々をひたすら生きていきたい。その決意も込めて、クリスマスイブに洗礼を受け、クリスチャンになりました。

洗礼は天国へのパスポートです。これから神の手に引かれて、神の道を歩んでいきたいと思います。僕のキーワードは、「清貧」です。

男は痛い！

P95～

西川 友理

大和大学白鳳短期大学部で保育者養成に、その他いくつかの場所で社会福祉

士など福祉系専門職養成・および育成に携わっています。

今年度の対人援助学会の理事会企画で共に発表させていただいた比治山大学の“さこさん”こと迫共先生と、愛知のかわさき保育園の園長“のりこさん”こと南部紀子先生と共に、「保育の当事者研究会」を始めました。3人とも、当事者研究で出会い、あとから“え、保育分野だったの？！”と知り合った仲間です。今の所、オンラインで開催中。さて、どうなるでしょうか、楽しみです。

気になる方は、X(旧Twitter)で「NY【支援するひとの対話の場】」(@NY20220222)を検索してみてください。「保育の当事者研究」をはじめ、西川が関わっている対話の場の告知をしています。

福祉系対人援助職養成の

現場から

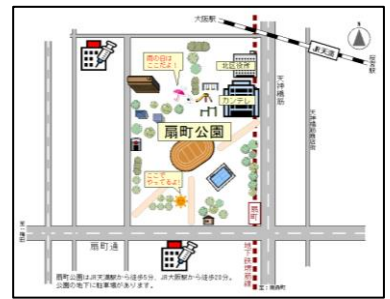
P53～

竹中 尚文

前号で、私たちがホームレス支援を大阪市の中之島でやっていると書きました。この3月より大阪市の扇町公園に移動します。ずっと支援活動の手が足りません。手を貸してやってもいいよ、と思われるかたは3月26日(毎月第4火曜日)の18:30に扇町公園にお越し下さい。また、宿泊施設で使わなかった歯ブラシ・ひげ剃り・スリッパを募集しています。◆ホームレス、路上生活者、野宿生活者など、いろんな言葉があります。ホームレスの人たちは、とても仲間意識が強いです。人間関係を大切にしています。彼らは一様に「仲間がいなければ、生きていけない」といいます。彼らの多くが家族とのつながりを失ったのです。建物としての家がないというより、家族のいる家をなくしたのです。その痛みを感じている人たちがホームレスなのだと思います。

◆私は、10年ほどホームレス食料等の支援をしてきました。数年前から、彼らの生い立ちを聞かせてもらうようになりました。はじめは、自分を語ることに警戒感がつきまといました。話を聞かせてくれた後、ホームレスの方から近づいて来てくれるように感じます。食料等の生活物資を提供していた所から、人生を少し共有させてもらったように思います。やはり、私たちは

精神的な生き物なのです。



路上生活者の個人史

P93～

坂口 伊都

今年度から、とても久しぶりに実習科目の担当をしています。保育士と社会福祉士の実習。花園大学の実習指導室講師から実習の仕事が始まりました。いろいろな大学で実習担当をして、何回も施設に謝りに行ったり、学生をなだめたりして胃が痛くなることもありました。実習担当を外れた時は楽だなと思ったものです。また実習ゼミの担当を持つと、今までの経験と私の年齢も重なって、かなりおおらかに受け止めるようになりました。学生に「失敗したらいい、一緒に謝るから大丈夫」と笑って言える貴族はつききました(笑)

実習訪問に行くときとホッとした顔を見せ、いっぱい話をしてくれる実習生。施設の方も、実習指導者の方の多くが実習を経ていて、温かく迎え入れてもらっています。ここでも、時代の変化を感じます。実習報告会の練習もいっぱいして、何を伝えたいのか一緒に考えました。言葉にして表現しようとすることは、人を成長させますね。まだ3月まで実習があるので、学生と一緒に頑張ります。

立場が変わると何が見える

P120～

河岸 由里子

公認心理師・臨床心理士・北海道

かうんせりんぐらうむ かかし 主宰

【子育て支援】

市の福祉団体として「子育て支援を考える会」を創設して丸20年になった。20年前当時、市内では、保健センターや家庭児童相談室のほかに、保育園や幼稚園、支援センターや子育てサロンなど、それぞれが別々に子育て支援を行っていた。母親が子育てに悩んだ時に、どこに行けば

よいのか。家庭児童相談室として、全体をまとめて横のつながりを作り、母親に身近に支援があることを伝えられればということ、支援者を支援するシステムがないことから、役所にいる間にと提案したものの、実現できなかった。いろいろな機関の人を一堂に会した時に、事故があったらどこが責任を取るのかというのが問題だった。そのことに失望し、市役所を退職後自分で作ったものである。一回目の会の時、多くの機関が集まってくれて、顔の見える形で、各機関がそれぞれの活動を知り、連携できるように話し合い、ざっくばらんにそれぞれの現場で起きていることを共有した。以来月1回の研修会を実施し、その研修会ごとに「添え木」という通信を発行してきた。2月の発行で133号となった。年に1回は一般市民向けに様々な講師の方に来ていただいて、講演会を開催してきた。本誌の編集長でいらっしゃる団先生にもご登壇いただいたことがある。それがちょうど10年前、創立10周年だった。

支援者を支援することで母親支援を間接的に支えることになる、そう思って研修では、支援者として必要な知識を共に学んできた。毎回筆者がほぼ一人で行ってきた活動で、会員は30名ほど、ここ数年は二か月に1回の研修として続けてきた。この3月に創立20周年記念講演会を開催する。北海道ののちの電話とのコラボで、「こころのライブ授業」と題し、講演とロックバンドの演奏がある。どのくらいの人に来てくれるか楽しみである。

私も今年70歳を迎える。あれもこれも一人でやるのは限界がある。この節目に今までの活動の成果を振り返り、これからの活動をどうしていくか、今一度考えてみようと思っている。

ああ、相談業務

P59～

先人の知恵から

P191～

大谷 多加志

前号の編集作業が佳境になっていた12月中旬に、2020年にコロナ禍に入ってから、初めての発熱がありました。39度の高熱で、さすがにこれはコロナかインフルエンザに罹ったのだと覚悟したのですが、検査は陰性。でも全然症状が改善せ

ず1週間以上寝込むことになりました。結局、風邪をこじらせて肺炎になっていて、肺炎の治療を始めるとすぐに回復しました。

肺炎が治ってやれやれと思っていたら、どうもベースとして肺の状態が良くないということで、人生初のCT検査を受けることになり、その結果「気管支拡張症」と診断されました。気管支が広がった状態で戻らなくなっており、肺炎が生じやすい状態になっているようです。治療には低用量の抗生物質を長期服用する必要があるということで、数十日分の飲み薬を抱えて帰宅するはめになりました。食事の度に服薬があると何だかすっかり老け込んだ気分がしてきます。少しずつガタがき始めていることは感じますが、何事も体が資本だとは思っているので、ちょっとは劳わりながらうまく付き合っていこうと思います。

発達検査と対人援助学

P110～



鶴谷 主一

柑橘好きの私には嬉しい季節がやってきました。

いちばん推しの紅まどんなは、もうシーズンが終わり、普通のみかんも終盤になってきて、これからはハッサクやポンカン系、あまなつ系ですね！最近新しい品種が次々開発されて出てくるので、見逃さずチェックして味わっていきいたいと思っているこの頃です。

原町幼稚園 <http://www.haramachi-kj.jp>

メール office@haramachi-kj.jp

インスタ [haramachi.k](https://www.instagram.com/haramachi.k)

ツイッター [haramachikinder](https://twitter.com/haramachikinder)

幼稚園の現場から

P46～

中村 正

退職準備をしている。1月15日には学部の「臨床社会学」という講義の最終回に

退職記念講義をした。学部が準備をしてくれた。35年間勤続である。学部や大学院のゼミの卒業生だけで400名近い。学部事務室が校友会をとおして案内のハガキを出してくれた。それに対して各地から返事が事務室に届いた。お手数だったと思うが組織立っていることに感銘を受けた。入職したのは1989年なので、一期生は50歳を過ぎている。卒業生の子どもが学生となり親子で最終講義に来てくれた人もいた。嬉しいものだ。しかし過去を振り返ることは少しにして、次の5年間、何をするかについて話をした。70歳までのセカンドライフのことだ。5年間は特別任用教授として科目担当をすることもあり、まだ現役のつもりだが、やりたいことがあるので一つの区切りをつける。さしあたり一般社団法人を創設して実践のベースをつくる予定である。やっていることはそんなに変わりはないが、事業化という形態をとることとした。これらについてもマガジンに記していきたい。しかし退職は煩雑な手続きの連続なので慌ただしい。

臨床社会学の方法

P22～

団 士郎

映画「哀れなるものたち」を観て、「そうなんだよ！」と膝を打った。

近年の性加害問題に関する社会の受け止め、報道のあり方に違和感が拭えなかった。基本的には正論なのだから、何を言うこともないのだが、そこに漂う時代の、いかにも今風。そしてしばらくするとかき消されてしまうような日本社会のうさん臭い空気が、ちゃんと議論することから人々を遠ざけている。

そんな感覚の時にこの映画を観た。主人公の健全さ、強さ。男のフィルターを通した価値観や、それへの反感ではなく、主人公オリジナルの真っ当さに感激した。

見かけはフランケンシュタイン博士の作り出したモンスターである。だからこその純粋な学習過程。うるさい男社会のベールなど纏われない強いジャッジに喝采だった。そうか、世界はこんなものを見せてくれるんだと納得だった。

私は「これは何？」とか、「どう理解したらいいのか？」なんて、まったく思わなかった。意見の分かれる映画だと書いた人も

会ったが、私にはとにかく面白かった。

晩年 D・A・N 通信⑦

P38～

中島 弘美

今回の能登半島地震によって、大きな被害を受けた方々に、心からお見舞いを申し上げます。この地震の報道に触れるたびに、29年前の阪神淡路大震災を思い出すことがいろいろあった。そのひとつが、子どもたちの様子だ。親が用事で離れようとすると、わずかな時間でもバラバラになるのを嫌がり、行かないでと強い口調で話していた。明らかに落ち着きがなくなっていた。機嫌よく遊んでいるように見えたが、「しんど、なな～(震度七)」などといいながら、建物が崩れる様子を真似して、地震ごっこをしていた。このような遊びは、不謹慎だと思われるかもしれないが、子どもは地震による体験を遊びに取り入れて、受けとめていくのだなあと思った。

震災による影響と思われる子どもの言動は、否定せずに受け止めることが何よりも大切だと改めて感じている。このようなことも、今後、学生さんたちにも伝えていきたい。

カウンセリングのお作法

P35～

藤 信子

主催している研究会の30周年記念として、他の地で研究会を続けながら、時々京都の研究会にも来てもらっていた友人二人を招いて、3時間ほどのグループをおこなった。最初の1時間は私と友人と3人で「なぜ、私はグループを続けているのか」というテーマで、思いつくままに話す。そのあとで、参加者(30名近くいた)全員で、グループを行った。始める前に、最初にあったのは、何時だった？とか少しずつ思い出すと、40年くらいの精神医療のことも思い出すことになった。40年くらいのことを共有できる友人はいいな、と思う日だった。

解放の心理学へ

P32～

篠原 ユキオ

今年も鳥取県の漫画コンテストの審査員として贈賞式に出席してきた。鳥取県は

12年前からまんが王国とする部署を県庁内に作って漫画文化の発信や漫画家、アニメ声優育成のためのイベントを展開している。

授賞式には毎年、平井知事が贈賞者として登壇し受賞者にお祝いのメッセージを贈る。この時、海外からの受賞者にはメモ無しでその国の言葉で語りかけるのが恒例だ。作品はアジア圏のみならずロシア、イタリア、ウクライナの他20数カ国からの投稿があり、今年はマカオとインドとミャンマーからの受賞者が出た。

今年も平井知事のメッセージを楽しみにしていたのだが能登への被災支援で欠席となり、代理の県庁職員が緊張した面持ちでマカオからの受賞者に現地の言葉で語りかけていた。平井知事からの指示があったのかは定かでは無いが喋り終わった後の彼のほっとした表情に全てが見て取れた。インドの受賞者は欠席だったのでもし出席していたら彼にはそれ以上のプレッシャーがあっただろう。

ミャンマーの留学生は日本語で大丈夫だったが彼の作品は国軍の圧政に苦しむ現地の人々の姿がリアルに描かれ、その想いを強く訴えていた。あらためて漫画が世界の共通のコミュニケーションツールになっていることを実感した。

ちなみに鳥取へは行きも帰りもドアに『まんが王国』のロゴの入った特急スーパーはくとのコナン号であった。



HITOKOMART

P246～

見野 大介

今年も息子とお風呂入った後に残業するのが定番化している。来年こそは改善したいと誓うことで、もう今年は諦めています。

ハチドリの器

P4

鶴野 祐介

2023年2月17日に脳梗塞を発症してから丸1年になりました。おかげさまで、なんとか今年4月から職場復帰を果たせそうです。ただし、「生き急ぐ」のはやめにして、「ぼちぼちいこか」をモットーにいきたいと思っています。

うたとかたりの対人援助学

P197～

寺田 弘志

2月22日は、恩師・佐々木雄二先生の一周忌でした。

あれから一年。いろんなことがありすぎた一年でした。

その4日前は父の七回忌でした。

父の法要には欠かさず出席してくれた叔父も去年なくなり、間もなく一周忌。

この時期は故人のことがあれこれと思い出されます。

最近ふと思い出すのが故・山下宰先生。

齋藤稔正先生のASC研究会でよくお目にかかりました。

山下先生は心身歯科医学の草分け的存在であり、佐々木先生とも仲良くされていました。

山下先生は、麻酔を使えない患者さんに催眠をかけ、痛みを和らげながら歯の治療をされていました。

いま思えば、佐々木先生も山下先生も、とても穏やかでやさしい先生でした。

お人柄がよく似ていらっしゃいます。

山下先生が何度もおっしゃっていたのが「常識を疑え」という言葉でした。(続きは本文で)

接骨院に心理学を入れてみた

P213～

古川 秀明

健康観察を活用した自殺予防の取り組みを推進するためにいろいろ動き回りました。「統計調査」「現場の声」「現状」「法律」「陳情」「プレゼン」・・・生来急げ者の私が自らこんなに能動的に動くのは、我ながら珍しいと思います。

例えどんなに内容に自信があっても、新しい何かを学校に導入するのがこんなに大変なこととは思いませんでした。また、現場教師の疲弊度も改めて実感できました。

この取り組みがどれだけ効果があり、ま

た広まっていくのか全く分かりませんが、ハチドリの教訓を活かして、タダタラント細く長く続けて行きたいです。

講演会&ライブの日々 P113～

きむら あきこ

今年の幕開けには、大きな地震や飛行機事故などがあつた。いつもの年よりも、ずっと「死」を身近に感じる年の始まりだった。

そんな幕開けに、自分自身もある朝、ぶっ倒れてしまった。全く起き上がれず。いつになく不安になって、子ども達に SOS を発信し来てもらった。これからは、こんなことも増えるのかもしれない。なるべく、自分でなんとかできるようにはしておきたいが、誰かの助けをかりなければならない時も覚悟しておかなければと思う。幸いにも、一日半ほどで復帰できた。

変な目標の立て方だが、「あと一年しか生きられないと思って生きる。」が今年の目標だ。気持ちの持ち方の話。あと一年、と考えると、やっておきたいこと、やらなくてよいこと、選択しやすくなった気がする。

かぞくのはなし P292～

山下 桂永子

この時期になるとやはり思い出すのは4年前の今頃、学校園が突然の臨時休業となり、教育現場が大混乱となったことと、教育相談においても知恵と工夫が試される日々だったこと。今年度は制限なくほぼすべての行事が行われ、最近では「そういえばこの子のマスクを取った姿を見たのは久しぶりだなあ」とか、「このお母さんはマスクを取るとこんな顔でこんな表情をされていたんだなあ」など、何だか懐かしいような新鮮なような気持ちになります。

今回のお話は、そのコロナ禍に入るころに、また別のことで頭を悩まし、怒ったり泣いたりしていたことのお話です。読んでいただければ幸いです。

心理コーディネーターになるために P178

脇野 千恵

4月からの生活に変化を持たせようと思

っている。もうフルタイムでの働き方を終了したいと考えたからだ。本当に長い間お疲れ様でしたと、自分で自分を褒めてあげよう。

さて、これからの時間をどう過ごすか？まず、好きなことは今まで通り続ける。楽器の演奏、一人旅、畑作り、読書、ドライブなどなど。まだまだやりたい事もある。やっておきたい事もある。ただ、世の中の状況に不安がないわけではない。戦争を身近に感じてしまうのは、私だけだろうか。だからと言って何もできないが、せめて世の中を俯瞰的に捉えることだけは、忘れないようにしたい。

こころ日記「ぼちぼち」 P253～

千葉 晃央



お仕事で、和歌山県御坊市に向かう。紀伊半島は車で1周したことがある。しかし、鉄道では行ったことがない。今回は「特急くろしお」で向かうことにした。新大阪駅発の特急くろしお。一日1本は京都発。そういえば京都駅でよく眺めていた。模様はパンダ。日本で一番パンダがいる白浜アドベンチャーワールドにちなんでいる。大阪でも天王寺でも乗り換えなく、ずいぶん楽。余裕をもって前日に行き、当日の午前半日は御坊市を事務局の方々が案内してくださった(ありがとうございます！)。

和歌山県はコロナでの対応、徳川家があったところ、カナダへの移民、トルコの関係など様々浮かぶし、海も山も豊かで広い。関西とはいえ、独自の存在感があるように感じてきたのでうれしい機会だった。スーパーマーケットに行くと新鮮なクジラの刺身、たくさんの種類の梅干しの数々。南海トラフ地震対策で津波避難タワーも各所にあり、特急列車内にも津波の時の避難方法が示されていた。石油基地、発

電所もあり、その誘致に伴う住民立ち退き等への補償に関するドラマも教えてくださった。御坊市の名称となった御坊の本願寺日高別院にもお邪魔。境内には音響設備もあり、地域での実践の姿を感じる環境が整っていた。障害者施設の事業所にもおじゃま。地域の史跡と福祉のコラボは一つの成功モデル。認知症の取り組みでも御坊市の実践は注目されていて、そういった方々がいて豊かなネットワークが形成されていて素晴らしい。研修会では資料はネットでのデータ配信を行い、印刷は必要な人だけが各自でしてくる、情報は共通のソフトを全事業所が導入し伝達を円滑に！とサステナブルで、負担が少ないオペレーションにアップデートされていた！お客様感覚での研修参加ではなく、参加する！印刷する！持ってくる！自分たちのため！という動機付けが伴う仕組み。それを根気よく若い世代の方々が作りあげておられた。京都で、今日行った保育園ではインカムを使っていたし、転倒しそうなシルエットになるとスマホに通知が飛ぶというソフトを入れている高齢障害者支援の現場の話も聞えてくる。こうしたバージョンアップの努力に伴うコミュニケーションの発生こそがさらに相乗効果になっているのではとも思う。

家族支援と対人援助 **ちばっち**

chibachi@f2.dion.ne.jp

090-9277-5049

障害者福祉援助論

P17～

荒木 晃子

勤務する生殖補助医療クリニックで、LGBTQ 当事者の診療を受け入れる体制創りが暗礁に乗り上げている。職場で新しい取り組みを始める際には何かしら抵抗や戸惑いが生じるのはいずこも同じであろう。ましてや、厳密な個人情報の守秘義務を負う医療現場では尚更である。なかでも、生殖補助医療はカップルの不妊問題を扱い、「カップルの性と生殖」に関する双方の心と体が治療対象となる。そのため、生殖医療従事者は、通院する個人・カップルの「誰にも知られたくないプライベートな内容」を扱う配慮とスキルを体得している。

このような診療体制を持つ生殖補助医療現場の在り方は、LGBTQ 当事者にとって有用であるに違いない。しかし残念ながら、このような診療体制を持つ医療現場があることを、成人したLGBTQ 当事者の大半は知らない。過去に、結婚して家庭をもち、子どもを産み育て家族をつくるといったライフストーリーを描く経験を持たないからであり、LGBTQ 当事者が家族をつくることを前提とした医療体制や社会保障、法整備のない社会で暮らしていたことがその理由にある。

現在、自身が当事者であることに気付いた子どもたちが成長し、安心して暮らすためには、教育現場と共に医療現場も早急な整備が必要である。

山陰の小さな生殖医療現場でも、私を含め皆ができることを探し、次年度に向け必要な改正、変革を模索中である。

生殖医療と家族援助 休載

岡崎 正明

本文でも書いたが、いろんな出会いや偶然が重なって、子どもが落語を習っている。もう8年ほどになる。月1の稽古から、年に1度の本番まで、横について我が子やその他の参加している子どもを見てみると、実に面白い。少しずつ上達していく様子や、それぞれの子の個性がよく分かる。師匠の助言も、お客にいかに効果的に伝えるか。人物の心情をどう理解し、どう演じるとより良いのか。コミュニケーションの理屈や人間理解にも通じるものがある、こちらも興味深く聞かせてもらっている。



長年いると、同じ演目を昨年はAくんがやったけど、今年はBちゃんがやる、なんてこともしばしばだが、だからといって聞く方が飽きてしまったり、新鮮味がなくなるなんてことが全くないのが落語のすごいところだ。演じ手が違うだけで、登場人物のキャラも、話の世界観もずいぶん変わってきたりする。M-1のように斬新な展開や、

新たな発想で笑いを作るのもすごいが、100年以上変わらない話がずっとと愛され、何度聞いても笑いが起こるというのもすごい。どっちが上とかではなく、種類の違う競技と思った方がいいんだろう。

立川談志は「落語とは人間の業の肯定」と言った。落語に出てくるのは、殿様、武士、町人、盗人、百姓、職人、女郎、年寄、若者、子どもなど、その時代を生きた人々であり、バカだったり、ケチだったり、嫉妬深かったり、義理人情にあつかったり。人間の持つ美しく高潔な面から、醜く薄汚れた部分まで、実に生き生きと描かれている。「そういう人、現代にもいるよね」「人間って、そういうところあるよね。私も…」と感じながら、そんなちっぽけな自分たちを笑い飛ばす。自己憐憫ともシニカルとも違う、どうしようもなさやありのままに受け止めながら、絶望せずに人を愛おしむ態度が、落語にはある気がする。

欧米の学校では演劇の授業があると聞いたことがある。様々な人物を理解し演じることが、相手への想像力や表現力を高めるのに役に立つのだという。確かに道徳の時間にお題目のように正論を伝えるだけよりも、演劇や落語を通して疑似体験でも誰かの立場を体験したり、見る人に如何に伝えるかを考えるのは、とても効果的なのではないだろうか。小中学校の授業に落語。ぜひ採用してもらいたいなあ。

役場の対人援助論 P103~

来須(らいす) 真紀

9月末に体調を崩し、半年が過ぎようとしています。早いものですが、療養しながら、半年間は、わが子としっかりと向き合う時間となりました。タイミングが良かったとは、言えませんが長女が学校への行渋りをしたり、習い事のことで悩んだりしました。口論になったり、喧嘩になったり、トコトン付き合ったり、病気で療養しているのに子どものことでこんなに心身をすり減らすなんて本末転倒だと正直おもうこともあります。

ただ、自分が今まで仕事を最優先してわが子に向き合ってこなかった、わが子に甘えていたということが引き金になっていただろうという思いもあり、償いの時間と考えることにしました。おかげさまで体調

もよくなり、4月から仕事に復帰できそうな気配なので、復帰したらわが子ももっと大切にしながら仕事したいと思っている次第です。本当子育てと仕事の両立は難しい…。つくづく制度の問題もあるけど周りの理解の問題だなと思う今日この頃なのでした。

教室の窓から P315~

工藤 芳幸

この年末年始から今日までであったという間に過ぎてしまいました。元旦に能登半島地震があり、毎日その報道に接していたことも影響しているでしょう。言語聴覚士の養成指定規則の改正が見込まれ、カリキュラム変更のための準備に追われていたこともあります(まだしばらくこの作業が続きます)。そして今年も朝から晩まで国家試験対策に時間を使いました。先日第26回言語聴覚士国家試験が終わったところ。この秋学期の学生と個別やグループ指導を数えてみると延べ110時間。空いている時間のほとんどを使って学生と問題を解いてもらい、学生に問いかけ、解説して毎日が過ぎていきました。明確な正答がある問題を繰り返し解いていく試験対策なので、大学での学びの本筋ではないかもしれませんが、この試験の可否は人生に関わるもの。大学生が社会に出ていくための後押しの仕事です。現在、多くの学生が一般入試ではなく、総合選抜型や指定校推薦を利用しており、受験勉強をしたことがない学生も少なくはありません。最後に国家試験が控えている場合は、全国一律の基準で合格判定がされますので、ここで初めて受験の壁に遭遇することになる学生たちが多大な苦勞をする様子を見てきました。最近、とうとう言語聴覚士国家試験のための塾が登場し、ビジネスにもなっています。4年間(3年制、2年制もありますが)の学びからこぼれ落ちてしまうのはなぜか。考えていかなくてはならない課題です。この4月から私立大学でも合理的配慮の提供が義務化されます。合理的配慮について執筆していましたが、今回は締め切りに間に合いそうにありませんので次の機会にしたいと思います。

みちくさ言語療法 休載

サトウ タツヤ 復活！

一度卒業した身ですが、帰って来た__
対人援助学縦横無尽シリーズとして、復
帰したいと思います。

コロナ後の様々な活動について ― 特
に文化心理学の蓄積のうえにたった活動
について一年一回くらい寄稿したいと思っ
てます。

学部長職も3年が終了。心痛むことも無
いとはいえないが、学生達が活動の場を
拡げて成長していく姿には勇気づけられ
ます。

帰って来た__対人援助学縦横無尽
P64～

山口 洋典

2024 年、元日に発生した令和 6 年能登半
島地震で被害を受けた皆さんに謹んでお
見舞い申し上げます。静岡県磐田市で 18
年育った私は、いつか来る東海地震を常
に備えるようにと言われ続けてきました。
そして大学進学でふるさとを離れて 1 年
が経たずして、阪神・淡路大震災が発生し
ました。自分にも「何かできる」の思いで現
地に駆けつけ、仲間と共に、そして被災さ
れた方々と共に、今よりもよりよい状態に
なるようにと、手と足と口と、そして気持ち
を動かしていきました。

地震から程なく、1 月 3 日に高校時代の
同窓会がありました。多くの方に不思議が
られるのですが、3 年生ではなく 1 年生の
クラスの仲間と恩師を囲む会で、オリンピ
ック・パラリンピックの年に行うことが慣例
になっています。今回、後期高齢者になら
れた恩師から、小説をもとにしたドラマ「グ
レースの履歴」を教えていただきました。
妙にその意図が気になり、一気に鑑賞し
たところ、元日の地震も相まって、いつか
やってくる自らの死に備えて自分の大切
な人に何を残し伝えることができるのかを
深く考える秀逸な作品で、いつまでたつて
も恩師は恩師だと、改めてその慧眼に敬
意と感謝をいたしております。

PBLの風と土
P207～

小池 英梨子

ひょんなことから、産経新聞の夕刊に月
1ペースで連載することになりました。その

名も「ねこから目線。の現場から」。マガジ
ンの原稿も毎回泣きながら締め切りギリ
ギリアウトで滑り込む私が、2つの締め切
りを抱えてやっていけるのか。次回は3月
23日だそうです。

そうだ、猫に聞いてみよう
P182～

安發 明子

『ターラの夢見た家族生活』が一般発売さ
れた。対人援助で大切なことについて考
える機会になる本だと思うので大学や地
域の図書館で注文してください。

フランスの対人援助の現場で使われてい
るお気に入りのツールを日本語訳し、ダウ
ンロードして使えるように公開しています。
是非チェックしてください。

[https://akikoawa.com/useful-
links/](https://akikoawa.com/useful-links/)



フランスのソーシャルワーク
休載

尾上明代

休載

一宮 茂子

生体肝ドナーをめぐる物語
休載

付け加えることができる価値は何か？

～ 親族が協力して、みんなで子育て ～

5

千葉 晃央

固有の文化を尊重した支援

2023年11月18日(土)から23日(木)にブリスベンの児童福祉機関で学ぶスタディツアーに研究員の立場で参加しました。このツアーは日本財団の助成で「フォスターリングソーシャルワーク専門職講座」の一部として企画、開催されました。前回に引き続き、その報告を行います。

ブリスベンでの研修2日目に、ソーシャルワーク機関KALWUNさんを訪れ、学びました。こちらは支援対象を先住民の方々を中心として、活動されていました。先住民の方々の文化が維持できるよう、同じ(できるだけ近い)文化的背景を持つソーシャルワーカーが担当することが特色でした。

今回は、そこを訪れたときのメモを文字お越ししてみます。前回同様、英語を通訳していただき、それを千葉がメモをしたものから文章を作っています。そのため、内容の

真偽を確認したものではありません。そのあたりをご理解の上でお読みください。



KALWUNへ

2日目の午前中に訪問。奥の部屋に通していただき、お話を聞く。立地はゴールドコーストの近く。建物は郊外の大きな一軒家という様子。ワーカーの方が話してくださいました。はじめに、土地の所有者が先住民の人々であるという認識を全員で共有しました。「晴天のゴールドコーストへ、ようこ

そ」。当日は曇天で小雨…ユーモアも交えてのスタートです。「今皆さんはオーストラリアの先住民のなかでも、カラマリ族の土地にいます。ここは、カラマリ族が切り開き、暮らし、その伝統の流れがあって今につながっています。この土地の名物は、ブッシュ茶（山菜茶）です。日本で里親制度を広げようとする動きがあることを私たちも聞いています。その時に重要な点は、実親家庭とのつながり、里親家庭とのつながり、それらを踏まえて、子どもの成長をどう支えるか、そしてどう情報を扱っていくかというところ です。そして、私たちがしていることを日本に当てはめるならアイヌ民族、琉球の方々の文化的背景を維持、伝承したソーシャルワークを行うということになるでしょう。こうした支援を行うことは、植民地化された史実の影響をなくし、本来の姿を取り戻す目的があります。」



家族の分離は、西洋文化

「児童福祉、児童保護に関するサービスの現状をお話しします。先住民の数はクィーンズランド州で、トレス諸島も含めて人口の約3%です。しかし、児童福祉、児童保護のサービスを利用している全体の約50%が先住民に関するルーツの背景を持っています。先住民の方々は何かかも奪われた世代がありました。家族、そして子どもたちは制度によって、家族から引き離されました。本来先住民の方々が行っていた教育や養育の実践から無理やり切り離された歴史があるのです。我々のゴールは、本来持っていた先住民の養育のやり方を現行の福祉システム、社会制度に理解させることです。」

「上手くいっていないときに、家族を引き離すというのは西洋的なやり方だと思います。私たちは先住民の暮らしに基づいた文化的養育に関してアドバイスをします。その手段の1つとして、親族養育があります。親族システムを生かし、おばが養母になることもあります。私たちの活動は、先住民ではない人々に対して誤解を解消していくことから始まります。つまり、西洋と先住民の子どもの養育の違いを認識してもらうことから始まるのです。親族養育の一貫として、祖父母が育てる、叔父叔母が育てるということもあり、その暮らしを支援するのも目的です。」

「家族の中には、セーフパーソンがいます。危険ではない人です。その人を含めて、

家族に力を与えていくことになります。誰が子どもを見ていくか決めていこうとアプローチすることもあります。そこで、ワーカーが考えることは、子どもはどの人を良く知っているのか？どこに行くべきか？です。これは家族（子ども）が決めることです。ワーカーではありません。家族として過ごせないなら、どうやって家族に戻ることができるかについて取り組むことになります。つまり、家族とつながる、文化とつながる。それを養育者がサポートしている環境が重要となってくるのです。」

子どもから高齢者まで

「私たちのサービスは、妊娠時から高齢期までが対象です。ヘルスサービス、心の健康も含まれます。先住民の方々は寿命が短いというデータもあります。そのため、シニアサービスもあります。長老と呼ばれてきた方々が対象です。子ども向け、家族向けのサービスもあります。」

「先住民が保護されやすいのはなぜなのか。先住民の文化では子どもと一緒に寝る習慣があります。西洋では子らははやい時期から別々に寝ます。アボリジニ（東洋も同じですが）は一緒に寝るのが普通です。また、子どもが親族の家での暮らしを複数経験する文化もあります。5つぐらいの家族に行くのが普通です。子育てをシェアしているのです。また、世代を超えて、暴力、ドラッグ、アルコールの習慣を持つことが起こっています。そして人種差別が残っています。」

「時にはアボリジナルの人たちにとってはリスクのある状況ではなく普通なのに、西洋の文化から見て普通ではないので子どもや生活を取り上げられるということが起こるのです。つまり、ケアのスタンダードが違うのです。一方は西洋の基準。もう一方は先住民の持つ7000年の習慣と文化。その違いです。親族養育のように成人にはコミュニティの一部である責任があります。男性、女性にそれぞれに責任があるというような西洋の価値観とは異なるのです。」



→お話の後には、フィールドワーク。先住民の方々が暮らしていた地域を歩きながら学びました。色付きの土がここにはあり、昔はそれを体に塗って客人を歓迎する儀式をしたと教えていただく。

親族で協力して子育て

「先住民の文化では、はやい時期に責任を教えています。年長のきょうだいや下の子に責任を持ちますし、祖父母がしつけに関しては責任を持っているという状況もありますし、叔父さんおばさんが教育者になる文化もあります。両親に関しては、安全と食事を提供する役割があります。こういった分業は、西洋の児童保護だと、ネグレクトになります。」

「先住民の暮らしには、13歳の子が子どもを連れておばさんのところに行くことは普通にあるのですが、西洋文化ではこれもネグレクトとなります。先住民には伝統的な暮らしがあります。なのに、普通はそこまで周囲に知られていないのです。」

ルーツが証明できない…

「先住民であると特定できない状況も多くの人々に起こっています。先住民の言語もできない、先住民の文化的活動にも参加ができない、先住民のルーツがあるけどもそれを証明する実態がないので、特定できない状況も起こっています。本人にとって、この状況は不名誉なことです。つまり、自分のことを知らない人が多いのです。そういう人々の安全な場所を確保し、本来の文化とつながる。その活動を行っています。」

「肌の色は世代を経て、薄くなり、ポルトガル系やイタリア系の肌の色？と言われてしまうことも起こっています。つまり、アイデンティティの危機です。失われた言語があり、失われた物語もあります。植民地政策における白人への同化政策で、本来の文化

からの隔離政策が行われてきたのです。オーストラリアの先住民は世界で最も古い歴史を持つともいわれています。人類の生きた歴史そのものなのです。つまり、どこの国でも先住民から学ぶことがあります。調べて、学べば学ぶほど宝があります。文化を理解することが非常に重要なのです。こんな言葉があります。耳が二つで口は一つという意味は、話すよりたくさん聞くことが大事！つまり、耳を傾けなければいけません。」



→ここは神話が残る先住民にとっての聖地です。
その横までビル群が…

たくさん耳を傾けよう

「2つのシステムがあります。児童保護のマニュアルがあって、児童保護法に基づ



→フィールドワークのラストは先住民に関する文化センターに立ち寄りました。

く危害等を児童が加えられた時の対応が決められています。しかし、そこには特別な制度もあります。先住民の文化ではこういったことへの支援も親族、家族の下ですのです。先住民の場合はその方針に沿うと決まっています。非先住民族への説明もできるようにになっているのです。こうして、自分たちの法律を作って対抗しています。」

「例えば、出産後に家族から引き離された子が6人いました。しかし、赤ちゃんは元の家族、親族に戻されました。そのぐらい先住民自身の文化と、その機能に自信を持っています。母は、暴力、ドラッグの課題を抱えていました。母自身もトラウマがあり、養育が無理と言われることもありました。しかし、先住民の文化に基づいた支援プランを立て、弁護士も立てて裁判も行うこともありました。先住民の暮らしに基づいた養育を行う家族に理解を示し、力を与えるのが私たちの役割です。」

「先住民には生まれながらに自分のトーテムがあります（日本でいうと干支のような）。そのトーテムごとに食べてはいけない食材が決めています。これは種を絶滅

から救い、食べつくさないためにもなり自然環境保護にもつながります。こうした文化もあるのです。」

家族が違う

「つまり、家族が違うのです。里親手当は日本より少し多いぐらいでしょうか。日本では一人月約 15 万円。イギリスは年約 240 万円。月約 20 万円。オーストラリアのクィーンズランド州では里親開始手当として約 12200 円、引き受け手当として一人につき約 61100 円。2 週間ごとに約 5600 円支給。高度な支援を求められるハイニーズケースには手当として 2 週間ごとに約 20000 円追加されます。なおかつ税の免除も受けられます。年間約 600 万円で、医療的ケア児ならさらに…となっている状況です。」

「里親には 24 時間相談テレホンも解説しています。心理相談も利用できます。大事なのは人間関係だと思っています。仕事の役割ではなく、人として接する必要があることは間違いありません。」



臨床社会学の方法

(44) 暴力加害者対策はどうして必要なのか

ー暴力の再生産・連鎖を断ち切るためにー

中村 正

1. 加害者どうするーようやく動き出すか

2001 年（平成 13 年）にできた「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（配偶者暴力防止法）」は加害者対策について第 25 条で調査研究することとしている。しかし加害者対策の制度が創出されていない。国は調査ばかりしてきたといっても過言ではない。私は、その一つ、平成 27 年度（2015 年度）「配偶者等に対する暴力の加害者更生に係る実態調査研究事業」に関係していたことがある。その時も、加害者対策の議論はするが本格的な取り組みをすべきという結論には至らなかった。その後何度か委員会を組織しているが、有識者会議も決断できずに推移し、加害者対策は時期尚早だと先送りしてきた。

しかしそれでは DV を断てないということで国も重い腰を上げ始め、加害者対策始動というところまで来た。そこで令和元年度（2019 年度）から再び内閣府の DV 加害者対策調査研究事業に関与するようになった。政策化をしたいこともあり座長になっている。これらの加害者対策は次のようにして進められてきた。令和元年度（2019 年

度）「配偶者暴力被害者支援における機関連携及び加害者対応に関する調査研究検討会」、令和 2 年度（2020 年度）「配偶者暴力加害者プログラム調査研究事業」を担った。さらに「内閣府女性に対する暴力に関する専門調査会」の委員も継続しつつ、令和 3 年（2021 年度）と 4 年度（2022 年度）には「配偶者暴力に係る加害者プログラムに関する調査研究事業検討会」を担当してきた。そして令和 5 年度（2023 年度）「配偶者暴力加害者プログラムの普及に係る調査研究事業」も継続して座長として担当してきた。

2. 暴力の連鎖を視野にいてーどうして加害者対策が必要なのかの根拠

刑事司法のなかでは被害と加害という対立的・二元的な構造は強く存在している。しかし、親密な関係性における被害と加害は同じようではない。親子、夫婦、男女（パートナーシップ制度があるので男男、女女、さらにトランスの場合も加わる）、さらには師弟、上司・部下など一定の人間関係がある者同士の暴力は、被害と加害の関係性を無視できず、見知らぬ者同士の被害と加害と同

じではない面がある。本連載では刑罰だけではなく加害者対策を長く検討してきたが、DV・虐待の加害者対策が地域・自治体レベルで社会制度的に始動する段階でもあり、加害者対策が必要となる論理を確認しておきたい。

刑事罰にならない暴力、いじめ、ハラスメント、体罰、虐待の加害者対策に刑事司法だけではなく取り組むべきという立場から重視したいことは、加害の背景にある暴力の連鎖である。

たとえば少年院在院者の調査（令和5年版『犯罪白書』）をみてみよう。あとで検討する「子ども期逆境体験」を調べたデータである。少年院在院者には親からの身体的暴力がかなりあることがわかる（本節末尾の図）。さらにその保護者にも同じようなデータをとっている。保護者もまた未成年の時に親から暴力を振るわれた者が12%となっている。令和5年の調査で18歳未満の在院者の保護者なので、比較的若い層だと推測される。40歳前くらいだろうか。さらにその親世代となると60歳前後だろう。こうして3世代にわたって暴力が続いている層がある。

続いて、学校の部活などでの体罰も同じ傾向がある。「体罰の再生産」と指摘したスポーツ心理学の研究がある。この分野の先行研究をまとめると、体罰を受けた経験を持つスポーツ選手は体罰を肯定し、体罰を用いるかもしれないと考えているという。また、体罰を受けた選手は体罰をとおして技術的・精神的に成長したと意味づけるという（中村哲也『体罰と日本野球』岩波書店、2023年）。

また、職場のいじめ研究（ハラスメントも

含む）からも同じようなことが指摘されている（坂倉昇平『大人のいじめ』ちくま新書、2021年）。坂倉さんは労働相談に応じており数多くの事例をもとに指摘をしている。この大人のいじめ研究では、上下関係だけではなく同僚関係でもいじめが存在しており、組織はそれを止めるどころか放置し、相互管理の仕組みとして利用さえしているという。「労災認定された職場いじめの4割は同僚による」「ハラスメントは放置される」などと言う。「ハラスメントの『放置』は、企業の対策の『不足』や『失敗』によるもの」ではなく、「むしろ職場いじめが繰り返される状態の方が、会社にとって何らかの理由で『合理的』なのではないか」と問うている（51頁）。それは競争しあうことが温床になっている組織だからこそ発生する疑心暗鬼がベースになっているといえるだろう。こうした事態を把握する言葉としてハラスメントは狭いので、「いじめ」として広義に把握することをおして、部下から上司や同僚同士の暴力を視野にいれ、それを放置することに「労務管理」的な機能があるという意味である。

子ども虐待とDV加害も暴力の再生産がある。虐待する父親向けの脱暴力を課題にする男親塾を大阪で主宰しているが、このグループワークに参加する男性の全てはかつて親から虐待を受けていた。もちろんそうではない男親も世の中には多いが、暴力が連鎖していない男性はそもそも男親塾には来ない。また、京都府と連携して取り組むDV加害が主訴で相談に来る男性問題相談室でも同じようである。つまりDV加害者には虐待する父親がいたのだ。暴力が連鎖していない男性がかなり存在しているので、

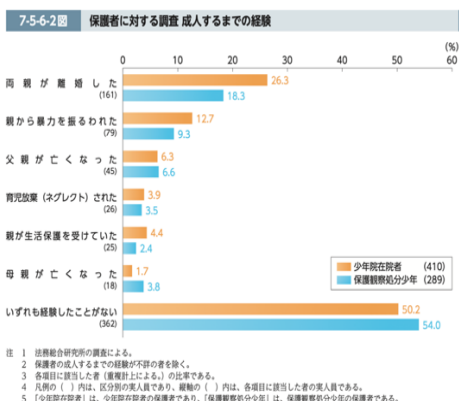
どこかに非暴力への分岐点があることになる。暴力を振るわれたが再生産していない男性の心理的社会的な特性が分岐点をみると分かるので、いずれにはライフストーリー調査をしてみたい。

暴力の連鎖・再生産は、被害者が加害者へと展開していく過程といえる。だからさらに次の加害者をうまないためにも現在の加害者への脱暴力対策が不可欠となる。

関係性の再生産(令和5年「犯罪白書」より)



続(その親もまた暴力を受けていた)



3. 子ども期逆境体験への対応としての男性性ジェンダー作用

子ども期に体験した被害は、「子ども期逆境体験」としてアセスメントされる。次の10項目が逆境的体験として特定されている。1. 心理的虐待、2. 身体的虐待、3. 性的虐待、4. 身体的ネグレクト、5. 情緒的 (心理的) ネグレクト、6. 家族の離別、7. 家庭内暴力の目撃 (DV)、8. 家族の物質乱用 (アルコール・薬物)、9. 家族の精神疾患、10. 家族の収監である。これらは英語名で「ACEs (エースズ)」と略され、その正式名称は「Adverse Childhood Experience」である。ここに先の少年院調査での少年と保護者のペア調査を重ねると、暴力の再生産・連鎖がみてとれる。

しかし、もちろん逆境的体験を乗り越える者も多いはずである。本稿で注目したいのは、その乗り越え方に、男性性ジェンダーが作用していると考えられる点である。何らかの逆境的体験を乗り越える力はもちろん肯定的な体験であるが、そこに男性性ジェンダーが作用していることが男性の暴力加害者との対話から見えてくる。体罰を受けたがそれを乗り越えることで成長したと感じる層があるという体罰肯定の研究を紹介したが、同じロジックである。アスリートだけではなく一般の男性でも、暴力を受けたがそれを乗り越えたと思う際に男性性ジェンダー意識が活用され、強化されていることがある。企業組織でもハラスメントやいじめまがいの競争的な環境で用いられる労務管理の手法で生き延びてきた上司も同じような傾向がある。自己責任という言い方がこれらを助長させる。

人生のこれまでの経過を肯定的に眺めるという意識や態度がありうるということを前提にしたとしても、逆境的体験が人を鍛えるという考え方は男性性ジェンダーを介すると危険な面もあることが理解できる。その乗り越え方に主流となっている男性性ジェンダー作用が機能しているので、乗り越え方を吟味する必要があるという意味である。子育てのなかで男親は、逆境的な体験を男性として乗り越えたがそれは男としての自己を強化したので、子どもにも同じような暴力の乗り越え体験をさせるべきだとの考えに至る経過は男性性からみると諸刃の刃である。そうした男親たちが私たちの取り組む男親塾にやってくる。

さらに一般化すれば、日常的环境のなかに暴力が存在し、そのなかをサバイブしてきたが、そこにこそ暴力被害が加害へと展開していく芽があるともいえるだろう。そこに照準し、子ども期逆境体験の暴力を肯定しない乗り越え方こそが大切となる。これは脱暴力に取り組む加害者対策実践者の留意点である。

暴力を肯定し、自己物語として内面化され、他者との関係づけのなかに意味構成されていく。そうした過程をとおして暴力が関係性に巣食うことになる。もちろんそうではない人もいたので、暴力によらない問題解決の身につけ方として、再生産・連鎖しない人の生活体験に学ぶことが不可欠となる。それと同じような比重で、少なくとも再生産・連鎖した人の体験の一連の過程を究明し、暴力と非暴力の分岐点をさぐるためにも暴力加害者との対話は不可欠といえる。そうした対話が可能となるような加害者対策は必須となる。ACEの研究は重要だし、

日本社会に即して改変されるべきだと思うが、それ以上に逆境的体験を乗り越えるという際に、両儀的な意味を持つ男性性ジェンダーの視点が欠けていることがやはり気になる。

4. 逆境的体験を乗り越える際の男性性ジェンダー作用

暴力が連鎖している加害男性たちとの対話からこの点を特徴づけると次のように整理できる。①「男性的な克己の過程」：暴力を振るわれてもそれに耐えて対応してきた男性的な克己の過程があり、それを乗り越えてきたと意味づけている。②「男性的な沈黙へと幽閉」：男性が暴力被害を受けることは主流の男性性ジェンダーからすると恥辱的なので、沈黙へと体験を閉じ込める（幽閉）。③「男性的な鼓舞の契機」：それは自負することでもあり、長じて自分の息子に推奨さえする鍛錬の体験でもあると考える。④「資源や儀礼として機能する」：暴力は、男性として生きていく上での資源として機能する。⑤あるいは通過儀礼として成長していく源泉ともなる。⑥「男性性ジェンダーが社会の共犯関係」：暴力という形態ではなく別の攻撃性へとエネルギーを展開していくこともできる。

これらは男性加害者との対話やグループワークのなかからの整理である。内心としてこうした心理作用を男性性ジェンダーは果たす。このジェンダー作用は、個々人の心理学的次元というよりは社会的次元にある。つまり、人々の関係性に影響を与える。また、いじめ、パワーハラスメント、体罰、暴力によるしつけなどは社会的、組織的に

は肯定される傾向もある。相互作用をもとにした関係性を構成する際に、男性性ジェンダー作用は次のような特性をもつ。

第1は、親密さの形成とホモソーシャル関係についてである。ボーイズクラブ的に親密な関係性が生育過程で作られる。学童期や思春期の同性同士が近づくなかで形成される友愛・友情に男性性ジェンダーが作用し、近づきつつも距離を置くというホソシアルとホモフォビアが同居する物語をつくる。

第2は、その際、暴力・競争・排除・優劣などの主流となっている特性が、男性性ジェンダーに付与されがちである。親密な関係性にこうした男性性ジェンダーの意識を内在させ、そこにホモソーシャル的な関係を組成させる。特にスポーツや女性蔑視的な文化が動員される。

第3は、漫画、映画、ドラマ、音楽などをとおして表象される男らしさ文化が関与し、イリュージョンとして意識に作用する。そこに自己を同化させつ男らしさ文化が構築される。それへの同化を試みながら少年たちはそのフィクションに擬態する。

第4は、マジョリティとしてのシスジェンダー男性への生育過程で、異性との関係において親密な関係性を展開させていく。先行する同性同士の友愛・友情として体験した親密な関係性を投影する。その際、異性との関係性を意識させるのは母性の存在である。「母性的なるもの」との関係で身につけた身体や感情の次元からのジェンダー作用は長じて構築する男女関係に影響する。特に、父母は男女関係でもあることから、パートナーシップの模範として子どもに作用する。成熟した男女関係を構築する以前の

親密な関係性体験として、同性同士の親密体験と母子関係における親密体験が混在する。自らつくる愛情関係に先行した親密体験は生育過程に影響する。

6点に整理した男性心理的な内心の構成と4つの社会的な関係性水準にあるものが交差し、逆境的体験の乗り越えに男性性ジェンダーが作用し、暴力を必ずしも否定しない意識や態度が構成されていく面を無視できない。

これらの事例は男性相談やグループワークにおいて頻出する。たとえば、グループワークで肯定的に応答（アファirmーション）すると批判的になる男性がいた。アサーションに馴染めない男性なのだ。そう簡単に肯定して欲しくないというのだ。あるいはタイムアウト法を卑怯だと指摘した男性がいた。その場から逃げるのだと理解したのだ。

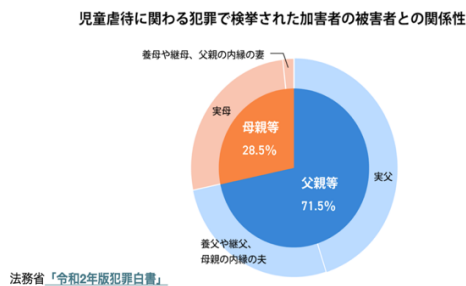
褒めると嫌がる男性は、グループワークがマウンティングの場になっているともいえる。「お前は俺を褒めるに値するのか」と値踏みしている。そしてそんなに簡単にこうした脱暴力プログラムやカウンセリングで変化する訳がないという強固な信念も吐露され、心の中の闘争モードが垣間見える。暴力の乗り越え方にそれまで生きていた日常的环境、相互作用の仕方、関係性の組成のやりかたが反映されている。

こうした加害男性たちとの心理的格闘の総体が加害者対策となる。さらに行為としては暴力なので、被害者が存在しており、謝罪、責任の引き受け、加害の自覚、関係性の再考などへと誘発する対話を行うことになる。時には指示的な面もある。傾聴はするが共感できない体験を持ち込む加害者との対

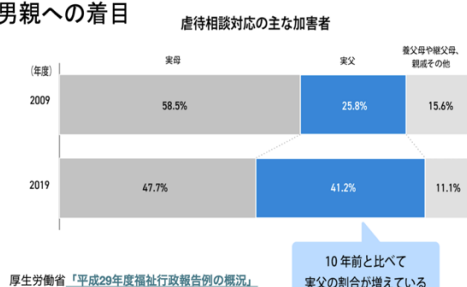
話には工夫が必要だ。そしてこれら全体は非刑事罰的なアプローチなので、動機形成を行いつつ、協働する伴走型の援助となる。

こうして男性問題の視点を加害者対策に持ち込む必要性は加害男性個人への動機づけとしての脱暴力への対話であるとともに、男性性ジェンダー作用が社会的次元からも機能している。暴力の言い訳や正当化として社会の無意識の、暗黙理論のように機能しているといえる。個人と社会の交差する点から脱暴力へと向かうべき加害者対策となる。

さらに虐待の場合もこの視点が必要である。子ども虐待の加害においても男親の暴力性は大きくなってきた。男親塾のようなアプローチの必要性は増大していることは下図からもわかる。子育てを担ってきた母親が虐待の加害であることが多かったがやはり男親が加害者として張り出してきている。なかでも刑事事件となるような重篤な虐待加害は父親が多い。



男親への着目



5. 関係性の病理について

紹介したように暴力の再生産・連鎖が多様な領域で確認されているので関係性や相互作用の視点から再生産・連鎖を考えてみる。暴力研究の領域では、ACE だけではなく暴力を振るう人の生きてきた環境（相互作用や関係性）を把握する概念が多く提起されてきた。それらを手掛かりにしてみずからの暴力行動を把握し、脱暴力へと至る支援の取り組みに反映させる必要があると考えてきた。「エコロジカル・ネスト（生態学的な巣）」、「トラウマテック・ボンディング」、「ストックホルムシンドローム」、「加害者への同一化」、「ガスライティング」、「学習性無力感」などである。

いじめ問題でも地位と関係性の病理をとらえてきた。たとえば「フレームの混乱」という事態である。いじめであるにもかかわらず、いじめている側が、「これは遊びだ」といってフレームや状況を恣意的に定義することは批判を封じるので恐ろしいことである。「遊びなのにまじめに反応するな」というメッセージを含み、いじめられている側に反論できないというダブルバインド状況をもたらす。

演習で指導をしているある院生が「いじり」の研究をした。インタビュー調査をして「いじられ体験」を聞き取った。いじめといじりは連続的であるが、仲間意識のなかでは潤滑油のように思う人、あるいはいじられ役を演じる人もいる。いじめとは不連続なように見える面もあるが、そこに被害者が加担させられることや自己非難じみた自虐性もあることなど、調査をすればするほど、いじめとはまた異なる恐ろしい面があ

ると指摘した。つまり無自覚で無意識的で遊び感覚的な要素があるというのだ。

これと同じようなことが男性相談でも話されたことがある。「笑いながら怒るようになってしまった」と悩む男性がいた。少年の頃、身体をくすぐられながら暴力を受けていたと振り返っていた。そうすると自然な笑いができなくなったという。逃れられない状況に追い込んでおいて暴力を加えながら別の意味づけ(フレーミング)をするとどうなるのだろうか。ダブルバインド状況が発生し、情動や行動が混乱し、対人関係が壊されていく。同じようなことは、これは愛情なのか暴力・コントロールなのか、しつけなのか虐待なのか、いじめなのかふざけや冗談としてのいじりなのか、体罰なのか指導なのか等、相互に関係を希求しあうところにはこうしたフレームの混乱が生じやすい。特に体罰を禁止せず、許容している日本社会では、「愛という名の鞭」という矛盾した言い方が流通しているので、余計にこのフレームの混乱がおこる。また、男性の性被害でも、身体的な刺激として生理的に反応して勃起・射精することがある。こうした場合は自己を責めることもあるという。

加害者臨床では、いじめ、マルトリートメントとしてのしつけの暴力、パワーハラスメント、モラルハラスメントや心理的暴力は、「関係コントロール」と位置付けて加害者に理解をすすめる対話をおこなう。暴力加害者たちの「弁解」は都合のよい、暴力を正当化する関係性の結び方を示していると考える。加害を認めないという「否認」と重なる面もある。

要約すれば、①相手との関係において「操作性の強さ」への無自覚さあるいは当然視

がある。②暴力行為にいたったのは理由があるという。相手に問題があるからだという。「他罰性と責任転化」である。③非対称な関係性における「服従化の心理の活用」がある。④相手に対して「読心性(マインドリーディング)の喚起」を期待する。⑤「歪んだ愛着」が形成されやすいこと(あいつは俺がいなければやっていけないと思う等)。⑥人格を攻撃する。「価値剥奪的で地位降格的な関わり」がある(モラルハラスメント的である)。⑦「被害者の自責の念を強化」させるようなコントロールがあること等である(パワーハラスメントについて論じた次の論考を参照のこと。中村正「ハラスメント加害者の更生はいかにして可能かー加害者への臨床心理社会的な実践をもとにして考える」、『日本労働研究雑誌』2019年11月号(No.712)より。ダウンロード可能)。

6. 関係性とコントロールが対象になる心理的精神的暴力

関係性が介在して暴力が生起する事情に関して、最近の暴力問題についての議論は、特に心理的精神的暴力、関係コントロール型暴力、エントラップ(罠)型暴力を軸として把握するようになってきた。たとえば2024年4月からDV防止法が改正されることは以前から紹介してきた。接近禁止命令の発令要件が拡大される。「更なる身体に対する暴力又は生命・身体・自由等に対する脅迫により心身に重大な危害を受けるおそれ大きいとき」とされ、心身という言葉で心理的傷つきを対象にする。

パワーハラスメント防止法(改正労働施策総合推進法)の定義にも「精神的攻撃や個

人の侵害」はすでに明記されている。また、刑法改正（2017年・2023年）で性犯罪の定義が変化した。たとえばグルーミング（手なづけること）、地位や関係性の利用（面会要求罪）、不同意性交罪の創設などである。さらに、カルト二世問題では主にマインドコントロール（子どもの自主性への課題）が主題になっている。SNS的なコミュニケーションの特性が悪用され、自己顕示欲的な発言を助長し、ヘイトコミュニケーションにある優越的コミュニケーション・他罰的コミュニケーションを横行させていることも重なる。

こうした傾向は、すでにDV・虐待など、関係性のなかの暴力の研究面においては心理的暴力や関係コントロールへの注目として研究が盛んである。たとえば、心理的なDVのアセスメント研究がある。いつも男性相談で参考に使っている研究を紹介しておこう（K. Daniel O'Leary、Roland D. Maiuro、(2001). Psychological Abuse in Violent Domestic Relations、Springer、p.xi）。

4つの視点からコントロールする心理的暴力をアセスメントする。「I. パートナーの自己イメージや自尊心を傷つける」行為で、たとえば、怒鳴る・下品な言葉、軽蔑的な言葉、卑下した言葉で言及する、名前を呼ぶ、外見や行動に関して貶める、友人や家族の前で恥をかかせたり、困らせたりする、子供の感情を害したり、疎外しようとする、超批判的である、否定的である、嘲笑する、感情を無効にする、非難によって個人の責任にする、その人の行動ではなく、性格に焦点を当てて批判するなどがある。

「II. 受動攻撃的に感情的なサポートや養育を拒む行為」で、たとえば、回避や引きこ

もり、不機嫌な態度、無言での対処、辛らつな不作為、ネグレクト、感情放棄（自暴自棄）などの懲罰的使用がある。

「III. 脅迫的な行動」で、たとえば、身体的に傷つけたり、傷付けたり、殺すぞという脅迫：離婚しろ、子どもを取り上げるという強圧的な脅迫、嘘や不貞行為、無謀な運転や行動をとることがある。

「IV. 個人の領域や自由を制限する行為」で、たとえば、友人や家族からの孤立、ストーカー行為や居場所の確認、日記や電話の記録の無効化、パートナーの就労や通学、または自分一人で何かをすることの妨害：関係における意思決定の支配：パートナーの金銭の管理、パートナーによる電話の使用の妨害、車の鍵の取り上げや車の使用不能化、性役割のステレオタイプ化など、性別および／または婚姻関係に基づくパートナーの選択肢の支配、権利意識または所有意識などがある。

7. 暴力のある家庭で育つ子どもの意識の研究から

子ども期逆境体験は子どもにとってはトラウマ的体験といえる。そこで育ちを支援する観点から、トラウマインフォームドフォークア（TIC）が重視されている。トラウマ的体験をしたことを念頭においたケアのことである。ジェンダー体験はトラウマ的になることもある。男性性ジェンダーも同じで、暴力に曝されることや耐え忍ぶことを強調された場合、トラウマとなる人はいる。こうしたジェンダー作用の視点はTICにおいても不可欠だと考えるが、あまり前掲化してこない論点である。子ども期逆境体験

を生き抜くさいに動員される男性性ジェンダー作用は、のちに暴力を肯定するようになる危険性もあることを指摘したが、TIC実践に活かしていく必要がある。このロジックは子どもが虐待のある環境を生き抜く際に抱える課題の研究としてなされてきた。DV家庭で育つ子どもの発達の研究である。たとえば、「DV被害者の支援に関するガイドライン作成に関する研究」(平成19年度研究報告書、主任は石井朝子さん。平成20年3月)という研究を紹介しておこう。

暴力のある家庭で育つ子どもへの影響を6点にまとめている。第1は、直接の虐待の影である。コントロールの影響が子どもにも発現する。DV(被害を受けている親は自分自身の被害によるこころの傷つきのために無感覚になっており、自分が止めに入ることによって更に暴力が激しくなるのを恐れて子どもを守りきれないことが多いという。

第2は、生活の中で繰り返されるトラウマがある。これは一回の大きなトラウマに比べて異なる反応を示すことが多く、発達への影響も強いものになると考えられている。

第3は、トラウマがある家族では安全感の喪失へと至る。

第4は、そしていつ崩れるか分からない不安が生起する。

第5は罪悪感・無力感が支配する。子どもは自分中心に周囲を認識する。そのせいで、何かが起きるとすぐに自分のせいであると思う。

第6は暴力での解決がモデルだと学習する。自分の周りで何か解決しなければならぬことがあると、弱者への暴力で解決しようとしてしまうことに繋がる。その結果、

家庭のみならず学校などの他の場面でも暴力的になる子どもは少なくない。そして権力支配のモデルと保身が見られる。弱い存在である子どもたちは、自分の身を守るために強者であるDV加害者の側に立とうとすることもある。

この研究は、子どもが虐待として直接振るわれる暴力ではなく、DVとして妻であり母である女性に向かう暴力が家族のなかにある場合、面前DVという直接的な暴力の目撃ではなくても暴力がある場合の緊張を反映している。これは家族のなかの暴力を関係性という点から学習していくことでもある。夫婦・男女という対等なパートナーシップが構築されず、暴力がそこに介在する場合は関係の非対称性を学習することになる。

家族を介した「関係性の再生産」

➡「面前DV」(＝複合暴力)をとおして、男女関係とジェンダー、パートナーシップを学ぶ子ども

- ①生活の中で繰り返されるトラウマ…ストレスとなることがあると、否認や解離に至ることが多くなる
- ②安全感の喪失
- ③いつ崩れるか分からない不安…常に緊張が強いられたり、身構えた中で生きていかなければならない
- ④罪悪感・無力感…罪悪感や無力感が自己評価の低下に繋がり、自分に自信が持てなくなってしまうがら
- ⑤暴力での解決モデル
- ⑥権力支配のモデルと保身…弱い存在であるDV被害者に怒りを向ける

『DV被害者の支援に関するガイドライン作成に関する研究』
平成19年度(2007年度)厚生労働科学研究報告書(主任研究者:石井朝子)』

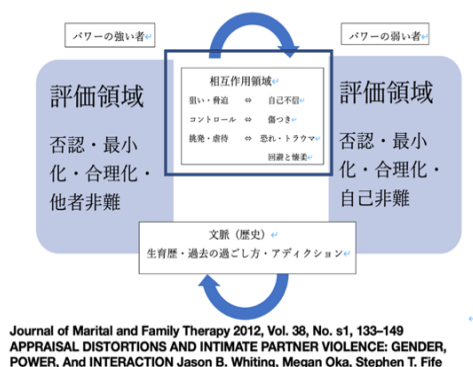
(これらの諸点をまとめたもの)

8. 非対称な関係性の相互作用をとおして生成する暴力

家族システムとしてこの関係の非対称性を見てみよう。夫婦関係と親子関係というパワーの強弱がある非対称的な関係性こそが家族の特性であり、そこを起点に情動豊かな小集団として組織されているのが家族であるが、であるが故に独自の緊張と葛藤

が生じる。その横と縦の関係が相互に影響を及ぼすなかで一方の側に脆弱性が蓄積されていくということを意味している。家族という関係性を対象にしている家族システムの研究から引用してみると下図のように整理できる。非対称な関係性は他方の側に脆弱性を蓄積させていくが、その相互過程には「他者非難と自己非難」という対の関係が組織されていることを表したものである。もちろん力の強弱によるコントロール作用なので強い者にはジレンマがある。加害者のジレンマと私は呼んでいる。非対称性の核心には、他者非難と自己非難の組み合わせがあり、それが関係性として固着してくなかで暴力が常態化していく男親たちは他者非難に長けている（下図参照）。

被害者支援と加害者対応が両方必要な関連図



9. 加害者対策は被害者支援の一環として存在していること

親密な関係性は、家族という生活の場であり、人間の再生産領域である。親子、夫婦を中軸にした関係性から成る。その再生産過程に発達があり、発達に影響を与えるものとして暴力がある。また、家族はジェンダー化されている。そこから逃れにくい関係として社会のなかで存在しているので、暴

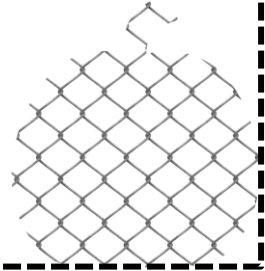
力や虐待を受けたとしてもそのなかを生き抜くことになる。また、心理的な虐待とモラルハラスメント型DVは、すぐさま暴力として告発や介入ができにくいこともあり、長期にわたる、習慣化した、関係性となる。当然のことながら、モラルハラスメントや心理的暴力には通例、刑事罰が課されるわけでもない。しかし、なんらかの対応を必要とするほどの暴力がある場合、分離を中心とした保護命令や家族介入がなされる。被害者支援という形態になる。分離も考え方を考えるべき時にきている。被害者が生活の場を離れるのではなく加害者がその場を離れることが本来は要請される。被害者が逃げなくてもよい対策という意味である。私たちの脱暴力グループワークや男性相談にやってくる加害男性の半数近くは自らが住まいを変え、いったん別居生活をする。母子である被害者が逃げなくてもよい選択をすることも加害者の責任の取り方といえる。こうしたことから加害者対策が体系化されていく。そして加害者臨床が登場する。脱暴力に向けた行動を意識へと改善することに伴走する支援が始まる。相当に長い過程を歩むことになる。いわゆる加害者プログラムであるが、単にプログラムがあればよいというのではないことは幾度となく指摘してきたが、また紹介していくことにしたい。本稿では、こうした加害者対策の必要性について被害者から加害者へと展開していくことがわかっているのでその連鎖を切断するということでの加害者対策の必要性を考えてみた。

中村正（なかむらただし）
社会病理学・臨床社会学
2024年2月29日受理

解放の心理学へ

— 疎外について — (4)

藤 信子



精神科の看護師が主人公の「今日もあなたに太陽を」という韓国ドラマがある。とても面白い話で、いくつか心に響くセリフがある。精神科の師長が主任に、新しく病棟に来た若い看護師のことを「昔の私たちを思い出すの、病院の規則より患者の心を大事にしていた頃をね」という場面があった。この若い看護師は内科病棟で、患者の言うことを聞きすぎるので、仕事が遅くなり、他の看護師にとって迷惑だとされ（本人は気が付いていないのだけれど）、精神科へ異動させられたのだ。患者の心より病院の規則の方が優先する、ということは、私が病院に勤務していた

時も聞いていたことがある。患者の健康を回復するための病棟環境を整える看護師から見るとある種の制限は必要だろうけれど、規則は、一度決めたら、なぜその規則が必要かを考えることなく、「規則だから」ということで、患者もそして医療スタッフの行動も制限されることになることもある。規則が人間性を抑圧する、という構造、疎外の状況。

疎外という人間性を喪失しつつある状況というのは、対人援助の場でも見られることだと思う。この頃、精神医療従事者一私の知合いはほとんどグループサイコセラピストなのだけれど一から聞く話は、「そのグループ

はコストにならないから」と、グループの実施の提案を否定される、というような例である。慢性の統合失調症のグループこそ、大事なのに、と20年近く慢性の患者のグループを実施してきた知人は言う。この場合、病院では、保険点数が付かないことを指摘されることになる。また、事例検討で、患者の家族に病気のことをもう少し理解してもらえたら、患者自身の病気の受容にもつながるのではないかと提案したら「家族面接は1回は保険点数が付きます」と言われ、ちょっとびっくりした。1回だけでは病気のことを十分には理解できにくいけれど、どうなっているんだろう、と思った。私が勤務していた時は、スタッフが役割分担して、家族への説明は看護師が担当したりしていたし、そういう時は、保険点数とか考えていなかった。私の経験は何十年も前の牧歌的な話なのだったけれど、病気に対する家族の理解が大事なことは、関係ないのだろうか、と首を傾げた。

医療に関する疎外状況については、私は電子カルテの導入も影響しているのではないかと感じることもある。患者の「医師がPCばかり見ている、顔を見てくれない」という導入初期の話は解決されたのだろうか。私自身は、病院勤務はずっと以前だし、その後クリニックでも電子カルテなど縁がなかったので検索してみた。参照した次のものは、文献が少し古いけれど、電子カルテについて

の一般的な情報という点では、なかなか見つからない中でのものだった。西村（2009）によると、病院や診療所は、多職種が連携しながら業務を遂行する施設であるため、「質の高い医療を提供するには、全体を一つのシステムとして考え、その元で医療行為が円滑に進められるための支援方法」の一つが電子カルテシステムという。質の高い医療のために、「全体を一つのシステムとして考える」というモデルが、精神医療しか経験のない私には理解できにくいだが、ここはとりあえず、導入するとどのようなメリットがあるのか、前述の記事を見ると i) 各医療職が患者についての情報を共有することができる。ii) カルテが読みやすくなる（悪筆のカルテがなくなる、ということらしい）iii) 待ち時間（検査オーダー、薬剤処方オーダー、会計計算など）が減少する。iv) 診療モデルの組み込み（自分の思考とは違うと混乱する医師が出てこないか）、あと医療安全性の向上等あげられている。正直、高いコストをかけて、システムの使用のためのスタッフの教育に時間をかけ、停電等の時は使えず、患者からは私の方を見てくれない、と言われながら使うには、それほど凄いメリットとも思えない。電子カルテと聞いて、友人は「私が旅先で倒れて、そこの病院にかかった場合、私の受診している病院の診療情報がすぐわかる」のではないかと言っていたが、それはすぐには無理なようである。電子カルテは複数の会社が参

入しているため、その互換性が担保されていないという。。そんなことは、作るときに各社、相談するのではないのか・・・？と驚いた。この互換性の問題は、気になったので調べたところ、2030年までに情報共有できるように2024年度中に標準化を実現したところから運用を開始する、となっている。私が資本主義について分かっていないのかもしれない。一病院内の利便性のために、すごいコストをかけるのか？スタッフには、コストにならないとよく文句言うのに・・・と思ってしまう。電子カルテの導入でコストがかかるから、細かく稼げということなのか・・・。

電子カルテが導入されたために、疎外の状況が生じているのではないかと考えるのは、言われるところの患者―医療者間のコミュニケーションの希薄化だけでなく、スタッフ間のコミュニケーションも減少しているのではないか、と聞くからである。。看護方針やその日の仕事の状態、順序がPCの画面に表示されるとしたら、質問とか疑問点は聞きにく

い。指示どおりに働くことになるのだろうか。他の人とのコミュニケーションが乏しくなると考えることも少なくなるだろう。現象に対するいくつかの考え、意見があることから、自分の考えていたことを見直したり、より確信を持ったりすることが出来るのが、普通の人間の思考や行動だけど、そういうことは無駄だと、電子カルテシステムを作る人は考えるのだろうか。そして、カルテにある通り（PCの指示どおり）に動くとしたら、それこそ、古いSFのようになる。これは、私が実情を知らないから勝手に考えているだけなのだろうか。システムを作る人は、人間は感情を持ち、それを表現し、他者に受け止めてもらえることで、思考が進むことを忘れているのだろうか。

文献

西村 千秋（2009）医療の情報化と電子カルテシステム．第3回横幹連合コンファレンス．
3C3-1

カウンセリングのお作法 第 38 回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水島)弘美

～二回目の家族面接～

全体像把握と課題の結果

前は、家族面接初回の課題について話しました。

今回は、全体像の把握と課題の結果に注目しながら、どのように二回目の面接を進めるのかについて話します。

二回目の面接の流れを説明

まず、二回目の面接の開始時に、この 90 分間はどのような流れなのかについて、家族に説明します。それは、着席をする前に「こんなことがありました」と近況を次々に話し出す人もいます。当日のスケジュールを示すことによって、有効な時間の使い方に協力をお願いします。もちろん、面接に参加している家族それぞれから、話したいと思っていることを語っていただくようにします。しかし、限られている時間ですので、話す人がかたよらないようにまた、最終のまとめの時間を確保するためでもあります。

わかった気にならず話を聴き全体像を把握する

二回目の面接をはじめる前のカウンセラーの心構えは、「まだまだ家族全体の理解はできていないというつもりで話を聴かせていただく」です。

初回は社交段階の部分が多く、話して大丈夫とご家族に感じていただけるように配慮し、信頼関係を徐々に作り上げていきました。もちろん一回目の面接ですべてを語ってはむずかしいと考えられます。もしかしたら、家族全員の前でははなしづらいことがあるかもしれないなどと、想像しつつ、まだ理解していないこともあるだろうという姿勢を忘れないことです。

面接では、つねに仮説、検証の繰り返しです。カウンセラーの頭の中で、家族の過去から現在の経過、それぞれの思いや行動の特徴、関係性などを描くことができるようにしていきます。

本題に入ると、例えば、

「前回、お越しいただいてから今日までの様子をどなたからでもよいのできかせていただけますか？」

とたずねて、経過を把握していきます。内容を確認しながら、より深く取り上げるべき話題や出来事があればさらにきかせていただきます。

カウンセラーから家族へ報告

初回面接後のカウンセラーと関係機関との連絡や、学校訪問について、家族へ報告をします。一例として、クライアントさんが通っている高校の先生からの紹介でご相談にこられた場合は、学校訪問等で、担任、学年主任、保健室の先生など学校の関係者とコンタクトをとった様子の報告をします。

（学校訪問の詳細については改めてお話する予定です）

家族に示した課題の結果

次に、初回面接で示した課題の結果を家族にうかがいます。たとえば、

「前回、〇〇について△△してくださいとお願いをしましたが、それがどのようなようになったのかを教えてくださいませんか」

などと問いかけ、話し出した内容を詳しくきき、まとめます。

「◇◇だったのですね、～～のようなことがあったのですね」

課題の結果を確認することがとても重要であるため、前後関係も含めて、正確に事実を把握します。

そのなかで、少しでも良いきざしが話された場合は、さらに大きな変化につながる可能性を秘めているため、その機会を逃さないようにします。重要なポイントです。

たとえば、不登校状態のご相談の場合、子どもさんが担任の先生に会ってみようかなというような話が出てきたとします。

その場合「それは良いですね」などと、即座に、その話に飛びつかずに、慎重に、慎重に前後関係を把握します。どのような流れでそのような話がでてきたのか、家族それぞれはどう感じているのか「お父さん、このお話をきかれて、どのように思われましたか？」など、家族の思いを言語化してもらいます。家族の歩調あわせです。ここはゆっくり時間をかけて進めます。

そして、それらは、何がきっかけだったのか、何がよかったのか、どのような家族の心かけによるものなのかを丁寧にうかがいます。家族の行動良いところ点検です。

良いところを確認したあとは、次の行動に結びつけるための話し合いです。

「学校の先生に会いに行くということについて、もしも実行に移すとしたら、どのような準備がいるのか、みなさんで、話し合っていきましょか」

と、提案します。何を決めていくのか、気を付けることがあるとしたら何か、家族でどのような協力ができるのか、などを家族主体で考えていきます。

成功体験を広げる問いかけと関係性の質問

「少しずつ、様子がわかってきました。そのほかに、ここしばらくの間で、子どもさんの行動でこれまでと異なる様子、より努力しているなぁと感じるものがあれば教えていただけますか？」

と、親御さんにさらにたずねます。

それは、成功体験のかけらに注目しているからです。家族がカウンセリングに来ているということは、今の状況から何とか脱出したい変化したいという願いをもっているからこそであって、あらゆる変化の可能性を逃さないようにします。

そして、この問いかけにはもうひとつ目的があります。子どもさんの行動について、本人に直接きくのではなく、親御さんにときいてこたえてもらいます。これは家族カウンセリングならではの効果が期待される問いです。親が良いと感じていることを子どもがきいている前であえて話してもらいます。少し自信を無くしかけている子どもさんにとって、親から褒められる安心材料となる面接場面でもあります。

晩年

D・A・N 通信

No.7

2023.11.21～2024.2.20

団 士郎

2023 の夏頃から約半年、新刊「グラフィック家族理解入門」の原稿をずっと書いていた。「マンガ木陰の物語+短文」、この繰り返しを「システム・家族の構造・ナラティブ」のくくりで配列したものだ。専門書とコラムの融合というか、混在のような一冊は、まあ思っていたような完成度になり、マガジン今号の編集作業に入る直前の校了になった。

振り返ってみると五十歳になる前、公務員時代に単著を出したことはなく、共著をいくつか執筆したことがあるくらいだった。だがその時点で、本を出したいという思いはあった。そんなことを口走ったのだろう。京都府主催の公務員退職記念パーティのテーブルで、面識もなかった部長に「ほお、退職して文筆業ですかー」とあきれたように言われたのが印象に残っている。

だからといって印税生活なんてことを考えたことはない。本なんて収益効率は極めて悪いものだと思っていた。漫画家になって新聞や雑誌に連載することになっても、担当編集者の思いつきや、媒体の紙面刷新ムードに、フリーの漫画家なんてあつという間に打ち切られるのも知っていた。

だからといって、せっかく独立したのだからどこかに属し、そこからの大口収入を確保して、それを主として暮らす生活などはしないと決めていた。つまり、出版も講演、講座も、マンガ連載も、大学教員も、相談員勤務も、どこにも一本かぶりの経済生活はしないと決めていた。経済的理由に縛られた生活から独立したのだから、フルタイム正規雇用の大学教員の口も二つ断っていた(内心、大丈夫か?と不安が首をもたげたりもした)。

今日の結果に至る道筋は輻輳的ではあるが、そのおかげで五十歳から今までに20冊以上の本が出せることになった。「家族心理臨床」系の専門書(もどき)か「マンガ」(「木陰の物語」を中心にしてきたが)。そしてこの度、二つを完全に融合した一冊として「グラフィック家族理解入門」が刊行できることになった。これまでマンガをたくさん作ってくれているホンブロック(kk アソブロック・私の長男の会社の出版部門)から出すことになった。

本が売れない、書店はどんどん潰れる、出版不況、デジタルへの移行など、話題は尽きない出版の世界。私もこの季刊雑誌「対人援助学マガジン」を10数年発行しながら、従来型の印刷媒体であったなら、とっくに潰れていたであろうと思う。新しい葡萄酒は新しい革袋に…とはたまに耳にする言葉だが、古い葡萄酒を新しい革袋に入れるのはありだろう。

インフラが整備されるのと併行して、コンテンツも変化ばかりしては、新製品だらけの、熟れていないものにあふれた世界になってしまう。新しい革袋に、古くからの知見もたっぷり含んだ葡萄酒を詰めているのが「対人援助学マガジン」だ。

11/●

ほぼ咳も出なくなったのでストレッチの後、髪を切りに。朝からバナナくらいしか食べてなかったので空腹。17時前、通りかかったびっくりドンキーでおすすめを聞くと、間もなく期間限定終了のガリバー400gがと。美味しく完食した後、ドトールで今後の行動ノルマ実施計画中。回復だな！

*

あまりピンときていなかったが、「よくそんなものを高齢者が食べるな！」と息子に言われた。考えてみると400gは確かにそうかも。他でのハンバーグの記憶は150gとか250gとか、そんな選択のような気が。

しかし美味しく食べてしまったのだから歳をとるに従って太り気味なものやむを得ない。食欲が落ちるところか、美味しくよく食べるのだ。元気な証拠だと思うことにして、でもお腹が出てくるのは健康上の問題はあるかも。



11/●

二十五年も月例勉強会を継続している草津市。キラリエで二週間マンガ展と本日のマンガトーク。こじんまり、熱心な聴衆が聴いてくださる中で、例によって思いつくままの時間、準備したパワポの内容になかなか入らないのは悪い癖だ。枕の長すぎる落語みたいなもの。今日も久々の人、お初のご縁、様々あった。



11/●

思いがけない巡り合わせで信楽 MIHO ミュージアムへ。金峯山(きんぷせん)のことなど、はるか昔の日本史単語

の記憶にしかなかった。役行者(えんのぎょうじゃ)もそうだ。解説を読みながら、千年も前のことかあと調査研究する人達を思う。今生きる人のことばかり考えるポジションにいと時々、こういう人の仕事が気になる。

*

菅原道真の頃、隆盛下にあった金峯山詣でが時と共に寂れて消えていく。信仰のようなものにも時の流行があるのが面白い。その程度のものなのだ。100年くらいしか生きない人間が考える本気や真実だから、こんなことは過去から今に引き継がれて起きている。たかだか人が、今本気で言っているにしても、自然の営みの何にもかなうものではない。そう思っていれば、些細なことに思い煩う自我や己を、それほど持ち上げずとも良い。その程度の存在なのだ。



12/●

赤坂のスタジオで家族理解研修素材 DVD 三作目の収録。ホンブロックから無料貸し出しの一作目、二作目は六十回もの勉強会が全国で開催されたという。好評につき三作目というわけだ。

終了後、不思議な申し出で、私のマンガ「木陰の物語・小雨の行列」を勝手に紙芝居にしてあちこちで上演している栄ちゃんという人と会う。

*

著作権とかあまりうるさく言うつもりがない。基本、教育・啓蒙的利用ならありがたいことだと了解している。この紙芝居、絵もそれ用に描き換えられ、表記通り私は原作者といった感じだ。

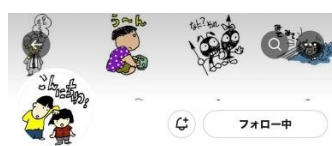
最近、「セクシー田中さん」の原作とドラマの間の問題が話題になり、漫画家が亡くなる事態にまでなった。スケールの違う話かもしれないが、この紙芝居の原作からの切り取り加工も、同様のことは漂っていた。

紙芝居はある意味、世間に分かってもらいやすい、感動してもらいやすい話にトリミングされていた。

正直、原作者として肝心なところが違うんだがなあと思った。でも、読者が私の作品を見るときにも同様のことが起きている可能性があることには気付いている。作品を他人に見せるということは、どのように受け止めるかは相手に委ねることだ。

でも、中間で別の発信に作り替える場合は、基本作者の意図は尊重されるのが良いと思う。とはいえ、私的にはどうでもいいんだけどね。

DVD 第三弾、収録時の写真。見たことがなかった。私の公式 x(まだ Twitter が馴染みだけど)もあまり目にしなかったが、DVD を使った各地での自主勉強会レポートがたくさんある。少人数で、自由に開催できる仕組みになっている。もう 62 回もあちこちでやっているのか。よかったらどうぞ。



士郎さん.com 公式
@shilangsan23661

家族心理臨床家・団士郎さんのオフィシャルサイト「士郎さん.com」の連動ツイッターです。全国で開催されるワークショップや講演の情報をいち早くお知らせします。

shiro-san.com



士郎さん.com... 2024/02/04

士郎さんに家族を学ぶ会〜DVDを使った研修会が1/28日曜日、堺市で開催されました。世話人を務めてくださった岩村さん、ありがとうございました。

v62さかい家族支援を学ぶ会（堺市）開催 | DVD講演会事務局@miracon #note



場所: note.com

12/●

三日間留守にして自宅に戻ったら置き配・宅配便のお知らせの山だった。本二冊、お歳暮のコーヒー、インクカートリッジ。一番多量なのは時間指定で受け取った五個口100冊のこれ。想像以上に嵩張っているし重い大判本。読む楽しみと、読みたい人に届ける楽しみを今から味わおう。

*

パリ在住の安發明子さんが、クラウドファンディングで出版にこぎ着けたフランスのコミックス。「エデュケーター」という職種の家族支援の専門家をしながらマンガも描いて、雑誌連載しているパポさん。

親子をまるごと在宅で支える。援助職としての距離感はずっと近くなる業務形式だ。専門細分化して、責任の押し付け合いに汲々としている今の日本から見ると、近所の知り合いのような、親類のおじさんのような援助形式。

それはそれでいろいろあるのだろうが、負担を背負う覚悟は見て取れる。誰かの失敗の責任追及ばかりし合っている日本よりは自由だ。

働いている人の姿が見えずに、ルールや法が前面化するのは福祉や教育の分野のことではない。昔は日本でもしていたことがすっかり姿を消してしまった業界になって、滅びつつあるのだと思った次第。働きたいと思う人も減っていく。



12/●

好天の日曜。KISWEC で家族面接を二つ見ながら、時代の家族だなあと思う。

*

ケースの中身を詳しく書くわけにはいかないが、扱われている問題と展開の今日的なことに少々驚く。出来事は昔からあるような訴えでも、その意味づけや対応、展開がとても時事的なのだ。

ざっくり言ってしまうと「金」の話なのである。「家族、子育ての相談で金かよ！」と思わなくもないが、一方で今の日本的だなあと思う。いわゆる経済・貧困の問題ではな

く、国政の舞台でも連日騒がしい不適切な金銭処理問題同様の問題が家族でも起こっている。

日本社会の相対的貧困話と多額の振り込め詐欺(金を持った被害者)が並立するのと同様なことが起きている。

12/●

夜、自宅で録画してあったM1を見る。優勝は「令和ロマン」だろうなと思ったらそうだった。納得。二人の存在感がいい。

*

M1 グランプリにはスタートから馴染んできた。わくわくするような面白さになっていったのは数回経てからだと思うが、新しいお笑いスターが輝き出すのを楽しみに見てきた。

これまで年末に見てしばらく真似するのが止められなかった筆頭はサンドイッチマンの「宅配ピザ」のネタだった。そしてミルクボーイの「コーンフレーク」。あらためて自分がサブカルチャー体質だなと実感する。

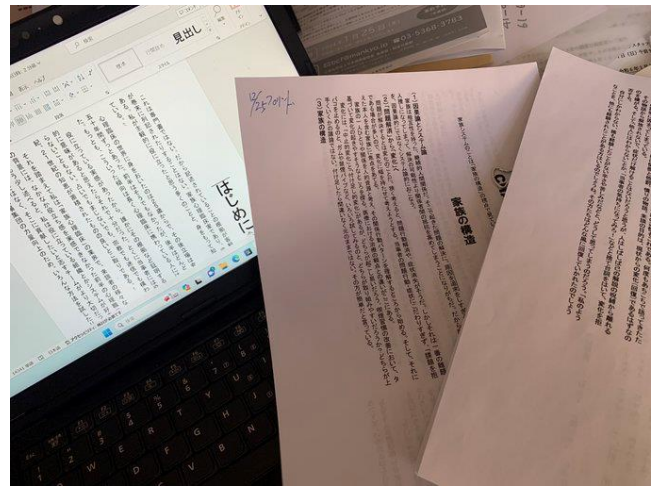
12/●

年末までと心に決めた 250 ページほどの原稿(「グラフィック家族理解入門」)がひとまず完成。もう一度読んでみて、編集者に投げる。出版までまだまだ手直しはあるだろう。

*

実際の進行状況はというと、前文にも書いたように現在(2月22日)まだ手元にある。2月末には編集者に手渡せる状態になった。書き進めながら気づいたことが多く、面白い体験だった。あらためて文章化することと、言葉として発している事との較差というか、持つ意味のそれぞれさを考えた。さらにそこに、話題・論点のチョイスに時代が深く関わってくることも感じた。

今だからいえることが、十年先にも言えていることかどうか。できればロングセラー書籍になってほしいと願っている。「流行言葉」の商売人にはなりたくないからなあ。



12/●

無事、2023 年の大晦日を迎えることができた。昨日は連載新作を完成して発送。大掃除や正月の準備など1mmもない。2024 年は又、老いも若きも、それぞれにいろんなことが待っているのでしょう。皆様、どうぞ良いお年を。

*

こう書いた翌日、能登半島で大地震が起きて多くの被害が出た。東日本大震災の時が思い出され、復興してゆくまでの長い日々が思われた。そしてあの時の私、六十四歳の共鳴と、今、七十六歳になった私の共鳴は同じにはならないことに気付く(体力の問題は大きい)。渦中の人たちが何歳で被災したかは、個々人の今後の展開への大きな要素になるだろう。

京都からの緊急支援的に動いている人(馴染みのスペイン料理レストラン店主・木下さん)に少し応援をして、今後の長期復興プランにどう関わっていくかを、東北の時とはまた違ったかたちで考えなければならない。石川にはたくさんの友人、知人、マガジン執筆者がいる。

1/●

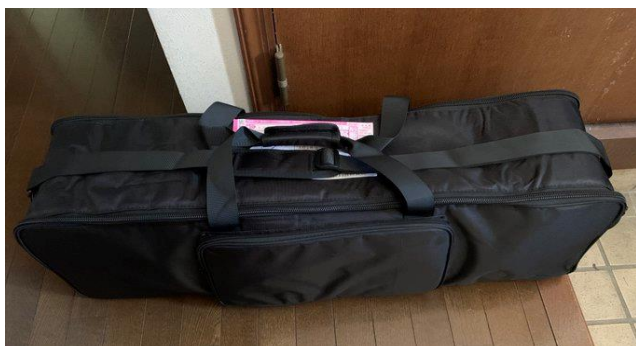
大波乱の幕開け 2024、とにかく明けましておめでとうございます。皆さん、生き延びてください。

net 注文した一人用のお節は、まったく意味がなかった。一応初詣にも近江神宮に次男一家と出かけた。元々年末・年始嫌いの私的には、さっさと一月のスケジュールに突入の感じだ。



1/●

このところコンスタントに掛軸マンガ展が開催できている。それに伴って、作品の選択、発送、返却作業がノルマ化する。今朝も担当のHさんが来て、手順を整えてくれた。ネット通販で見つけたカメラ三脚用バッグが、掛け軸の宅配発送にちょうどいい。いろいろ便利なものが格安で手に入る時代だ。



1/●

久しぶりの伊丹空港。明日の一日WSのため、高知行き。今回は継続しているWSプログラムとは別口の依頼だったのに、混同して航空券やホテルのことで行き違い。

それが直近になって判明して慌てて即対応。そんな対応作業がスマホでできるのはありがたい。あちこち走り回っていると、当然のようにトラブルも多いな。



1/●

結局、日曜夕刻の帰路便を取り損ねたので、高知に土日連泊。観光などしたことがなかったので、何十年ぶりで高知城に行ってみた。南国の気温は12℃、風もなく、冬装束で歩いていると汗ばむ。目に入った高知文学館にも立ち寄ってみた。久々に清岡卓行のことを思い出してネットで一冊購入。

*

この高知散策を翌日のXに書いた。するとすぐに、文学館から展示は撮影禁止だから、無断撮影の写真は消すよう連絡があった。凄いなあ。

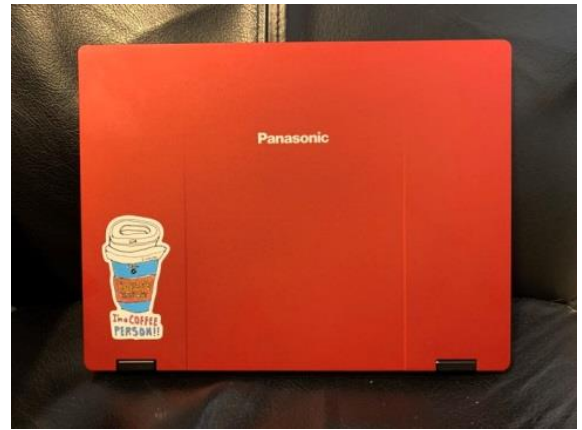
世界の美術館は撮影フリーの時代に、日本はいつまでも撮影禁止だ。なんというローカルルールだと思うが、すぐに対応して写真を消す。



1/●

「児童相談所と近接領域の家族療法勉強会 in 浜松」。漫画展をプログラムの隙間に見てもらおうよう準備した。本も販売しているが、昼休みにはたくさんの方が見てくれて「家族の練習問題」も買ってください。

あちこちで漫画展が開催出来るようになったが、まだ見たことのない方も多い。会場が確保できれば、全国各地でどうぞ開いて下さい。



1/●

マンガ同人「ぼむ」の月例会。1970 年に「同人誌ぼむ」を発行して以来だから、長い時が流れた。みんな高齢者になったので、病気の報告もあちこちから。それでも元気な間は、この会は続く。今年も4月の第一週には京都、余花庵でぼむ漫画展。

*

歳をとったからといって、病気話と孫話にしたいわけではない。実際にガンを患ったものが三人も出たのだから、経過報告だ。元気で漫画展を続けるのが目標の集会だ。



2/●

仕事場のエアコンが夏も冬も中途半端な働き。マンションが建った時からの設備だから、五階建ての賃貸全室の中でも多分もう唯一の生き残り機種だろう。96 年製って！きつと電気代も無駄に食っていると思うが、設置の構造上取り替えが大工事になるのが面倒でズルズル今日まで。しかしいよいよ業者にきてもらうことになった。

1/●

浜松に来ているのだ。やはり鰻は欠かせない。帰路の新幹線まで少し時間があつたので、ホテルで荷物をピックアップ後、駅前の気になった二軒の内のこちらに。

コンビニの2階の店ってどうかなあとドアを開けたら異空間。気になったメニューの「食べ比べ重」を注文。確かに違いはあるが共に美味しかった。



1/●

2023 年もよく働いたご褒美に、具合イマイチなノート PC を新しくしておいた。いろいろカスタマイズするので、年末、大阪駅前のヨドバシカメラで、レッツノートの専従スタッフに頼んでいたモノが届いた。すごく綺麗で気に入った。早速シール第一号を貼った。



自分自身も、周辺の物も、皆老化している。不思議なのは 30 年近く使っていたのに昨夜、いよいよ全く動かなくなった。

そして予定通り今日の工事。律儀な機械だなあと長年働いてくれたエアコンに感謝。物にもそんな所があるね。



2/●

マガジン No.56 の原稿締切日を知らせると執筆者から、休載とか早めに出しますとか、初めてエントリーしますとか、いろいろ返信がある。

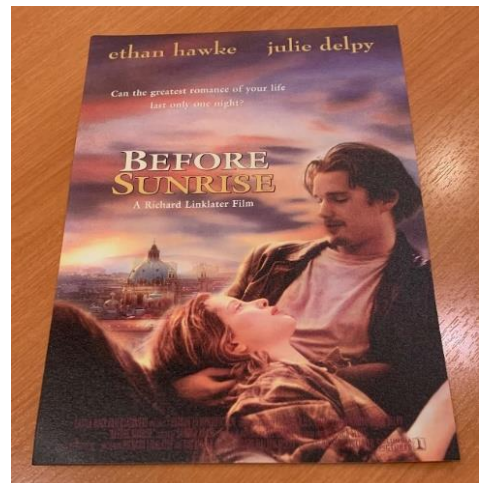
昨日の kiswec 家族面接はケースが欠席だった。今日は雨模様で出かける気にならず在宅にした。

先日手に入れた PC はクルリと回転させるとタブレットになり、画面が大きいのでコミックスを読むのに kindle よりも良い。



2/●

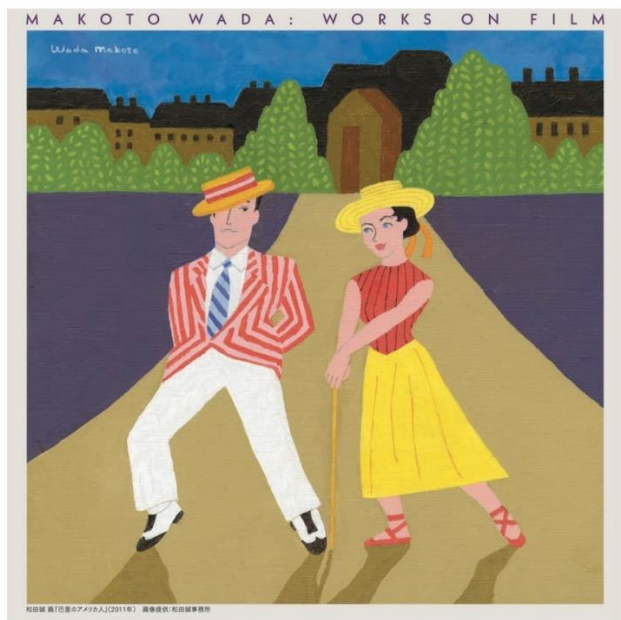
確定申告の整理を済ませ、仕事場がダンボールハウス(屋内が)状態だったものを片付けた。明日、明後日の講座と WS プログラムの準備をしたところで、夕飯に出た。その後、三部作をすべて DVD で観たビフォア…シリーズの第一作 1995 年公開作を映画館で。二週間の限定再上映だそうだ。



2/●

昨日は家族理解 WS 東京。少人数だったが、準備したプログラムを快調に。身内感覚が強いと自民党代議士の失言のようなメカニズムが働くなあと反省。

今日は東京駅近くのこここれ。2 年前、和田誠展で大抵知っている気もしたが、映画に特化したものの情熱が楽しい。ぼむ展用準備に励もうと思う。



2023.12.12(火) - 2024.3.24(日)

国立映画アーカイブ展示室(7階)

※月曜日より12月26日(火)・1月4日(水)は休室です。
 観覧時間: 午前11時・午後4時30分(入室は午後4時まで) ※1/26、2/23の両曜日は観覧時間を午後5時まで延長いたします。(入室は午後7時迄です)
 料金: 一般250円(2023/12/25)・大学生150円(2023/12/26)・65歳以上、高校生以下及び18歳未満、障害者等をお持ちの方(付添者は別料金)までは、国立映画アーカイブメンバーシップ会員は無料。＊料金は常設の日本映画展覧会と同一の価格を定めます。＊1/19は2024年1月の定例料金です。＊学生、65歳以上、障害者等をお持ちの方、メンバーシップ会員の方は入室の際、証明できるものを提示ください。
 ※国立映画アーカイブが主催する映画の国際展覧会「ナショナル・フィルム・フェスティバル」(輸入権限あり)または「ナショナル・フィルム・フェスティバル」にて展示された、1日に限り展示料金が適用されます。
 主催: 国立映画アーカイブ
 協賛: 和歌山県、和歌山県立大学アート・デザインセンター
 国立映画アーカイブホームページ: www.nfa-jp.jp
 X(旧Twitter): @NFAJ_PR Facebook: NFAJPR Instagram: nationalfilmarchivejapan

和田誠 映画の仕事

慌ただしい外仕事が一区切りして、しばらくは中仕事。
 仕事場に泊まり込んで新刊の原稿の最後の手入れ。2月中には終える！昨日手にした、知らなかった雑誌の特集、文化戦争がめちゃ面白い。漫画もいっぱい。



2/●

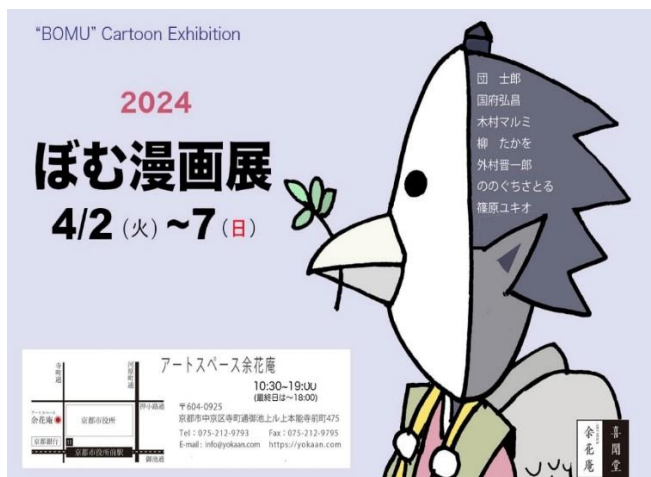
こもり作業の日々。今年のぼむ展は4月2日～7日まで。毎年の京都、寺町御池上がるのギャラリー余花庵で。その準備の掛軸作りを、この時期に集中的に。まだ完了はしないが、今年はこのテイスト三作。
 この後は対人援助学マガジンの原稿、編集になる。

*

ぼむ展にはマガジン連載執筆者・柳たかを、篠原ユキオも出展しています。ぜひご来廊ください。

2/●

昨日、今日は立命館大学で家族理解講座 6 コマ。少人数ながら和気藹々の時間。お昼一緒に食べに行きましょと誘われて、みんなでランチにも。院生が多いが最年少の学部生は 19 歳だそう。脱線多数の話の展開は、どの年代の人達までついてこられるのか、時に心配になった。



2/●

56・こいのぼり製作

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）



5月の空を泳ぐこいのぼり。幼稚園や保育園の製作活動としては定番ではないでしょうか。原町幼稚園でも、教材屋さんの市販品から大きなこいのぼりにクラスみんなでデザインする共同製作など、形を変えつつ毎年の恒例行事として作ってきましたが、十数年前に52号で紹介した川和保育園の寺田先生に教えてもらって、和紙と竹ひごで作るこいのぼり製作に切り替えました。教材準備の手間はそれ以前の3倍ぐらいになりましたが、子ども

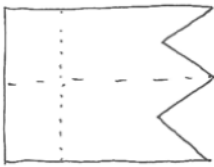
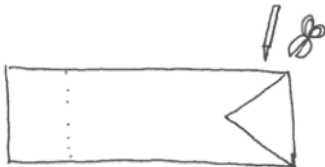
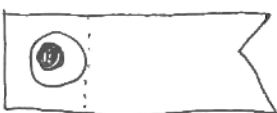
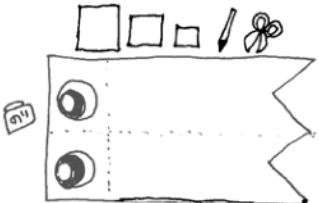
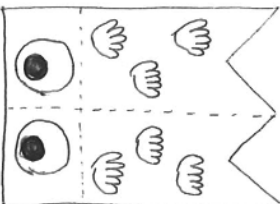
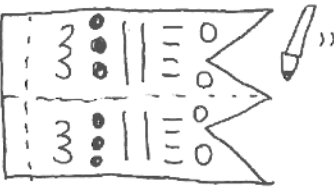
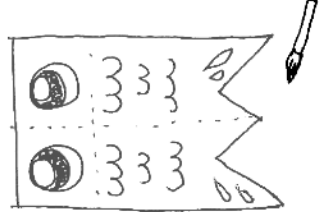
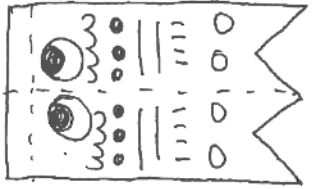
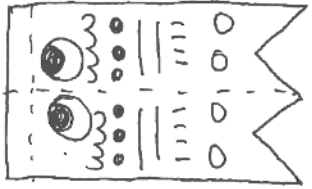
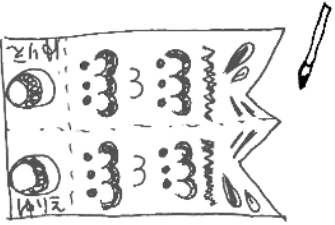
たちが自分のオリジナル鯉のぼりをじっくりと1尾作って、園庭に飾ったあとに自宅に持ち帰り、3年間の成長も感じられる製作活動として意味のあるものになったと思います。

全員の鯉のぼりが完成してからこどもの日をはさんで1週間ぐらい毎朝園庭に泳がせます。自宅では1年ごとに1尾ずつ仲間が増えて3尾のこいのぼりが自宅で泳いでいることと思います。



- 鯉のぼりの製作は、年齢ごとに段階を踏んで行います。
- 子どもの活動では、製作の前に“導入”を必ず行います。本物や絵本をじっくり見て、鯉のぼりの形状や模様を見て観察する活動から始まり、自分なりのイメージを持って製作に取り組みます。
製作過程では年齢に合わせた内容で、同じサイズの鯉のぼりを作ります。
- 材料：本体（和紙）を1人分のサイズに切っておきます
口輪（クラフトバンド ※当初使っていた和紙用竹ひごは丸めるのに苦労するのでクラフトバンドに変更）
たこ糸、サルカン（5号程度/釣具店で購入/口輪とロープの間に繋いでねじれを防ぎます）
ポスターカラー、目玉用画用紙など
掲揚用ロープ（端にS字フックを結んでおくと取り外ししやすい）
ダブルクリップ（こいのぼりをロープに付けるため）
※毎朝掲揚して夕方や雨天時には収納します。数人で作業します。

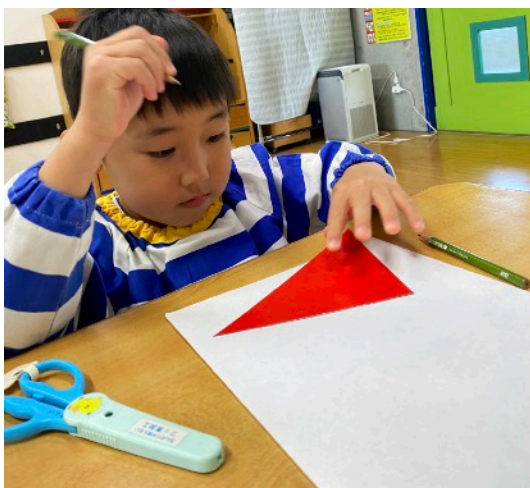
こいのぼり製作過程

ステップ	年少組&満3	年中組	年長組
ステップ1 ボディーを作る	年少はステップ2と3だけ行います。 尾は先生が事前に切っておきます。 	先生が描いた線に沿って尾をハサミで切ります。 	自分で尾の形を決め型紙に合わせて鉛筆でなぞり、ハサミで切ります。 
ステップ2 目玉づくり	先生が丸く切った画用紙の大小2つから色を選んで目玉の大きさ、色、向きなどを自分で考えます。(貼付は先生) 	色画用紙から大小2つの目玉の色を選び、ハサミで切ります。 丸は予め先生が描いておきます。 	色画用紙から大中小3つの目玉の色を選び、型紙で型をとり、ハサミで切ってボディーに糊で貼りました。 
ステップ3 ウロコ描き	開きの状態の和紙にてがたスタンプ、もしくは筆で模様をつけました。 自分で色を選んでデザインします。(満3組はタンポ) 	開きの状態で、左右対称(シンメトリー)を意識して筆でえのぐを使ってウロコを描きました。 ※シンメトリーは「できたらやってみよう」という程度で行います。 	年中と同じ過程ですが、最後に黒を入れることを意識しながら塗ります。 本物をよく見て黒目を黒マジックで描き入れました。 
ステップ4 仕上げ	◆ここから先は、先生の仕事です。 - こいのぼりの口輪は以前の竹ひごからクラフトバンドに代えて止めたものの。 - 開きの状態で仕上がったものを貼り合わせ、口輪にボンドで貼ります。 - 乾いたらヒモを口輪につけ、釣りで使うサルカンでジョイントしてたこ糸で結びます。 このおかげでこいのぼりが風にあおられてもヒモが絡まりません。 - 園庭に泳がせて完成! 	糊で目玉を貼りました。 大小が逆にならないように、同じ色にならないようになどアドバイスしますが、最終的には本人の考えで仕上げます。 ◆あとは年少と同じ。 	黒で仕上げのデザインをした後、目の横に自分の名前を書いたら完成です。 ◆あとは年少と同じ。 

▶ステップ1・ボディー作り



年中：予め引かれた線に沿って尾の部分进行切ります。和紙なのでちょっと切りにくい。



年長：型紙を使って尾の切り取り線を自分で描いてから切ります。

▶ステップ2・目玉作り



年中：好きな色の目玉（大きい方）を選んで切ります。2枚重ねになっています。



年少では初めて糊にさわる子どももいます。分量の調整を覚えていきます。



年中は慣れています。

▶ステップ3・ウロコ描き（デザイン）



満3はタンポでスタンプ



年少はポスターカラー（水性えのぐ）を筆で自由に描きます。



年中・年長：ポスターカラーでシンメトリー（左右対称）を意識しながらデザインします。

▶ステップ4・仕上げ



年長：最後に黒を入れて仕上げます。目の位置などを考えながらデザインします。
乾いたら目を貼り付けて子どもの作業は終了です。



大人は、仕上がった本体を輪っかにして口輪、サルカン、たこ糸、クリップをつけて完成させます。



鯉のぼりを集めてロープに付けたところ。1人鯉のぼりになってます(^_^)



園庭の鯉のぼり掲揚と作品の動画 (YOUTUBE)



<https://youtu.be/pJVEO8TufF8>

(動画をご覧になるには、画像をクリックするか、URLをブラウザにコピーして下さい。)

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- | | |
|-------------------------------|---|
| 第1号 エピソード（2010.06） | 第31号 幼稚園の音楽教育
（その2・こどものうた）2017.12 |
| 第2号 園児募集の時期（2010.10） | 第32号 幼稚園の音楽教育
（その3・コード奏法）2018.03 |
| 第3号 幼保一体化（2010.12） | 第33号 〔休載〕 |
| 第4号 障害児の入園について（2011.03） | 第34号 働き方改革・一つの指針（2018.09） |
| 第5号 幼稚園の求活（2011.06） | 第35号 働き方改革って難しい（2018.12） |
| 第6号 幼稚園の夏休み（2011.09） | 第36号 満3歳児保育について（2019.03） |
| 第7号 怪我の対応（2011.12） | 第37号 満3歳児保育・その2（2019.06） |
| 第8号 どうする保護者会？（2012.03） | 第38号 プールができなくなる！？（2019.09） |
| 第9号 おやこんぼ（2012.06） | 第39号 跳び箱（2019.12） |
| 第10号 これは、いじめ？（2012.09） | 第40号 幼稚園にある便利な道具〈紙を切る〉
（2020.03） |
| 第11号 イブニング保育（2012.12） | 第41号 コロナ休園（2020.06） |
| 第12号 ことばのカリキュラム（2013.03） | 第42号 コロナ休園から再開へ（2020.09） |
| 第13号 日除けの作り方（2013.06） | 第43号 ティーチャーチェンジ（2020.12） |
| 第14号 避難訓練（2013.09） | 第44号 除菌あれこれやってみた（2021.03） |
| 第15号 子ども子育て支援新制度を考える | 第45号 マスクと表情（2021.06） |
| 第16号 教育実習について（2014.03） | 第46号 感染予防と情報発信（2021.09） |
| 第17号 自由参観（2014.06） | 第47号 親子ソーラン節（2021.12） |
| 第18号 保護者アナログゲーム大会（2014.09） | 第48号 親子コンサート（2022.03） |
| 第19号 こんな誕生会はいかが？（2014.12） | 第49号 うんちでたー！（2022.06） |
| 第20号 ITと幼児教育（2015.03） | 第50号 子どもが育つ園庭・その1 木登りとブランコ
（2022.09） |
| 第21号 楽しく運動能力アップ（2015.06） | 第51号 子どもが育つ園庭・その2 砂場（2022.12） |
| 第22号 〔休載〕 | 第52号 子どもが育つ園庭・その3 ストライダーと
Tonka（2023.03） |
| 第23号 大量に焼き芋を焼く（2015.12）2019 | 第53号 リスクと安全・園庭編（2023.06） |
| 第24号 お話あそび会その1（発表会の意味） | 第54号 夏の音楽会・動画（2023.09） |
| 第25号 お話あそび会その2（取り組み実践） | 第55号 クリスマス劇・動画（2023.12） |
| 第26号 お話あそび会その3（保護者へ伝える） | 第56号 こいのぼり製作（2024.03） |
| 第27号 おもちゃのかえっこ（2016.12） | |
| 第28号 月刊園便り「はらっぱ」（2017.03） | |
| 第29号 石ころギャラリー（2017.06） | |
| 第30号 幼稚園の音楽教育（その1・発表会）2017.09 | |

▶気になる記事・ご感想質問等ありましたら気軽に連絡ください。✉ office@haramachi-ki.ed.jp





福祉系

対人援助職養成の

現場から 56

西川 友理

前回に引き続き、評価表の話

学生の実習先から評価表が返却されてきました。この評価表を参考に、今回の実習を学生と共に振り返ります。

倫理観やマナーを心得た対応が出来たか、実習生としての責任は果たしていたか、子どもの発達についての理解は深まったか、子どもとのかかわり方はどのようなであったか、スーパーバイザーとしての態度は十分であったか、記録の適切な取り扱い方は出来ていたか…等、成績評価表の項目に従って、一人一人と個別

に面談しながら共にじっくり振り返ります。

この評価項目は、各養成校が適当に作っているわけではありません。国が出している「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」には、保育士資格取得に係る科目の教授内容に関する標準的事項が指定されています。この基準の「保育実習」に係る標準的事項には「保育所における子どもの生活と保育士の援助や関わり」「保育所保育指針に基づく保育の展開」「子どもへの援助や関わり」「全体的な計画と指導計画及び評価の理解」「保育士の役割と職業倫理」「関

係機関や地域社会との連携・協働」…などといった、実に多様な内容が並んでいます。

これらを網羅した実習が出来たかを判断するためには、当然ながら評価表にそれらの項目を組み入れる必要があります。保育士養成校それぞれ、国の基準を踏まえて評価表を作成しています。

ところが、そのようにしてつくった評価表と、実際の実習場面では、ちょっと解離しているかもしれない、と引っかかってしまうところが1か所あります。いままで、いくつかの保育士養成校を見てきたのですが、そのどこの学校でも、全員とは言いませんが、多くの学生の指導で、同じところで引っかかるのです。

それは、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」に定められている実習に関する標準的事項でいうと、「入所している子どもの保護者に対する子育て支援及び地域の保護者等に対する子育て支援」、つまり保護者支援とか子育て支援と言われる部分についてです。

保護者支援・子育て支援について

面談時、

「子育て支援とか、保護者支援について、実習中に何か具体的な学びはありましたか？」

とこちらが聞くと、多くの学生が首をひねって考え込みます。

「…うーん、特には何もなかったですね

…というか、実習生は保護者と関わっちゃいけないって言われてました」

「あ、やっぱり。そうですか……。」

実習生は、保護者と関わってはいけない、という指導をしている実習先は、かなり多いように感じています。

確かに、それは納得できます。園の職員とも出会ってまだ数日の学生です、様々な事情にある親御さんとコミュニケーションをとるのは確かに予測できないことが多すぎて、不安になるものでしょう。もしも園の子どもの保護者さんと実習生がコミュニケーションをとる場を設定するのならば、何らかの準備や予備的な環境設定をしておく必要がありますが、現場で働いている保育者にとって、実習生の指導にそこまで力を入れるのは、「かなり頑張ったお仕事」になってしまい、あまり現実的ではありません。

実際の実習場面では、実習生は保護者と一切かかわるな、という形でなく、

「親御さんが来たら必ず挨拶をすること！」「親御さんから話しかけられたら、実習生だから職員にすぐに代わります、と伝える事！」

その上で、

「ただし、自分から親御さんに話しかけるのはダメです！たとえ知り合いであったとしても、実習生という立場をわきまえて、自分から話しかけに行かない！」

このように指示されることが多いように見受けられます。

そして実際、自宅近隣の実習先に行った学生は、子どもの保護者と実習生が知り合いであることから、そこで話が盛り

上がってしまい、実習先が混乱し、実習生が指導を受けるといったことは、保育実習のあるあるパターンの一つでもあります。

「…そう、だから、そんな状態だったし、保護者支援について学べと言われても、実習中にその機会はなかったですよ。」という学生。

でも、本当にそうかな、と私は考えます。

保護者支援、子育て支援を学ぶ重要性
昨今、保育現場では様々なケースが増え、家庭内に複合的な問題がある家族が増えたことで、保護者支援や子育て支援の重要性が増しています。今そのような場所で働く保育士さんには、保護者や親御さんの話をしっかり聞き、信頼関係を構築し、寄り添い、共に子育てを行っていくパートナーとして、保護者を支えていくことが求められます。

今、子育て支援は、法的にも保育所や認定こども園の重要な仕事として位置付けられています。実習先である保育所や認定こども園では、連日職員と保護者の、そのようなかわりが繰り返されています。だからこそ、国も子育て支援を実習での学びの課題としています。

しかし、実際に実習で繰り返されていく実習内容を見ると、上記の通りです。実習で保護者支援や子育て支援を十分に学べた、という実感を持つ学生はほとんどありません。

時には子育て支援に関する評価項目について、実習先の方から「ここは教えられていけませんので、評価できません」

とおっしゃり、空白で返されるところもあります。

そうか、保護者と直接かかわれないから、保護者支援は勉強できないか、そうかそうか……でも、本当にそうかな、とやはり私は考えます。

というのは、一体保育現場や実習生たちは、何をするかを「子育て支援」や「保護者支援」と考えているのかな、と最近気づいたからです。

保護者支援・子育て支援って

何をする事？

もちろん子どもの親御さんとの直接的な関わりは保護者支援や子育て支援の最たるものでしょう。だけど、例えば、地域に住む親子に園庭を開放する取り組みや、園での様子を親御さんに伝える掲示板の情報の精査の方法や、保護者に向けた園だよりの作成、これらは直接保護者と関わる行動ではありませんが、子育て支援や保護者支援になっていることではないでしょうか。これらに触れて、その意味を理解することも立派な保護者支援、子育て支援の学びになるのではないのでしょうか。

なにより「日々必ず挨拶をする」といったことに代表される保護者との関係性のありかたはどのようなものなのか、あるいは日々必ず挨拶をするように指導されている割に、「実習生が自分からかかわって行ってはいけないとされる理由」を考えることもまた、保護者を支

援することについての理解を深める手がかりになると思われます。

現場の保育士は、何を保護者支援と考え、何が子育て支援だと思っているのでしょうか。その定義が明確になされておらず、直接親御さんと関わる事のみが、保護者支援や子育て支援だと考えられがちであるため、「たとえ評価項目に入っているとしても実習では教えられない」と考えられてしまうということはないのでしょうか。

保護者支援、子育て支援って

ベテランの仕事？

また、別の要素として、そもそも保護者支援、子育て支援はベテランの先生がする仕事であり、初任者は子どもの様子を見てお世話をすることが役割なのだから、親御さんと関わるのはハードルが高すぎる、だから実習生も保護者支援や子育て支援に関する学びは後回し、とにかく子どもと関わり、子どものことを理解する学びが優先、と思われるように感じる場合があります。

国で定められている保育実習における保育所・認定こども園における実習期間は、保育実習Ⅰで10日間、それから保育実習Ⅱで10日間の、計20日間となっています（これ以外にも児童福祉施設での実習もあります）。もし保育実習Ⅰでも保育実習Ⅱでも同じ園で学ばせていただく機会が得られたとしても、せいぜい20日間です。「そんな限られた

時間では、子どもとの関わりの学びで精一杯ではないかな、だから保護者支援は実習期間では出来ていなくても仕方ないよね」といった見解も耳にします。

しかし、たとえ時間が限られているとしても、なぜ子どもとの直接的なかわりが優先されて、保護者支援や子育て支援の学びは後回しにされるのでしょうか。子どもの保育も保護者支援も、両方とも大切な保育施設の仕事なのに、実習で勉強しなくていいのでしょうか。

園しかできない、支援のかたち

保護者支援、子育て支援の取り組みは、様々な児童福祉施設、機関、NPO 団体、ボランティア団体などがおこなっていますが、特に保育園や幼稚園の先生にしか出来ない保護者支援、子育て支援があります。

それは、ほぼ毎日、子どもとその保護者の顔が見て、言葉を交わすことが出来るということです。

毎日直接目視で、また言葉を交わしてその姿が確認できるという事は、その子どもと家族の普段の様子を知っているということです。普段の様子を知っているからこそ「普段と何か違う」という事に気付いたり、半年前と比較するとどうなっているか、という事も肌感覚としてわかるという事です。

さらにはほぼ毎日顔を合わせ、何かあれば情報共有をする相手なんて、否が応でも関係性は濃くなり、信頼関係が構築されやすい間柄になるでしょう。

ある親とその子どもに、同時にそのような関わり方を出来る「専門職」の職場というのは、今この国で、保育園や幼稚園、認定こども園、あるいは子どもの療育に携わる施設しかないのではないのでしょうか。

つまり、保育園や幼稚園に代表される、子どもが毎日のように通所する就学前の子どもが利用する施設の先生は、保護者支援や保育ソーシャルワークの第一線にいるのです。

だからやはり、保育士の資格を取得しようという人達は、保護者支援や子育て支援についてしっかり学ぶべきであるし、その学びの宝庫である現場で、保護者支援、子育て支援についての理解を深めてほしい、と考えます。

では、現実的にどう学ぶか

では、現実的には、実習で保護者支援や子育てをどう学ぶかを考えてみます。

保護者支援や子育て支援というのは、何か具体的な行動でもありますが、それよりなにより、まずは視点ではないかと思えます。保護者支援や子育て支援に関する視点から見て見ると、あらゆる取り組みがその意味を持つことがわかります。

子どもや保護者に対する立ち居振る舞いやマナー、服装などの身だしなみは、誰のために、何のために整えるのか。それは子どもと保護者の安心のためです。

保護者から「この先生なら安心だ」「ちゃんと常識をわきまえて、我が子を預けられる人だ」と信頼を得るためには、信頼を得られるような自分でなくてはなりません。

子どもをよく見る、観察するのは何の為か。それは、子どもに適切に対応するためですが、それだけではなく、親御さんと共に子育てをするために、情報共有をする材料になります。

日々の子どもに関する記録は何のために書くのか。それはデータを蓄積することで、今後の子どもへの保育に活かすため、そしてそれらを親御さんと情報共有して、今後の子育てを共に考える材料にするため。

園庭開放や地域へのお散歩は何のためにしているのか。それによって地域の子育て家庭になんらかのかかわりが出来るきっかけになるのではないのでしょうか。そこから始まる支援の可能性を開くために実施します。

このような視点で保育現場での取り組みを見ると、実は保護者支援、子育て支援はあらゆる活動の中にみられるのです。それを現場の保育者が自覚すると、実習指導のあり方も変化するのではないのでしょうか。それらの自覚があれば、たとえ保護者とのかかわることが難しいからと言って、保護者支援や子育て支援について学ぶ機会がないということはないと思います。

保育者養成校に出来る事

…などと、実習先への要望を偉そうに書いていますが、実は上記したことは、私たち養成校教員が実習前にきちんと学生に伝えておくべきことであり、それが十分に伝えられていなかったために、学生たちが実習先で十分学びきれていないのではないかと、いう事も考えさせられます。保育施設で行われているあらゆる取り組みに、保護者支援や子育て支援に繋がる考え方が含まれているという視点を、実習事前指導できちんと伝えるべきだったのに、十分意識して伝えていなかったから、このようなことがおこっているのではないかと反省します。実習前の授業中にその視点をきちんと伝えておけば、学生たちも自ら意識して「あ、これは子育て支援だ」「保護者への支援に繋がることだ」と気づいたのではないかなと思うのです。

とはいえ、やはり保護者との実際のかかわりも必要。

これと同時に、保護者との実際の関わりの経験はやはり学生のうちに欲しいところです。子どものお父さんやお母さん、ご家族さんとお話をしたことがない、という状態で保育現場に出るよりも、1度でも「子どもの親」と話をする経験を出来る経験を、これは養成校が用意する

必要があると考えています。

例えば地域の家庭教育講座や親子教室の現場にボランティアとして関わらせていただく、養成校付属の子育てルームなどで手伝いをする、子育てサークルの方にご協力をお願いし、親子に触れ合う機会を設定するなど、様々な方法が考えられます。

これらを実施する際にもまた、何が子育て支援になるのか、どういう事をすることが保護者支援なのか、という“視点”を事前に伝え、十分に用意をすることが大切だと考えます。

子育て支援・保護者支援

新年度、また新たな学生が入学してきます。少し前までは、保育幼児教育分野を学びに来る学生は「子どもが好きだから」「子どもと関わりたいから」という志望動機が多かったのですが、最近は「親御さんの力になりたいくて」とか「不安な気持ちの保護者の方をサポートしたい」と語る新入生が増えてきています。そこにさらにどんな視点を学んでもらうか、何をすることが保護者の支援、子育ての支援になるのか、また学生と一緒に考えていきたいと思えます。

ああ、相談業務

～ 拓也くんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

16

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

今回は不登校の子どもの話である。なんといっても、子どもの相談のほとんどが不登校で、男女の差はなく、年齢も小学校低学年から高校生までばらばらである。ただ、中でも多いのは中学生である。高校受験を考えて中学生の不登校については保護者が不安になるのもある。今回の拓也くんは小中高と関わってきたケースである。

家族

拓也くんは、母親と妹の三人家族である。拓也くんと出会った当時、小学5年生で、妹は3年生、母親は29歳会社員。父親とは離婚したばかりで、父親は関東に住んでいた。離婚理由は父親の金銭問題だった。三人は、市営住宅に住んでいた。

相談経過

拓也くん（以下本児）の相談が入ったのは、秋の気配が漂う頃、学校からであった。4年生にな

ってから、パラパラとしか学校に来ていなかったのが、夏休み明けから全く来なくなったという。そして学年が上がっても、その状況が変わらないという。

学校としては何とか学校に来させたいと思っていた、母親と連絡を取ろうとするが、中々取れないし、母親自身も余り積極的に登校させようという感じがしないとのことだった。家に訪問しても本児しかおらず、本児は出てこないでお手紙を入れて帰ってくるだけという。3年生の妹は登校できているので、妹から様子を聞くと、昼間はずっと寝ていて、妹が学童保育から帰るころ起きだし、その後はずっとゲームをしているそうである。

かなりのゲーム依存状態であることが想像できた。学校が連絡を取りづらい母親と、筆者がいきなり連絡を取れるものか疑問であったが、まずは母親と連絡を取ることを考えた。学校から筆者が連絡を取りたがっているからと言うことで、母

親の携帯番号を教えてよいかの許可を得てもらうこととした。

数日後、学校から連絡があり、携帯番号を教える許可を得たとのことで教えてもらった。意外と早く繋がったらしい。

会社員でもあるので、まずは昼休みが良いかと思い、昼時に電話をしてみた。一回でつながるとは思わなかったが、知らない番号からの電話だったからか、一回で母親が出た。市のスクールカウンセラーであることを伝え、母親とお話したいが日時の都合はどうかと尋ねた。市のカウンセラーではあるが、かかしもあるので土曜日でも夜でも構わないと伝えたところ、夜であればとのことで、数日後の夜19時からかかしでの面談となった。子どもたちを連れてきて構わないと伝えていたが、二人で留守番ができるというので置いてきたとのことだった。

母親は小柄だが、しっかりした体つきで、受け答えもきちんとしており、やり取りもスムーズだった。

母親の実家は道北で、母方祖父母と母方叔父がいることが分かった。年に数回会いに行くなど交流はある。祖父は心臓が悪く糖尿もあり、母親は足が悪いのと高血圧があるが、何とか元気にやっているようであった。

本児の父親がとてもゲーム好きで、ゲームばかりだったので、母親としては本児にゲームを与えたくないと思っていた。しかし父親が勝手にゲームをどんどん買い与えてしまい、父子でゲームを楽しむようになった。場合によっては父親が仕事に行っている間、本児にレベル上げを頼んでいくなどと言うこともあったという。父親は働いてはいたが、お金の使い方が荒く、生活にも支障をきたすようになり、借金も増えたことから離婚をすることになったそうだ。嫌いになったわけではないので連絡は取り合っており、本児や妹とも物理的に遠いので会うことは無いが連絡は取り合っているという。

もともとゲーム好きだったのが、半年前に父親がいなくなってから、余計にゲームにはまるよう

になったそうだ。学校には行ってほしいと思って、あれこれ工夫して、学校まで送って行ったこともあった。しかし、学校の対応も悪く、頑張って学校に行っても、本児の口の利き方や態度について叱責したり、勉強の遅れのために、放課後いきなりテストや補習で詰め込まれたり、褒められることもなく、拳句に本児が切れて暴れてしまったため、「発達障害ではないか」、「病院に」などと言われ、連れていくことにも抵抗を感じるようになったそうだ。本児が学校に来やすいようにしてもらえないかと話してみたこともあったが、本児だけのために学校があるわけではないからと言われ、これでは無理だと思ったとのことだった。

本児は家でどんな生活をしているか聞くと、妹からの情報の通りで、昼夜逆転状態で、ずっとゲームをしているという。母親自身夜は疲れて寝てしまうため、何時間くらいゲームをしているのかはわからないそうだ。ある意味放っていると。本人の責任という言葉が出ていた。

妹はどうしているのかときくと、妹は兄の様にはなりたくないと言って、ゲームもほとんどせず、きちんとした生活を送っているという。本児はそんな妹に対してもイライラして、時々ちょっかいを出すそうだ。そういう時は母親もしっかり叱るが、それ以外はうるさく言っても仕方がないと思っているようだった。

さて、どうしたものか。まずは学校とも話し合ってみたいと伝えた。母親のお話を聴いて、学校で何かできることがあるのではと思ったからである。一方でもし本児さえよければ、夜の時間帯で本児と面談をしてみたいのだが連れてこられるかときいた。母親はたぶん連れてこられるとのことだったので、日程を決めてその日の面談は終了とした。とりあえず母親との関係構築はそこそこできたと感じた。

次の日学校に電話をし、母親と面談したのでその結果も含め学校と情報共有をしたいと申し出た。学校は直ぐ了解してくれて、コーディネーターと担任が入ってくれて、筆者と三人の話になった。

本児がゲーム依存の状態で、それには父親の影響があったこと、父親と離れることになった影響もある事、母親が学校に頑張って連れて来た時の学校の対応について等本児の状態と母親のお話を母親の了解のもと伝えた。その上で、本児の寂しい気持ちにも寄り添ってほしいし、学校に頑張ってきた時は、無理強いせず、来たことだけでもいっぱい褒めて、頑張りを認めてあげてほしいと伝えた。すると学校側としては、「他にもたくさん手のかかる子がいる中で、本児だけに特別な対応はできない、切れて暴れたりするのも困る、学校に来たからと言ってそれは当たり前前で、頑張ってきたのだから誉めてほしいというのは甘えである、本児には何かしら発達の問題があると考えているので発達検査につないでほしい」等と手厳しい答えしか戻ってこなかった。

正直この答えにがっかりした。本児に対する拒否感も感じられた。ちょっとした声掛けもできないほど学校は手いっぱいなのだろうか？母親との関係性が悪い中で発達検査を勧めるなんて不可能である。こんな状態では本児をこの学校に戻すのは難しいだろう。学校全体の方針がそのような感じと見受けられた。「それでは本児が学校に来るのは難しいかもしれないので、何か本児が登校できるようになるまでの支援を考えていく」と伝えて情報共有という会は終了した。（当時はまだこういう学校があったが、今は殆どの学校で、不登校の子どもが登校した時の声掛けなどとしてもやさしく、気を使ってくれている。）

この結果も含めて二回目の面談に本児も登場することとなった。本児は、髪の毛を伸ばして顔を隠すような感じで、体は色白で少し肥満体形で菓子ばかり食べていそうな体つきだった。

母親に「学校は今のところあまり期待できない」と伝え、さもありませんと大きく頷いていた。そこで、適応指導教室（注1）の活用に向けて、見学ができないか勧めてみた。母親は働いているので時間給が取れるかどうかにもかかっていたが、適応指導教室について聞いていなかったらしく、興味を持ってくれて、見学に行ってくれるこ

とにはなった。

一方本児とは、一回目でもあり、関係づくりに力を入れた。ゲームはどんなものをしているのかと聞くと、「〇〇」と答え、「他には？」と聞くと「××」とゲームの名前を教えてくれた。どちらもバトル系のゲームで父親の影響だというのが、中高生で流行っているゲームでもあったので、ある程度話が合わせられた。ゲームの話で少し盛り上げると、本児も心を少し開いてくれた。ゲーム以外に好きなことはと聞くと「絵を描くこと」と言うので、「じゃあ描いてみる？」という「うん」という。いきなり人の目の前で絵を描く子は少ないが、本児はそれも気にしない様子だったので、画用紙と鉛筆、消しゴムを渡した。本児は、ゲームのキャラクターを描いた。結構上手だったので思いっきり褒めた。母親も本児も嬉しそうだった。絵は相談室に貼ることにしているので、おいて行ってもらい、貼る許可ももらった。その上で次回の約束をした。

次の回までの間に、母子で適応指導教室の見学に行ってくれた。本児は、少人数で緩やかな雰囲気少し気に入ったようで、「此处なら行っても良い」と言ってくれた。ただし「毎日は無理」とも。

今まで昼夜逆転だった子がいきなり毎日適応指導教室に行けるはずもないので、週に1回くらいからで良いよと伝えたと喜んでた。ただし通級については学校を通さねばならない。学校が渋い顔をするのは目に見えていた。適応指導教室に通うようになると学校には戻ってこないと思っているからである。適応指導教室は子どもが居やすいように工夫しているのだが、それを甘やかす場所ととらえているからである。案の定、筆者の方から適応指導教室を勧めた話をすると、嫌な雰囲気になったが、「学校に行けないし、小学生が母親のいない間ずっと一人で家にいるよりはよいのではないか」と伝え、母親が申し込みに行くので対応してほしい旨お願いした。

こうして適応指導教室への週1回の通級と、月1回のかかしへの来室という形が整い、面談が続

いた。

間に母親だけの面談も時々入れていった。不登校の場合、母親が辛くなったり焦ったりすることがあり、そこを支援しないと良い状態に変わってきていても後戻りしてしまうことがあるからだ。

本来は小学生が一人で家にずっといるのは認められないが、母子家庭でもあり、昼には母親がいったん帰るという形にしてもらって何とかこの形を継続した。

翌年春、6年生になった。担任は変わったが校長は変わらなかった。6年生になったので、一度登校してみようという話になり、本児も昼夜逆転からは少し抜け出していたので、最初の二日くらい行ってみた。しかし周りの子と話が合わなかったり、担任との関係も上手く作れず、また不登校になってしまった。二日間行けたことはしっかり褒めた。それでも適応指導教室を続けることは大丈夫そうだったし、日数も、週1回だったのが週2-3回になっていたのも、このまま6年生も適応指導教室でということになった。6年生では修学旅行がある。本児はそれには行きたいと言い、参加することができた。修学旅行に参加の前後数日は学校に行けたが、その後はまた不登校ということになった。運動会や他の行事には参加しなかった。そもそも運動はあまり好きでもないし、得意でもなかった。最初にあったときからアスペルガー症候群の可能性を感じていたのも、修学旅行だけでも参加できたのは奇跡のように思っていた。こういう子は集団が苦手だし、コミュニケーションも上手ではない。特に同年代とは難しいからだ。

相談室で描く絵はかなり進歩し、独特な絵柄で、目を引くような作品も描かれるようになっていた。

貼ってある本児の絵を、別の保護者が相談室に来室時にみて、「この絵面白い！」と評価してくれたことを伝えると、すごく喜んでいて。

こうして適応指導教室に行ったり、少し休んだり、また行ったりして6年が終わろうとする頃、本児に中学に向けての思いを聞いた。すると「中

学は行こうと思う」とのこと。大抵の子どもが同じことを言う。中学になったらとか高校になったら頑張るといって、大抵数日か数か月で折れてしまうことが多い。そこで、「中学は頑張ろうと思っているんだね。すごいね。ちょっと学校が遠いけど大丈夫？」と聞くと、「多分自転車通学になると思うから」とのこと。微妙な距離なので自転車通学になるか確かではなかったのも、「もし自転車通学じゃなかったら難しいのかな？」と聞くと「うーん・・・、面倒かも」と言った。正直に言ってくれたのは有難かった。「もし行けたら、歩いてでも頑張ってみよう。新しい友達も増えるし、ゲームの話ができる子もいるはずだよ。ただ適応指導教室もあるから、両方使う感じでも良いよ。頑張りすぎると折れちゃうから無理しないでね。」と伝えた。

中学に上がってからは本児のみで来室し、帰りに母親が合流するという形で面談が繰り返された。最初の内は学校に行けたが、5月の連休明けくらいから休むようになり、適応指導教室に行くことの方が増えた。相談室に来ると、絵を描くだけではなく、ゲームや今興味がある話などを沢山したり、詩を書いて来て見せてくれたりということも増えた。詩の内容は、「死」や「心」や「精神」といったものを題材にしていた。時には「死」という文字だけで絵を描いてきたなどと言うこともあった。思春期の心の揺らぎが思いっきり出てきた感じで、これも悪くないなと思って関わっていった。中二の時にはイライラすることが増え、ある時切れて、そこらにあったものを投げたことがあった。「物を投げるなら帰ってください」と言って帰らせたが、5分後くらいに戻ってきた。謝罪はなかったが、反省している様子が見えたので、そのまま残りの時間面談を続けてその日は終わった。以後暴れることも暴言を吐くこともなかった。

中学三年間は、適応指導教室も行けたり行けなかったりだった。母親もゲーム依存をなくすために、本児と約束をして、出来るだけゲーム時間を減らしたり、時にはWi-Fiのコードを抜いて会社

に持って行ったり等努力してくれたが、コードは自分で買ってきてしまって、抜いても無駄だと知った。筆者からは、ゲームだけを毎日している完全なゲーム依存の人の治療は精神科であること、麻薬中毒患者と同じであることなどを伝え、その危険性を理解させるようにしていった。本児はゲームではなく、中学に上がってからは、音楽を作ったりすることにも興味を持ち、自分なりに工夫していろいろなことを試していたようだった。そんな話を本児は相談室で沢山話してくれたし、中三の途中からは高校についても考えるようになっていった。中三になると、哲学的なことにも興味を持つようになり、ニーチェやプラトン等の本を読むようにもなった。

高校は通学のところを勧めていたが、本児と母親との話し合いで、某有名通信制高校になってしまった。こうなると中々外に出ないのではと心配したが、適応指導教室で知り合った先輩の影響で、アルバイトを始めた。最初はファストフードの店に入ったが三日でダウンした。しばらくしてまた別のお店に務めだし、今度はずっと続けていた。学校の方は何とか単位もとっていた。オンラインで知り合った、某国立大学の大学院生との付き合いが深まり、その方にラテン語を教えてもらったりして、更に哲学について学ぶようになっていった。オンライン上の彼女もできた。高校での課題提出も危なげだが何とかできているしアルバイトも行けているという段階で、相談は終了となった。

この間母親とは、母親の私的な問題や、祖父が亡くなったり祖母が倒れたりと様々な環境変化がある中で、本児と妹を支えている母親を、支える面談を繰り返してきた。幸い母親は倒れたり体調を崩すことなく元気に働いている。また妹も無事高校に合格し、安定しているとのことであった。

まとめ

不登校でゲーム依存の子どもに出会うことは多い。そういう時、筆者が考えるのは、「引きこもりにしない事」である。そのために考えるのは、

どこでも良いから小集団なり、なんなりにつないで、人とのコミュニケーションを持つ場を作る事、そして、本人の特性を生かして、本人が好きなことを伸ばせるようにすること、保護者を支えることである。

小集団は適応指導教室でも良いし、少年団でも、クラブでも、お稽古事でも何でもよい。将棋が好きな子に将棋クラブを勧めたこともあった。どこかに所属することは、不登校の子どもにとってとても大事である。そこには存在価値がついてくるからである。家で一人で居てゲームだけしていても、退屈だからゲームをする悪循環になるだけである。最近はオンラインでグループを作りゲームをしていることもあるが、その中での人間関係も中々大変で、喧嘩別れになることもある。それでもそうしたグループがないよりはあったほうが良い。

本ケースも、ゲーム依存ではあったが、最終的にはゲームより哲学の方が面白くなり、ラテン語を習得するまでになっていった。もともと力のある子ではあったが、学校という、強制される場は苦手で、自ら学ぶことに集中するタイプで、そういう子が増えているのも事実である。こういう子は学校に不適應感を持つ。したがって不登校になる。筆者の相談室に来ている多くの不登校児がこのタイプである。自分のペースで学びたい。自分のペースを守りたい。急かされたくない、強制されたくない、と思っている。友人関係もそううまくはない。ついズバツと正直に言ってしまって関係を壊すなどと言うこともある。そういう子たちがいられる学校は、フリースクールしかないのかもしれない。学びの形もこれからはオンラインで学ぶなど形を変えていく必要があるだろう。実際大学でもなんでも、オンライン授業は増えているし、通信制の学校も増えた。教育の形そのものに変化が求められているのかもしれない。

今回は一人の不登校児の成長をつづらせてもらった。

帰って来た__対人援助学縦横無尽(1)

コロナ後の文化心理学ネットワーク、再始動

立命館大学総合心理学部 サトウタツヤ

前口上

日本では2023年5月に新型コロナウイルス感染症の扱いが変わり、コロナ後に移行した。2020年3月にはブラジル行きを予定したにもかかわらず、実現することができなかった。本稿では2023年度に私が経験した文化心理学海外ネットワークとの交流について簡単に記して起きたい。まず、8月にはオールボー大学の Mogens Jensen 名誉准教授が立命館大学人間科学研究科の客員教授として滞在し1週間の集中講義を行った。ついで、9月には筆者が立命館大学総合心理学部海外フィールドワークの引率をしてデンマーク・オールボー大学とコペンハーゲン大学などを訪問した。そして、ブリガムヤング大学の Zachery Beckstead 准教授が9月末から始まる秋学期の約3ヶ月間、立命館大学客員准教授として家族と共に滞在して英語で授業を行った。11月には被災地福島への小旅行・講演も行った。あくる2024年1月ザックは帰国した。そして2月、筆者はシンガポール国立大学・ウォーカー泉准教授に招待されてTEA（複線径路等至性アプローチ）に関する講演を行ってきた。以上、筆者にとって2023年度は文化心理学を中心にした海外交流が再開した年だったと言える。こうした記録を残しておくのはやはり『対人援助学マガジン』だと思い、卒業した身ではあるが、急遽、原稿を準備することにした。

目次

- 1 2023年8月 モーンス in 立命館大学
- 2 2023年9月 海外フィールドスタディ in デンマーク
- 3 2023年9～2024年1月 ザック in 立命館大学
- 4 2023年11月 ザック in 福島
- 5 2024年2月 サトタツ in シンガポール国立大学

1 モーンス in 立命館大学

オールボー大学の Mogens Jensen 名誉准教授のニックネームはモーンスである。Mogens をローマ字読みするとモーゲンだが、デンマーク語では単語の間の母音に挟まれた子音を発音しないそうなので、モーンスとなる。モーンスには、立命館大学総合心理学部の海外フィールドスタディを受け入れること、その前提としてオールボー大学心理・コミュニケーション学部と立命館大学総合心理学部の相互協力覚え書き締結に非常に尽力してもらった経緯がある。大学院で集中講義をしてくれないかと依頼したところ快く引き受けてもらった。

ちなみにオールボー大学は、PBL を実践する大学として1974年に創設され、世界トップレベルの大学である（世界ランキング201-250位）。オールボー大学のPBLは、オルボーモデルと呼ばれており全学部で実行されている。なお、デンマークの大学の学費は全て無料であるが、間接税が高いことでも知られている。

モーンスの授業は文化論的心理学に基づくものであった。授業の様子、授業の一環として行われたエクスカッションについての写真を掲載しておく。



また、ハイブリッド形式で、文化心理学セミナーも行った。この会ではモーンズと共著論文を執筆した経験がある神崎真実（RGIRO 助教；サトゼミ 8 期生）が研究発表を行った。

文化心理学セミナー 9/01 14:40～

企画・司会 サトウタツヤ（立命館大学）

共催：立命館大学ものづくり質的研究センター／立命館大学人間科学研究科

1 On Personal Umwelt; Cultural psychology, personality and agency.

Mogens Jensen (Associate professor emeritus; Aalborg University, Denmark)

2 不登校の文脈理解: "Common perspective" を拓く

神崎真実（立命館大学 RGIRO 研究助教）

3 全体討論

4 終了後；フェアウェルパーティー



Cultural psychology, personal umwelt and agency.

文化心理学、個人的環世界、そしてエージェンシー



Mogens Jensen, associate professor emeritus
Aalborg University, Denmark
Visiting professor, Ritsumeikan University
mogensj@ikp.aau.dk



心理学において環境主義を標榜すると、人間の主体性を損なうのではないかという疑念が寄せられることがある。モーンズの個人的環世界という考えはそうした危惧を払拭する魅力的な考え方である。

2 海外フィールドスタディ in デンマーク

オールボー大学と筆者の関係は、Jaan Valsiner がクラーク大学からデンマークに異動した 2013 年に遡り、その後の様々な経緯を経て学部生を定期的にオールボー大学に連れて行けるようになったのが 2019 年度のことであった。2020 年 3 月に第一回目の海外フィールドスタディを行ったが、まさにパンデミック前夜でありまさか

の大学閉鎖で1日早く帰国したのであった。その後、2年間の代替オンラインセミナーを経て2022年度には直接訪問が再開された。2022年度も押し詰まる2023年3月に再開第一回目（通算二回目）が行われ、2023年度からは9月に行うことになった。

表 2023年度海外フィールドスタディ（デンマーク）日程表

9/11（月） オールボー大学 文化心理学セミナー講義

9/12（火） オールボー大学 文化心理学講義、街アート見学、コンピテンシー講義

9/13（水） コペンハーゲンに移動。国民学校訪問

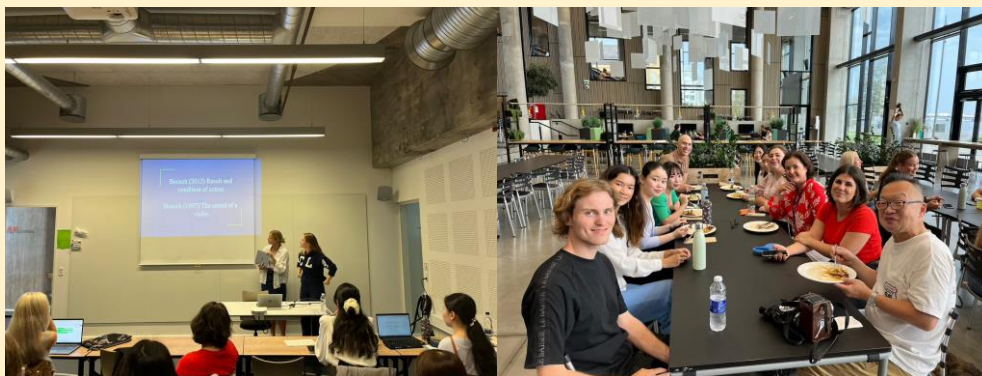
9/14（木） コペンハーゲン大学 講義参加 エクスカーション（人魚姫）

以下、それぞれの日の活動報告である。

9/11（月） オールボー大学

10：15～昼食をはさんで、14時ころまでが、文献購読文化心理学セミナー（AAU 学生7名）

昼食は大学で（外だと物価が高い、という理由もある）。



14時半くらいから16時半ころまで、ブレイディこと Brady Wagoner 教授による文化心理学の講義（社会的表象）に参加。

9/12（火）

午前中は、ご存じモーンズ先生の個人的環世界の講義に参加。その後、サラ先生こと Sarah Awad 准教授のアート系の講義に参加した。午後から見学するウォールアートについての解説もあった（はず）。



午後はオールボーの街歩き。サラの案内で街中の様々なアートを体験する。Sense of Wonder（オドロキの感覚）をもたらすのがウォールアート。



午後は丘の上にあるメインキャンパスへ

Thomas Ryberg 教授と Jesper Vestergaard 教授にヤスパー先生の講義内容はアントレプレナー・コンピテンスでした。講義もさることながらブレイク用に用意してくれたお菓子と飲み物が豪華でした。



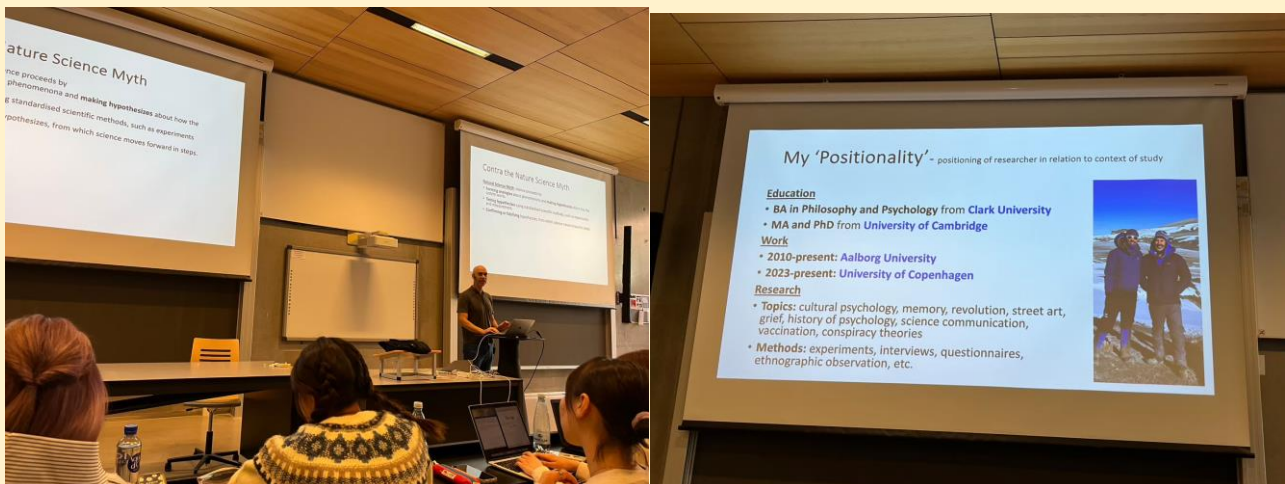
9/13（水）

オールボーからコペンハーゲンに移動。そして、デンマーク北端にある国際国民学校（International Peoples College）を訪問。ここは、TA を務めてくれている D3 の高史行氏の出身校ということもあり、校長先生以下みなさん大歓迎してくれた。以下の 2 枚の写真を含め、高氏のカメラに収められた写真も多い。



9/14 (木)

コペンハーゲン大学の講義に参加。コペンハーゲンの心理学と言ってもピンとこない人が多いかもしれないが、多義図形（横顔か盃か）で有名なルビンはデンマークの心理学者である。ブレイディが行う講義に参加させてもらった。学生の様子をチラ見していると、前の席は熱心に聞いている学生が多い一方で後ろの席はスマホを見ている学生も多く、学生文化は普遍的なんだろうなと思った。ただ、日本の教室で見られない光景としては、サラダを食べながら受講する女子学生がいたことである。私自身は講義で食事をするのは賛成であり、微笑ましく思えた。



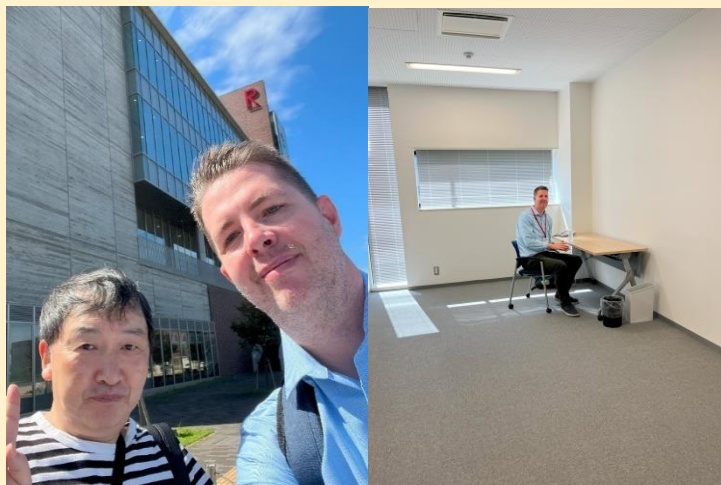
ブレイディは 2023 年からコペンハーゲン大学で授業を持つようになり、この日はその第一回目、ということで自己紹介もふんだんに盛り込まれていた。筆者が彼に最初に会ったのは 2008 年の第 5 回国際対話自己学会 @イギリス・ケンブリッジ大学で、彼は大学院生として受付係をやっていた。立派に成長したもんだ、と感慨にふけったりして。

3 ザック in 立命館大学

1-1 客員准教授ザックの授業

今回、ザックは妻と子ども 3 人の 5 人での滞日であった。2024 年 9 月に来日し、家族でディズニーランドなど観光を楽しんだあと、彼が初めて OIC に来たのは 10 月 2 日。客員教授として教員研究室も与えられていた

が、机一つで少し寂しかった。



初回授業には総合心理学部の学生のほか、経営学部 of SIK(Study in Kansai)の学生 4 名も参加した。



授業は毎週月曜の午後 1 時から。初回授業の自己紹介パートでは、懐かしい写真も提示された。ザックは 2009 年に大学院生として立命館大学の筆者のもとに滞在したのであった。当時はクラーク大学の大学院生で、Jaan Valsiner 教授（愛称ヤーン）のもとで巡礼に関する研究を行うために日本に来ていたのであった。写真はおそらく 5 期生の蓮井さん（旧姓）の実家が経営している焼き肉店だそうである（記憶曖昧）。

また、総合心理学部では、月水金の昼休みに「英語で話そう」というイベントを行っているのであるが、ザックは時間があるときにそこに参加してくれた。



歓迎会やあつという間の送別会なども何度か行われていた（ただし、ザックは宗教上の理由からアルコールを嗜まないで常にコーラを飲んでいたのであった）。



2 ザック in Fukushima

ザックの研究は巡礼や集合的記憶である。そうしたテーマには第二次世界大戦の記憶や福島原発事故（の後の避難）が含まれる。そこで、福島ツアーを企画した。震災復興に関する卒論を書いている学部生／修論生などを含め総勢8名で福島訪問を行った。ゼミ生を連れて行く企画はコロナ後初めてである。

日程は2024年11月21～23日の二泊三日。福島県喜多方市の会津地域、福島市の中通り地域、そして浪江焼きそばで有名な浪江町など浜通り地域、福島全域をまたぐツアーとなった。以下、時間順に

11月21日

06:51 新大阪発 のぞみ206号

09:40 東京発 やまびこ55号

11:15 郡山発 会津若松行 普通列車

12:30 会津若松からレンタカーで喜多方へ

昼食は、もちろん喜多方ラーメン。



木之本漆器（私の母の実家）訪問

母方の実家を訪れた理由は、母の兄（伯父）がサイパン島で戦死しており、仏壇にその方の写真が飾られているからである。筆者自身、伯父の写真は「おばあちゃんち」に行く度に良く見ており、個人の家で戦死者をどのように悼んでいるのかをザックに見せる目的で彼を連れていった。海外からきた研究者が個人の家のお仏壇を見ることは簡単ではないが、筆者の母の実家なのでイトコで当主の遠藤久美氏に頼んで実現することができた。



ちなみに木之本漆器店の祖先是滋賀県の木之本から会津に来たそうである。いまでは漆器や桐のグッズの店として知られている。



<https://www.aizu-kinomoto.com/>

夕刻 一般財団法人 福島民報教育福祉事業団

喜多方市から福島市に車で移動し、一般財団法人・福島民報教育福祉事業団で震災復興のために寄付。サトゼミでは、福島に来るたびに、少額ではあるが、寄付をさせてもらっている。後日、新聞記事に掲載してくれるのも大変ありがたい（エビデンスという意味でも）。



18：30 頃

福島県立医科大学（駅前キャンパス）で研究会

Fifth Meeting of the Longitudinal Study on Evacuees from the Fukushima Nuclear Power Plant Accident

夜は、福島県立医科大学講師の日高友郎（サトゼミ3期生）による研究会が行われた。日高、ザックの二人が研究発表を行った。この二人は、ザックが2009年に立命館大学に滞在したときお互い大学院生同士だったという旧知の仲であり、それぞれが研究者として成長した姿を見せ合ったという意味でも意義深いものであった。福島大学の研究者たちも参加してくれて大いに賑わった。



この時のザックのテーマは移行であった。

彼は、移行について探求すべき問いとして、

記念碑はどのように想起の助けとなるのか？ 記念碑は、トラウマ的出来事の集団的・個人的想起にどのように役立つのか？ 記念碑はトラウマの癒しに役立つのか？

の3つをあげていた。そして、これらの問いを探究するために「Liminality」が重要だと主張していた。

Liminalityとは耳慣れなかったが、リミナリティとカタカナ書きされたり、境界性と訳されたりする文化人類学の専門用語である。Liminalityはラテン語の「Limus」に由来し、閾や敷居という意味をもつ。敷居とは、家の内と外をわける領域のことである。俗に「敷居が高い」と言えば、何か新しいことをやったり、人に会って何かを頼むのが困難だ、という意味をもつ。移行が難しいということなのであろう。

なぜか筆者はこの概念の沼にどっぷりとはまってしまい、様々な文献を読みあさり、ついには Liminality=移境態という訳を提唱することになった。そして『TEA 用語辞典（仮）』で移境態を担当することにして、「移境態

は時間・空間における何かと何かの間の境にある（いる）という状態を指す。ある場所から他の場所へ、キレイなものがキタナイものになる（また、その逆）など可逆的な移行・移動、人生における発達段階（思春期から青年期）のように非可逆的な移行・移動、の中間状態が移境態である」と定義することになった。

ちなみにザックは、「Liminality is one of the few universal principles key a culturally inclusive psychology and an aspect of our everyday life. = 移境態は文化的にインクルーシブな心理学における数少ない普遍原則の一つであり、私たちの日常生活の一側面です。」と述べていた。

研究会の後は、会津郷土料理「楽」で夕食・宴となった。この店は、会津風の馬刺しを食べさせてくれる。

<https://www.rakunitanoshiku.com/>



22 日

朝 飯坂温泉 公衆温泉 鯖湖湯

公衆の温泉、というのも日本文化だよね、ということで訪問。



正午

12:30 檜葉町 一般財団法人ならはみらい

ならはみらいには立命館大学の校友が多数関与しており、今回も校友でならはみらい勤務の森雄一朗氏のお世話になった。また、立命館大学福島県校友会に属する馬場幸蔵氏と三村智春氏の体験談を聞かせてもらった。馬場氏は郡山から、三村氏はいわき市から、それぞれ手弁当で駆けつけてくれてザックや学生達に当時の話を聞かせてくれたのである。

「震災二ヶ月後、立命館大学の校友会が、福島にきた。

しかし、福島の人々は展望がなく、何を支援して欲しいか言うのが難しかった。」

その後も、立命館大学の職員が福島県の校友会を訪ねてくれた。しかし、卒業生の状況もわからなかったのも、何も頼めなかった。

そこで、福島の立命館大学卒業生を、立命館大学の全国校友会に招待してくれと頼んだ。そこで、多くの他の卒業生に 2011 年の状況を伝えることができた。全国の卒業生が福島を支援してくれてうれしかった。また、他の県の卒業生が、東北地方を回るツアーをしてくれた。とにかく現場を見ようという校友の気持ちがうれしかった。」

馬場・三村氏は、立命館大学は全国型大学で、全国の卒業生がその時から切れ目無く支援したり来てくれたりしたのでありがたいということを深い感慨と共に述べていた。



昼食 道の駅 ならは

昼食後は富岡町の東京電力廃炉資料館を訪問した。予約制であり、東京電力の皆さんの視線からみた原発事故やそれへの対応が記念館になっている。

富岡町 東京電力廃炉資料館



大熊町役場

夕方、復興知事業で旧知の職員のいる大熊町役場を訪問し、役場内を見学させてもらった。大熊町はそのホームページを見る限り、2024年2月現在においてもなお、人口のほぼ全てが町の外に避難している状況である。地震・津波の被害も大きかったが、原子力災害の被害は持続性という意味で他の災害とは異なる影響を与え続けている。

[大熊町民の被害・避難状況 - 大熊町公式ホームページ \(town.okuma.fukushima.jp\)](http://town.okuma.fukushima.jp)



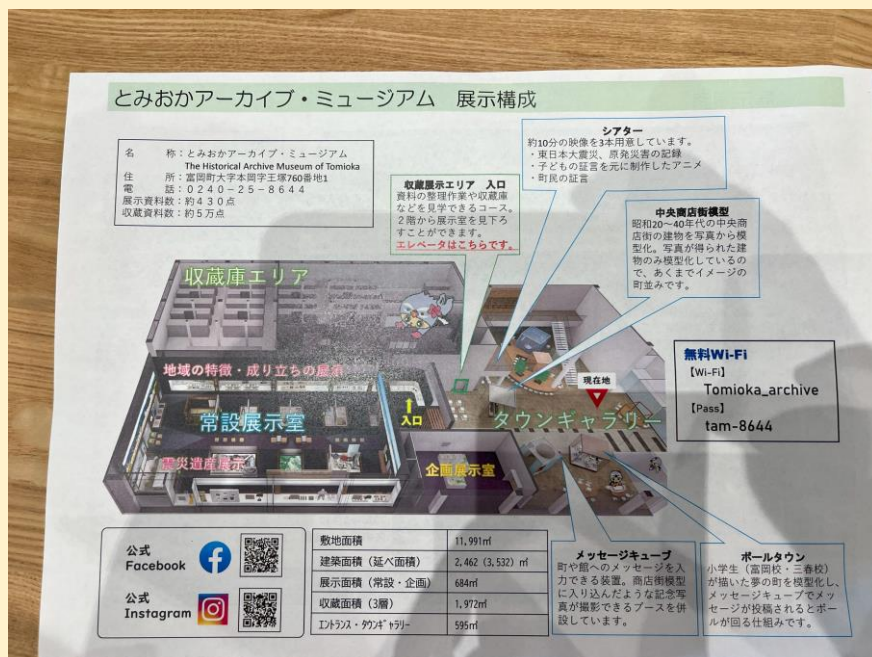
大熊インキュベーションセンター (OIC) <https://okuma-ic.jp/>

この施設は、小学校だった建物の再利用。

23日 朝

富岡アーカイブ・ミュージアム

このミュージアムは、住民目線からの震災・原発事故が語られている。



双葉町のウォールアート

その後、双葉町役場横山氏と落ち合って、双葉町のウォールアートを見て回った。2023年度のサトゼミ卒論生（20期生）が双葉町をフィールドにしているのだが、その情報源の一人が横山氏である。まず、ウォールアートを解説付きで歩いて見て回ることができた。贅沢である。



だが、それ以上に胸をうったのは横山氏の自宅の様子である。震災後12年たっても、自宅がこの有様なのである。地震＋原子力災害によって帰還できなかったことのすごさを見せつけられたと言える。横山氏はテレビ取材などにも応じて自宅の状況を発信してきたというが、このような自宅を人に見せている横山氏の心中はいかばかりだったかと思う。



東日本大震災・原子力災害伝承館

そして、双葉町にある東日本大震災・原子力災害伝承館である。黒い袋はフレキシブルコンテナバック、略してフレコンである。福島県内では、除染によって生じた廃棄物をこのフレコンに詰め、仮置き場に保管している。仮であるから、やがて他の場所に移すのだが、まずは中間貯蔵施設に蓄え、最終的に最終処分の場所に移すことになるのだがー容易に想像がつくようにーこうした処分の場所を決めるのは容易ではない。このフレコン、車中移動をしていると至る所で目にするのだが、その大きさについてはあまり実感することができなかった。今回、フレコンの実物が展示されていたので、ザックをモデルにして人間との大きさの対比を実感できるようにしてみた。



昼食

最終日の昼食は「道の駅なみえ」フードテラスかなで。

<https://fukushima-jobanmono.jp/enjoy/eat/restaurant1256/>

浪江と言えば浪江やきそば。



昼食後は 浪江震災遺構＝浪江町立請戸小学校に向かう。

<https://namie-ukedo.com/>

<https://fukushima.travel/destination/the-remains-of-ukedo-elementary-school-in-namie-town/351>

公式サイトによれば、「倒壊を免れた校舎に刻まれた脅威と、全員避難することができた経験を伝えるため、2021年より震災遺構として一般公開いたしました」とのことである。

筆者は浪江町立請戸小学校には、震災遺構として整備される前に何度か訪問してきた。文字通り時間が止まったままになっている時計、翌日の3／12が卒業式だったこともありその準備状況のままになっていた体育館など、震災の傷跡をリアルに伝えてくれていたのである。震災遺構として整備されることで、こうした状況を永く保存出来るというのは素晴らしいことである。



その後、最終目的地である、大平山の慰霊碑訪問を行った。



ザックからの直後のメール

Dear Tatsuya,

I am very happy to hear from you are on your way back.

I will give Tatsuya's Travel Agency (TTA) a five out of five star rating. You may be getting inquiries about your services soon.

I was incredibly impressed with your students. I was worried I would make them feel uncomfortable because of the language barriers, but they were so kind and willing to help interpret and tell me about Fukushima. I really enjoyed getting to know them.

It was a pleasure and I am excited for new ideas about research. I couldn't help but think about how this relates to my life and community at home. I would love to bring my students to Fukushima for them to learn more.

Thanks again for everything and have a great weekend!

Best,

以上が、ザック＋サトゼミ福島訪問記である。

5 シンガポール国立大学訪問

忙中閑あり、というわけではないが、2024年2月のカレンダーを見ていたら、数日間、出張できるということに気がついた（2024年1月中旬）。そこで、かねてよりお招きのあったシンガポール国立大学を訪問することにした。

かつて立命館大学にサバティカルで在籍したウォーカー泉先生が、2023年5月にシンガポール日本語教師の会の会合に誘ってくれていたのであるが、事情で現地参加ができずオンライン参加（ZOOMによる講演）をせざるを得なかった。その代替となる訪問をしたいと思っていた、という事情が背景にあった。

シンガポール国立大学において、外国人ゲストを呼ぶためには1ヶ月間の余裕が必要だということは私は全く知らなかったの、気楽に訪問の意図を伝えてしまった。ウォーカー泉先生ほかの皆さんは大変喜んでくれていたのであるが、実は事務的には色々と問題を引き起こしかねなかったのがあった。

2024年2月6日、この日は移動日であるが、映像学部の北野圭介先生がサバティカルでシンガポール在住と

いうことを知っていたので、声をかけてご夫婦と小籠包を堪能した。お嬢さんもいたのであるが、写真を撮ってくれたので写っていない。



翌2月7日、打ち合わせをかねて大学内の高級レストランで食事会。北京ダックを食べさせていただく。



シンガポールは四季の区別がほとんどなく、2月でも30度程度の気温であった（それでも、2月は1年のうちで1番涼しい時期だという）。

講演のタイトルは「TEA（複線径路等至性アプローチ）と日本語教育の邂逅」であった。ウォーカー泉先生はTEAと質的探究学会に論文を発表している。その紹介も行った。<https://jatq.jp/journal.html>



まとめにかえて

以上、2023 年度における文化心理学の仲間達との交流を振り返ってみた。私が TEA（複線径路等至性アプローチ）を開発する途上で出会った人たちが今では大学の教員になって立命館大学の学生たちと交流してくれているということに、大きな喜びを感じている。

参考にこれまで対人援助学マガジンで紡いできた文化心理学的交流について振り返っておく。

参考 対人援助学マガジンの関連サイト

2012 年 1 月イタリア、3 月ブラジル <http://www.humanservices.jp/magazine/vol8/16.pdf>

2013 年 3 月イタリア、デンマーク、5 月イギリス <http://www.humanservices.jp/magazine/vol13/17.pdf>

2014 年 3 月ブラジル、4 月デンマーク、8 月オランダ、デンマーク

<http://humanservices.jp/magazine/vol18/17.pdf>

2016 年 7 月横浜 ICP、9 月ポーランド、10 月イタリア、11 月ノルウェー

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol28/16.pdf>

Jaan Valsiner 先生、2018 年 5 月の滞在記

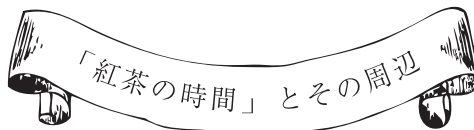
<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol33/16.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(1) 2008 年まで

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/15.pdf>

ヤーンの古希を言祝ぐ：日本ならびに立命館大学における TEM とヤーンのネットワークの拡大(2) 2009 年から

きもちは、 言葉を さがしている



第 52 話

水野 スウ

元旦の夕方に

2024年元旦。天気予報に反して、北陸のこの季節にはめずらしい青空。つい心はずんで、午後から夫婦で金沢へドライブに出かけていました。

崖の上の喫茶店でお茶していた時、ぐらぐらっと来た最初の揺れ。しばらくするとおさまり、ほっと息をついたそのとたん、今度はもっと大きな揺れ。でかい！ これはいつもの地震と違う。怖くなってあわててお店の外に飛び出しました。停めてあった車が地面ごとぐわんぐわん大きく揺れている。立っているのがおぼつかなくて、思わずその場でしゃがみこみました。

ほどなく揺れがおさまったので、家に戻らなくちゃ、とあわててお店に戻ってお会計を済ませ、国道を避け遠回りして裏道を走り抜ける。その間にも消防車のサイレンがあちこちから聞こえてきます。遠くで火の手があがるのを見ながら家に向かう途中、カーラジオから「志賀町震度7」と聞こえてきて、思わず震えあがる。志賀原発どうなってる？

心臓をバクバクさせながら家にたどりつくと、家

そのものは何ともなく建っていたけど、うひゃあ、家ん中ぐちゃぐちゃです。ひっくりかえった本やら食器やら箱やらで足の踏み場ありません。おまけに二重にロックしていたはずの二重窓まで開いている。この地震、一体どんな複雑な揺れ方をしたんでしょう。

幸い、わが家は電気、ガスとも生きていて、その時点では水も出たので即、お風呂に水を貯めながら「こちら二人とも無事、ご心配なく！」とまずはSNSに発信。それからとりあえず食事ができるだけの空間と、トイレまで行く動線（この途中で割れた食器やガラスが散乱してて、この短い距離を確保するのに時間がかかった）と、布団をしけるだけのスペースをつくってから、すっかり遅くなった夕食を冷蔵庫のおせちですませました。その間にもかなり強い余震が幾度も襲ってきます。

奥能登が……

テレビがなぜかつかないけど、パソコンは生き

ていました。地震直後から東京の娘と電話を繋ぎっぱなしにしていたので、「なら、パソコンつけてNHKプラスのサイトで今NHKが放送してる地震情報、リアルタイムで見れるから見て!」と教えてもらう。情報があるって心強い。とはいえ、遅ればせにパソコンで見たニュース映像——津波の避難指示で真っ赤になっている能登半島の地図、激しく炎燃えあがる輪島の朝市通り……奥能登の被害のすさまじさに息をのみました。長いつきあいの友人たちの顔が次つぎ浮かびます。

その後少しずつ、個々の人たちがFacebook（以下FB）で発信してくれる情報を頼りに、奥能登の被害の甚大さが見えてきました。とはいえ、当初は通信がつかない、つながってもすぐとぎれる、特定の場所にいかないと電波が届かない、などなど、何より、一番ひどい状況にいる人は発信すらできなかったのも、後から思えば被害の全体像はまったくといっていいほど見えていなかったのですが。

珠洲の湯宿 さか本

珠洲に津波が来ている、そうわかったときに真っ先に思い浮かんだのは、珠洲の湯宿「さか本」一家のことでした。

新ちゃんこと坂本新一郎さんと出会ったのは30年以上も前の、志賀原発の反対集会。後に、珠洲の「さか本」という知る人ぞ知る湯宿のご主人だと知りました。娘の菜の花さんが生まれるずっと前のことです。

菜の花さん（なのちゃん、といつも呼んでいます）は沖縄のフリースクールで高校生活を送り、そのことを「菜の花の沖縄日記」として地元の北陸中日新聞に連載、私も毎回楽しみに読んでいました。なのちゃんのまっすぐな感性から紡がれる言葉がとてもすでに貴重に思えて、何年も前の紅茶の時間で語ってもらったこともあります。高校卒業後、両親のお宿を手伝っていたなのちゃん、一昨年、22歳の時にさか本のおかみをお父さんから引き継ぎました。

さか本は一体どうなっているだろうかと不安で不

安でたまらなかった時、友人がFBに書込んでくれた投稿で状況を知ることができました。

「生きています

珠洲にいます

とてつもない大きな地震が何度も何度も発生しました

さか本で一緒にいた方々と 避難しています

さか本のみなさんも けがもなく元気です

電気も水道もダメ

さか本の周辺の土砂災害の危険性もあり

今晚は車で過ごします」

さか本では毎年、常連客さんや親しい友人たちと年越しするのが恒例だけど、今年は彼女もそこに参加していたのです。みんなのからだが無事とわかってひとまずはホッとしたものの、建物はどうなっているのだろうと思いながら、たびたびの余震の中、浅い眠りにつきました。

その友人が1月3日になってから、私も知っている友人夫婦と3人、普段なら2時間半で行ける道を8時間かけて金沢まで車で戻ってきたこと、能登までの道路が大変な状況であること、そしてさか本を心配して訪ねた方の投稿によって、さか本の建物がどうやら無事らしいと、FBを通じて知ることができました。

そして1月13日、なのちゃんが地震後はじめて、自分の言葉でFBにこんなふうに投稿してくれたのでした。

「ご心配、エール、有難うございます。

自分からの投稿が遅くなって、ごめんなさい。私も両親も無事です。

年末年始と一緒に過ごした友人ら20名弱も数日後には無事に帰宅されました。

元旦は、避難所ではないけれど高台の、珠洲消防署の駐車場付近で車中泊しましたが、2日朝以降本日まではずっと家で生活しています。慎重な設計士さんと、腕の良い大工さんと、考えて考える父の三

者がつくった建物は、ほんとうに丈夫です。壁のヒビや剥がれ、ネタ木の裂け、大きな窓のサッシの歪み、戸の傾き、くらの被害で済んでいます。本当に有難いです。ありがとうございます。

電気はまだ戻りません(町内でも戻った家もあります)。でも井戸水を汲んで、薪ストーブで暖をとり、プロパンガスで調理しています。ボランティアの方からバッテリーと太陽光パネルを頂いたので、充電や夜間の照明の心配がなくなりました。電気さえ戻れば、ほとんど元の生活に戻れると思います。でもそれまではこのような生活。早寝早起き、体をよく動かして。これはこれで健康かもしれません。呑気なことを言っているほど心身ともに健康です。

欲しいものと言ったら、薪で直焚きできるお風呂。洗濯機も回るようになんとかしたいな。というところ。お風呂の方は知人と相談しながら、資金集めて何台か購入し、民間のお風呂場所を作りたいね、と昨日から話しています。

もう少し先の仕事のことを考えるとクリーニング屋さん情報が欲しいです。長い間ほんとうにお世話になってきたクリーニング屋さんが亡くなられました。宇出津あたりまでの範囲で、おすすめのクリーニング屋さんご存知の方いらっしゃいませんか。

宿という仕事は、家族だけではまわっていませんでした。漁師、魚屋、農家、八百屋、スーパー、クリーニング屋、掃除や外仕事や配膳のスタッフ、メンテナンスをしてくれる大工さんや水道屋さんや建具屋さんや石屋さんなどの職人さん……キリがないほど多くの方が、みんな健康であってこそまわっていて、ようやくお客さんを迎えられる。今まで本当に有難うございました。これからも、やっていきます。どうぞよろしくお願いいたします」

読みおえて本当にはっとしたと同時に、この状況の中で24歳のなのちゃんがおかみさんとして凛と立っていることが伝わってきて、オロオロしていた私の背筋まで、スッと伸ばしてもらったような気がしました。

ここで書かれているお風呂の件は、もう実現しています。お父さんの新ちゃんが五右衛門風呂をつくっている大和重工という会社に直接電話して「ひと

つ買いますから、5つ支援してもらえませんか？」と交渉したところ、なんと、1個50万円のお風呂を30万円で、あとの5個は中古を無償で提供しましょう、とびっくりするようなすてきな返事。それまでにお宿に寄せられていた寄付金で即購入、すでに6つの五右衛門風呂が届き、1台はさか本に、あとの5台も珠洲の友人たちのところに旅立ったそうです(その後、さか本の1台も輪島市三井町へと運ばれました)。

珠洲のこと

奥能登の珠洲には2ヶ所、巨大な原発をたてる計画がかつてありました。28年にも及ぶ市民の長く厳しい闘いの末、その計画がようやく凍結されたのは2003年のこと。

珠洲原発予定地の一つであった高屋地区では、今回の地震で海底が2メートル隆起して海のかたちが変わりました。もしも珠洲の原発計画を止めることができず、その場所に原発が建てられ稼働中だったなら……。その高屋地区は、今回の地震で周りの道路が土砂崩れですべて通れなくなり、水も電気もなければネットも電話も通じず、集落ごと一時孤立状態、誰もそこに近づくことすらできない日々が続きました。

珠洲原発反対運動の中心で、長いあいだ仲間たちの精神的な支えでいらした高屋の円竜寺ご住職、塚本真如さんは、地震後、一時孤立した集落の中のお一人でした。もし高屋に原発が建てられていたら、と新聞取材で聞かれた塚本さん、「もっと悲惨な状況になっていたやろうな、としか言いようがない。止めて本当によかった」と答えておられます。

珠洲での反対運動が激しかった1990年ごろ、私も何度か珠洲に行き、塚本さんのお寺に泊めていただいたことがあります。そうして知り合った珠洲の人たちに会いたくて、わが家の夏のキャンプは決まって珠洲の海でした。浜にテントを張って、こちらから会いに行ったり、テントに会いに来てくれたり。珠洲は娘が幼かったころから、私たち一家の思い出のたからばこのような場所なのでした。

地震後、10日余りたってやっと塚本さんは集落

の人たちと一緒に加賀のホテルに二次避難することができたと友人が教えてくれました。ホテルの塚本さんにお電話した時、「ご無事で本当に良かった。でもお寺が壊れてしまったそうで……」という、「スウさん、そんなことはね、な—んでもないことだよ」。そのおっしゃり方が前とまったくかわらない穏やかさで。あらためて塚本さんというお坊さまの大きさ、深さにが—んと圧倒されて、私は胸がつまって何も言えなくなりました。

「報道特集」特任キャスターの金平茂紀さんが、ホテルで避難中の塚本さん取材した時のことを、こんなふうにお話してくれました。お坊さんの立場でよく原発に反対することができましたね、と尋ねると、塚本さんはこう言われたそうです。「親父から二つのことを教わった。強いものと弱いものがいたら坊主は弱い方につくものだ。むずかしいこととやさしいことがあったら坊主はむずかしい方につくものだ、と」円竜寺20代目ご住職の塚本さん、泣きながらそうおっしゃっていた、と。

珠洲の原発計画を白紙撤回させた市民のねばりづよい反対運動、それがどれほど意味のある大切な闘いだったか、私たちの命と暮らしをいま救ってくれているか、わかるのはこうしてずっと後になってからのことなのです。だからこそ、珠洲に原発が建たないでよかった、志賀原発が止まってよかった、と過去形にして済ませちゃいけないことだと思う。地震がこの先、どこでまたいつ起きるか誰にもわかりません。想定内とか想定外とかいう言葉がどれほどむなしいか、この国のどこにも原発の適地などないと私は思うのです。

半島に原発を建てるということ

1月下旬、それまで通行止めだった能登へのメインルート、のと里山海道が七尾まで通れるようになり、七尾市郊外に住む志田ヒロさんを訪ねました。途中の道路はつぎはぎだらけ。陥没や隆起、地割れなど、どれだけぼこぼこずたずたの道路だったか、応急処置された色の違いでよくわかります。下道にでると路肩まではまだ復旧の手がまわらず、割れた

コンクリートが段差のある道でそのまま積み上がっているところもあちこち。ブルーシートで覆われた屋根の多さが目立ちます。

ヒロさんとの出逢いは30数年前の志賀原発反対運動。団結小屋と呼ばれる原発近くの小屋の壁にそれはすてきな絵が貼られていました。なんて絵の上手な能登のお母さんだろうとずっと思っていたら、後に、実は友禅作家さんだったと知ったのです。

ヒロさんに再会できたたん、うれしさ爆発してぎゅうっとハグ。生きててくれてありがとう！ 心からそう思った瞬間です。元旦の地震でヒロさんの家は大揺れして、家具など倒れてこわれたものもあったそうだけど、おうちそのものは無事でした。電気は通っていたので、その夜は同じ敷地内に住む娘さん一家と犬たちと、みなで母屋のこたつに集まって余震の続く中、眠れぬ一夜をすごしたとのこと。

志賀原発差し止め訴訟の原告の一人でもあるヒロさんの家から、原発までは約10キロ。3.11以後、志賀原発は止まったままとはいえ、元旦の大揺れと度重なる大きな余震に、ヒロさん一家はどれほど怖い思いをしたことか。変圧器が壊れて大量の油が漏れだし、外部電源の一部が使えなくなり（それが長引けば使用済み核燃料を保管しているプールの水を冷却できなくなる恐れ）、放射線量を測るモニタリングポストも一部が作動していなかったことが後から発表されました。

志賀原発直下に活断層はないと北陸電力が主張して、原子力規制委員会もそれを了承したため、いよいよ再稼働に向けて進んでいたところに起きた今回の地震。もしこれが運転中の地震だったら——考えただけでぞっとします。実際には志賀原発から9キロ先の活断層が動いてずれていたそうです。

何より今回の地震で、原発事故を想定しての避難計画がまったく役に立たないことがはっきりしました。海の底がもりあがって陸になり、地形までもかわってしまった、何千年に一度と言われる今回の地震。道路はいたるところで寸断され、どこにも逃げられず、通信手段も断たれて数日間孤立していた人たちが輪島にも、珠洲にも、いたのです。

「屋内退避せよといわれても、家がもう家じゃ

なくなってるところがこんなにたくさんあるのにね」
「半島に原発を建てるという発想そのものが、そこで生きる人たちをはじめから見捨てているとしか思えないよ」とヒロさんと語りあいました。元旦に起きた能登の地震は、安全対策やら避難計画やらの見直し、なんてレベルの話ではなく、原発をここで動かしてはならない、という何よりの証明じゃないのだろうか、とも。

ヒロさんの家に行く前に、ほしいものは？と尋ねると、りんご、というのでりんごとみかん、それと肉じゃが、お豆の姉妹煮（その日その時、家にあるお豆をまぜこぜにして煮るのをこう呼んでます。この日は、黒豆と小豆とら豆とうずら豆。黒砂糖とほんのちょっとの醤油で味付けした、あまり甘くないおかず風の煮豆）、そして超ロング腹巻（正確には、胸腹腰すっぽり巻とよびたいくらい長い）を、ヒロさんの娘さんの分もふくめて数枚プレゼント。

実はこの腹巻き、私が娘から贈られてあったかさ実感ずみ。能登や七尾の方、電気がとまっていた避難所は寒いだろうな、寒い中での片付けもしんどいだろうな、ちょっとでも体をあたたくしてほしい、きっと体は心ともつながっているから。そう思って、紅茶つながりの人たちが私に寄せてくださったカンパの一部で多めに購入しておいたのです。



一本杉通り商店街

ヒロさんちの帰りに、七尾の市街地へも行ってみました。テレビで何度も目にした和倉温泉の有名なホテルも壁がくずれたり、建物ごと傾いたりしてい

る。それからおそろおそろ一本杉商店街へも。

ここはかつて商店街のおかみさんと一緒にしていた勉強会のために、はじめのころは2ヶ月に一度訪れていた、私にとっても馴染みの通りです。勉強会のはじまりは、以前から紅茶の時間にきていた鳥居さんが七尾に移って鳥居醤油店の若おかみとなり、近所で親しいろうそく屋のおかみさんと相談をして、長い一本杉通り商店街のおかみさん同士もっと知りあおう、というところからでした。

高澤ろうそく店の2階をいつも会場に、醤油屋さん、ろうそく屋さん、漆器陶器屋さん、昆布屋さん、仏壇屋さん、洋服屋さん、和菓子屋さんのおかみさんたちと、互いに知り合いながらコミュニケーションを学ぶ勉強会。1999年にはじまって2016年まで続いたその間に、商店街のそれぞれのお店をギャラリーとしての「花嫁のれん展」がはじまり、やがて北陸新幹線が開通すると能登までも行きやすくなり、一本杉通りは花嫁のれん商店街として、全国にも知られる観光名所になっていったのです。

この通りは特に古い建物が多く、それがまたこの通りの魅力でもあったのだけど、見知ったいくつものお店が無残に崩れています。その様子はテレビで何度も映されて知っていたけど、自分の目で見るのは全然違う。ああ、おかみさんたち、どんなきもちでいるだろう……。それを想像したら、胸がつぶれそうで、この日はただ通り過ぎることしかできなかった。覚悟して会いにいったのはそれから一週間後の2月初めでした。

おかみたちに会いに

地震からひと月余りたって、ようやく一本杉のおかみさんたちに会いに行った時、差し入れはここでも、超ロング腹巻と芋サラダと煮豆。いまだ水の出ない地域で普段のおかずが何より、とよろこんでくれた。連絡しないで突然行ったにもかかわらず奇跡的に、会いたかったおかみさんたちみなに会えて、顔見て、話せて、胸がいっぱい、涙が出ました。

お店がくずれた高澤ろうそくさん、鳥居醤油さん、それから漆陶舗あらきさん、いずれもお店の再建を

願ってクラウドファンディングの呼びかけをちょうど始めたところでした。

1月に行った時、瓦礫だらけのお店の写真は、とてもじゃないけど撮ることができなかった。だけど、おかみさんたちに会えた後にもう一度高澤ろうそくさんのお店の前を通った時、瓦礫の中にゆきえさんが活けた一枝の紅梅を見つけました。その一枝にゆきえさんのきもちがぎゅっと詰まっている気がして、あ、この瞬間を残さなきゃ、と唯一撮らせてもらったお店の写真です。



2月11日、一本杉商店街に面した駐車場で一本杉復興マルシェが開かれました。開店少し前にはもう人でいっぱい、マスコミもいっぱい。高澤ろうそくさんは和ろうそくやお香を、あらきさんは塗のお箸やお椀や割れなかった陶器など、木下精肉店さんはソーセージを、南三陸からは七尾応援のかまぼこや鯖の味噌煮、鮭の焼いたのとか、たくさん。お寿司屋さんは開店早々売り切れ、和菓子屋さんもじき完売。無名塾の役者さんである若村麻由美さんが熊本のみかんを配ってる横で、私は2日前に長野の農園から届いたりんごを来場客さんに配りました。

お客さんとお店の人が顔合わせて、話して、互いに無事を確認しあっていました。お店の再建にはまだまだ時間がかかるけれど、お商売やさんはお店を開いてこそ、お客さんと会ってこそ。どんな形でもお店を開くことが大事だと、一本杉マルシェはこれからも定期的に開いていくそうです。

▼鳥居醤油店さんクラウドファンディング

(3月31日まで募集中)

<https://readyfor.jp/projects/toriisyouyuten>

▼漆陶舗あらきさんクラウドファンディング

(4月28日まで募集中)

<https://www.makuake.com/project/araki/>

まなみさんのアトリエつばさ

一本杉おかみさん勉強会仲間の一人、セレクトショップをご夫婦でひらいている道下まなみさん。みなし仮設住宅に引っ越した先が、私の家から車で3分という至近距離。さっそくおかずと長い腹巻を持って会いにいきました。

お店は地震の被害があったけれど、お店の隣にある子どもたちの絵画教室、アトリエつばさの建物はどこも壊れていなかったとのこと。こんな時こそアートのちからだ、とまなみさんは1月の早い内からアトリエを再開しました。子どもたちに、来る？ときいたら、わーいわーい、とよろこんでやってきたそうです。絵を描きながら、干支の龍のオブジェをつくりながら、子どもたちは互いに、地震の時のことやこわかったきもちを話していたといいます。それを聞いて、ああ、今この場所があることがなんて貴重かと感じました。「話す」は「放す」だから。これまでにないくらい怖い体験をした子どもたちに、そのことを話せる場所があって本当によかった。そして、そんなふういきもちを言葉にする機会を必要としているのは、きっと大人も同じなのだと思います。

まなみさんはアトリエつばさを、絵の教室としてだけでなく地域にひらかれたアトリエでありたい、と願ってはじめてたそうですが、今まさにそれが起きています。知りあいの美術教室の先生が、教室として使っていたところがこわれてしまったのでアトリエつばさを貸してほしいとか、金沢のがんサポートセンターの看護師さんが、能登に住むがん患者さんたちの語り合える場としてつばさを使わせて、といった依頼が次々まいこんでいるとのこと。

まなみさんはその後、2月半ばにお店を再開。き



れいな春いろの服を色とりどりならべて、お店に立っています。

発信すること つなぐこと

地震が起きて以来、私が改めて強く感じているのは、発信そのものが、誰かの力や助けになるということ。菜の花さんが地震から13日目にはじめて自分から発信したFBを読んだ時、本当にうれしかったし、安心しました。

私のところにも、「FBですぐ発信してくれて本当にありがとう！」と多くの人から連絡が来ました。元旦の夕方、家に戻るなり、「私たち夫婦は無事」と発信しましたが、それは、私たちは大丈夫だからね、心配しないでね、と友人たちにいち早く知らせたかったから。それが多くの人に受けとられ、受け止められ、それをまた周りに知らせてくれる人たちがたくさんいたようです。

ネットをしない人が心配でたまらず、若い人に頼んで私のFBやブログを探し、それを読んで安心したからすぐには電話をしないでおう、と電話する時期を待ってくれた人たちが何人もいたこと、後で知りました。また、共通の友人の安否を、直接は怖くて聞けないので、と私に尋ねてくる人たちも多かったです。

私自身、能登の友人たちのFBをチェックしては、「無事です」の一言にずいぶん救われていたのです。投稿のない人は、今はまだ通信できない状況かも、発信するだけの余裕がないのかも、と思って静かに待ち、そしてこれは大事そう、と思った友人の発信

や情報はできるかぎりシェアしました。

FBを見ると、すばらしい、めざましいボランティア活動をしている人たちがいっぱいいます。1月中はそれを見て焦ったり、無力感に凹んだりしていました。でも頭をいったん冷やして自分の年齢や体力を考えたら、奥能登まで出かけて行って目一杯うごきまわる、みたいなdoは自分の身の丈じゃないとだんだん見えてきました。私のできることはたぶん、発信すること、つなぐことだ。

震災以降、本当にたくさんの方からご心配いただいて、お気持ちカンパも品物も私宛にいっぱい送っていただいています。また、能登にカンパしたいけどどこに送ったらいいでしょう、のお尋ねも実にたくさん。そのつど、私の知っている人や活動の中身をお知らせして、その人その人のきもちにあったところにつないでいます。

のっぽくん&アル

カンパ先としてつないだうちの 하나가、古くからの親しい友人、小浦むつみさんご夫婦が経営する自然食品店ののっぽくん&フェアトレードショップ・アルです。<https://noppokun.co.jp>

金沢の隣町にあり、常日頃から生産者さんともお客さんともつながって持続可能な社会づくりを実践している、私にとっても大切なお店。のっぽくんの食品棚にはパレスチナ産のオリーブオイルが並び、アルさんのフリースペースは、フェアトレードについて学ぶ会、憲法講演会、ドキュメンタリー上映会、時にはピースウォーク金沢実行委員会の会場になったりもしている、市民に開かれた空間です。

アルのむつみさんは震災翌日、もう動きだしていました。自ら車を運転して、ずたずたに寸断されて段差だらけの道路をいったいどのようにぐりぬけて七尾までいったのか、集落の人たちが身を寄せる小さな避難所に支援物資を届けにいったのです。そこまで行けるとわかったから、と翌3日は家族で、より大きな車に荷物を積み込んでさらに遠くの避難所まで。行くたびにその様子をSNSで伝え、その上、「お気持ちカンパお預かりします」とも発信してく

れたので、県内外の紅茶仲間からわが家に届くカンパをそのつど手渡しに行くことができました。

悲惨を目の当たりにして自分に何ができるかうろしている時、託せる所があるってありがたい。全国からののっぽくんに送られてくる大量のカンパ野菜、たとえばキャベツ100玉、大根50本、白菜130玉、それを洗ってカットして「何人分」と分けて袋に入れて真空パック詰めする係、またある時は、数100人分の炊き出しの下ごしらえをする係、というふうにLINEで募集のお知らせをしてくれる。あ、それならできる、その日なら手伝える、とこまごま自分にできることがあるのも私には本当にありがたいことです。

能登震災支援プロジェクトSUNくる

田谷船長、と呼んでいる田谷武博さんは、能登での福島キッズ保養プロジェクトを長年になってきた能登の漁師さんです。今回の地震で田谷船長は自らも被災、船を出せなくなったにもかかわらず、すぐさま動きました。必要な支援物資を書き出してFBで募集します。そのリストも実に具体的。水の出ない避難所で紙コップは使い捨てだから小さいサイズを、スチロール碗もお年寄りが多くて容量が大きいと飲みきれないから直径13~15センチのものを、というふうに。

田谷船長は、2月にあらたに「能登震災支援プロジェクトSUNくる」を立ち上げました。

奥能登では宅急便が一部再開したものの、田谷船長の活動している地域ではまだ受け取ることが難しいので（2月末現在）、物資は金沢のライブ喫茶、メロメロポッチにいったん集めて、そこから船長の仲間が取りにくる、または金沢の仲間が届ける、という独自の流通システム。時には、のっぽくん&アルに集まったカンパで購入した物資がどーんとメロメロポッチに届けられ、それが田谷船長のもとに運ばれていくことも。

メロメロポッチの店主さんは金沢市議で、ピースウォーク金沢実行委員会のメンバー。3.11後に仲間たちと「志援隊」というチームを組み、何度も東北

に行っている人でもあります。田谷船長がリストにあげたこまごましたものを業務スーパーで買い出してメロメロポッチに届けに行った日も、店内には、お米やら野菜やら缶詰やら衣類やらの支援物資、それに企業からとどいたダンボールベッドなどなどが、山と積まれていました。

行政がしてくれるのを待っていては間に合わない、公の支援の行き届かないところを見つけ出しては精力的に活動している田谷船長のことも、できる限り応援したいと思い、カンパ先を探している方へつないでいます。

能登への想い曼荼羅

去年11月、愛知県から日帰り弾丸ツアーで紅茶を訪ねてくれた人たちがいます。それぞれに、能登を応援したいけどどこに届けたらいいと思う？と訊いてくれたので、のっぽくん&アルさんのこと、田谷船長のこと、名古屋工業大学の北川啓介先生のこと（ダンボールハウスや保温性のあるインスタントハウスを開発し、被災地に建てていらっしゃる先生、好評で要望が多すぎて研究室が資金不足に）などお伝えしたら、3人がそれぞれ、この3つの違うところにカンパを送ってくれました。

一人は2月はじめ、知り合いのお寺でひらいた能登チャリティバザーの売り上げをのっぽくんに、別の一人はインスタントハウスの北川研究室に、そしてもう一人は主催したコンサートの会場においた募金箱カンパを田谷船長のプロジェクトに、というふうに。能登へのきもちを、やっぱり顔の見えるところや活動のわかるところにできたら送りたいものだと思うのです。そのきもちをつなぐことができて私もとてもうれしかった。

直近では、東京の紅茶つながりの人から、湯たんぽを50個購入したけどどこに届けたらいいだろう、のお問い合わせ。なのちゃんに訊いたら10個ほどの希望、田谷船長に訊くと、避難所やこの地域の人に聞き取りしてから知らせます、とのこと。こうしておそらく3月中には50の湯たんぽが一つ一つ誰かのもとへと渡るでしょう。なのちゃんそこへは私たち夫婦が珠洲に行く時に、船長のところへは物資

中継地の金沢のメロメロポッチに届けにいきます。

私個人のもとに届く品物やカンパは紅茶つながりの人たちから、その外側では、ピースウォークつながり、原発つながり、能登保養プロジェクトつながり、子ども食堂つながりetc.と、さまざまな人のネットワークが、絡まりあい、連絡しあい、助けあって動いている。その図を頭に思い浮かべると、能登を想って行動するたくさんの人たちが描く、現在進行形の能登曼荼羅のようです。

*ここに登場した方へカンパをしたいと思われたら私のところまでご連絡ください。振込口座などおしらせできます。

北川先生の活動へのカンパはこちらから

令和6年能登半島地震被災地への簡易住宅設置支援
一口：1,000円～

<https://www.nitech.ac.jp/.../support-instant-products...>

あらたな日常をつくる

2月に入って、坂本なのちゃんが「次に考えているのは、民間による家屋解体用の重機の購入です」とあらたにFBで発信しました。倒壊しているお家から、位牌だけ、通帳だけ、など、それぞれの大事なものを家主さんに聞きながら取り出していく。大きな業者の一括解体が始まる前にやりたい、と自分でローンを組んで重機を買おうとしている友人がいることを知り、それにかかる費用300万円あまりの寄付を募集します、とFBで呼びかけたのです。なんてすごいこと考えるんだ！と最初は驚いたけれど、いわれてみれば確かにそれはその地で今、ものすごく必要な、求められているものにちがいません。

「さか本に集まったご寄付は、その友人や、もっと困っている人やことのために使おうと思っています。刻々と変化していく状況によって、多少予定が変わるかもしれません。

ご寄付いただいても領収書は出せません。細かい会計報告もできないかもしれません。

それでもいいよ、と思ってくださる方、ご寄付い

ただけますと、とても助かります。

どうぞ宜しくお願い申し上げます。湯宿さか本坂本菜の花」

このように直接的でまっすぐなお願い。なんとすがすがしくてきもちがいい。目に見える、お金の活きる使いみち。なのちゃんの呼びかけを私も早速FBでシェア。ほんの数日で重機を買えるお金が集まったそうで、その呼びかけはすでにもう終了しています。

さか本は今、大勢の人のいる避難所には行きにくい地元の方や、ボランティアにはいる人たちをお宿でうけいれています。五右衛門風呂のことや重機購入のアイディアを提案したのは、30年前の珠洲原発の計画に反対していた、私も知っている人でした。その彼はバイクで走り回って地元の声を聞き取り、さか本の新ちゃん、なのちゃん、さか本に集まってくる実戦力のあるボランティアさんたちとともに珠洲の未来を話しあっているようです。ああ、ここにも、珠洲曼荼羅を描く人たちがいっぱいいる……。

なのちゃんは「もとの姿に戻るだけが復興じゃない。大災害を体験したからこそ、持続可能な地域のありかたや能登らしさを考えていきたい」と新聞の取材にこたえています。

もとの姿に戻るだけが復興じゃない、と言い切った強さにハッとすると同時に、クッキングハウスの松浦幸子さんから教わった回復とリカバリー、という二つの言葉の違いを思い出しました。回復は元の場所に戻ることを意味するけど、リカバリーは、今の状況を認めたうえで、以前とはまた別の方向へさらに生き活きと進んでいくこと、そのプロセスそのものがリカバリーなんですよ、といってもらったことと、なのちゃんのイメージする能登の復興が重なる気がしたのです。

その意味でも、ちいさな重機が必要です、と発信したことはなんとも象徴的。大型ブルドーザーでそこにある崩れた家も瓦も暮らしの道具も一挙にとりのぞき、土を一律に平らにならししていく、のとはちがうやり方。海がみえなくなるほど高い、コンクリ

ートで固めた防波堤をつくる、というのではない考え方。今回の地震で、行政のつめたさをいやというほど体験してる人たちだからこそ、行政頼みでは実現できない、一人ひとりの素朴で率直な願いがかたちになるような復興ってなんだろう。どうやったら実現できるのだろう。いっぱい語りあって、知恵をだしあって図を描く。さか本に集まる人たちが今しようとしているのは、そういうことなんじゃないだろうか。

かつて、奥能登は過疎で何もなかったところといわれ、そこに原発の計画がもちこまれました。いや、何もなかったところか珠洲の海にはなんでもある、珠洲は本当はとても豊かなところだ、そう信じる人たちが、国策である原発計画に真っ向から反対したのです。東北大震災と福島原発事故の起きるずっと前の1970年台から21世紀に渡って、原発はいらないと意思表示し続けた人たちの底力、屈しない反骨の精神が、今も生きていて感じました。お坊さまの塚本さんも、なのちゃんのお父さんも、バイクで走りまわって地元の声を聴く当時の反原発の同志の中にも。その語り合いの輪に、なのちゃんや珠洲を大好きな若い人たちも加わっている、加わっていくのだろう、と思う時、珠洲曼荼羅はさらに彩り豊かです。

例年、雪の多い1月2月、湯宿さか本はお休み。今年はそれを3月まで伸ばすそうです。電話した時、「だからまた遊びにきてください！」となのちゃんの声はとても元気でした。手伝いにきて、ではなく、遊びにきて、ととっさに言える珠洲の湯宿の若いおかみさんは、震災を経て、多くの人たちとともにあらたな日常を創り出し、その目は珠洲のずっと未来を見えています。

ないことにしない

震災ハイ、という言葉があるそうです。3.11を体験した栃木の友人から聞いた言葉。自分たちも被災して大変な時、ご近所はもっと大変だから助けなくちゃ、と自分のことをさておき、がんばってがんばってすごい力を発揮しちゃったらしいのだけど、3

ヶ月くらいしたら一気にハイから急降下してうつぽくなってしまったそうです。「だからスウさん、無理しないでね、自分がハイになってることもその時は気づいてなかったから」と。

そういえば、と、志田ヒロさんを訪ねた時のことを思い出します。七尾の旧市街はこの時はまだ断水中でしたが、ヒロさんの住む地域ではほんの3、4日前から水が出るようになり、当初の不便な生活からは解放されていました。それまで、洗濯の水は近くの川から、飲み水は少し遠くの湧き水まで汲みにいったヒロさんの夫さん、水が出るようになったら、急に腰の痛みを感じだした、と。何も考えるまなく無我夢中で震災に続く日々を過ごしていたときは、痛みすらキャッチできなかったんでしょうね。体だけじゃなく、きっと心も同じだと思います。疲れたり傷ついていたりしていても、なかなかそこに気づけないのではないかと。

一本杉のまなみさんが「被災地の被災者になって感じたこと」を、FBにこんなふうに綴っていました。

「少しでも人の役に立ちたいとか、微力でも自分にできることを何かしたいとか、いろいろ思うけどやっぱり自分自身が元気でなければそれはできないということです。

まずは自分を大切に。自分を優先することに罪悪感など持たなくていいと思います。

ある方が『やっと断水解除されお水が出てすごく嬉しいはずなのに、まだお水が出ない暮らしをしている人のことを思うと申し訳なくて心が痛む』とおっしゃった。でも、そんな事を思わなくてもいいと思います。まずは自分から、そして身近な家族から1日も早く元気になって。元気になってから周りの困っている人を助けてあげれば良いのだと思います」

うなずきながら、まなみさんの発信を読みました。私自身、電気も水もガスもあってテレビも見られる自分の生活を、どこか申し訳なく思うきもちがあったから。自分の中にあるきもちを含めて、いろんな状況にあるそれぞれの人のきもちを想像しました。

震災の体験は、一人ひとり、ほんとに違う。同じ

地域でも被害の大きかったところ、見た目にはそれほどでもなかったところ（でも家の土台が傾いてしまっているおうちもある）、ほとんど被害のなかったところ。無意識のうちに比べて、自分よりもひどい状況の人に対してもうしわけないと思うきもちが湧いてしまうのかもしれません。

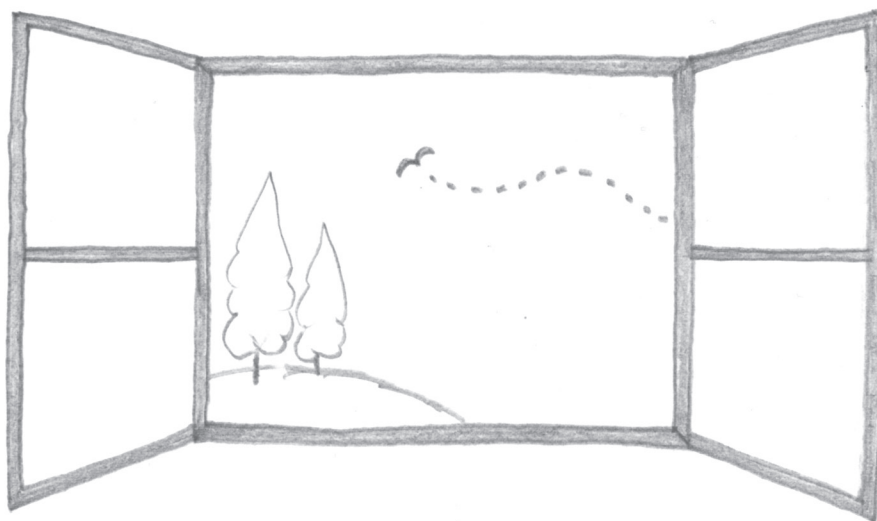
「うちなんかまだマシ、もっとひどい方がおられるから」という言葉を、私も本当によく耳にしました。そうやってご自身を奮い立たせているのかもしれませんが、ただ、本当はどの人ももう十分に傷ついていて、それを相対化することはできないのじゃないだろうか。本当は確かにあるきもちを、ないことにしてしまう。自分の悲しみや痛みを置いてけば

りにしてしまう。それはきっと苦しいことです。

私は、どうかどんな人もご自身のことを大切にいたわってほしい、と心から願っています。自分を大切にいたわるって、たとえば、悲しかったら泣く、悔しかったら怒る、つらかったらつらい、と言葉にするということ。

誰かが、あ、私には今そうすることが必要なんだ、と思うときがもしもやってきたら（それがいつかはわからないけど）。その人がそのきもちを言葉にできるように、ただそこにいられるように、私は紅茶を静かに開け続けていよう。私は私の速度を守りつつ、息を長くして能登とともにありたい、そういうbeでいたい。そんなふうに今、私は思っています。

2024/2/29



路上生活者の個人史

第10回

竹中尚文

宮城 伸一郎 氏(仮名)

1989年11月生

私は札幌で生まれました。現在34才です。家族構成は父母と弟の4人家族でした。家族といっても、私は生まれたときから障害がありましたので、幼児期は小児病棟で育ちました。幼児期、私の命が続くか判らない状態だったようです。私は生きながらえることができ、院内学級のある病棟で育ちました。そこはターミナルケアを受ける子どもたちが多くいる場所でした。私はそこを生きて出ることができて、家に戻りました。両親は次の子どもを望んで弟が生まれました。

家に戻ってから、「産むのじゃなかった」といわれ続けて暴言暴力を受け続けました。子どもとして最も

つらい言葉でした。子どもながらに居場所のなさを感じていました。家族とは両親と弟の3人で、私はその中には入れてもらえませんでした。中学に入る前には勉強がしたくて私立中学を望みましたが、かなえられる希望ではありませんでした。公立中学校にも満足に通わせてもらえませんでした。私は勉強がしたかったので何とか高校に入れてもらいましたが、高校卒業の資格が取れるということだけがセールスポイントで、内部暴力が日常的な高校でした。山間部の交通手段の全くない刑務所のような学校でした。高校卒業後はさらに勉強がしたくて、大学を受験して入学をしました。大学入学で関西に来ました。もちろん親からの援助はありませんから、大学の

学部と修士課程の6年間に奨学金を受けて、学部卒業して修士修了をしました。

経営学修士(MBA)を取得したのですが、学部を卒業したときも、修士を修了したときも、リーマン・ショックとかで就職状況は極めて悪いものでした。社会の不景気に加えて私は身体的ハンディもあるために高給といえるような所に就職できませんでした。もう勤続10年になりますが、昇給はありません。この中で奨学金の返済をしていかねばなりません。6年間に約2千万円の奨学金を受けていました。この10年で約1千万円を返済しました。1年に100万円ですから、毎月10万円近い返済になります。給料が手取り15万円程ですから3分の2を返済に充てるわけです。とっても住まいを借りて生活をするような経済

状態ではありません。会社には友人宅を住所として届けていますが、現実にはホームレス生活をしてきました。そんな中でビッグイシューの存在を知りました。ビッグイシューの方々の手助けで「特定疾患医療受給者証」や「障害者手帳」を申請することができました。このようなことは、私の親が一切してくれなかったもので、本当に助かりました。ビッグイシューの方に教えていただいて、シェルターの存在も知りまし、今のこの出会いをすることができました。

夢ですか？ 高校生に戻って、母親の作ってくれたお弁当を持って父親の通勤と同じ電車に乗って学校に通ってみたいです。帰り道に友達とハンバーガーを買って食べたいなと思います。

世の中で、しっかり仕事をしていればホームレスにはならないと思っている人がいます。しっかり勤務をして収入を得ているのに、奨学金の返済のためにホームレスになってしまった人の話です。私も大学院の時代に奨学金を受けました。修士・博士課程の5年間に奨学金を受けたので、その返済は苦しいものでした。しかし、宮城氏の場合は私の時代よりはるかに苦しいものです。じつにひどい世の中になったものだと感じました。私は宮城氏の親の世代です。一世代の間に、私たちはひどい世の中を作ってしまったものだと忸怩たる思いです。



男は 痛い



國友万裕

第50回

『Perfect Days』

1. 男性優位主義者と初期のフェミニストは似ている

前回の連載で、俺の女性への思いについて書いて、この連載を閉じたいと書いた。しかし、今、それを書くことに躊躇している。やはり、異性を批判するとなった時に、男は、女性よりもはるかに不利なのである。

このブログにも何回か書いたが、今や男性が大っぴらに女性差別的な発言をするのは絶対に許されない。女性の方は男を大っぴらに批判してもそのことで激しく糾弾されるということはないが、男の方は何気なく言ったことであっても、女性が差別だと感じれば、ポリコレ棒でガツンとひっぱたいてこられることは目に見えているのだ。

俺は、フェミニズムが悪いとは思っていない。しかし、自分の女性へのわだかまりを克服するのに、フェミニズムを選んだことは間違っていたのではないかと思うことがある。フェミニストたちの言っていることを聞いていると、ますます、わだかまりが増幅されていくのである。

誤解がないように言っておくが、ここで俺が言っているのは、「初期のフェミニスト」である。今のフェミニストはさすがに一方的に男を批判するようなことはしなくなっている。問題なのは 70 代くらいの高齢のフェミニストなのである。

批判されることは覚悟で、あえて初期のフェミニストに苦言をさすと、初期のフェミニストは男尊女卑の男に似ている。

俺が子供の頃は、クラス委員なんかでも、男が正で、女が副と決まっていた。当時は、男の方を上であることが男女の自然な摂理であると思われていた節があり、男性の先生だけではなく、女性の先生でもそういう価値観をもっていた。

俺の少年時代を思い出すと、女の先生に限って、「男のくせに」という言葉を口にしていたし、「女の子はお金持ちになりたいと思ったらお金持ちのお嫁さんになればいいけど、男の子は頑張らないと就職がない」「男の子は将来一家の大黒柱になら

なきゃいけないのよ」と言って、男子の方にプレッシャーをかけようとする女性は多かったのである。

フェミニストに言わせれば、それは彼女たちが男社会の価値観を内面化していて、それに毒されているからだということになるのだろう。しかし、俺はそれだけではないと思っていた。男がきちっと大黒柱の役目を果たして、女には苦勞させないという考えだったら、女は苦勞しないで生きていられる。女たちが苦勞しないために、男には苦勞に耐えろと言っているように聞こえていた。

確かに最近は結婚しても仕事はしたい、専業主婦ではいたくないという若い女性は増えている。しかし、その一方で、依然として、専業主婦になりたい、今は不景気だから共働させざるを得ないだろうけど、もし可能なのなら家にいたいと思っている女性も多いのである。

必ずしも全ての女性が仕事をしたいと思っているわけではないのに、フェミニストは「女はみんな男と同等に仕事をしたがっているんだ」という前提のもとに話をしている。また、男の主夫が少ないことはまったく問題にしようとしなない。

男だって、仕事が好きな男ばかりじゃない。昔は女は家庭か仕事かという二者択一を迫られるから損だと言われていて、それは映画『愛と喝采の日々』(1977)でも描かれていた。しかし、あれはバブルが弾ける前で世の中の景気が良かった頃の話である。

今や不景気。むしろ、女性の場合だったら、仕事でもいいし、あわよくば、家庭に入ることもできるし、選択肢があるから女性の方が得だと俺は思うのである。

2. 男だって悪いけど、女だって・・・。

もちろん、男にも問題はあある。昔は女の方が男よりも上みたいなことを言われると、猛り狂う男も多かった。1970年代の終わり、山口百恵と三浦友和が結婚したが、二人の主演作は、百恵・友和

と言われて、百恵のほうがビリングが上だった。これに対して、『キネマ旬報』で、ある映画記者が、「結婚したら、友和・百恵とすべきだろう」と書いていて、俺は思わず笑ってしまったものだ。

あの頃はちょうどフェミニズムの時期で、「女が強くなった」と言われていた頃だったので、あの当時の男は、社会のパラダイムの大きな変化についていけなかったのだろう。女の方が男よりも上に来るなんて、男女の自然の摂理に反していると信じている、馬鹿な男は多かったのである。

アメリカ映画でも、『コンペティション』(1980)という映画があって、ピアノコンクールで、恋人同士で参加して、女性の方が勝ってしまうため、男の方が凹んでしまって、二人の関係に問題が起きるという話だった。

例をあげればキリはない。芸能人が離婚すると、「女性の方が収入が多かったから上手くいかなかったんだ」というのが、週刊誌やワイドショーのステレオタイプな切り取り方だった。そんな単純なものじゃないだろうに。

昔風の男尊女卑系の男は、「女に負けたくない」「男は女よりも上であるべきだ」という考え方が非常に強かったせいで、それに反論してこられるとムキになって反論する人が多かったのである。自分が育ててきた男のイメージを絶対に崩したくなかったのだろう。

俺はそういう男は馬鹿だと軽蔑していた、だから、フェミニズムに関心を持ったのだが、結局、フェミニスト系の女性もほとんど同じなのである。

これは前にも書いたかもしれないが、15年ほど前、ブログをやっていたときのことだ。俺のブログは、DV 加害者男性の脱暴力運動を指揮している男の人のつながりのブログだったので、読んでいる人は大抵はそこに出入りしている人やそこに関心のある人たちだった。

俺は女性に加害行為をした覚えはなく、むしろ女性から被害を受けた男なので、男性の被害を訴えていた。女性の方が得だということを書いていた。とりわけ、俺たちの学生の頃はバブルの頃だ

ったから、女性の方がいっぱい金を使っている、楽しく生きているというイメージだったのである。

そのことを書いたところ、俺のブログの読者だったある女性(おそらく俺より10歳くらい上だから、今は70くらいの女性)が、ムキになって反論してきた。

「バブル女なんて、あんなのはマスコミが作り出した幻想ですよ。私の周りなんてそんな女、一人もいないですもの」と逆鱗に触れたような言い方だった。

結局、彼女たちは被害者でいたいのである。女性は被害者だ、女性は無力だ、女性のほうが損だと言っておけば、責任は男に押し付けることができる。男を傷つけるようなことをしても、それは男のせいだと言い訳ができる。「女は悪くない理論」である。

被害者でいたいと思っている彼女たちは、女よりも上でいたいと思っている男たちと何も変わっていない。

女にトラウマを負わされた男だっているのにそれを認めない女たちと、男よりも優秀で仕事のできる女はいるのにそれを認めない男たち。結局、お互いを鏡に映し出しているような姿なのだ。どっちもどっちなのである。

初期のフェミニストの問題点は、被害者の権力を男に渡そうとしないところである。それだったら、社会権力・政治権力を男が女に渡さなくても文句は言えないだろう。お互いに権威主義で自己中心的で、異性のトラウマに思いを巡らしていないのだから。

幸い、時代の流れは変わり、フェミニズムも変わった。最近の学生のレポートを読んでも、今となっては女性の方が男性よりも差別されていると思っている学生はほとんどいない。ジェンダーは男女両方の問題であるという認識が強くなってきて、女性だけが問題を抱えているわけではないというのは共通認識になってきている。

結局、俺が古いのかもしれない。考えてみればもうこの原稿が出る頃には俺は60歳。歳をとると

加速度的に時間が過ぎていく。ジェンダーの運動に関わっていた頃が、昨日のここのようなので、あの当時のわだかまりを今でも俺は引きずっているが、今となっては、そういう被害者意識の強い女性はごくマイノリティー。フェミニスト系であっても今の若いフェミニストはさすがに一方的に男が加害者みたいな発言はしなくなってきている。

とはいうものの、若いフェミニストでも、まだ一部そういう女性は存在しているのだ。

例を挙げればキリはないのだが、FBなどSNS上であってもそのことで気分の悪い思いをしたことがあった。前に、ツイッターでエゴサーチをしていたら、俺の書いた本(『マッチョになりたい!』?)について、とんでもない思い違いのコメントを書いていた女性がいた。おそらく、彼女はまだ20代くらいの若いフェミニストなのだが、おそらく学術的なものを読んだ経験がほとんどないのだと思う。

具体的には、彼女は、「國友万裕はフェミニストに親を殺された経験でもあるのか」と書いていたのである。つまり、フェミニストに恨みを持っている。しかし、俺はあの本で、女性を蔑視したようなことは一言も書いていないし、フェミニズムを否定するようなことも書いていない。その証拠に、あの本は、肉食系のフェミニストとして知られている北原みのりさんだって、ほめてくれたのである。ところが、まだ若い彼女には本を読む読解力やジェンダーの勉強の経験がないから、そう受け取ってしまうのである。

ああいう系統の女性は、男がジェンダーについて論じようとする、何もかも男尊女卑的な先入観で見えてしまう。そういう女性はいるのである。彼女だけではないのだ。かなりフェミニズムを勉強しているインテリ女性でもとんでもない解釈をしてしまう人は、たくさんいて、やはり、まだまだ男性問題は認知されていないという思いを新たにするのだった。

3. ジェンダーの覇権は女性が握る。

2年前だったと思う。『パワー・オブ・ザ・ドッグ』という映画が話題になり、監督のジェーン・キャンプオンが女性としては3人目のアカデミー賞監督賞を獲得した。あの時、アカデミー賞の前哨戦となる何かの賞の授賞式での彼女のスピーチが問題になったことを記憶している。

確かあの時、彼女は授賞式の壇上で、実在の女性テニスプレイヤーを描いた映画『ドリームプラン』のモデルとなった姉妹たちに向かって、『あなたたちは女と戦ってきたんでしょ。だけど、私はここまで来るのには男と戦わなきゃいけなかったのよ』と発言したのだ。

彼女からしてみれば、会場を盛り上げるためのジョークのつもりだったのだろうが、これはテニスプレイヤーの女性に対して失礼だと批判を浴びたものだ。

往々にして、男の世界をのし上がってきた女性はこういう発言をしたがる。確か俺の記憶では小池さんもかつて同じようなことをおっしゃっていた。「女がここまで来るのには、男の何倍も頑張らなきゃいけないんだ」と。

政治や映画の世界はまだまだ男が牛耳っている世界だから、彼女たちがこういう発言をしたがる気持ちはわかる。

だけど、俺は男だてらにジェンダーの世界を生きてきた。そうすると、逆のことが起きるのである。

ジェンダーの世界は、まだまだ女性がトップにいます世界なので、男性ジェンダーや男性の研究者に対する認知度は浅い。だから、こういう問題となるとフェミニストたちが上から目線になる。ジェンダーは女のほうがわかっている、男にはわからないと思っているフェミニストは依然として多いのである。

しかし、これは間違いなのである。

30数年前、俺がこういう問題について勉強したんだと指導教授に持ちかけた時だ。あの頃、アメリカではすでに男性のジェンダーの問題も徐々

に取り上げられ始めていて、そういう本の翻訳が徐々に出始めていた。ハーブ・ゴールドバーグの『男が崩壊する』やロバート・ブライの『アイアンジョンの魂』などがそうである。

その時、指導教授（アメリカ文学の大御所）からは言われたものだ。

「こういう問題についてやっていこうと思うのなら、もっとフェミニズムの本をたくさん読みなさい。フェミニズムをきちっと勉強した上で、男性ジェンダーのことも訴えなくては、フェミニストから袋叩きにされる」と。

そう言われて、俺はその後30代の頃、必死になってフェミニズムを勉強し、一時期は女性センターの図書館に置かれている本を全部読むんだという気持ちで、片っ端から読み漁った。

俺だけじゃない。中村正さんだって、伊藤公雄さんだって、男性でジェンダーを勉強している男性は、フェミニズムをくまなく勉強している。そうしなければ、フェミニストから批判されるからである。

一方で、初期のフェミニストたちが、そこまで男性ジェンダーを勉強しているだろうか。

明らかに彼女たちの方が勉強不足なのに、男であるが故に差別される、とりあってももらえない、偉そうなことを言われるという歯痒さを俺はいやと言うほど味わったのだ。

やはり、自分のジェンダーへの囚われを治療するのにフェミニストに頼ったことが間違いだった。

俺は子供の頃から男はバカだと思っていた。女に踊らされていると思っていた。しかし、結局、男尊女卑的な信念で生きている、女は下位と思っ

て生きている男の方が女性と付き合いやすいのである。男尊女卑的な男性だったら、「所詮、女は男よりも劣った存在なんだ。だから、大の男が女に真剣にとりあうのはみっともないんだ」という古いジェンダー観で生きている。だから、女性から嫌なことをされても、男だから理不尽なことを要求されても、「俺は男なんだ」と自分を奮い立たせて、女性と付き合うことができるだろう。そうし

なかったら、男なんてやっていかれない。

だけど、人生の早い時期に、ジェンダーに囚われてしまった俺は、すべて「男女平等」という物差しで女性を見てしまうため、女性と付き合うことができないのである。

男は理不尽なことだらけなのである。女性だって理不尽なことは多いだろうけど、女性の場合は少なくとも文句は言える。一方で、男はまだ文句すら言えないという状況なのだ。

4. こころない悪口は禁止すべき！

俺は母に一つだけ怒っていることがある。

母は家族のために自分を犠牲にしてきたような人だ。60 過ぎてから自分の人生が開けて、仕事でも成功したものの、それまでは人の何十倍も苦勞した人だった。

俺は大学に入った後、アメリカの大学に行きたいと思っていた。俺は立命館に合格したが、立命館という大学のことを何も知らなかった。高野悦子さんの『二十歳の原点』は読んだことがあったが、学生運動世代ではないので、シュプレヒコールやらなんやら言われても、俺にはピンと来なかったのである。

俺は高校にも行かなかったのだから、人より遅れるのは仕方がない。もうしばらく浪人して、自分の気に入ったところに入ろうかという気持ちもあった。しかし、母は、もう 1 年浪人するよりも、アメリカに行くことを考えた方がいいからと言ってくれていた。ところが、いったん大学に入学して、その話を具体化しようとする、母は、「アメリカに留学させるような、お金はない、休み中にちょっと旅行に行くぐらいにしとかなないと」と言い始めたのである。

母は、先のことをあまり考えず、その場しのぎで生きてきた人だ。母は、大学に行った後のことは、そこまで考えていなかったらしいのだ。大学に入れば、適当にどうにかなるだろうと思っていらした。

母は、人の 10 倍くらい苦勞は多く、人一倍人の面倒を見てきた人で、俺は母がいなかったらここまで生きて来れなかった。だから母には感謝しているけれど、このその場しのぎの嘘だけは許せなかった。

俺は大学に入った後、アメリカ留学準備を始めようと思っていたのに、まったくその目標がなくなったのである。英文科を選んだのも、アメリカに行きたいという思いがあったからだ。そうでなかったら、英文科なんて選んでいない。

日本の社会で、大学と言ったら一つの身分制である。卒業大学はずっと一生ついて回る。例えば、家柄のいい金持ちの子であれ、貧乏な下層の家庭の出であれ、同じ大学を出れば、同じ階層とみなされるのが日本の社会である。

とりわけ、俺たちの頃はその傾向が強かった。

しかし、これは立命館の卒業の人の多い、対人援助学会のマガジンで言うのは本当に憚られるだが、俺は、今の立命館だったら好きになれていたかもしれないが、あの当時の立命館とはどうしても合わなかったのである。それは入る前から歴然としていた。大学のパンフレットを開けただけで、この大学とは俺は合わないという予感があったのだ。しかし、どっちみちアメリカに行くのだから俺は自分に言い聞かせ、立命館に入ったのだった。

しかし、やはり予感は当たった。

当時の立命館は、「貧乏・学生運動・汚い」というイメージであり、俺は元祖ワンルームマンションのお坊ちゃん、学生運動なんかは全然わからない。俺自身はイケメンではないが、だからこそ綺麗なものに人一倍憧れる。そういう子だったのである。まったく、俺の理想とはかけ離れていた大学だったのだ。

しかも英文科。英文科だから女の子が多いことはある程度は覚悟していた。俺は女の子から、キモいと言われ続けてきたので、女の子が多いのは恐怖だった。しかし、アメリカに行くためにあえて英文科を選んだのに……。あの頃の立命館は

英文科は2クラスで、俺の入ったA組はなんと8割くらいを女性が占めていた。B組だったら半々だったのに。なんという不運。

さらに、あの当時の立命館はクラス単位の授業が多いことが売り物になっていて、そのためクラスの仲間のつながりは他の大学よりも強いと言われていた。そのため、クラスに友達が多い人には楽しい大学なのだろうが、俺は引きこもりだったため、クラスに溶け込むことはできず、また例によって「ぼっち君」であることで白眼視される日々が始まったのである。

「なぜ、よりによってこの大学を」。まさに神様のイタズラとしか思えなかった。俺はどっちみち下宿するわけだから、東京の大学でも名古屋の大学でも構わなかったのだ。他にもたくさん選択肢はあったのに、なぜ、寄りによって・・・。

だけど、俺はあの頃前向きだった。女の子が多くて、こっちが彼女たちに偏見をもたずに接していれば、どうにか道は開けると思っていた。女性に対する偏見を治すためのチャンスだと前向きに捉えようとした。

あの頃の俺はできる限りポジティブに物事を捉えようと考えていたのである。しかし、現実はあるが甘くはなかったのだ。それまで不登校で、高校も行かなかった俺が、大学に入ったからと言ってすぐに溶け込めるわけではない。女の子と付き合えるわけがない。俺は自尊感情が最低ラインまで落ちていたのである。

俺は今でも女性が怖い。

今でも時々、心無い女の先生から「あの人、気持ち悪いわ」と陰口を言われているという話を聞く。そのことを他の女性に話したら、「女が気持ち悪いなんて言うのは、大して深い意味もなく言っているんですよ。気にしなきゃいいのよ」とのことである。しかし、それを言うんだったら、男だって大して深い意味もなく女にセクハラしているんだよ。女性に「キモい」なんて言われると、大抵の男は傷つくのである。だから、やめてもらわなくては！

女性の悪口はマスターベーションだと言われる。女性は、人の悪口を言うことで、自分のフラストレーションを発散しているのだ。しかし、マスターベーションは大っぴらにすることではないはずだ。

男が自分の部屋でAVを見ながら、マスターベーションをするのは許されても、女性のいる前でマスターベーションをしたら、公序良俗に反するとフェミニストは怒るはず。そうであるのならば、女も人の悪口はおおっぴらには言わないという女性になってもらわなくては！これまでずっと女性の悪口のターゲットになってきた俺は、女性だから安易に他人の悪口を言っても許されるという考えは断固として許せないのである。

幸い、最近になって、室井佑月さんの「キモい」という言葉への批判が話題になって、少しはこの問題に陽が当たったかもしれない。しかし、室井さんは女性である。女性だからこそ、フェミニストを批判することが許される。男がフェミニストを批判するとなると激しい反発を喰らうだろう。

男性被害も、ジャニー喜多川さんの事件が明るみに出してから大きく日の目を見た。とは言っても、ジャニーさんは男性である。性の加害者は男性とは限らない。女性が加害者になるケースだってあるし、現に俺はそのトラウマに今も苦しんでいる。しかし、女性が加害者で男性が被害者などという話をメディアがとりあげるだろうか。

5. メンズリブからクリスチャンへ

30代になって、メンズリブ運動に加わったのも、これもどこか間違っていた。メンズリブに加わったことで、勉強にはなったし、さまざまないい出会いもあった。しかし、結局、俺の傷つき体験を理解してくれる人たちではなかったのだ。

いや、中村正さんは、ぼんやりと理解してはくれているのかもしれないが、正さんも含めて、メンズの男性たちは、決して女性に馬鹿にされるようなタイプではない、男として自信がないと言う

タイプでもない。奥さんもフェミニストという人が多いし、むしろフェミニストのアライである。

そのため、日本のメンズリブは、男の加害者性に注目してきている。俺なんかは被害にあった立場の男なのに、被害を否定されてしまう。あれでは共感できないのである。

俺がメンズリブと決裂したのは 36 歳の頃である。2 年間べったり頑張ったのに、いとも簡単に別れは訪れた。

その後は苦しい日々が続いた。仕事の方もうまく行かず、大学で教えるのは厳しくなる一方。転職しようにもうまく行かない。

俺は 30 代の終わりの頃、関西カウンセリングセンターに通っていた。そこで、ある男性の先生との出会いがあった。講義の一環としてカウンセリングを受けるのだが、俺はついた人がよかった。あれは、普通はまだカウンセリングの勉強をしている素人の人がカウンセラーなので、普通はプロのカウンセラーほど経験も実績もない。しかし、俺がたまたまつくことになった人は、当時 60 代の男性。かつてはエリートサラリーマンだったのがうつ病になり、それからカウンセリングの勉強を始めた人で、学者肌の人だった。

その先生に俺は自分の抱え込みを洗いざらい話した。

するとその先生は、「女同士集まって誰かの悪口を言ったり、ちくりちくり噂話をしたりという女性独特の部分に苦しまれたんですね」と言ってくれた。

この台詞は、まさに俺がメンズの人たちにずっと言って欲しかった台詞だった。この人が初めて俺の女性に対するわだかまりを受け止めてくれたのである。残念ながら、メンズリブの人たちは受け止めてくれなかったのである。日本の男性運動の人たちは、モテ男系だから、女に馬鹿にされたり、「キモい」と言われたりする男のトラウマがわからないのである。

このカウンセラーの人のおかげで、ある程度は溜まっていたトラウマが消化できた。あの人、今

はどうしているだろうか。いつか挨拶しに行かなくてはと思いつつ 20 年が過ぎた。あの当時 60 代だったから、もう亡くなっているかもしれない。しかし、感謝している気持ちはあの人の魂には伝わるだろう。

そして、40 代になり、仕事が増え、経済的に少し余裕が出てきた頃、今度はメンズリブ時代に知り合った男の人の団体に出入りし始めた。

一時期は、ここの人たちと埼玉のヌエックのワークショップについて行ったり、料理教室をしたりで、うまく行っていたようにも見えた。しかし、ここでも決裂が起きた。

ここも基本は男性の脱暴力支援である。従って、やってくる男の人はまったく俺のトラウマを理解できないような人ばかり。俺がうまく行くわけはなかったのだ。今思えば、俺は自分の居場所が欲しかったから、無理して合わせていたのだろう。

その後、俺は 47 歳の時に初めて単著を出した。これはそれなりに評価してもらえ、朝日新聞や京都新聞にも記事が出た。

その後、50 歳の時に、2 冊目の単著が出て、これは新書だから安いせいもあり、この本がきっかけで、週刊文春やサイゾーなど、有名雑誌に小さいながら記事が出たりもした。

その間、共著やテキストも出し、仕事も増え、40 代の終わりから 50 代にかけては、充実の 10 年間だった。

学生たちとの関係も良好で、慕ってくれる学生がどんと増えた。男の元教え子とは温泉やプールに行ったこともある。女子学生とは一緒に写真を撮って、Be Real に Up したりもしている。

その一方で、50 代の半ばになって、クリスチャンの先生と知り合いになり、その先生や学生たちとアメリカツアーにも行き、そして、去年の 12 月のクリスマスイブ。ついに洗礼を受けて、正式なクリスチャンとなった。

こうやって見てくると、俺の人生は、徐々に進化はしているのである。

これまでの連載でも書いてきた通り、俺の大人

になってからの人生は、仕事と家族を除けば、カウンセリングとマッサージ、水泳とボクシング、社会運動と宗教だったと思う。

この中で、もうカウンセリングはいらない。もうありとあらゆるカウンセラーについてきているので今更受けても得るものはない。社会運動ももう懲り懲りである。社会運動を否定するわけではなく、俺は元々社会運動は生理的に受け入れられないのだ。

水泳は、ボクシングを始めてからほとんど行っていないが、泳ぎは一旦覚えれば忘れることはないと言われる。またもっと歳をとって気が向けば始めればいいのかと思っている。マッサージは、お金のゆとりがある限りはこれからも続けていこう。

そして、宗教は、仏教を勉強したこともあるけれど、やはりアメリカが好きな俺にはキリスト教が一番いいのだ。幸い、教会で一緒に先生が、ピアノを安いお金で教えてくれることにもなった。ピアノは前から憧れていたもので、この点でもプラスだ。

これからは人生の終活。自分の合うものと合わないものはだいぶわかってきたので、気負わず、徐々に歳をとっていきたいと思うのである。

6. 『Perfect Days』(ヴィム・ヴェンダース監督・2023)

この映画、大感動だった。

前からご贔屓だった役所広司が一人暮らしのお金もない男を演じている。役の上では、もっと若い設定になっているのかもしれないが、役所広司は俺より7つ年上で、もう60代の後半である。

その彼が、細々と市井の片隅に生きる独身男を演じている。俺と重なり合うのだ。

主人公の過去については詳しく語られない。途中で、女の子が出てくるので、彼の娘なのかと一瞬思ったのだが、そうではなく、姪っ子だということがわかる。俺は結婚歴がないし、子供いないから、この部分でも共感できた。

映画は、その彼の何気ない日常生活を淡々と綴っていく。特別大きな事件が起きるわけではない。だけど、片隅に生きる彼の生活が愛おしく思えてくる。そんな映画なのである。

見ていて、見習わなくてはならないと思ったのは部屋が綺麗であるということ。畳2部屋の安アパートで暮らしている彼だが、部屋がゴミひとつないくらいに綺麗で、「清貧」という言葉を思い起こさせるのである。

こういう生き方だったら俺だってできる。

俺は子供の頃から男集団に外れた子だったため、将来に希望が持てなかった。世の中は男の社会だと初期のフェミニストは言うが、しかし、男の規範に外れた男はの中で女性以上に惨めな思いを味わわなくてはならなくなるのである。

これまで、結婚もせず、ほとんど女性と付き合わず、やっと50歳ぐらいになって、男の友達ができるようになって、仕事も非常勤で、常に劣等感を感じながら生きてきた俺に対して、「男の人は見えない権力を握っている」「結局は男で決めるのよ。女はいつだって蚊帳の外」なんて言われたんじゃないかチッとくる。

俺は生物学的には男だけど、権力なんて握ったことはないし、蚊帳の外に置かれてきた男なわけだから・・・男は一種類じゃないんだよ!!!

それを考えて！初期のフェミニスト。

役場の対人援助論

(4 7)

岡崎 正明

(広島市)

名前にまつわるエトセトラ

1 人にひとつ

家庭児童相談の仕事をしていると、おのずと人の「名前」というものにたくさん出くわすことになる。子どもはもとより、親、祖父母やきょうだい、学校や保育園などの関係者。正直名前を覚えるのがあまり得意ではない私は、苦勞することも多い。最近は特に、顔が出てきても名前が出てこない症状が目立ってきて、職場のベテランと一緒に「加齢あるある」をボヤいている。

ゴダイゴの名曲「ビューティフルネーム」の中で『名前 それは 燃える生命（いのち） ひとつの地球に 1 人ずつひとつ』と歌われているように、世界中のどんな所に住んでいようと、金持ちでも貧乏でも、健康でも病弱でも、名前だけはみんな 1 つ持っている。それは変わらない事実だろう。あの国の独裁者も、虐待で顔を腫らしたこの子も、炎上商法のユーチューバーも、野球界のスターも。みんな生まれてきたとき誰かに祝福され、願いを込めて名付けられた存在だ。様々な不条理や困難に置かれる子どもたちと関わっていると、その不変性や公平性は、私には救いのように思えることがある。

年齢や性別、流行り廃りに関わらず、どんな人の名前にも多かれ少なかれの由来や物語がある。それもまた、例外なく万国共通だと思う。どんなに高尚な意味があろうが、好きなアイドルからつけた軽いノリだろうが関係ない。そこには命名者の意図や想いが間違いなく存在している。

個人的にはどうやっても読めない、学校の先生泣かせの当て字や、明らかにアニメキャラの名前から付けたもの、おそらく親は車が好きなんだな～と感じる車名シリーズのきょうだいにも出くわし、「私ならしないな…」とは思ったりしたが、そんなことは余計なお世話である。価値観は人それぞれで、いろんな人がいるから、いろんな名前があっ

て面白いともいえる。

私自身「命名」とは、男親でもできる数少ない子どもの誕生に寄与する仕事と思い、アレコレ考えて結構な思い入れを込めたと記憶している。ただ最近は、あまり親が自分の思いを乗せすぎるのも、ありがた迷惑かもしれないな…と思ったり。まあ大事なのは、本人や家族がその名前を少なくとも呪わずに済み、できれば肯定的に受け止められれば、それで御の字ではないかと思う。

家族を理解するための面接の定番に「名付けのことを聴く」という手法がある。これは別にキラキラネームだからだとか、変わった名前だから親のセンスを知りたい…ということではない（もちろんそれもアセスメントの材料にはなるが）。対人援助の支援者がより興味を持つのは、名前そのもの以上に、その命名プロセスだ。

生まれた子どもの名前を、どのようにして決めたのか。誰が案を出し、誰と誰が相談し、最終的な決定を誰がどうしたのか。そこには家族の普段からの役割やパターン、力関係など、その家族の特徴がよく現れる。「支配的な父がトップダウンで決めた」「母が昔からあたためていた名前を付けた」「親族が画数にこだわった」など、家族の選択は様々だ。

ちなみに我が家の場合は私がいくつか候補を出し、妻の審査に通ったものを最終的に話し合って決めた。漢字の持つ意味を重視し、画数はいろんな流派で言うことが違うので、途中で考えるのをやめたのだった。

もちろんそのプロセスややり方に正解はなく、家族がそれでうまくいくのであればどんな形でも構わない。しかし問題を抱えている家族というのは、そのプロセスに「一般的」や「多数派」とかけ離れた「え？そんなやり方？」「それはあまり聞かないな」という部分があったりする。支援者側がそう感じる感覚は結構大切で、実はそのあたりに家族の歪みや無理が現れていたり、誰かにシワ寄せがいつている痕跡が見つかることがある。だから若い人たちには、「え？」と感じたら放置せず、できるだけその詳細や理由を突き止める努力をお勧めしている。

エピソード①

利幸と美奈は同居しているが入籍していない、30代後半のカップルだった。利幸は妻と随分前から別居し、ほとんど連絡もとっていなかったが、相手の反対もあって離婚が成立していなかった。美奈は利幸と婚姻することを強く望んでおり、何度も離婚を迫っていたが、利幸はその度に「もうすぐ妻と正式に話し合う」「来月には裁判所に手続きに行く」と言って、かれこれ2年以上が経っていた。美奈はもともと気分障害などで精神科通院していたが、利幸と交際が始まってからは、その関係性が病状に大きく影響し、利幸と喧嘩になるたびに症状が悪化していた。

そんな中美奈が妊娠。彼女は産むことを希望し、さらに強く利幸に離婚を迫ったが、利幸は相変わらず口約束はするものの、手続きは前に進まなかった。美奈は煮え切らない利幸に対し「出産までに入籍したい」「でなければ赤ちゃんは施設に預ける」「お腹の子と心中してやる」などと述べ、話し合いがこじれると暴力に発展したり、希死念慮が高まるなど、不安定な状況が続いた。美奈からは支援者に対して利幸への不満や、婚姻できないことへの不安が度々聞かれたが、お腹の子への心配や想いが語られることは少

なかった。支援者側は入籍問題については 2 人で冷静に話し合うことを促して距離を取り、病状や妊娠へのフォロー、出産後のサポートなどに関わる姿勢を維持した。

予定日より少し前に無事赤ちゃんは生まれた。年の瀬が迫る頃生まれたその女の子は「利結奈（りゆな）」と名付けられた。「『利』幸と美『奈』が結ばれる」との意味から名付けたのは、美奈の意向が強いようだった。結局 2 人の結婚は出産には間に合わなかったものの、妊娠中に利幸と妻との離婚裁判がようやく進展し、利結奈が 1 歳になる前に 2 人は入籍した。

しかしその後も美奈が利幸への不満や不安を訴えて病状が不安定になることは続いていた。利結奈の養育は、ヘルパーや保育園の利用で支援し、少しずつ美奈が子どもに向き合い、安定して関われる時間を増やしていった。

「親として子どもに向き合う」「親としての意識や気持ちを醸成する」などのいわゆる親の準備性というものは、誰もが均等に持ち合わせるものではない。中にはパートナーとの関係や、自らの課題という荒波にアップアップで、それどころではない人もいる。そんな現実を感じたケースだった。

エピソード②

高 3 の恵子が妊娠した。中絶できる時期を過ぎて妊娠が発覚。お腹の子の心当たりを父母から聞かれ、恵子は SNS で知り合った男性と 1 度だけ性交渉があったと語り、その後連絡はつかないとのことだった。「頼まれて断れなかった…」と語る恵子は、軽度の知的障害があった。元々生理不順で、性的な知識も希薄だったことが相談を遅らせてしまった。両親は恥を外に出したくないと、親戚にも学校にも秘密にしたいと述べ、家庭の事情を理由に恵子を退学させた。

恵子の両親は生まれてくる子の養育はできないと述べ、里子に出したい意向を示した。恵子は言葉少なく、両親に追随した。その後何度か話し合いの場を持ったが、恵子と両親の意向は変わらなかった。「戸籍にも載せたくないくらい」「もし施設に入ったとしても、面会はできない」などと両親は述べ、恵子もうなずいた。特別養子縁組前提での里親委託を検討することとなった。

しかし妊婦検診でお腹の子には肺に重大な疾患があることが判明。出産後すぐに難しい手術をしなければ命の危険があると病院側が説明すると、恵子の両親は疾患のために里親が見つからない事態になることを不安視し、「治療せずそっとしておけないのか」「手術に同意しなければどうなるのか」「絶対家には連れて帰れない」と述べ始めたため、支援者側はその対応に奔走することとなった。

恵子と両親に対し、法律などを根拠に、合理的に適切な治療をするべきことを繰り返して述べ、手術への同意と治療への協力を促した。最後まで渋りながらも、病院や児相の説得により恵子と両親は手術に同意。赤ちゃんは出生後すぐに数時間かかる大手術を乗り切り、なんとか NICU に入った。

数日後、恵子の父から連絡があった。出生手続きを済ませたとの報告だった。「みなさ

んが『法律ですから』と繰り返しいわれたので、法子にしました」と、まるで天気の話でもする調子でその命名理由を語った。

法子の病状はその後安定せず、一進一退が続いた。家族は病院から要請された面会や手続きには応じていたが、恵子は就職活動優先のため、対応はもっぱら父母だった。結局 1 歳になる前に、法子は施設にも里親宅にも行くことなく、病院で息を引き取った。

支援者は時に、抗えないものの前にその無力さを思い知ることがある。それは分かっているはずだが、かといって慣れるものでもないし、慣れてもいけないことだと思っている。法子に対する家族との温度差や違和感は最後まで続き、心の中の霧はいまだ晴れない。それでも私たちはその時できることを精一杯するしかない。そんな思いでいる。

名前をつけてやる

生きていれば誰しも、何かに名前をつける（命名、ネーミング）場面があるだろう。対象は何も我が子に限ったことではない。ペットやモノ・友人ということもある。幼い頃、お気に入りの人形やおもちゃに自分なりの名前をつけたり、友達にふざけたあだ名を付けた人も結構いるのではないだろうか。その行為は対象への愛情や親近感、時には怒りや腹立ちなど、強い思いがきっかけになることが多い。名付け・名付けられるという行為が、互いの関係を強化したり、これまでと違う段階に引き上げる。そういう効果は確かにある気がする。

また、自分自身に別の名前をつけるということも、ときに人はやったりする。ペンネーム・ラジオネーム・俳号・芸名・源氏名などなど。新たな名前を名乗ることで、人はいつもと違う自分を生きたり、役割を変化させてみたくなるのだろうか。

そういえば昔知り合った人で、自分のことを「天使ちゃん」と名乗る女性がいた。SNS で詐欺の講師をしていた「頂き女子りりちゃん」同様、そのセンスには共感できないが、いずれの名付けにしても、そこには本人の様々な思いや理由が存在する。「願い」や「希望」が強いこともあれば、「呼びやすさ」や「字の好み」「音の響き」「他と区別するための分かりやすさ」などが重要なこともあるだろう。1 つの名前がひとつの理由だけで決まるとも限らない。

個人的なことだが息子が「こども落語」なるものを習っており、月 1 回アマチュア落語家が講師となり、市内の公民館で稽古をつけてくれ、年に 1 度発表する会もある。ここでは息子は本名ではなく、落語をする時の名前、いわゆる「高座名」というもので活動している。「〇〇亭××」とか「〇〇家××」といった落語家らしい名前を、参加する子どもたちがそれぞれ思い思いにつけている。

互いの本名も知らず、住んでいる地域もバラバラな彼らは高座名で呼び合い、和気あいあいとやっている。たまに保護者が本名で子どもを呼ぶと、なんだかピンとこない感じすらある。とても小さな世界だが、その場では子どもたちはみな高座名の自分を生き、互いにそれがしっくりくる関係性ができている。横で見ている私からすれば大変面白味深い。子どもたちにとって高座名は、いつもの自分から飛び出して、こども落語の一員になるスイッチになっているようで、そのあり様はとても自由で豊かに見える。

思えば昔の武士階級は子どもの頃は幼名で呼ばれ、成長したら元服して正式な大人の

名前をつけていた。新たな名前を名乗ることで、大人としての自分に生まれ変わるというか、その自覚を促す効果もあったのかもしれない。そう考えると現代の私たちは、いつ大人になったと言えるのだろうか。どんどん分かりにくく、曖昧になってきている気がする。成人式は相変わらず 20 歳だが、民法上は 18 歳成人になった。しかし最近では自立する年齢があがっている感じだし、精神年齢も若い若者が多いような。かくいう私も 25 歳頃までフラフラしていたし、30 歳になったときも「自分が大人か？」と言われると、頭の中は中学時代とあまり変わり映えしないような気がしていた。

この際我々も 20 歳とか結婚出産あたりを機に、大人の名前に改名するようにしてはどうか？などと、半分本気で思ったりもしてしまう。

名前≡呼称ととらえると、仕事上では役職や職種で呼ばれることも多くの人を経験することだろう。「社長」「課長」「店長」「看護師さん」「先生」「アルバイトさん」などなど。これもプライベートな自分とは違う世界を生きる時の名前だろうが、なんだか少し窮屈で不自由な感じがするのは、私だけではないのではないか。その理由はおそらく「役割」に偏った呼び名であることや、世の中や組織という顔の見えない何かにつけられた名前だからなのかもしれない。

逆に命名プロセスに自らが参加できたり、顔の見える信頼できる相手による命名によって、名前をつけることの効果を最大限引き出しているのが、家族療法の外在化や、当事者研究での自己病名だったりするのだろう。どちらも名付けることによってそれまでの固定概念を揺るがし、変化をもたらす力をもっており、個人的にもとても好きな手法だ。

そんな私は、3 月まで「課長さん」と呼んでいた人を、4 月になったら退職再雇用で急に「〇〇さん」と呼び始める慣習がどうにもしっくり感じないため、自分は普段からさん付けで呼んでもらえるよう、職場の人をお願いしていたりする。

石垣りんの「表札」みたいというのは、ほめ過ぎだろうか。

※ エピソードは作者の経験を基に、個人情報保護のため内容を改変・創作し、登場人物も勝手に命名したものです。

臨床のきれはし

SHEET24

浅田 英輔

Professional Identity

少し前だが、定例となっている「家族支援研究会」に参加してきた。青森県弘前市において2001年くらいから続いている、団先生にきてもらうワークショップだ。かなり最初の方、20代のころから参加している。そこで話題になったことを考えてみた。

私は児相を離れて、いわゆる「心理の仕事」はしていない。県庁で、「行政職の枠」で事業をやったり事務をこなしたりしている。

※公務員の多くは一般行政として採用されているが、そのほかに心理や、医師、歯科医師、薬剤師、獣医師、看護師、保健師等々多くの専門職がいる。私は心理の専門職採用。

今の仕事の前任者は行政職だし、後任となるのも少なくとも心理職ではないだろう。心理の人だからできる仕事、というものでもないのだ。でも、私は心理職であると思う。臨床心理士だし公認心理師だ(2つの資格にこだわりはないが、臨床心理士のほうの響きが好き)。仕事で主催したり参加したりする研修会には、ケアマネとか社会福祉士とか保健師とかがよく参加している。そういう時も職種欄には「臨床心理士」と書く。今の仕事に資格は必要ないが、モノを見る視点として心理の学びはとても役に立っていると思う。それほ

ど遠くない未来に定年を迎えたりして県職員をやめるときが来るが、それでも私は「心理職である」と思うことだろう。「職」とは言わないかもね？心理屋さんです、とかだろうか。やめたあとに心理の仕事をするかわからないが、心理の力を発揮する場面のない仕事であっても同じように思うだろう。臨床心理士の更新をやめて資格を失ったとしても、外で名乗りはしなくとも臨床心理士だと思うだろう。臨床でも公認でもよいが、「自分は心理職である」というのが職業的アイデンティティであるように思う。

これは、専門職、それも更新がいらない(公認心理師はいらない)資格を持っているからだろうか。たぶん、看護師や保育士の人なんかは、仕事をやめたあとも「私は看護師(保育士)である」と思っているかもしれない。もしかしたら、資格は取ったけどその仕事をしていない人は違うのかもしれない。勝手な想像だが、教員免許を持っている人は、仕事を辞めると「私は教師だ」とは言わないのかもしれない。言い方は「教員免許を持っている」となるのかもしれない。私も教員免許を持っていた(更新制度が導入されたときに失効しているはず？)が、自分のことを教員だと思ったことはない。そう考えると、「更新不要な資格を持っていて、その仕事のある程度したことがある人」は職業的アイデンティティを持ちやすいのかもしれない。

では、資格のない人は職業的なアイデンティティを持てないのか？

離職や転職、非正規雇用が増えているとはいえ、日本は基本的に終身雇用だ。20年、30年と同じ会社に勤めるパターンが多い。大きいところであれば異動があるのが普通で、同じ部署にずっといるということは非常に稀だ。青森でいうと県庁はかなりの大企業であり、当然異動がある。健康福祉部の人には部内で異動することが多いが、担当する仕事はかなり違うものである。20年、30年といろいろな仕事を経験し、部長とか課長になる人もいれば、そうでもない人もいる。私の周りの同年代の人もほぼ全員が20年以上県庁に勤めている人たちだ。

そういう人たちは、仕事を辞めると「タダの人」になるのだろうか。名前がつけにくいのは確かだし、「行政専門職です」とはあんまり言わない。でも、「行政の仕事をしてきた経験を持った人だ」とは言えるだろう。実はこれ、外にいくと結構大事な能力で、事務処理能力、資料を作る力、事業を企画する力などは結構すごい。いい気になる必要はないけど、「そういうことができる自分」というのは誇っていいと思う。

今回の能登半島の震災の対応もそうだが、災害支援となるとDMATの医師や薬剤師など、直接対応する専門職が目立つことが多い。でも、どういったチームにもロジ（ロジスティクス）と呼ばれる事務調整役が含まれていることはあまり知られていない。知られていても、「記録係」とか「運転手」と思われていることも多く役割は地味といえるが、とても大事なのである。チームによって多少異なるが、各種調整や記録、他のチームとの調整交渉などを担うことが多い。青森県からも保健師チームが派遣されており、チーム編成の基本は保健師×2＋ロジ×1で、派遣元の県本部と連絡を取り合い、全体を把握しているのはロジであることも多い。逆に、ロジがぱっとしないとチームはなかなかうまく動かない。タスクを整理し、優先順位をつけ、

次々と処理していくという技は専門的な技術といえるだろう。「災害対策本部」の写真を見たことがあると思う。様々な色のビブスを付けた人がたくさんいるやつ。あれも全部ロジ。行政＋専門職が、支援のためのモノやヒトを割り振りしたりしているところである。

そういった、自分が積み重ねてきた仕事について、意識する機会はあるだろうか。公務員に限らず、一般事務や営業と呼ばれる仕事をしている人たちは、そういう専門性を意識する場面が少ないのかもしれない。

いまそういう一般行政の仕事をしていて思うのだが、われわれは今している仕事をもっと分類するといい。

「今やっているのは研修企画、運営であって、講師を確保するのに交渉をしているところだ。」とか。

「参加者を募集するのに、興味のありそうな分野の人たちに案内を送るという事務だ。」とか。

「交付金を取りまとめるのに、各事業をチェックして数字をそろえて確認して提出するとりまとめだ」とか。そういうふうを考えていくと、「私はこれまで、講師交渉や参加者の取りまとめといった研修主催事務を行ってきました」とか「数字のチェックをしたうえで一枚に取りまとめるという経験はかなり積みました」とか言えるのではないだろうか。そしてそれは結構大事なスキルだし、重宝されるのではないかなと思う。

心理職だって同じで、「認知行動療法を専門にやっています」などと言えるのはとても望ましいが、得意な技法だけを使って仕事ができる人は多くないように思う。どういう仕事を積み重ねてきたかということを少し言葉にしてみることは大事である。

そう考えると、私はずっと「支援者支援」をやっているなあと思う。得意です！たぶん！

「自分は大したことしてこなかった」と謙遜するのもいいが、やってきたことをキチンと分類して、何をやってきたのかをちょっとだけ明確にするのって、自分を確かめることに大事なのではないかなーと思ったりもする。

発達検査と対人援助学

⑮ 正しさの罠

大谷多加志

正しさを積み上げる

起こるとは想像もしていなかったロシアのウクライナ侵攻から2年が経ち、収束しない間にイスラエルのガザ侵攻も始まりました。どちらの地域でも数多くの人々が犠牲になり、とりわけ若年者の多いガザ地区での犠牲者には子どもも多数含まれています。時折流れてくるニュースに対して、痛ましさや悲しみ、怒りも感じるものの、世界のどこかで子どもの命が刻々と失われている事実を知りながら、何もできないまま、安全な国で「ひとりひとりの子ども大切に」「子どもの発達ニーズに合わせて…」などと語ることに何か言い知れない後ろ暗さを感じてしまいます。そんなことを考えながら、頭に思い浮かんだのはここ半年くらいの「学び」についてでした。今回はこの内容について少し振り返ってみようと思います。

ここ半年くらいの学びに共通している点が「正しさに潜む危うさ」ということだったように感じています。前号で報告した対人援助学会の中で「被害と加害を超えて」という言葉が記憶に残りました。一見して、「ノーサイド」や「誰かを責めるのではなく…」みたいな綺麗ごとっぽいお話なのかなとも思えたのですが、身近なところでも「よくある対人トラブル」について、“自分の方が先に被害を受けたこと”、“自分もやり返

しているが、程度は相手の方がひどいこと”を力説されるケースが重なっていたことから、少し立ち止まって考えるべき事柄であるように感じられました。確かに「被害」を受けたことは、反撃をする理由にもなりますし、被害を償ってほしいという主張にも正当性が生まれます。ともすると、加害者擁護や被害者バッシングに見えかねないので、語ることがとても難しく感じるのですが、「被害を被害として語る」というプロセスが、やや省略されているのかもしれないと感じます。起こった事実や、そこで自身が感じたことをそのまま語ることは、正しさの表明や相手への非難とは、質が異なります。対人援助学会における被爆の語りには、この「被害を被害として語る」ということが前面に出ていたように感じました。もちろん、被害の弁済や加害者の責任追及を否定しているのではなく、これもまた必要なプロセスだと思います。しかし、一昔前の「勝ち組 - 負け組」や「論破」のブームにも表れているように、「どちらが正しいか」に焦点が当たり過ぎている傾向には、やはり注意が必要なのかもしれません。実際のところ、先ほどの「対人トラブル」についても、最終的には「それで、これからはその人とどう関わりたいの?」ということが、本質的には当事者の方も語りたいたいと思っておられたことだっ

たのですが、どうしても自分の正当性を確保してからでないと語りにくいと感じる部分があったように見受けられました。“自分が感じたこと”や“自分がしたいこと／したくないこと”をそのまま語ればと思うのですが、正しいこと以外は語りにくい空気が醸成されてしまっているという部分もあるのかもしれません。

だからこそ、「それ自体の正しさを疑えないもの」について、表面的な正しさだけで完結してしまわないように、注意する必要があると感じました。

先日、年4回シリーズで開催されている【『木陰の物語』で家族の構造理論を読み解く会】に参加しました。団編集長のお話と「木陰の物語」を題材に参加者同士で話をするオンライン・ワークショップなのですが、先日の回で紹介されていた「木陰の物語」は、家出した高校生の娘を巡る家族のお話でした。その中での親の語りに「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」という言葉があります(正確ではないですが、大意ではこういう意味の語りでした)。

今の日本社会では、「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」という考えは、基本的には“正しい”と判断されているように感じます。「何が何でも一流大学に入れる！そのためには自由を奪って勉強させる！」という考えは、むしろ批判的に見られるでしょう(なぜか結果的に成功すると肯定されるという向きもありますが)。ともかく、この物語の中では「娘の家出」が、親の「成績なんてどうでもよくて、娘がやりたいことをしてくれたら…」とい

う表面的な語りを揺さぶります。高校に行かず家出することを「やりたいこと」と認めて応援できるのか…？と問い返されるわけです。

【家族の構造理論を読み解く会】では何かひとつの答えが示されるわけでもないですし、「やりたいことをしてくれたら…」と言うなら何でも受け入れるくらいの覚悟を持って！みたいな精神論が語られたりするわけでもないです。ただ、この物語でもそうなのですが、“正しさ”という点では疑いがないことについて、深く掘り下げないままに語り続けることには注意が必要であると感じました。「多様性の尊重」という言葉も同様で、「みんな違ってみんないい」というのは間違いではないと思いますが、多様な価値を認め合うというのは、自分と全く異なる価値基準や判断基準を持つ人と、それでも隣人として(時には家族として)生きていくということですから、当然ながら葛藤や衝突も起こります。そうやって、一人の個人としてぶつかりながら、一緒にいられる落としどころを作っていく…というのは、結婚したカップルが、互いに異なるそだちや生活習慣による衝突を繰り返しながら、やがて新しい文化を作っていく過程と似ているかもしれません。そういえば、離婚するカップルも少なくない現代です。多様性の尊重というのは、好きで一緒になった人同士でも難しいことを、たまたま隣になった人とやってみようという試みとも言えますので、言うほどに容易なことではないと思っておいた方がよさそうです。前号の編集後記にも書いたのですが、先日の対人援助学会の折に多様性の尊重について表面的に語られていることに違和感を持ち「もっとド

ロドロしたものなんですよ！」と語っておられた方がいたことが思い出されました。

この視点に立つと“良いもの”と信じられているものが、きちんと扱われない中で機能不全を起こしているケースは少なくないように感じます。基本的に正しくて良いものとされている「民主主義」が機能不全を起こしていることは肌身で感じますし、「コロナ対応や経済対策では独裁の方が成果をあげている」という主張もあります。ここで“だからいっそ独裁の方がいい”という話でもなく、“そもそもなんで独裁をやめようって考えが広がったんだっけ？”と立ち返れば、そんな話で済むはずありません。

考えてみれば、私たちの社会は「正しいこと」とされることを積み上げてきたはずで、確かに、30年前に会社や学校で見かけた強烈なハラスメントは少なくとも表面的には見る機会が少なくなりましたし、サービス残業や超過勤務も、ある程度は軽減されているようにも見えます。経済成長のためにインフラ基盤を整えてきたことで、移動が速く便利になったことも間違いありません。しかし、その結果として本当に社会が豊かになり、そこで暮らす人々の幸福度が増したかと言えば、なかなか厳しい現実がありますし、「子どもが生まれてこない社会」ができあがってしまったという現実もあります。

少子化の背景として、若者に経済的な余裕が少ないことが指摘されていますが、これは理由のごく一部に過ぎないと思います。そもそも俯瞰してみれば、子どもはむしろ経済発展の途上にある国の方が多く出生する傾向があることは明らかです。実際の背

景はもっと根深く、もっとドロドロとしたところにあると感じます。

正しさに依拠せずに語る

最後に少しだけ現場的なことと絡めてみると、「相反する意見を併存させること」はケースの見立てや議論の中でも必要な力であると感じます。相反する考えが提示された時に「どちらが正しいか」という思考にとらわれてしまう場合、すでに「正しさ」の罠にはまっているのかもしれません。

一人の人間の中に相反する考えや側面があるということは全然あり得ることです。それは私たちひとりひとりが自分の考えや行動を振り返れば、十分確かめることができるくらい明らかなことだと思います。そして、そのうち「どちらが本当の自分であるか」などと問う必要もなく、「どちらも私の一側面である」と考えるでしょう。

子どもの発達の見立てにおいても「パターンで落とし込む」や「基準に当てはめる」形で解釈したいと考える人もいますし、ある程度の解釈ができるように作られている検査もあります。その解釈は基本的には“正しい”と思いますが、実態をどの程度反映できているか、それが本当に有用な情報になるかは別の話です。効率や損得勘定（正しいとお墨付きがある）を考えればこの誘惑が強いことはわかりますが、ここが過剰になるのは講座の中で語られていた「異質なものと関わることをさぼっている」ことになるのかもしれません。大人とは異なる子どもの世界を、そうであると理解した上で知ろうと歩み寄る取り組みは、多様性の理解と同じくドロドロを含んだ試みなのかもしれません。

講演会 & ライブ な日々 ③⑧

古川 秀明

『自殺防止と健康観察』 第四回(最終回)

※この記事の掲載については、学校長の許可をもらっています。

● 教師からの実践報告

① 生徒の様子は見た目だけではわからないので、生徒が正直な気持ちや心身の状態を入力できるシステムは生徒にとってもプラスになるし、教師が生徒を理解するきっかけになっている。

② 日頃、生徒たちは本心を教師に伝える機会があまりないことを考えると、「わかってほしい」という思いを持っている生徒の気持ちを汲むことができるようになった。この時、SOS の生徒に丁寧に対応することで、書く意味があると生徒が感じ始めている。

③ 入力されている内容が雨や曇りだと、本人の心身の状態が客観的にわかるので、声をかけやすくなった。

④ ある日の出来事

心の天気が雨の日がずっと続いている生徒に声をかけると「深刻なことではなくて、単に学校に来るのがめんどくさい」「クラスが嫌だとか、担任がどうとかいうことではなく、毎日準備をして学校に来るのがめんどくさい。毎日休みやったらいいと思っているだけ」という答えが返ってきた。授業を見る限りでは、そんなことを思いながら登校しているようには見えない生徒なので、その生徒の考えていることを少し知る機会になった。

このように、健康チェックデータを見ることにより、担任でなくても生徒に声をかけることができ、コミュニケーションのネタにもなる。

⑤ 生徒理解や生徒指導に特効薬はなく、小さなことの積み重ねと、その小さなことに丁寧に目を向けるきめ細やかさが徐々に生徒理解につながっていくと思う。毎朝行う健康チェックの取り組みを毎朝のルーティンにさせる働きかけも大切な教師の仕事であるし、生徒が頑張って入力したほんの少しのデータを丁寧に見て、不調な生徒には応えてやろうとする教師の動きは大切なことだと思う。

⑥ SOSボタンを押した生徒に対応すると、自殺に関することではなかったが犯罪に関わるとても大きな問題で、事前に事なきを得ることができた。

● 保健室からみた問題点

- ① クラスにより、健康観察が実施できていない生徒が多い場合がある。遅刻生徒や生徒指導面に課題があるクラスは実施率の低い日が続いてしまう。
- ② 毎日症状を訴える生徒への対応をどうするか。数が多いので、保健室での個別対応が難しい。
- ③ 担任（や学年教員）が毎日の生活の状況をどこまで把握できているか分かりにくい。
- ④ 入力しているが反映されない生徒がいたり、ソフト面での不具合の影響を受ける場合がある。
- ⑤ 欠席の把握がしにくい。

● 導入にあたっての不安

健康観察を使った自殺予防を様々な学校で説明させてもらっています。そのなかで共通した意見を抜粋します。

- ① この取り組みは効果があり、重要なことは理解できるが、学校では日々、各種アンケートや取り組みがたくさんあり、これ以上何かをやらされるのは正直しんどい。
- ② SOSボタンが押されていたのに、何か問題が起これば、担任の責任にされそうだしんどい。
- ③ SOSボタンがたくさん押されたら、その全員に学校が即対応するのは難しい。

これらの不安を聞いていると、いかに今の現場教師が疲弊しているかがわかります。

たった5分という最短の時間で最大限の予防効果を発揮できるのに、その5分が負担になるくらい疲れているという現状があります。

今SOSボタンが一番必要なのは教師かも知れません。

● 令和6年の現状

令和5年4月、タブレットによる「自殺予防健康観察」の取り組みは大規模校である神川中学のみで例外的に許可されていましたが、思いのほかよい流れとなっていることを踏まえ、他の中学でも実施する許可を頂きました。

これで実施してもらえる学校を増やすことができると喜んでいたところ、令和5年7月11日(火)、京都新聞朝刊に、次の記事が掲載されました。



【京都新聞記事の抜粋】

子どもの自殺防止へ学習端末活用を

文科省通知、夏休み明け

*文科省は10日、夏休み明けに子どもの自殺が増える傾向があることから、全児童生徒に配られている学習端末を活用して心身の状態や悩みを把握するなど、各学校が予防に取り組むよう全国の教育委員会などに通知した。

*文科省によると、厚生労働省などの統計では、2022年の小中高校生の自殺は514人で過去最多となった。今年1～5月は暫定値で164人に上り、前年同時期より26人減ったが、高止まりとなっている。

*通知では、夏休み前のアンケート実施や、いじめを訴えている児童生徒らに対して登校日に面談して状況を確認すること、電話相談窓口を周知することを求めた。

*また、端末で使うことができる有効なアプリ一覧も示した。

*子どもが心や体の状態を4段階で自己評価して教員が入力内容を確認できるものや、端末から専門の相談員に匿名で悩みを打ち明けられる機能を備えたものなどを挙げ、導入を推奨した。

1人1台端末を活用した心や体調の変化の早期発見を推進			
趣旨	・こどもの自殺対策緊急強化プラン（令和5年6月2日） 1人1台端末の活用等により、自殺リスクの把握や適切な支援につなげるため、 <u>有償・無償で利用できるシステムやその活用方法、マニュアル等を整理・作成し、全国の教育委員会等に周知し、全国の学校での実施を目指す。</u> ・誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）（令和5年3月31日） <u>1人1台端末を活用した心や体調の変化の早期発見を推進</u> とされており、これらを踏まえ、1人1台端末を活用した児童生徒の心や体調の変化の早期発見や適切な支援につなげるためのシステム・マニュアル等について、下記の通り整理した。		
	無償		
会社名	システム名	機能	機能詳細
Google	Google フォーム	・健康観察 ・相談窓口	・アンケート機能（健康観察に活用） ・記述式アンケート機能等を用いた相談窓口 ・リンク、QRコード、メールによるフォームの共有 ・Google スプレッドシート等へのデータのエクスポート ・Google Apps Script を利用したアラート機能等の実装
Google	Looker Studio [Google]Looker Studio in a minute -YouTube	・データの可視化	・Google スプレッドシート等のデータソースから表やグラフ等を作成し、データを可視化 ・データの自動更新や様々なフォーマットのグラフにより、多様な角度からの迅速な分析が可能に
Microsoft	Microsoft Forms	・健康観察 ・相談窓口	・アンケート機能（健康観察に活用） ・記述式アンケート機能等を用いた相談窓口 ・リンク、QRコード、メールによるフォームの共有 ・Microsoft Excel へのデータのエクスポート ・Microsoft Excel のマクロによるアラート機能
Microsoft	Reflect [Microsoft Teams for Education] Reflect - YouTube	・健康観察	・既存の質問項目を選択して、アンケートを簡単に作成 ・文字だけでなくキャラクターを使った選択肢 ・健康観察等に特化し、Microsoft Formsをより簡易に利用
Google フォーム、Microsoft Forms 用いた健康観察・相談窓口の作成方法(リンク) Looker Studio、Reflect の活用事例(リンク)			

2

● みなさまへのお願い

以上のように、京都市教育委員会の許可と文科省の通知により、日本全国地域や校種を問わず、皆さんの学校でもタブレットを使った自殺予防健康観察の取り組みを実施することが可能になっています。

また令和5年9月8日、厚生労働省社会・援護局総務課自殺対策推進室 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 こども家庭庁支援局総務課自殺対策室は共同で、こどもの自殺対策の推進のために、都道府県知事、指定都市市長、都道府県議会・指定都市議会議長、都道府県・指定都市教育長、市区町村長、市区町村議会議長、市区町村教育長に宛てて、3大臣からのメッセージを送付しています。

その中で、以下の4ポイントが強調されています。

① こどもの自殺対策緊急強化プランに関する概算要求のポイント

- ② 「こども・若者の自殺危機対応チーム」について
- ③ 1人1台 端末等を活用した「心の健康観察」の推進
- ④ ゲートキーパーについて

③「心の健康観察」については、令和5年度補正予算案として10億円を計上しています。

そこで、みなさんにお誘いです。

私たちと一緒に、この取り組みを実践してみませんか？

理由 その1

文科省等の通知では具体的な実施方法が書かれておらず、各学校の努力に任せています。

今から方法を模索する手間をかけるよりも、神川中学で完成しているノウハウ（導入からアセスメントまで）があるので、それをそのまま活用して頂けます。

理由 その2

各学校でバラバラの方法で実施するより、統一された規格で実施したほうが、学校規模、地域特性、学年による差異がわかりやすく、各種統計も取りやすいです。

また同じ方法で実施している学校が集まり、内容を吟味することで、実施内容の長所と短所が明確になり、その解決方法やアップデートも精度の高いものにできます。

学校現場にいる教職員が作り上げていくものなので、アカデミックな統計や理想論や机上の空論ではなく、学校内で実現可能なものに仕上げられます。

● 最後に

自殺予防健康観察の取り組みは、それで褒められたり、成功して称賛されたりすることはありません。

児童・生徒は自殺しないことが当たり前で、いくらこの取り組みが成功していても、子どもは自殺しないという、当たりの結果しか出せないからです。

ですが、その当たり前が、実は凄いことなのだと思います。

飛行機は空高く飛んでいるのが当たり前、しかしその当たり前を実現させているのは、整備士や管制塔、乗務員、パイロットなど多くの人の努力の積み重ねです。

子ども達が自殺しないで生きているという当たり前を実現させるのは、家族と私達学校関係者の努力が必要不可欠です。

その努力のひとつとして、この方法をやってみませんか？もちろん、この方法で100%自殺を食い止めるのは不可能ですが、最後にこのお話を教訓にして終わりたいと思います。

ハチドリのひとしずく



(全長 6 cm、体重 2 g 弱)

これはちいさな力の大切さを教えてくれる、南米アンデスの古くて新しいお話。

森の火事に、一滴ずつ水を運ぶ小さなハチドリに対して、森から逃げた大きな動物たちは「そんなことをして何になるんだ」と笑います。

小さなハチドリは

「私は、私にできることをしているだけ」と答えました……

自殺予防健康観察の取り組みは、まさにこの「ハチドリのひとしずく」だと思いました。

日本中の学校の先生のひとしずくを集めて、子どもの自殺という恐ろしい炎を一緒に消しませんか？

タブレット(学習端末)を使った自殺予防健康観察の取り組みに興味を持って頂けた皆さま。

児童・生徒の自殺予防に関心のある皆さま。

自殺というキーワードで、今、パッと頭の中に浮かんでいる子がおられる皆様。

学校で子ども達を見守る私達が力を合わせて、ひとりでも多くの児童・生徒を自殺から守りましょう。

ひとつでも多くの学校、ひとりでも多くの先生方とチームを組み、児童生徒の自殺防止に取り組みたいですと思っています。

※ お問い合わせ先 神川中学校

- ◆ 自殺予防健康観察 全般について
支援教育部 部長 宮迫(みやさこ)先生
 - ◆ 保健室関係について
養護教諭 松田先生 木村先生
 - ◆ 古川についてのお問合せ
スクールカウンセラーコーディネーター 近藤先生
- *スクールカウンセラー 古川秀明
神川中学には水曜日に勤務しています

神川中学校 〒612-8487 京都市伏見区羽束師菱川町 741

TEL:075-934-1505 FAX:075-934-1528

E-mail: kamikawa-c@edu.city.kyoto.jp

最後までお読みいただき、誠にありがとうございました。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

立場が変わると何が見える



～その8 家庭、里親、児童養護施設の体験から～

坂口 伊都

はじめに

また新年が明け、年度終わりに近づいてくると、慌ただしさを感じます。元旦から大きな地震に見舞われ、身近に衝撃的な事柄も起きました。その中で明るい気持ちになるのが憚れると感じながら、それでも、人は生きていく営みを続けていくしかなく、寝て、起きて、仕事して、ご飯作って、犬の散歩をしています。自分自身でも気持ちの底に何があるのがよくつかめませんが、大きな震災を幾つも経て、コロナウイルスの感染を経験し、前に進もうとする気持ちを学んだような気がします。自分達の力ではどうしようもできない大きな力を前にし、できることをしていこうとする力でしょうか。皆さんは、どのようなことを感じていますか。

私事です、12月に銀婚式を迎えました。

結婚して25年。なかなかの年月です。頑張ったなあ私達。

私は、結婚記念日を何故か正確に覚えられず、この辺りの日にちだったという程度の認識で、祝うこともせず過ごしていました。去年の結婚記念日に突然、大学生の娘がレストランを予約して祝ってくれました。その宴席で、次が銀婚式になると気づきました。そこで、夫と相談して来年は娘を招いて祝おうと決めました。自分たちのために祝う気は起きませんが、娘が絡んでくると途端にやる気が出ます。夫が、魚介と肉の鉄板焼きの店を夫が予約してくれました。息子も誘いましたが、仕事で来られず、残念。

前回のマガジンで紹介しましたが、夫とのやり取りの変化も影響をしていると感じます。夫婦のコミュニケーションが円滑の方向に傾くことで、結婚記念日を祝うことに抵抗がなくなりました。一緒にいてもすぐに険悪になると思えば、わざわざ時間とお金をかけてする意味を感じることはできませんが、お互いに少しのやさしさを持ち合わすことができます。

娘からは生花を夫からはネックレスをもらいました。父母から



娘に少し早いクリスマスプレゼント、私から夫には遠近両用メガネをプレゼントしました。何年か前まで、結婚記念日はいつの間にか終わっているものでしたが、娘のおかげで銀婚式を祝えました。さらに娘から提案があり、二人の結婚記念日を大切に、これからもお祝いしよう。そして父母に小さなメッセージカードを渡し、相手のいいところを書いて娘に出すように指示されました。次の結婚記念日に娘からそれぞれに渡すからねと。次は息子も一緒に美味しい料理を食べられるように動いてみるとしましょう。

さて、今回は母親、里母、そして少しの間ですが児童養護施設に関わる時間をいただけたので、それらの経験を通して見えたことを語りたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いください。

誰との関係が優先されるのか

子どもは誰も、生まれてすぐ育ててくれる大人の存在が必要です。自分では動けないのですから、養育者は命をかけた関係作りになります。そして、だんだんと周りに目を向けられるようになり、友達を作っていきます。年を重ねると親よりも友達関係を優先させようとし、それは自然なことですが、育っていく過程の中で最終的な宿り木として親や養育者を自分の味方として捉えられているかは、人や社会を信じることにつながり、重要です。

私の子ども時代の経験では、幼稚園時代と小学校、中学に通う中で子ども同士の関係を作った後、良好に維持していく方法がよくわからずに過ごしていました。楽しく過ごせることもあります、クラスの中で誰が力を持っていて、その周りにいる子、集団でやってきて自分たちのやり方に従わせようとしてきたり、存在を否定されたかのように相手にされなかったり、強いと思っていた子が何故か泣かされていたり、いろいろな事が目まぐるしく展開されていきました。子どもだった私は、何を目標として行動すればいいのかわからず、人の関係の渦に飲み込まれていました。私は、友人との関係を持て余していましたが、大人に相談するということは思いつかず、時代背景もあったかと思いますが、学校を休むという発想も持っていなかったです。学校が楽しい場所でもないが、母親がいる家に居るよりも学校に行っている方がマシかなと思っていました。母は、自宅の一階で居酒屋をしていたので、二階で一人の時にいろいろ妄想をして、その世界で過ごすことが楽しかった変な子どもでした。

息子は誰に似たのか、友達付き合いが下手だなと思って見ていました。娘は、男女問わず上手く付き合っていました、本人は些細なことで悩んでいました。私から見れば、とても上手に友達と上手く付き合っているように見えますが、当の本人はそれを認めません。それは、大学生になった今でも続いていて、人間関係で凹むと電話をかけてきます。淡々と話を聞き、「そうなんだね」と返している時はいいのですが、少し意見を交えると「そんなこと今は聞きたくない」と言って叱られ、電話を切られてしまいます。私はサウンドバックかと突っ込みたくなりますが、娘には深刻な問題なのです。電話から数日が経ち娘の気持ちが落ち着くと、母子の意見交換会が始まります。そのタイミングを計るのは難しい。どんな子どもでも、子ども関係の悩みを持つもののようです。

息子の方は、小学校低学年ぐらいまで親に甘えていましたが、だんだんと語らなくなっていきました。聞いても生返事ばかりで、その上、学校からのお便りを失くしたり、ランドセルを公園に置き忘れたり、高校受験の受験受付の前日にいると言い出して慌てて高校まで願書を取りに行くこともありました。今も息子は、偉そうなことを言いますが、困ったら親を頼ってきています。兄妹でも、タイプが違うなあと感じます。

里子は、我が家に来てから、帰宅後に何をしたらいいかわからず、時間を持て余していました。施設で過ごしていた時は、子どもが至る所にいたので、気持ちが紛れる部分があったのでしょう。里兄は高校生、里姉は中学生で自分のことに忙しくていて、里子は狭い家の中で一人、何をしても手持ち無沙汰のようでした。里親が近くにいても、実習生のように遊び相手になるわけでもなく、里子から話しかけてくることもあまりなく、一から関係をコツコツと作っていく毎日でした。住居環境が変わり、家での過ごし方から困っていたのでしょう。

児童養護施設の子供達は、大人との関係よりも先に施設内の子供関係が展開されていました。ユニットケアとなり、一つのホームの子供の数は小さくなっていますが、子供の交流はホームを超えて交流します。子供達は、大人の目が届かないところで繰り広げられるパワー争いや自分の居場所確保が続き、さぞ神経を研ぎ澄ませているのだろーと感じます。職員は住み込みでなければ、それぞれの家に帰っていきます。子供達は、その場所で生活しているのですから、子供関係の中での自分の居場所確保は、何よりも優先される事柄だと容易に推測できます。年齢が低いほど、自我を通そうと必死になり、年齢が高くなると陰湿さも含まれ、仲良くしていたかと思えば、衝突し、トラブルが多発します。グループの輪の中にいる時は強気な声をあげ、グループからはみ出した時は他の声に怯える。そして、誰も強者であり続けられない不安定なヒエラルキーに見えます。



児童養護施設で、夜中にある女の子の横にいたことがありました。その子との面識はありましたが、お互いよく知らない者同士でした。その子が他の子どもとのトラブルで、家に帰りたくて泣き、女性に話を聞いてもらいたいと言っていると、その場にいた私に白羽の矢があたりました。その子は、トラブルの内容や家に帰りたくて想いを話しますが、私を見ているわけではなく、ただうんうんと話を聞いてくれるモノとして、そばに置いておきたかったようです。きっと、朝が来たら誰に話していたか覚えていないのだろーなあと、思いながら聞いていました。何故、女性なのだろう。母親的なものを求めているのか……。それもよくわかりません。

ただ、他の子どもが見ていない、聞いていない時にしか大人に気を許せないのだとわかりました。子どもが眠る時間、職員体制はもっとも手薄になります。子どもの関係から離れられる時間の短さを改めて感じました。

子どもにも個人差がありますが、コミュニケーションに苦手意識を感じているととても多い。子ども間のトラブルがあった時に大人を信頼して利用できるようになるには、小学校低学年頃までに親や近くの大人とどのように扱われたかで左右されるのではないかと感じます。その対象が両親であることが望ましいですが、子どもとの距離感が近いほど冷静になれなくなるものです。アタッチメントシステムの考え方では、主たる養育者が子どもの安心、安全基地になることを求めますが、養育者ではない大人の方が冷静でいられ、子どもへの状態を言葉にする寄り添いをしていけばいいのではないかと感じ始めています。

※アタッチメントシステム

人間がもつ本能で、不安等のネガティブな状態に陥ると特定の養育者に近づき、気持ちを落ち着かせてもらおうとくっつきに行く。そこで、養育者が子どもの気持ちに寄り添い落ち着かせてもらおうと、探索行動に向かう。その繰り返しを経ていくことで、安定したアタッチメントが形成されていく。

自分の中で何が起きているのか教えてよ

振り返ると、乳児院や児童養護施設で暮らす子どもや発達や知的の課題を抱える子ども等、数多くの子どもに出会う機会に恵まれてきました。幼児が大きな声で泣きわめく場面によく出会いますが、その子どもと調子を合わせて「あー、嫌やった、ここにいたくないねえ、ごめんごめん」「〇〇ちゃんは、これしたいね。でも□□ちゃんはこっちのゲームをしたいんだって、困ったね、どうしようか」等、子どもの状況を言葉にして伝えていくと、急に子どもが驚いたような顔をし、私の顔をじっと見てきます。その表情が出ると、パニック状態に進んでいくことはなくなります。この人、何言っているの？と驚いた時から私の声が届くようになります。すぐにピタッと泣き止むわけではありませんが、また思い出しては泣き、だんだんと落ち着いてきて、私の方をチラッと見てくるようになります。そうしたら、にっこり微笑むと子どもも嬉しそうな顔をしてくれます。

子どもは、自分のもやもやした感情を第三者に言葉にしてもらい、わかってもらえてスッキリしたという気持ちでいるようです。

子どもの状態を代弁するためには、冷静に観察をし、細かい部分の行動を見逃さないことがポイントになります。その場面に意識を集中させれば、代弁は上手くできます。だから、集中した方がいい時に観察ができれば、面白いほど簡単に子どもが反応してくれます。

しかし、生活を共にしている大人がそれをするのは難しい。なぜなら、生活に切れ目などないからです。どの場面で意識を集中すればいいかわかりません。子どもが不安になった時が観察する時ですが、機嫌が悪くなると、大人は動揺しうんざりします。大人の状態が不安定な時は、観察より自分の感情が優先され、集中して子どもを観察することが難しくなるのです。

里子を家に迎えた時、冷静に対応できるように、いつもよりも子どもを観察しようと努力したことがありました。その時、娘に「ママが保育士さんになっちゃった」と言われました。家の中の空気を悪くしな

いようにするための努力でしたが、母親はネジが3本ぐらい抜けているような状態の方が、親しみやすいようです。

児童養護施設の職員間で、アタッチメントの重要性を解けば解くほど、「アタッチメントアレルギー」になっていると聞いたことがあります。アタッチメントは子どもにとって大事なことはわかるが、子ども集団を前にどうしたらいいのよ、というところがあるのだと思います。

アタッチメントシステムは、個別の関係性の中に成り立ちます。同じ子どもでも、AさんとBさん相手では、アタッチメントの形が変わると言われています。その場に複数の人がいても、個別の対応をしていくことは可能ですし、そこを大切にしてくださいと伝えているのですが、複数の大人や子どもがその場において会話を聞かれている状況では、落ち着いて対応しにくいものです。その子の気持ちに寄り添った声かけをしようとしたら、

「私の時はダメと言ったのに、何でAちゃんの時だけいいの？不公平だ！」
と言われかねません。状況が違おうでしょうと説明しても、そこは入らないで、不公平やひいきしたが一人歩きしてしまいます。

児童養護施設では、子どもとの個別の場面を作っていこうとすることにも努力が必要になります。朝起きて登校して、帰ってきたら施設の子ども達と過ごし、夕食に入浴を済ませて、就寝時間まで子ども同士の関係があり、担当と二人で過ごす時間を持つという流れにはなりにくい。病気やけがをして通院や何かトラブルがあって担当と話し合うというような特別感が出てきます。

最初にも述べましたが、子ども同士の関係、子どもと職員の関係、職員同士の関係、そしてその関係の中もどれぐらい長くその施設にいるのか、さらに子どもの年齢や特徴などが絡まってきて、複雑になります。施設は、その中でのみ通る文化や価値観が存在し、まるで違う小国家が成り立っているように感じました。例えば、子どもが職員に相談をしたいと思っていても皆の前で悪態をつく方が優先されれば、その対象となった職員は傷つきます。そんな事に慣れたと思っていても、面と向かって悪態をつかれた後に優しい気持ちになれないことは起きるでしょう。

家庭でも里親でも、生活を共にしていくことは変わりありません。その状況の中で、できるだけ子どもを否定しないようにや、子どもの好きなものに気を紛らわせようとしないように気をつけようとしても、大人の気持ちが落ち着かず、子どもへの対応を失敗することがあります。大人側にも、気持ちを落ち着かせてもらう誰かの存在が必要です。

子どもに上手く寄り添える言葉をかけられるのは、生活を共にしていない大人の方です。

子どもは、感情を理解して生まれているわけではありません。自分の状態を大人に言葉で表現してもらうと、自分の中で何が起きているのかわかってきます。

里子に言われたことがあります、「寂しいって、何？」と。

そう言われて何て答えたらいいのか思いつかず、固まってしまいました。この子は、寂しいという言葉
を共有せずに過ごしてきたのかと感じました。小さい頃から意識して、子どもの状態を言葉にしていく
積み重ねの重さを痛感しました。

幼児が集まるとすぐにトラブルになります。幼児の言い分は稚拙なものですから、意味もわからず言
い合っていたり、手や足が出たりします。幼児の発話量は爆発的に増え、言葉を交わせるようになると、
その言葉の意味をわかって使っているように見えてきます。だから、ついつい大人は、

「何でそんなことをするの？前にも言ったでしょ」

「そんなことをするから、皆から嫌われるんだよ」

と説教をしてしまう。子どもの中には、ダメ出しされたことだけが伝わり、行動が悪化します。発達障
がいの子どもの「ダメ」と言われることに過剰に反応すると聞くことが割とあります。これも自分が拒否
された部分が強調されて伝わるからではないかと感じます。

保育士実習で、2歳児の担当となった学生が真剣な顔をして、

「子どもが言うことを聞いてくれない」

「私を馬鹿にしているんですよ」

「どうしたら、言うことを聞かせられますか？」

と聞かれました。

切羽詰まったお母さんみたいだと感じながら、まず学生へのねぎらいから始めます。2歳児がどこま
でわかって行動していると思うか、落ち着いて振り返っていきましました。子ども達を目の前にすると余裕
がなくなり、できない自分が辛くなるのですね。また、子どもの波に飛び込んでいく実習生を案じなが
らその場を後にしました。幼児は、見た目よりも未熟な存在であることをお忘れなく。

子育ての難しさ

家庭や施設の子育てを体験して、それぞれに違いはありますが、子育ての難しさを痛感しました。親も
里親も職員も子どもと良好な関係を築きたいと願っています。子どもも養育者に愛されたいと思いつ
つ、その方法がわからず反抗的な態度を取ってしまい、その態度に大人は腹が立ち、傷つき、正面から
子どもと向き合うことが怖くなる。大人も子どもも同じようなことを願っているのに悪循環に向かっ
てしまう。

家庭内は、主たる養育者が孤立していくことで、児童養護施設は関係性が複雑になっていくことで悪
化してしまう印象を持ちます。養育者は、子どもの嬉しそうな笑顔を見たいだけなのですが、悪循環に
陥るとそういう空気になりません。養育者側の状態を落ち着かせるためには、大人同士の支えあいが必

要不可欠だと感じます。

家庭なら父母、里父里母のタックが組めていることが一番ですが、それがなかなか簡単ではありません。父母で相談できる関係で、話し合う時間があり、向いている方向が同じだと感じられると安心できますが、生活の中で改まって話すことはできそうで、できないのが現実なのかもしれません。

児童養護施設では、ホームの中での職員同士がタックを組むことが一番でしょう。一つのホームに複数職員が配置されますが、早出、日勤、遅出、宿直等の勤務体系があり、一緒にホームに入れるのはせいぜい 2 人ぐらいなものです。職員は、出勤した時はホームでの生活を体感できますが、離れていた時に起きたことは体感した職員と温度差が生まれます。職員は、ホームでの生活を細切れに体感する難しい経験をしています。業務内容が、介護や作業であれば公私の区別がつきやすいですが、子どもの生活を支える業務は、公私の感覚が混じり込むようでした。切り替えがとても難しい仕事だと思います。

職員同士で取り上げられる話題はトラブル対応が先に立ち、一人ひとりの子どもに向き合う余裕は持ちにくいと思います。子どものことを生活の中で、職員同士が相談してもその数人で方針を決められるものでもありません。

家庭でも施設でも、子育ての歩調を合わせるのは簡単ではないのです。

- ① 子どもは見た目ほどわかっていないと考える
- ② 子どもの状態を言葉にして伝えていく
- ③ 子どもを落ち着かせることを優先する

この 3 つを覚えておくことをお勧めします。

誰もが子どもの幸せを願っているのですから、お互いに笑顔で過ごせる時間を増やしたいですね。



周辺からの記憶 42

2021 年度 福島

村本邦子（立命館大学）

2024 年 2 月、ニュージーランドを訪れた。ニュージーランドにはマオリのための大学が 3 校あるそうだが、一般の大学にもマオリ学部というのがある。今回、ワイカト大学のマオリ学部のモアナ（ワカレモアナ・ワイトキ）先生のお招きで、大学を訪問した。モアナ先生は臨床心理学者で、ニュージーランド心理学会の会長を務めたこともある。たまたま入学式の日で、光栄にもマオリの儀式に則った大変美しい入学式に出席させて頂いた。マオリは集団で歌いながら少しずつ客人を招き入れる。ゲストたちは返礼の歌を歌いながら、少しずつ中に招かれていく。何か問題があれば、途中で中断され、訪問がキャンセルされることもあるという。入学式でも、ホスト側（大学関係者）の主導で、少しずつゲスト側（新入生たち）が迎え入れられていった。低く太い声と身体の動きで、エネルギーの波動が場全体を包み込んでいくのを感じ、感動した。歓迎の歌と踊りが終わるとスピーチだが、これもホスト側とゲスト側が交代で次々に対話を重ねていくような形で進行し、一人のスピーチが終わるごとに返礼の歌が歌われた。

マオリ学部のサイコロジストたちに「いかにして日本の心理学は脱植民地化し、土着心理学を創れるのか？」と題する小さなプレゼンを行ったが、プレゼンに対しても常に返礼の歌が歌われるそうで、みなさん起立して、私のために歌ってくださった。何だか気恥ずかしくもあったが、とても大切に扱われていると感じた。その後もみなさんにとっても丁寧にもてなされ、マオリの人たちがいかに関係を大切にするか身を持って知った。マオリの人たちの土地に対する考え方、人やものに対する考え方にはとても共感する。たとえば、目の前に一人の人がいる時、そこにあるのは独立した個人ではなく、家族や友人や祖先などたくさんの関係性につながれた人なのである。東北の文化もそうであるが、植民地主義を内在化してしまっている日本の脱植民地化の方法は、植民地化された文化の多様性を学ぶことなのだと改めて認識した。



福島ミュージアム

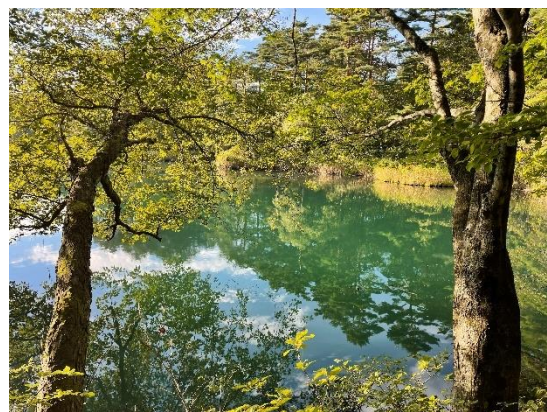
9月10日

日本赤十字社平時災害救助発祥の地

少し時間は遡るが、2021年9月の夏休み、福島のフィールドワークをした。まずは一度行ってみたかった五色沼群へ。福島に来るようになって、あちこちで写真を眼にするようになり、是非一度は訪れてみたいと思っていた。とても美しく妖艶であり、途中、何かに化かされる経験もした。次回はこの辺りに一泊してゆっくり過ごしたいと思った。

昆沙門沼に「日本赤十字社平時災害救助発祥の地」という記念碑を見つけた。説明版によると、1888（明治21）年午前7月15日7時45分頃、磐梯山が突如爆発し、死傷者500人を超える大惨事となった。日本赤十字社は医療救援者3名を派遣し、地元猪苗代町の医師ともども、昼夜の別なく、治療、診療を展開した。世界赤十字社は、当初、戦時救護を目的として誕生したが、その後、平時救護を正式に活動対象に加えることにしたのは、国際機関である赤十字社連盟が設立された1919年以降であり、先駆的な取り組みであった。1989年、百周年にこの「日本赤十字社平時災害救護発祥の地」の碑を建立したという。

偶然、出会った碑だったが、初めて知った。猪苗代湖を通してその夜は会津の東山温泉に泊まる。大正ロマンの雰囲気漂わせる洒落た温泉街だった。



9月11日 アウシュビッツミュージアム

福島菊次郎「捨てられた日本人」

翌日、約束していた白河の原発災害情報センターへ向かったが、なぜか鍵がかかっていたため、同敷地内のアウシュビッツミュージアムの方に入る。受付の人に原発災害情報センターのことを尋ねてみると、怖い顔をして両腕でバツを作り、奥に消えてしまった。とりあえず、今回の目的とは違うが、アウシュビッツミュージアムを見ることにする。こちらでも何度も来ているが、いつものようにアウシュビッツについての20分映像を観てから展示を見る。

ちょうど、福島菊次郎の特別展「捨てられた日本人」をやっていた。広島のある家族の記録で、原爆で妻を亡くし、子どもたちを養うために原爆病を抱えながら「狂気の漁」に出ていた男の物語。子どもたちはそれぞれ家出していく。一人の女の子はキャバレーで働き始め、一人は四国の士族の娘と偽って水商売をするが、それに伴い、生活保護から金額が差し引かれていく過酷さ。被写体である中村さんは、被爆に苦しんだ自分の写真や困窮しつくした現状を見せつけることで世に告発していた。福島菊次郎は、1921年山口県の生まれ。1960年「ピカドン ある原爆被災者の記録」で日本写真批評家賞特別賞を受賞。プロの写真家として総合雑誌グラビアに発表していたが、1982年第一線を離れ瀬戸内海で自給自足生活を始める。1988年病のため断念し、翌年から自作のパネルで写真の巡回展を始める。2015年、94歳永眠。

水俣病や原発とも結びつく興味深い展示だった。



三春町民族資料館・自由民権記念館

三春町歴史民俗資料館には自由民権記念館は併設されており、一度、来てみたいと思っていた。

三春町は、自由民権運動発祥の地として、東北の民権運動をリードした多くの民権家を輩出した町である。明治政府は専制政府で、社会のしくみを変える改革を次々に進めたものの人々の生活は良ならず、国民の自由を守り権利を主張する場もなかったところから、人々が国政に参加し、自由と権利を獲得することを目的に、自由民権運動が全国的に広がった。

三春町出身の河野広中は、多くの同志たちと民権運動に参加し、三春に政治結社「三師社」、青年活動家を養成する学塾「正道館」を創設し、数多くの運動家を育てた。また、関東・東北地方では例のない政治雑誌「三陽雑誌」を発刊した。三春は東北地方最大の自由民権運動の中心地となった。

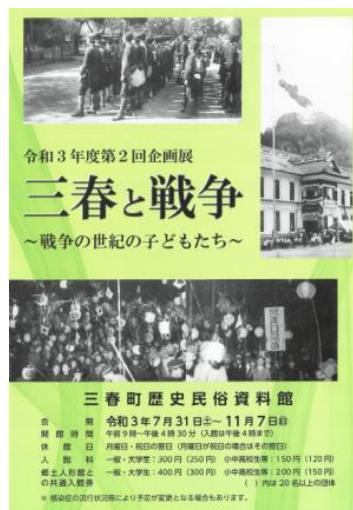
このような動きに対し、明治 15(1882)年の秋に起こった喜多方事件を好機として、明治政府の力を背景とした福島県令三島通庸は大弾圧を強行し、河野広中、田母野秀顕ら三春町出身者 10 名を含む、58 名の運動家を逮捕した。この事件は「福島事件」と呼ばれ、河野と田母野ら 10 名が有罪とされた。

福島事件以後、自由民権運動は全国で激化、茨城県で「加波山事件」と呼ばれるこの運動が起こるが、これも失敗に終わる。三春出身の山口守太郎は獄死、琴田を含む 7 名が死刑、河野広体(広中の甥)ら 5 名が無期徒刑となるなど、多数の人

が処罰された。このような運動の高まりの結果、明治政府も国会の開設、憲法の発布を検討するようになり、1889(明治 22)年、大日本帝国憲法発布、翌年に第 1 回衆議院選挙が行われ、帝国議会が成立したのだという。



歴史博物館では、ちょうど「三春と戦争～戦争の世紀の子どもたち」という企画展をやっていた。第一次世界大戦、日中戦争を経て第二次世界大戦へと続く戦争の世紀の中で、三春の人々がどのような暮らしをしていたのか、1927 年(昭和 2 年)分から保存されていた三春尋常高等小学校(その後国民学校)の日記をもとに子どもたちの「戦争」を展示したものだだった。

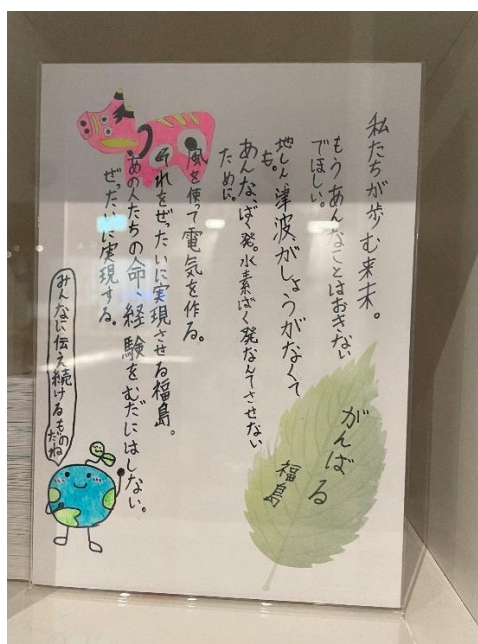
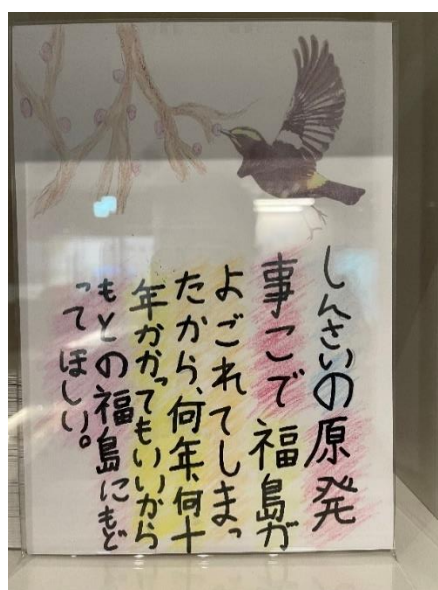


コミュタン福島

それからコミュタン福島へ。展示内容はそれほど変わっていなかったが、今ではスタッフの緊張感も緩み、未来のメッセージでは、そのまま打ち込んだ文字がボードに表れるようになっていた。ただし、黒字で直後に一度現れるだけで、カラフルな文字として残されるのは選抜されているようだった。

ジオラマで事故後 2019 年までの線量の変化を見せる展示があり、これを見ていると、少しは高い所も残っているが、時間経過や除染を経て、たしかに線量は減っているのだと感じられる。しかし、使われている数値は測定された地点のみであり、山林はじめ今なお高い数値を示すところの情報は反映されていないのである。これはトリックであり、詐欺のようなものだと思う。

また、見学に来た子どもたちのメッセージカードが並べられており、一枚一枚読んでいくと、胸が痛む。子どもたちにこんな思いをさせてきた大人社会を恥じるばかりである。同時に、すでに震災や事故を知らない子どもたちになってきたことを感じる。時間は流れているのだ。



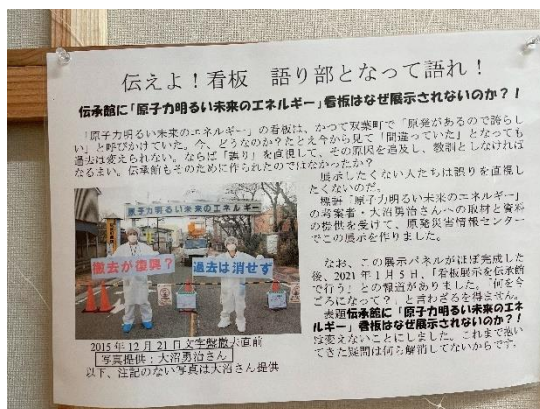
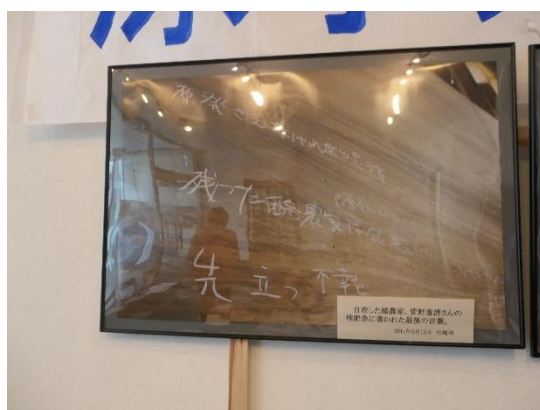
9月12日 原発災害情報センター

その夜は土湯温泉まで戻って宿泊していたが、原発災害情報センターからメールが入り、「きのうは待っていた」と。どういふことかわからず混乱したが、いろいろ調べてわかったことは、現在、「原発災害情報センター」というのがふたつ存在し、ネットから連絡して予約メールを入れたが、これまでも何度か行ったことがあるので、白河のセンターの方に行ったが、現在は大工町の方にあるのだという。ネット上には「乗っ取り」という言葉も見られ、穏やかならざるものを感じるが、もう一度行ってみることにして、白河まで戻った。

住所を頼りに行ってみると、ガラス越しに豊田直己さんの写真が見えていた。ビルの1階を借りて、たくさんの写真や資料が所狭しと展示されていた。

実物大の「原子力明るい未来のエネルギー」の標語の下に、「原発さえなければ」と書いて自死した酪農家の遺言が書かれた壁の写真がある。「遺言 原発さえなければ」という映画にもなったものである。また、小学生の時に標語を考えた大沼勇治さん夫婦が看板撤去に抗議した写真とともに、それを所有する原発災害伝承館がなぜそれを展示しないのかという抗議文もあった。

鹿児島県にある川内原発の再稼働反対の裁判闘争の市民運動も紹介されてあった。



タイベックスーツの代用として使われた実物の雨合羽、女性用外作業帽子、ゴム手袋、マスクの展示もあった。提供者は福島第一原発から2キロのところにある双葉厚生病院の医師で、原発事故時、入院患者の治療に当たっていた。突然タイベックスーツに身を固めた自衛隊員が現れ、「避難しろ」と告げられた。「絶対安全」の神話のもと、病院にはタイベックスーツは配備されていなかったため、代用として利用されたのがこの雨合羽だったというのである。



案内してくれたスタッフのお話を聞いたが、元あった原発災害情報センターの建物の所有をめぐるトラブルになっており、やむなくこの地で展示をしているということだった。とても残念な話である。早めに解決して欲しい。

いわき・古滝屋「考証館」

それからいわき市に向かう。今年の3月12日、いわき湯本温泉古滝屋に開館した「原子力災害考証館 furusato」を訪ね、宿泊した。この宿は、たまたまかつて泊ったことがある。部屋には三百年を越えるという宿の歴史がまとめられていた。原発事故に見舞われ途方に暮れていた第16代目社長、里見喜生さんは何度も先祖の墓を詣り、「父なら、先祖ならどうしただろう」と自問し、苦難を乗り越えてきたという。古滝屋には過去にも2度、存続の危機があり、常磐湯本の地で旅館を営む一人の経営者として、また多くの喪失を体験した一人の被災者として、歴史を残すことは、自分に課せられた大きな課題だと認識するに到る。その里見さんがこんなミュージアムを開設した必然性がよく理解できた。

旅館を復旧させる傍ら、被災状況を伝えるツアーを始めていたが、伝承活動の事例を学ぼうと水俣市を訪れ、水俣病に関する市の資料館や民間が運営する歴史考証館などを視察し、公的施設と民間施設が異なる視点で資料を展示し、補完する重要性を学んだそう。名前も「考証館」を受け継いでいる。

「しまくらまさし写真展 フクシマの10年」の特別展の他、娘さんを亡くした大熊町の木村紀夫さんのインスタレーション、中筋純さんの写真と三原由起子さんの短歌を抱き合わせた展示、関連の新聞記事、裁判の記録など貴重な記録が展示されていた。木村紀夫さんは津波で次女と妻と父を失くした。行方不明になった3人を夜を徹して探したが見つからないまま、原発

事故で避難を強いられた。1週間後に避難先から戻って3人を捜索しようとしたが、原発の30キロ手前の道で警備員に止められ近づけなかった。次女の遺品やその後の捜索の様子や資料などが展示されていた。



それから、考証館のFスタディツアーに参加した。汚染土を運び出すゼッケンをつけたトラックがたくさん走っている。

双葉駅周辺では、あちこちバリケードがあり、その向こうには家の駐車場にポルシェなど高級車がそのままに置かれていた。

桜で有名な夜ノ森の駅は、東京オリンピックに合わせて2020年3月14日に全線開通した常磐線の駅だった。駅前の線量計は $0.185\mu\text{Sv}$ だが、近くの草むらは $10.1\mu\text{Sv}$ という異様な状況だった。しかも、線路を挟んで東側は今も帰還困難区でバリケードがはられ、西側では避難解除され人の住む住居や車があった。何と言っていいのかわからない。言葉を絶する。





9月13日 伝言館

古滝屋に宿泊して、翌日は檜葉町大谷の宝鏡寺境内にできた「伝言館」を訪問する。このミュージアムは、長年、原発反対運動に取り組んできた早川篤雄住職が賠償金など私費を投じて建設したものである。早川住職が館長で、立命館大学名誉教授の安斎育郎さんと東邦大学名誉教授の桂川秀嗣さんが副館長ということで、三人みなさんで迎えてくださった。

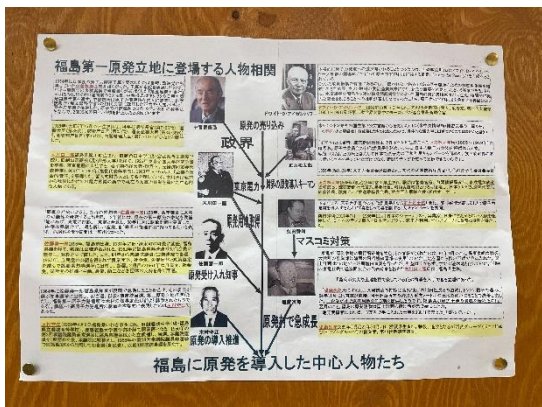
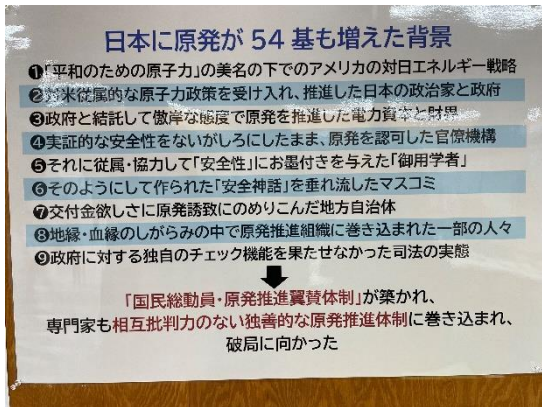
展示を見せて頂く。1階には原発推進を謳う旧科学技術庁のポスターや除染の写真、汚染水や震災関連死についての説明パネルなど約100点を展示している。地階では広島、長崎の原爆被害に関する資料、米国の水爆実験で被曝した第五福竜丸などの展示があった。

3人は始終楽しそうに戦争展示（沖縄やアイヌ）の準備をしていらっしやった。これから浪江の測定に行くという。エゴマアブラのかすで何か作れないかと、最初は石鹼を作って京都の石鹼会社に怒られたが、次は和蠟燭を作り、京都の蠟燭屋の協力も得て、付加価値もつき、これから道の駅などで販売するそうだ。

庭には、「電力企業と国家の傲岸に／立ち向かって40年力及ばず／原発は本性を剥き出し／ふるさとの過去・現在・未来を奪った 人々に伝えたい／感性を研ぎ澄まし／知恵をふりしぼり／力を結び合わせて／不条理に立ち向かう勇気を！／科学と命への限りない愛の力で！ 2021年3月11日 早川篤雄・安斎育郎」と刻まれた「原発悔

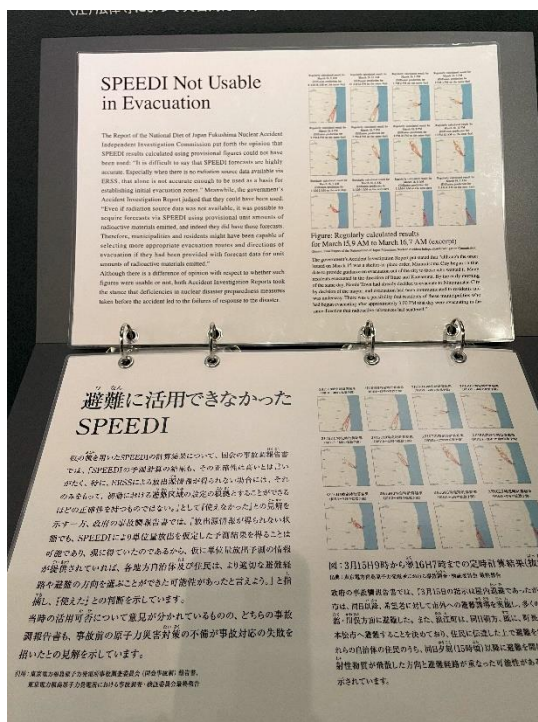
恨・伝言の碑」があり、約30年間、東京の上野東照宮境内で灯されてきたという「非核の火」が燃えていた。

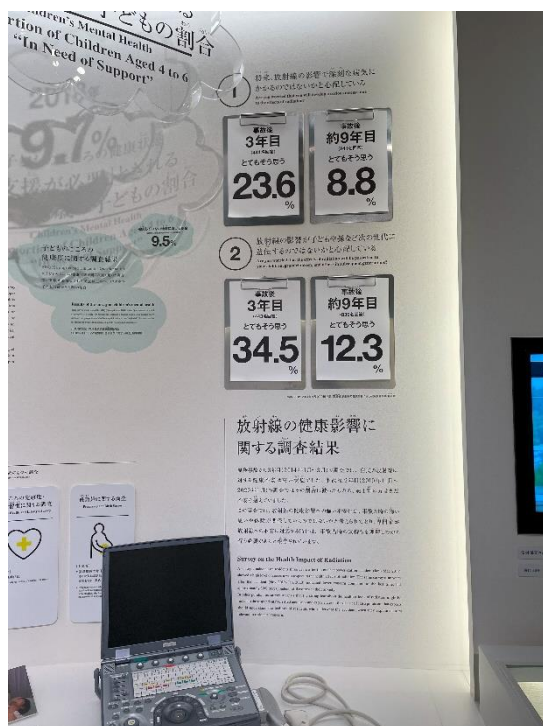




原発災害伝承館

伝承館では、まず外にある看板を見てみた。レプリカで標語は違っていた。4つの標語を交替で出すらしい。最初のコーナーでは、スタッフ（元小学校の先生だったらしい）が、アトムかばん、行政や学校や電力会社がどんなふうにくっついて離れがたいものになっていたかという説明してくれる。これが人災であること、SPEEDI が避難に活用されなかったことなどの展示はあったが、放射線による健康被害に関する問題はあたかも心理的問題であるかのような説明には大きな問題を感じた。





東日本家族応援プロジェクト in 福島 2021

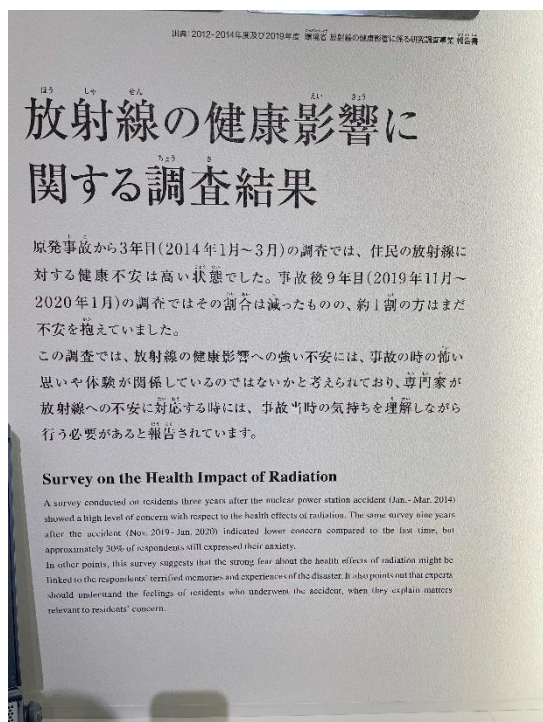
12月3日 山元町中浜小学校震災遺構へ

12月3日から5日、最終回となる福島でのプロジェクトだが、今年は毎年会場にしていた「こむこむ」が使用できず、福島、白河、いわきの三拠点での活動に加え、前後、途中で、参加メンバーがグループに分かれて自主的フィールドワークを行うことになった。

私自身は前乗りして、12月1日、授業を終えてから新幹線に乗り、東京駅まで出て、1泊したが、深夜1時過ぎに大きな地震があって目が覚めた。山梨で震度5だったようだ。

翌朝、新幹線で福島まで行き、河野さんにピックアップしてもらった。相馬の鎮魂記念館に行く予定だったが、グーグルマップを見ると山元町が案外近いことがわかったので、予定変更してそちらに向かう。民俗資料館を見てから中浜小学校遺構へ。途中、『巨大津波』に登場する八重垣神社を見た。夢いちごの郷で、ホッキ弁当といちごとりんごを買った。

中浜小学校震災遺構で受付をすると、坂本中学の校長だったという方が案内してくださった。小学校前に立つと、校舎の上の方に津波の高さがわかる。運動場に3本の旗掲揚ポールがあるが、その高さは津波に合わせてあるという。運動場の棒が気になって聞くと、日時計だということだった。時間がわかるが、2時46分のところに石があり、3月11日にぴったり合うようになっているそうだ。銀の棒の色は小学校の時間割を表



している。中央の丸い銀には過去の地震津波とその場所の方角が記されている。福島第一原発 60 キロの表記もあった。

中浜小学校はおしゃれな感じのする建物で、平成元年に新校舎を建てた。その時、町の人たちの強い要望で2メートルのかさ上げをした。これがなければ、屋上まで水に浸かっていたかもしれないということだった。「紙芝居を見ました」と言うと、とても驚かれて、「映像が見られますよ」ということなので、「是非お願いします」と頼んだ。

校長室、天井にひっかかった竹馬やのり。給食室。あの日の給食はカレーだったので、子どもたちはみんなおなかいっぱい食べて、一晩食わずでも何とかしのげたのだそうだ。ずっと気になっている子どものことを聞いてみたが、その後のことは知らないが、「あれほどの体験をしたら誰でもおかしくなってしまうですよ」としみじみ言う。「中学は大丈夫でしたか？」と聞いてみると、高いところにあるので、運動場までも水は来なかったということだった。中学校は、もともと小学校の避難所になっていたそうだ。

2階にあがると音楽室で映像を観ることができた。映像の中で亡くなられた庄司あいさんが紙芝居を読んできた。こんなところでお会いできるなんてと、胸がいっぱいになった。もうひとつの映像は(2本見せることはふつうないらしいが、今日は他にお客さんがいないから特別にとスタッフが言い、後でも、別のスタッフが最初で最後と言っていた。なぜなのか少し不思議ではある)、おもに当時の校長先生と門間先生(紙芝居を作った先生)の話だった。屋上に上がるこの階段を90人が上り、校長は最後に上ったが、「上がったら死ぬか助かるかのどち

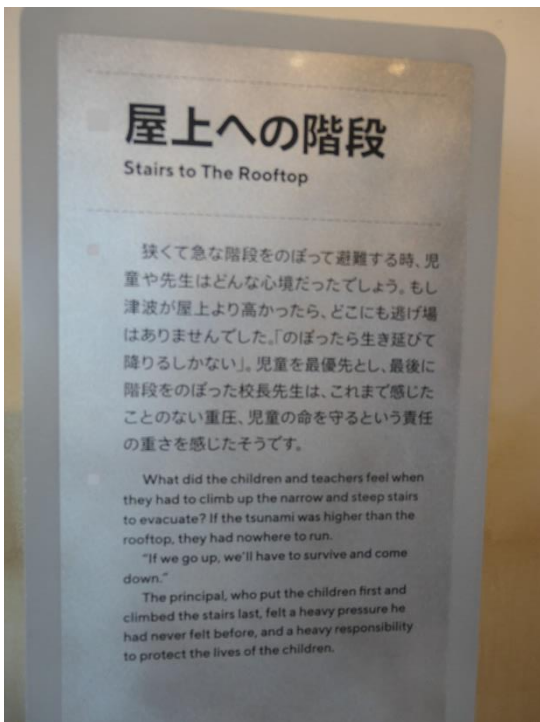
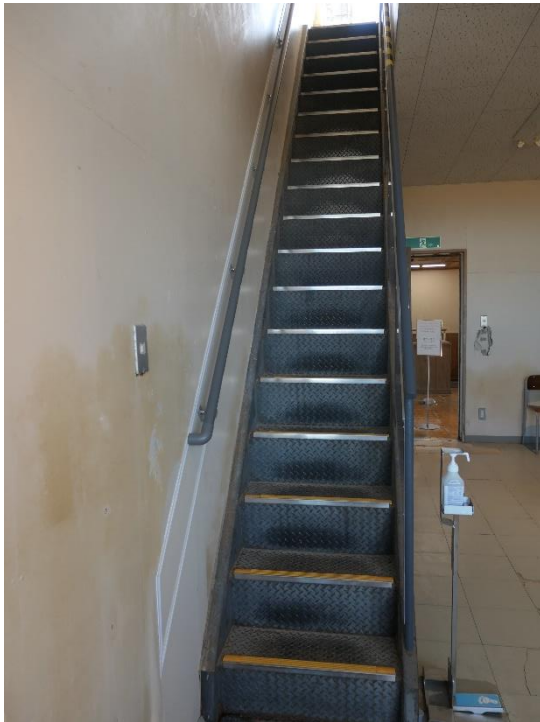
らかしかない」と腹を括ったそうだ。

最後の方で、PTA 会長が出ていて(子どもを預けていた保護者ということになる)、「何がよかったのか誰にもわからない。でも、幸運が重なってよかったと」と。偶然がいくつも重なっていることが強調され、大川小学校をはじめ犠牲の出た学校への配慮を感じた。

スタッフが交代し、階段を上って屋上を案内してもらう。子どもたちが一夜を過ごしたという倉庫。その中はあの時のままだという。撮影禁止になっていた。当時の子どもたちが訪ねてくることがあるかどうか聞くと、ほとんど来ないとのことだった。



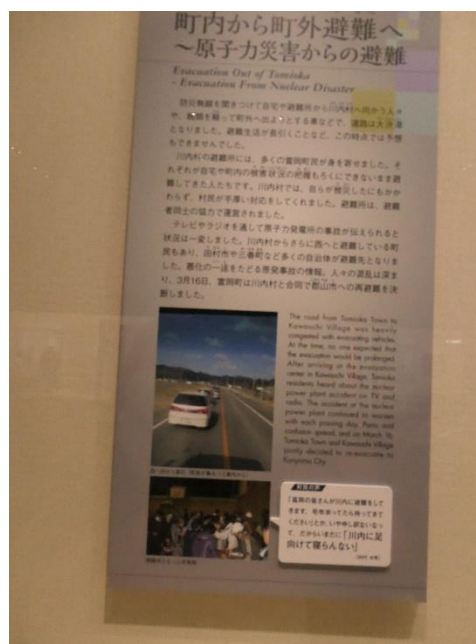
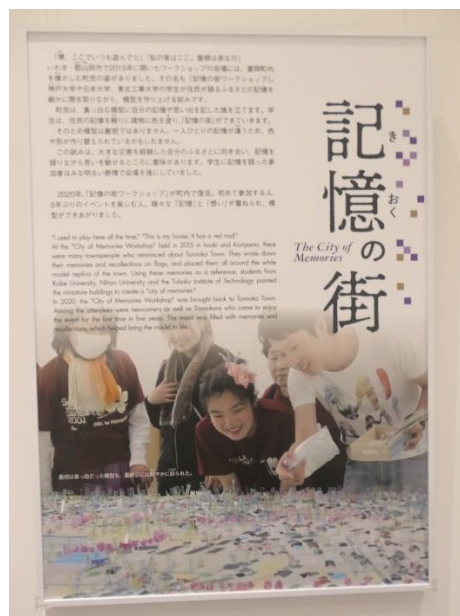


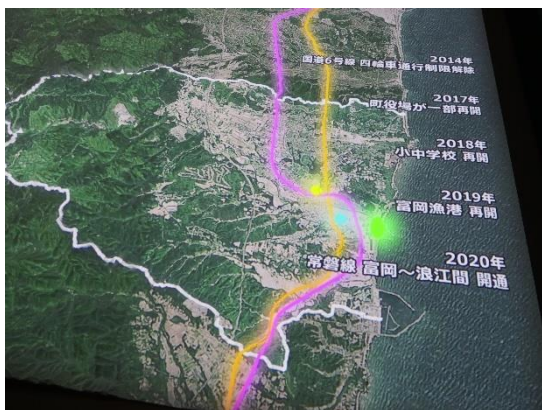
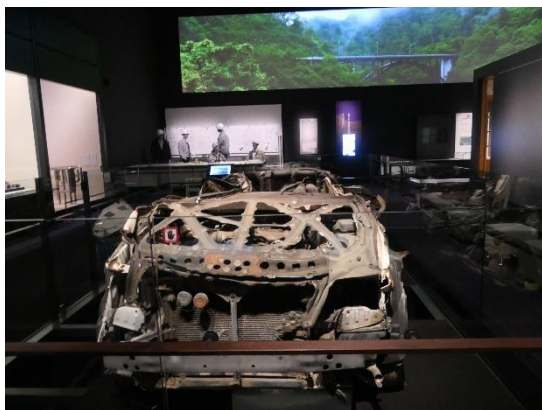


富岡アーカイブ

だいぶ時間を喰ったので、相馬の伝承館を飛ばし請戸小学校に向かうが、時間がなく閉館で、そのまま富岡アーカイブへ行った。町の歴史を残そうという姿勢が感じられた。原発誘致の正当性を伝えようとしている印象はあった。前半は地震津波中心だったが、後半は原発避難の話で、復興の強調はなかった。しかし、病気のリスクなどの話もなかった。

津波でひしゃげたパトカーや当時の災害対策本部の等身大模型などは、とてもリアルに感じられるものだった。





ふたばインフォ.

それから、ふたばインフォに立ち寄る。双葉郡の各町村のコーナー展示。写真と関連図書。図書としては幅広く置かれていたと感じがする。



ならは CanVas

暗くなってきたので、急ぎならは CanVas へ。おしゃれなきれいな会館だが、中は交流スペースになっていて、使いやすそうだなと思ったが、伝承館登録されているにしては伝承に関するものはほとんどなく、ごく一部の写真展示のみだった。



12月4日 飯舘村へ

二本松の岳温泉に泊まり、翌朝、8時半出発で飯舘村へ向かう。途中、飯舘村の極久里珈琲を通ったので、店を覗いてみたが、パンを売っていた。道の駅に立ち寄ってから、長谷川健一さん宅を弔問のために訪れる。

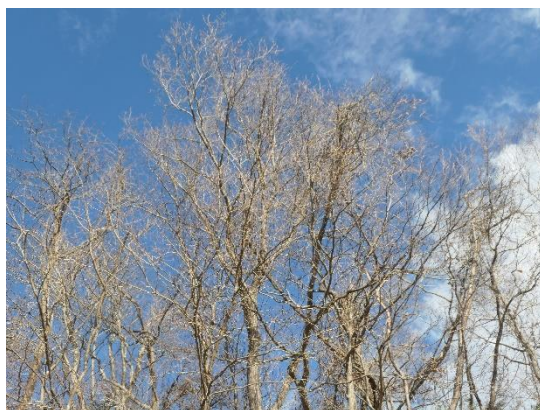
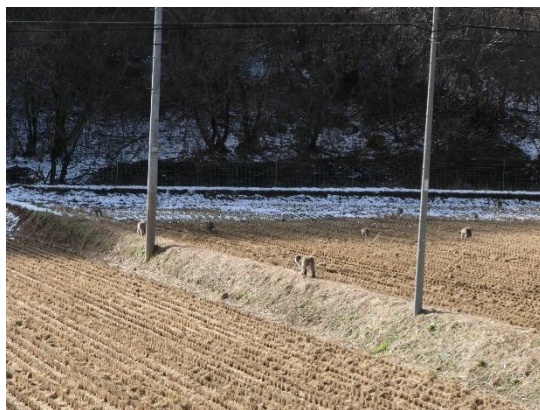
そこまでのところは、ほとんど線量は $0.1 \mu\text{Sv}$ 以下だったが、長谷川さん宅の前の道路、向こう側にフレコンバックが丘のように積み上げられ、横にはススキがぼうぼうと生えているようなところは、モニタリングポストが $0.35 \mu\text{Sv}$ を示していた。

長谷川花子さんにご挨拶をしてお焼香させて頂く。花子さんが経過を話してくれる。2月に「声が枯れているね」と病院へ行くと、「大きい病院で検査した方がいい」ということで3月検査に行って、「癌です」と言われた。医大を紹介され、手術することになったが、たくさんありすぎて取り除けなかった。放射線治療、胃ろうもした。8月、「蕎麦をやらないと」とドクターに相談し、いったん帰ってきて、段取りをする。仲間たちに後を頼むが、みな高齢なので、息子と婿がやってくれて、仲間がバックアップした。結局、おとつい終わったばかり。長谷川さんは何もかも自分でやっていたから、引継ぎもないまま、自分がやることになった。

最後の日、朝、珍しく電話があり、「充電がなくなるから充電器を持ってきてくれ」と言い、コロナで会っていないからか、「会いでえ会いでえ」と言っていた。それが午後、突然急変したと連絡あり、自分も带状疱疹で片目がつぶれ、目が見えにくいなか運転して駆けつけた。原町の方へドクターとともに移動していたが、たまたまドクタ

一の休日で、急に腫瘍が破裂して大量出血、本人もそのつもりはなかったと思う。延命を聞かれて、苦しみが続くだけだからと断っていた。明日が49日だと言う。

辛い話だった。尊敬すべき素晴らしい先輩方が次々に鬼籍に入られていく。十年続けるということはこういうことなのだとしみじみ思う。飯館はかすかに雪景色で、人のいない田んぼには猿たちがたくさんいた。



福島は今、そしてこれから

福島駅に戻り、それぞれにフィールドワークを終えた皆と合流し、初年度よりお世話になっている「NPO 法人ビーンズふくしま」の理事中鉢博之さんのアレンジで、「福島の今、そしてこれから」というテーマで、「一般社団法人ふくしま連携復興センター」のみなさんのお話を聞いた。

「ふくしま連携復興センター」は、福島大学災害復興研究所や県内の NPO とともに、2011 年 7 月に設立され、12 月に法人化された。様々な支援のコーディネートやネットワークづくり、情報発信、事業連携・協働推進をサポートする中間支援組織で、「東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が投げかけた課題を教訓として、その課題解決に取り組み多様な主体が連携を深化させ、人口減少・経済格差・社会的孤立の拡大防止に取り組む『共に助け合う市民社会・ふくしま』を目指す」としているとのこと。

復興庁の資金で動いている被災者支援コーディネート事業と、県の委託事業としてやっている福島県県外避難者への相談・交流・説明会事業、福島県復興支援専門員設置業務委託事業の 3 事業を中心に、福島県にある社会資源をつなぐことや、お互いの事業を知り合うことなどでより機能的に被災者支援ができるような事業、全国 26 か所に生活再建拠点を設置し、県外避難者が県内へ戻る時の相談や支援、また県外で住む人への相談・支援等を行っている。

ふくしま連携復興センター（2021）『FUKUSHIMA の 10 年—震災・原発事故に向き合った市民団体 50 の物語』という本を頂いたが、福島の復興に向けさまざまな

NPO がさまざまな取り組みをしていることがわかる。

4 名のスタッフたちの被災時の経験やどのような思いで現在働いているかという話も聞かせて頂けたことが興味深かった。スタッフは全部で 4 人いらっしやり、自己紹介が興味深かった。

最初の人は、福島出身で塾経営をしていたが、子どもが生まれ、転職を考え始めた時にこの仕事に出会った。二人目の女性は、福島市出身で妊娠中だった。子どもの未来のためにできることをしたいとこの仕事を始めた。三人目の男性は横浜出身で、ジャパン・プラットホーム、NGO で途上国の支援などしていたが、一番乗りで福島に拠点を作った。そのほかの国際 NGO は、当初、50 キロから 80 キロ圏内でしか活動しなかった。福島の拠点を引き上げたので、こちらの仕事に変わった。最後の女性は、福島市で震災の時中学生だった。大学生になって、観光 PR で、あちこちで福島のを食べてもらう取り組みをしているということだった。若い力を頼もしく感じた。





極久里珈琲

その後のビーンズふくしまの運営する「みんなの家」の訪問は、人数制限があったため、今回初めての訪問となる院生5名に譲り、私たちは、毎年お世話になり、去年はコロナ禍でオンラインとなったため、漫画展会場も引き受けて頂いた極久里珈琲を訪問した。



極久里珈琲は、自分たちのリズムを狂わせていけないと、コロナ禍でも一度も店を閉めず、売り上げは2割も落ちなかったから、支援金申請もしなかったということだった。さすがである。どこへも出かけられない、人とも会えない時、人のぬくもりを感じながら、静かに美味しいコーヒーを飲む時間がどれほど人々を慰めてきたことだろうかと思う。



マスターが、「きのう配達で飯舘村を通ったら雪が降っていた」とおっしゃったので、「私たちは今朝行ってきて、まだ少し雪が残っていましたよ」とお伝えした。

マスターが、「復興と言うのは、元の村に戻るのではなくて、何かまったく新しい町ができるということなんだな」とポツリと言ったことが胸に刺さった。美しい飯舘村の極久里珈琲は他者に貸して今はパン屋さんになっていた。市澤さんご夫婦が、どれほど寂しく残念な思いをされていることだろうかと思っていたばかりだった。十年の年月が経てば、どこであっても町が同じであることはないのだろうが、これは、自分たちの営みや思いとはかけ離れたところで起きた変化である。



12月4日 白河プログラム

今年は「こむこむ」が使えず、毎年プログラム協力頂いている小磯さんの属する「NPO 法人しらかわ市民活動支援会」との共催で、市民交流センター「マイタウン白河」にてプログラム開催となった。このNPOは、このセンターで、市の委託を受け「おひさまひろば」を運営している。子育て支援や情報交換の場として、親子で遊べるスペースの中で親子の交流や、子育ての相談ができ、ひろばには、保育士をはじめ、子育て研修会で学んだサポーターらが活動している。お誕生会や季節のイベント、歯科衛生士や助産師による相談事業、親子向けのセミナー等も行っているとのことである。

例年のように、漫画展の他、プログラムとして、漫画トーク、「カプラに挑戦しよう」、「クリスマスカレンダーを作ろう」だった。それにコミュニティ・カフェ EMANON の協力で、高校生6名がボランティアで加わってくれた。



それから、駅の照井で円盤餃子を食べ、翌日のプログラムに向けて白河へと移動した。

漫画展、漫画トーク

漫画展には、「それぞれの人が持つ、悩みに寄り添うこと。関わることのむずかしさを思うより、率直なコミュニケーション、言葉のやりとり、気持ちのかけ合いが大切だと感じました。」「“はっ”とする言葉です。気が付かず、他人様にひどい言葉をかけているかも・・・と思われました。人を思いやる心を大切にしたいと思います。」「人はひとりでは生きていけない。」「胸に迫るものがありました。なにげに立ち寄ったのですが、今後の自分の生き方を考えさせられま

す。ありがとうございました。」「ほのぼのとしたやさしいタッチのまんがに思わず笑い、そして泣けました。希望をもらえました。」
「あたたかい、ただひたすらにあたたかい!」「とコミュニケーションをとるのは難しいと思っていましたが、相手の気持ちや状況を考えるのが大事だと思いました。」
「コロナ禍でますますコミュニケーションが取れなくなってきましたが、なるほどと考えさせられること、身に覚えのあることばかりです。漫画トーク、楽しみにしています。」「10年で終わってしまうのですか?残念です。素敵なイラストと内容。昨日来て本をいただいて帰りました。あつという間に読ませていただきました。妹にも持っていました。なにか心に残るといいなあとと思います」などの感想を頂いた。

トークは人数制限のあるなか 20 人ほどの参加者があったが、「出来る事は難しい事ではなくて身近な所からという事がしっかり認識できてとても良かった。」「心に響くお話でした。考え方で自分が変わると思いました。」「自分自身の子育てを振り返ることができました。」「家族をはじめ、スタッフの方々の協力もあり、団士郎さんの講演を聞く機会をもらえました。今まで少し自分の考え方をマイナスに見ていたのかなと思え、見方を変える方法を知ることが出来ました。子どものためにマイタウンへ来ましたが、自分のための良い時間となりました。ありがとうございました。」などの感想を頂いた。

とても喜ばれているので、今後も続けることができたかと思っている。



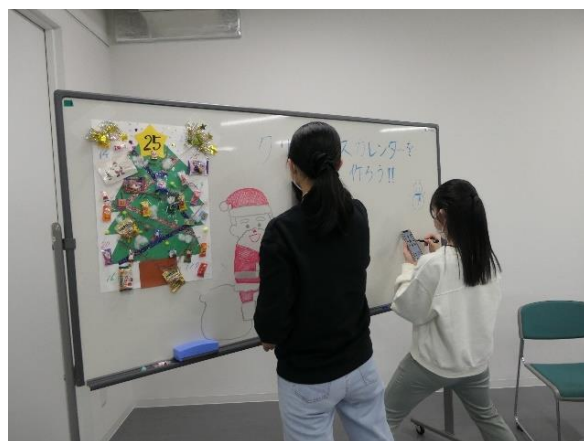
カプラ

「カプラに挑戦しよう」は小磯さんが中心に運営してくれたが、ナイアガラを作るといことで、院生たちも頑張っていた。小さい子たちには難しいものだったが、ハラハラしながら見守り、崩れ落ちる音にそこに居合わせたみんなから一斉に歓声が上がるという一瞬にして凝縮された一体感が感じられるプログラムだった。



クリスマスカレンダー

クリスマスカレンダーづくりには、9組の親子（こども13名、親11名）が参加してくれ、おひさま広場のスタッフさんや、白河高校2年の3名もボランティア参加してくれた。いつものように、子どもたちが工夫を凝らしてユニークなカレンダーを作り上げていた。「時間がかかったけどたのしかった（5歳女）」「たくさんの人にぼくのお手伝いをしてもらってありがとうございました。お菓子をたくさんはったり、飾りをつけたりしてたのしかったです。シールもあってよかったです（9歳男）」などかわいいアンケートも書いてくれた。





EMANON 交流会

その後近くの EMANON で交流会を行った。EMANON は高校生対象のコミュニティ・カフェで、無料で自習をしたり、放課後活動に利用したり、ひとりで過ごしたりと、いろいろな活動ができる。室長の青砥さんは、福島には大学が少ないので、ご自身が高校生の頃、大学生が周りにおらず、大学ついて身近に触れる機会がなかったことからこのカフェを作ったという。スタッフは現役の大学生で、OB や OG、地域の大人もサポーターとして関わっている。ボランティアで参加していた高校生たちは震災当時 6 歳だったという。時間の流れを感じる。



12月5日 Fスタディツアー

白河でのプログラム終了後はマイクロバスでいわきに移動、古滝屋で夕食を取りながら反省会を持った。

最終日は、Fスタディツアー。子どもたちの絵でラッピングされたマイクロバスで檜葉の宝鏡寺にある伝言館を訪れ、浪江や富岡を案内してもらった。



伝言館

檜葉町の宝鏡寺にある伝言館では、原発が核であることを明確にし、広島、長崎、ビキニなどとの関連性のなかで福島原発事故の問題が扱われている。また、沖縄の米軍基地問題についての展示もあった。これは、館長、副館長たちが9月に準備していたものだった。「エネルギー・アレルギー」のポスターはインパクト大であり、今回は写真を撮っておいた（前回はショックが多すぎたのか、写真を撮ってなかった）。





沿岸部(富岡・浪江)

私は9月の下見とほぼ同じコースだったが、沿岸部が初めての院生たちの衝撃は大きかったようである。

とくに富岡の沿岸部から福島第二原発がよく見える。この美しい海で地元サーファーが戯れていて、背景の第二原発との対比が何とも言えず複雑な気持ちになった。





富岡の街中には、廃炉資料館がある。また、公園には富岡町の人々の小さな慰霊碑もあった。ボランティアで作ったとのこと。大きな痛手を受けた公園の木々にも新しい芽が出て新しい枝が伸びているのだそう。途中、「福島再生」の書かれたバンが止まっていたが、ここで甲状腺検査をするのだそう。





桜並木で有名な富岡町夜ノ森周辺を歩いた。桜並木周辺は道路を除くと今なお立ち入り禁止区域になっており、バリケードが張られ、時間経過とともに朽ちつつある家や車がゴーストタウンのように並び、すでに解体されて空き地となったところには、黒いフレコンバッグが積み上げられ、それぞれの袋には放射線量を表す数字が書かれていた。

JR 夜ノ森駅まで行くと、線路を挟んだ東側は今も帰還困難区域とされる一方、西側は帰還困難区域解除となり、人々が生活をしている。常磐線とこの駅、線路を境に別世界が両側に存在する奇妙な現実が原発事故のすべてを象徴しているかのようである。来年には東側も避難解除される。





車窓からはたくさんのソーラーパネルが並ぶ光景を見た。汚染され田んぼとして使えなくなった土地を都会の大手企業が安く買ったとき、設置されているという。十年もすると、これは環境ごみになる。

ネットで見たことのある「富岡ヴィレッジ」という宿もあった。

マイクロバスの運転手さんは櫛葉出身で、第二原発で働いていた。クレーン車が折れて亡くなった人いたそうだと。里見さんが「フクシマ 50」を話題にしたので、「見られましたか」と聞くと、運転手さんは「怖くて見れない」と、里見さんも「先に話を聞いているから見る気がしない。ヒーローのように描く」とおっしゃっていた。

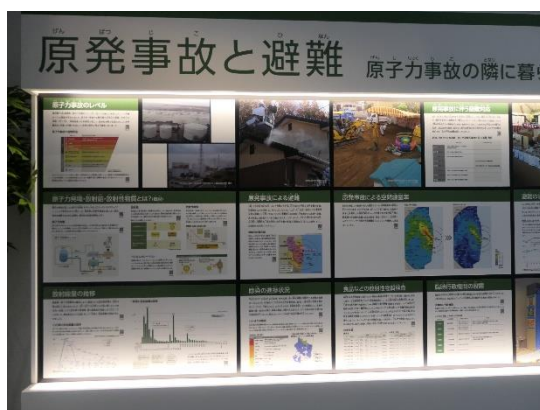
バスのなかで、里見さんが院生たちにいろいろなことを話してくれた。宿坊体験で食事を頂く際に、「この食べ物を食べるだけの価値がある人間か」と問われたことがある。命を頂いて、私たちは自分の生を支えているのに、生産現場で何が起きているかも、生産者の苦労も知らず、サービスをお金で買って消費している。福島で起きたことも同じで、原発事故で放射線被害にあったのは原発に隣接する地域だった。原発は都会で消費されるための電気エネルギーを作り出していたのに、消費者たちは原発事故のダメージを受けず、事故は過去の出来事として忘れられていく。でも、放射性物質は、現在も、そしてこれからもずっと街と自然を汚染し続ける。

お昼過ぎに解散し、それぞれでフィールドワークを続け、帰路に着いた。

いわき震災伝承未来館

私は、いわき震災伝承記念館といわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11 いわきの東日本大震災展」などを訪れた。

いわき震災伝承記念館は海辺の高台にあった。津波被害、放射線被害など震災当時の様子が映像や写真で見ることができた。ピアノ展示があったが、これは津波被害にあった旧豊間中学校のピアノで、市内にあるピアノ店の店主が譲り受けて原状回復させ、今では「奇跡のピアノ」と呼ばれているものだそうだ。伝承とともに教訓、防災についてのコーナーもあった。

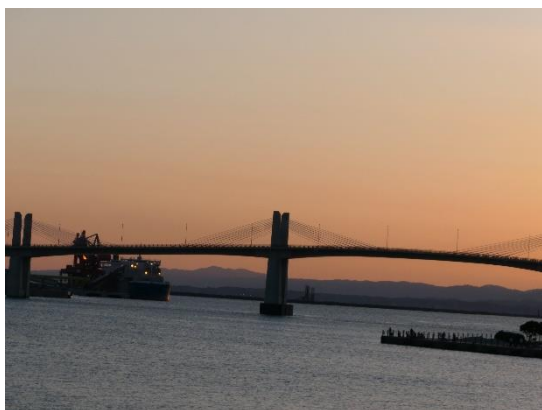


いわき・ら・ら・みゅう

あまり時間はなかったのだが、伝承施設として登録されている「いわき・ら・ら・みゅう」まで足を延ばした。これは基本的に観光物産施設で、飲食店や土産物の販売が中心のようだった。一角に「3.11 いわきの東日本大震災展」というコーナーがあり、そこで、震災時のいわきの様子をパネルや映像で展示していた。

大惨事での苦難とともに、やはり、復興や未来といった人々を鼓舞するメッセージが溢れており、共感し、そうであって欲しいと希望する一方で、外部者は影の部分にも眼を向け、責任を背負い問い続ける姿勢が必要であることを心に刻まなければならないと思った。

つづく



精神科医の思うこと③②

『恋する力』

松村 奈奈子

ここ数か月、診察している患者さんが続けて3人、「好いてくれている人ができて」「彼と一緒に過ごす夜は、睡眠薬なしで眠れます」なーんていい話をしてくれて、症状が改善する事が続きました。そうそう、当たり前ですが、恋が上手くいくと、人の心は安定します。精神科の診察をしていると、「人を思ったり」「人に思われたり」で病状がよくなるのをよく体験します。なので今回のテーマは「恋する力」

ほんと、「恋」の力ってすごいなって思います。

まだ私が30代の頃、数年前に夫を亡くして「よく眠れない」とちょっと元気のなかった60代の女性が通院されていました。しかし、数か月前からなんだがお肌がツヤツヤしてイキイキしてきました。思わず「何かあったんですか？」と聞くと、「うーん、最近カラオケ仲間ができて」と話します。「なんだか、お肌がツヤツヤしてきれいなので、気になって」と思わず聞いてしまいました。すると「いろんな男性に、食事に誘われるの」「うーん、でもみんな、いまひとつなのよー」と微笑みます。確かに、美人さんではないけれど、ほわっとしたやわらかい感じが魅力的な女性でした。そーゆーことか！人から思われてるのね！と納得しました。そして、男性に告白されて「ドキドキ」体験が続くと、60代の女性でも、肌がツヤツヤの変化を遂げるのかーと若かった私は驚いたのを覚えています。あの女性の、きめ細やかな肌の美しさは、今でも鮮明に記憶に残っています。

そして、もうひとつ。

拒食症という摂食障害のケース。拒食症は体重が減って、ある一定の体重まで痩せてしま

うと「生理」が止まってしまいます。そして、治療の過程で、ゆっくり体重がもどり、また一定の体重になると「生理」が再びもどってきます。人間の身体とはよくできていて、体重減少すると、「生命」を維持する事が優先し、生殖機能のひとつである「生理」は止まり、カロリーを消費しないように脈拍がゆっくりになったり(徐脈)と変化します。

で、回復の過程で多くは一定の体重に戻らないと「生理」は戻らないのですが、「恋」をする患者さんは、その規程の体重よりかなり低い体重で「生理」が戻ることがあり、「えっ、そんな低い体重で生理がきたの？」とびっくりする事がよくあります。「そういえば、前の男性担当医の事、好きとかいってたな」とか「男性に声かけられて、ご飯に行くっていったな」と思い当たる「恋」の存在があります。「恋」は女性ホルモンを誘発してくれるすごい力を持ってるなーと目の当たりにさせられる体験です。数年前、拒食症の治療で体重が改善しても、なかなか生理が戻らない女子大生に「恋すると生理が来るよー」と話したら、「それ、前の病院の先生も同じこと言ってたわ」と笑われました。そうなんです、拒食症の治療をしている先生は、みんな体験している、あるある話です。「恋」という心の変化が、ホルモンを誘発するんです。

ただ「恋」する力、みんなが持っているわけではありません。

うつ病のしんどい時などは「恋する」エネルギーもないので、「恋」ができる状態は、ある程度、快方に向かっている途中の状態だということなんですけどね。

大切なことは、健康的に継続する「恋」は自己を肯定し、自分を大事に思える状態でないと、できないという事です。よく患者さんに話すのですが「オレ、自分の事嫌いやけど、お前のこと好きや」という状態で、恋が成立することはないです。だって、自分の事も大事にできないのに、人を大事にはできないですよ。「オレは自分の事が好きだし、お前の事ことも好き」と言える状態が大切。これは「恋」に限らず、友達に対しても同じです。

精神科を受診する多くの患者さんは、自分を否定し、自分を大事に思えない状態で診察室に来られます。精神科の治療の経過の中で、自己を肯定し、自分を大事に思える状態まで回復するのをお手伝いするのが、我々の仕事かなあっていつも思っています。そして「恋する力」がでると、それはお薬よりもよく効いて、「恋」が安定すると治療は終わります。

そして、恋する相手も大事です。私は基本的に「自分を大事にしてくれる人と一緒にいる事」「自分を大事にしてくれない人とは距離をとる事」が、精神的に安定するために必要と繰り返し患者さんに話します。あたりまえの事です。子供の頃からの環境で「大事にされないのがあたりまえで育った人」を、「大事にされるのがあたりまえ」に変化させるのは、なかなか難しい。だからこそ、すべての患者さんが、健康的な「恋」をして、治療が終われるわけ

ではありません。ただ、自分を粗末に扱う人と一緒に過ごして、精神的に安定する事はないと考えています。

だからこそ、複雑な環境で育った患者さんが治療を通して、大事にしてくれるパートナーと「恋」をして、治療が終わるのは嬉しいです。

で、「恋のちから」。かくゆう私も、結婚する前はウキウキしていた時がありました。ずーいぶん前の話ですが、結婚が決まってしばらくは患者さんに何も話していなかったのですが、何人かの患者さんに「先生、恋してる？」とツツコミを入れられ「えー、そんな感じするんですか？」とぼけて返していました。その後、結婚でいったん病院を退職する事となり、それを告げた時に「やっぱ、オレの言ったとおりやったやん」なーんて言われて小突かれました。その時の私、お肌がツヤツヤだったのかもしれませんが。

「恋」に必要な「自分を大事に」は、精神科では大きなテーマです。また、別の機会に詳しく書きたいなっています。

居場所の大人にできること - 子ども食堂篇Ⅴ -

馬渡 徳子

元旦の被災を受け、短信でも述べた「いしかわ家族面接を学ぶ会」の発起人である寺本紀子さん(以下寺本さんと略す)の呼びかけで、「報道されない支援が必要な各地の状況と、支援しようとする団体や人々の直近の状況を共有するグループLINE: のと応援隊」が立ち上がりました。

実のところ事務局員は、自身や家族が当事者であったり、職務上から休日もままならない激務の中に身を置いております。そのような中に、このグループLINEで直近の実情を共有し合い励まし合いながら、一日一日を前に進めています。

寺本さんと2004年4月に「いしかわ家族面接を学ぶ会」を立ち上げてからの15年は、事務局員は石川中央地区に限られソーシャルワーカーのみでしたが、コロナ禍を経て現在では能登地区にまで拡がり、職種も多様になりました。

講師の団さんと約束したことがあります。①地元でつながる多様な人々とともに活動すること、②公的資金に依存して受講費無料で実施することはない、ということでした。

今回、20年の時を経て、阪神淡路大震災以降の大災害時に現地に赴き支援活動を行ってきたメンバーも多く、また事務局にフォーマル・インフォーマルな組織メンバーもいることを活かした活動ができていて、正に団さんと早樫さんのおっしゃられた「継続は力なり」を実感しています。

さて、我が子ども食堂では、1月4日に緊急三役会議を開きました。そこで決めたことは、①子ども食堂は止めない、②当事者となった方々の話をしっかりと傾聴する、様子の変化を観察し、気になることはスタッフで情報共有し、場合によっては当事者の同意のうえで専門職の支援につなぐ、③奥能登への支援は、元旦から活動開始して

いる母体の石川民主医療機関連合会の医療班活動を最優先し、現地のニーズに基いた支援物資と支援者支援金(ガソリン代等に充当)を届ける、④全国からいしかわ家族面接を学ぶ会の事務局員を通じて集まった支援物資は、ターゲットを絞って支援が届いていない状況にあるところや人々に届ける、⑤石川中央地区に自主避難、二次避難された子育て世代を中心とする家族全体に必要な支援物資は、受け入れ先となっている学校や学童保育、保育園、放課後児童等デイサービス、自治体の子育て支援課等に赴き、「子ども食堂において!のチラシ」を手渡し、実際に必要とされている物資をリサーチしながら、個々の組織としての主体的な取り組み状況に配慮しながら届けていく、⑥支援物資の作業は、当事者の方々や子どもたちにも呼び掛けて一緒に行う、⑦金沢大学の学生ボランティアは、それぞれがヤングケアラーや生活困窮者世帯等の学習支援、カタリバ等の活動をしていることから、想像力豊かな柔軟な知恵や力を発揮して頂こう、⑧今回の活動を通じて得られた各自治体毎の社会資源情報をまとめて、公的支援の拡充に提起していく、ということでした。

実際に、公式ラインとInstagramで広報すると即日に支援物資が集まり、毎週賑わっています。制服(標準服)とランドセルや中学の鞆、学用品のうち、小中学校の制服(標準服)は順に各学校PTAでも取り組みが広がりましたので、ランドセルと学用品がとても喜ばれました。1月中旬からは大雪の日が

続きましたので、各保育園よりのスキーウェアのリクエストにも直ぐに応えることができました。子どもたちも大人も手に握ることができるサイズの気持ちの良い素材のぬいぐるみや抱き枕になるぬいぐるみがとても喜ばれました。また、物資を提供された子育て世代の方々からは、「何かしたいけれども、募金以外に何をすればよいかわからずもやもやしていた。今回具体的にできることを示してくれたので、嬉しかった。」学校、保育園や学童保育からは、「初めて保護者にも支援を呼びかけた。反響が手に取るようにあり、コロナ禍で停滞していた保護者会活動が活発化するきっかけとなった。」「職務上、奥能登にも避難所への職能団体にも応援に行けず、歯がゆい思いをしていたが、職場で迎える側としてできることを考えることができた。」との感想をいただきました。

高齢者の方々や地域の介護保険施設に避難してこられた方々は着の身着のまま来られていました。支援物資が山盛りになった1月中旬のことです。避難してこられた高齢者の方々が、「日中親戚の家に居て、とても気兼ねなので、こちらに来たら気分転換できるかな、何か手伝えるかなと思って電車できました」と申し出いただいたことから、高齢者向け物資の仕分けをお願いしました。施設の職員さんも来られて、「そうそう、こういう服が欲しかった。65でなくて50歳以上の方向けという仕分け表示は良いわねえ。」とのことでした。



支援物資仕分け作業の初日には、こんなこともありました。

私たちスタッフが、サイズと性別で段ボールに仕分けしようと記載していたら、子どもたちに「それは、今の時代にアウトやよ。サイズと種別だけでいい。」と指摘され、ハッとしました。学用品も、小中学校毎に規則があり、学校に持っていけるものと普段使いのものとの仕分け提案をされました。子どもたちでないと気付けません。以後表示や仕分け区分は、子どもたちにお願ひしました。実際に来所いただいた方々からは、これは選びやすいねえと好評です。

集まった支援物資は、来所だけではなく、他の子ども食堂や奥能登の避難所となっている学校にもお持ちしてきました。

そうそう、のと応援隊では、3月の卒業式を前に、能登地区の高校の制服支援も OB を中心に拡がり、無事に間に合うことでできたそうです。

2月に入ってから、2014年から毎週火曜日昼に継続してきたカレー食堂に、二次避難してこられた能登の

方々が、お互いに連絡を取り合って食事と交流を目的に来所されるようになりました。そこで、始まったのが、2月20日からの交流会です。こちらの企画のファシリテーターは奥能登で元公民館主事をされてこられた方です。ホストも能登の方というところが良いなあと思います。どうやって連絡を取り合ってこられたのかと伺うと、震災前に長く地域で健康教室やレクリエーション活動のリーダーをしてこられた方が、毎週一回地元に戻り、こつこつとご自宅や避難所への訪問を重ねて、メンバーの現在の居所を尋ねられたそうです。二次避難先でも、電話や待ち合わせをして対面で逢うなど、孤立しないように、有益な正しい情報を取得して必要な手続きや行動選択ができるように支え合っていました。

私たちスタッフは、その席に居て、「果たして自分たちはこのような行動がとれるだろうか。人生の先輩方から学ぶことばかりだなあ。」と率直にふりかえる機会となりました。

何でも語り合ひましょう 能登からの避難者あつまれ！

2月20日(火) 14時～16時

お昼はえがおカレー食堂へ

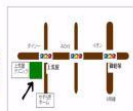
11時30分～13時30分



毎週火曜・被災者は無料です

お知り合いの避難者にお知らせください

えがお会館大ホール
金沢市上荒屋1丁目380



西ブロック健康友の会
連絡先 076-281-6020
矢澤 幸恵
090-8261-6760

さて、2017年に子ども食堂を開催するときに、皆で約束したことがありました。

①子どもたちは、ファーストネームで呼びましょう、②誰れをも排除しない、③いろんな人々が関わっていることを愉しみましょう、④誰もが、居たいようにいられる場所をつくりましょう。⑤あつたらしいなと思われる制度は、どんどん行政に提案しましょう。

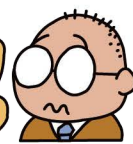
体験しないと観えていなかった
世界があった。

体験したからこそ
自分のからだの声に
素直に耳を傾けながら、
自分と大切な人々を守るために
やれることを考え生きていきたい。

どんな未来を手渡すのか
まわりの人々と一緒に
考えながら歩みを進めたい。

2024年2月25日

東成区の昭和 やぶにらみ日記



柳たかを 絵と文

母の愛情

僕の小学3年の春休み、父の写生について奈良吉野の山中を歩きまわり、疲労から風邪をひいた。

翌日、熱があるのに無理に登校し授業中に高熱が出て、小遣いさんの自転車の後ろに乗せてもらって早退した。

そこから3か月、肺炎で生死をさまよった。

戦後、まだ貧しい時代、日本画家の父は日銭稼ぎで学用品にイラストカットを描くアルバイトをして家族を養った。

戦争で活動停止していた青龍社(川端龍子主催の日本画団体)が再開し、父も先輩に誘われ画

家に復帰するため作品応募しカムバックしようともがいた。

ただ作品制作期間はアルバイトを辞めるため収入がなく、僕の治療費もかさみ、家族6人にとって試練の日々。ただ高熱で苦しいさなかでも僕は心のどこかで楽観していた。

父の入選の知らせを聞いた時も絶対そうなる気がしていた。

振り返ると前向きでマイナス思考と無縁の気性の母の愛情に守られていたように思う。

子の生を強く信じる心が家族と僕を生かしてくれたのだらうと。

(やぶにらみ日記・完)

※次回以降は番外編でお目にかかります



やぶにらみ日記 (590)

東成区の沼和

(132) 写生



やぶにらみ日記 (591)

東成区の沼和

(133) 写生



やぶにらみ日記 (592)

東成区の昭和

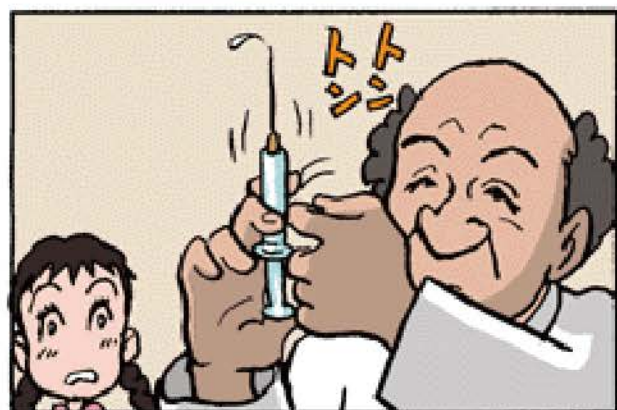
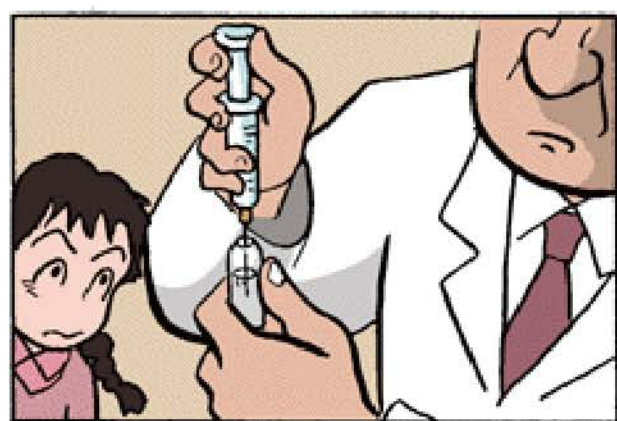
(134) 写生



やぶにらみ日記 (593)

東成区の昭和

(135) 写生



やぶにらみ日記 (594)

東成区の昭和

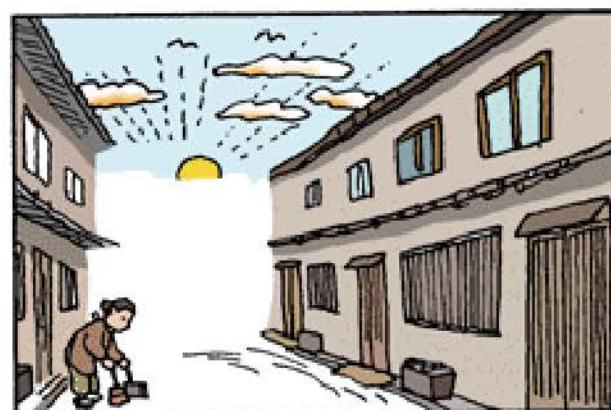
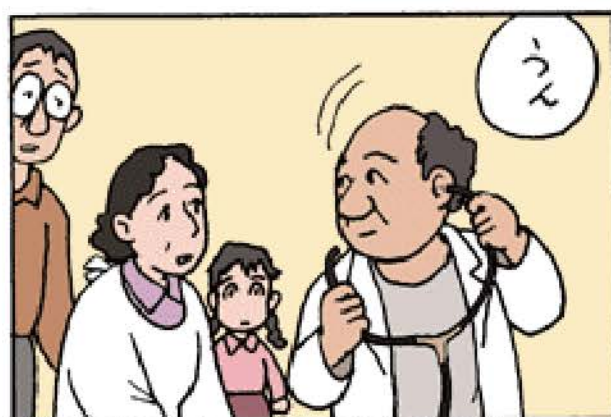
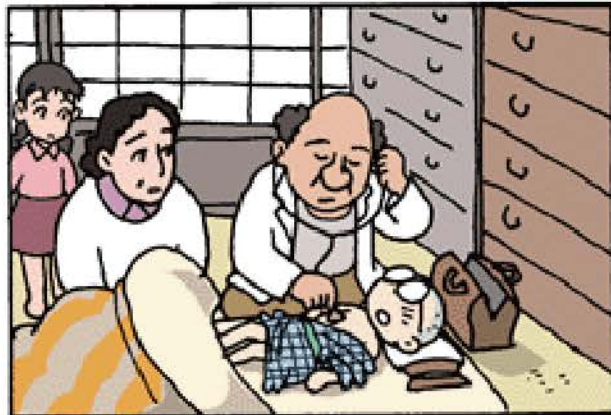
(136) 写生



やぶにらみ日記 (595)

東成区の昭和

(137) 写生



やぶにらみ日記 (596)
東成区の昭和
 (138) 写生



やぶにらみ日記 (597)
東成区の昭和
 (139) 写生







やぶにらみ日記 (602)

東成区の昭和



(149) 写生



やぶにらみ日記 (603)

東成区の昭和



(150) 写生 おわり



心理コーディネーターになるために Vol.13

山下桂永子

☆契約更改の話

数年前の年明けのある日のこと、週 4 日で勤めている教育センター所長から応接室に呼び出された。相談員は全員単年度契約の職員であるので、毎年この時期に来年度に向けての採用面談があって、勤務についての継続の意志確認などが行われる。

そこではいつも私は相談員不足の現状を訴え、相談員の給料を上げてほしいことや、自分の給料を上げてほしい話などをするので、所長からは「山下さんはアメリカ人みたいやねえ」などと笑われたこともある。自分の給料の交渉をする人は珍しく、ましてお金のことを細かく言うような対人援助職たる相談員はもっと珍しいらしい。自動的に毎月同じ日に、毎年確実に増えていく数字が口座に振り込まれる公務員である所長からすれば、私のような存在はあまり他では見たこともないタイプであるのだろう。

しかし、その年は少し勝手が違い、なんと所長から来年度の給料について話があった。お金の話をするのは、所長にとって慣れないことのように、なんだか何とも言えない作り笑いのような笑顔で給料の話をされた。



☆会計年度任用職員という制度

細かい言い回しは覚えていないが、内容として言われたことは 2 つ。1 つは来年度から賞与が出るということ。もう 1 つは月収が下がるということ。「はあ。。。と生返事をする私。頭の中が一瞬「???」マークでいっぱいになった。「えーと、つまりそれはどういうことですか?」と私が返したところ、所長が言うには、「会計年度任用職員」という新しい制度により、非常勤の職員にも賞与が出ることになったのだが、来年度は制度による変更の予算が組まれていないため、年収を上げるわけにはいかないから、トータルの年収が上がらないように賞与の分を給与から差し引くということになった、賞与が出るし、年収も下がらないから特に損はないとの

こと。所長としては、穏便に話を済ませようとしたのに、私の表情がどんどん曇っていくのを見て、焦っていたかもしれない。所長は必死に「年収は変わらないから」「会計年度任用職員は昇給もあるらしいけど、山下さんの雇用は、事務職の最高等級だからこれ以上昇給はできないんだよ」などと申し訳なさそうに繰り返し訴えていた。



☆よみがえる雑誌のキャッチコピー

結局年収変わらないってこと？いや、なんか言っていることおかしい。ボーナスが6月末に出たら給料増えたことになるから社会保険料の計算変わってくるやん。そもそも会計年度任用職員の制度を所長もわかってない気がする。

頭の中に数年前に出張先の近くのコンビニで買って読んだ経済雑誌の「就職氷河期世代を救え！」という見出しがかけめぐる。就職氷河期世代が非

正規雇用が多くてひきこもりも多くて大変だから何とかしようみたいな内容だった。読んだあと「こんなもんで救われるかあ！」と若干の巻き舌で叫んで出張先のビジネスホテルのベッドに雑誌を投げつけた。この30年の不況とデフレの中で、自分は自ら選んで非正規雇用を続けてはいたが、同時に無自覚に経済的に搾取され続けてきた世代であることを思い知ったあの時のことがよみがえる。

どこから突っ込んでいいのかわからない。ゆっくりと怒りが奥底から湧いてくるのを必死に抑えながら冷静に話そうとしたが、おそらく抑えきれていなかったと思う。

☆就職氷河期世代、火を噴く

「年収は変わらないとおっしゃいますが、賞与が6月に出たら社会保険料が増えることになるんですよ。つまり月収が減らされて社会保険料が増えたら手取りが減らされることと同じですから年収が下がったことと同じです。」「仕事は増える一方なのに、固定給で年収が上がらないところから納得いってません。事務職の最高等級とのことですが、心理職を事務職として雇用しているところから間違っています。事務職にも失礼だし、心理職は専門職のはずです。」「この給料ではあと数年が限界と去年も申し上げましたが」「そもそもこの制度は、同一労働同一賃金の実現に向けての制度のはずです。元からスクールカウンセラーよりも相当安い賃金で教育相談員は働いているのに、これ以上格差を広げてどうするんですか」「私はスクールカウンセラーを週1日やって、ここの給料が足りないところを補充して生活していますが、それでも独身で扶養家族がいらないからできていることです。相談員

の先生方の中には、私よりも低いここの給料だけで家族を扶養して生活している先生もおられます。ご自分の同年代の相談員の先生の給料がいくらかご存じですよ？そこから月収がひかれて生活が回ると思いませんか？」「私は1円でも年収が下がったらその時点ですぐ辞めます」などなど、もうここでは書ききれないほどに所長を問い詰めるように言ってしまった。

ここで所長に文句を言っても変わらないのはわかっている。でもせめて現状を知っていてほしいという気持ちが強かった。経済的格差をなくすために作られた制度であるはずなのに、制度の本質が理解されないまま運用されるとこういうこ

とが起こるということ、良かれと思ってやったことが、実際には搾取につながっていることもあるということ



☆双方無自覚の搾取

所長もまさかそこまで私にまくしたてられると思ってもしなかったと思う。実質手取りが減るかもしれないということも知らなかった様子で、「いや。。。年収は減らないって聞いて

ますから。。。ちょっと制度の確認しておきます」とやや慚然とした様子で話を終えたあと、人事に確認の電話を入れたり、市役所まで赴いて話をしていた様子であった。

そこからしばらく後、所長より、会計年度任用職員制度について確認したことの内容の説明があった。結局私の手取りが減ることはあるかもしれないが、今後人事や会計と話し合っていく、給与制度を変えるのは議会を通さないといけないので難しいなど話していた。それについては、私もそれ以上何か言うつもりもなかったが、内容説明の中に給料日が変わるということが含まれていたので、「毎月10日だった給料日が25日になるということは、実質半月無給になるわけですから、生活費の予定やカードの引き落としに関わるかもしれません。すぐに他の相談員に説明してください。」とだけ伝え、相談員の会議で説明する機会を作ってもらった。

所長は丁寧に説明してくださったが、私とのやり取りの口調からは苛立った様子が伺えた。

所長の苛立ちは無理もないことと思う。人事や会計の部署から国がこういう制度を決めたからと言われるがまさに、来年度の雇用契約について説明しただけで、ここまで文句を言われるとは思ってもしなかったと思う。数年前までは学校現場で生徒を相手に教鞭を取っておられた先生である。お金のことについてなど誰か

と話す機会もなければ、従業員の雇用や社会保険料の制度について知る機会もないし、仕事に忙しくてその時間もなかっただろう。そもそも非正規雇用の問題なんて自分とは関係もないし興味もなかったことだろう。普通に定年まで迎えれば世代的にもおそらく年金の心配もする必要のない公務員である。そんな所長からしてみれば、私は 20 年近くパートタイマーで賞与がなかったわけだから、賞与が出ることは喜ばしいことだろうし、それを伝えることで私が喜んでくれると思っていたかもしれない。それまで現場の教員の時には想像もしなかった煩雑な業務をこなしながら、一生懸命相談員の声にも耳を傾けて動いてきたのに、その相談員に牙をむかれたわけである。不機嫌にもなろう。

所長には悪気はないが、従業員の雇用や立場への知識もなかった。それゆえに残酷である。非正規雇用を救うための制度が現場に卸されてきたとき、矛盾が生じて付け焼刃のような数合わせをしようと小細工をした結果、非正規雇用をさらに追い詰める。これまでの信頼関係にもひびが入ってしまう。私が無自覚に搾取されてきた世代ならば、所長は無自覚に搾取続けていた世代と立場でもある。

☆お金と権利にうるさい相談員の誕生

このことがあってから、私は以前にもまして、相談員の雇用や待遇について所長やその他の指導主事や事務職員などと話をするようになった。所長は大抵 2～3 年で交代する。新しい所長になるたびにできるだけ丁寧に、そしてざっくばらんにコミュニケーションを取りながら、教育相談について、相談員の給料や心理職の待遇について話をする。怒って権利を主張するだけではうまくいかない。怒りは怒りを呼ぶだけなのである。無自覚な搾取を止めるためにはまず自覚してもらう必要がある。そして伝えて知ってもらうだけでなく、私自身も制度を理解し、教育委員会の組織についてや人事、会計の仕組みもたくさん聞いていく。対話による相互理解である。その積み重ねの中で少しずつ、相談員の待遇や教育相談活動が充実したものとなっていくはずである。

教育相談をしていく上で、教育相談は多職種とのチームによって成り立っていることを胸におきながら、これからはお金にちょっと細かい、権利にちょっとうるさい相談員になっていこうと思っている。





福祉職員さんの意識の変化、知識の深化が早期支援につながった

今回は、人もねこも一緒に支援プロジェクトの活動からマガジンを書きたいと思います。やっと、多頭飼育崩壊が起きてからではなく、起きる前に予防的に対応できるようになってきた気がする！なぜなら、、、という内容です。

多頭飼育崩壊の背景や支援について、福祉職の方向けにここ数年研修会の講師依頼をいただくことが増えてきました。京都市さんとは「高齢者とペット問題」というテーマで福祉職の方向けに参加無料の研修会を実施し、参加してくださった方には個別相談にも対応するという取り組みを始めて2年目になります。去年は ZOOM でしたが、今年はコロナもあけたので、各区役所を会場に実施しました。

研修では、「多頭崩壊に陥りやすい方は、経済的に困窮している方、高齢や障害等で社会的に孤立しがちな方といった特徴があります。そういったリスクの高い方が猫の飼育をされていたら、不妊手術をしているか確認していただき、もし未だしていないようであれば、早めに相談してください」と伝えていました。多頭飼育が崩壊状態になる前に、数匹の段階で予防的な支援に入るには福祉職の方との連携体制の構築が不可欠だと思っていたからです。ただ、正直なところ、初めの数年はあまり効果を実感できる機会が少なく色々悩んでいました。しかし、昨年くらいから多頭飼育が崩壊する前に相談をいただけるケースが増えてきました。

NPO として福祉系の案件に係わるようになって7年。初めの頃は、あれこれ提案しても生活保護担当部署の偉い方に「多頭飼育崩壊なんて100ある問題のうちの98番目くらいですよ！」と一刀両断されて凹んだりしていましたが、だいぶ風向きが変わってきたなと感じます。そこで、今回のマガジンでは、2023年度に人もねこも一緒に支援プロジェクト（NPO）で対応したケースを振り返りつつ、現場で感じた事を書き連ねてみようと思います。

ケース① 70代男性1人暮らし猫5匹。

相談者：地域包括支援センター

相談内容：「高齢者の自宅で子猫が産まれたので、子猫を保護してもらえないか」

回答：子猫の保護よりも親猫たちの不妊手術を早急にしないとさらに増えちゃいますね！親猫に不妊手術を受けさせる了解をまず飼い主さんから取ってください。親猫を手術の為に動物病院へ送迎するついでに、子猫も連れて行って里親に出すためのメディカルチェック（ウイルス検査やワクチン）を実施できます。子猫2匹はまずは頑張って里親を探してみてください。」

結果：親猫3匹の不妊手術支援と子猫2匹の診察送迎をNPOで対応。子猫2匹は相談をくださった職員さんが里親を見つけてくださり無事譲渡されました！飼い主さんは手術を終えた3匹と引き続き暮らしています。

費用負担：送迎費と不妊手術費はNPO負担、子猫の医療費は飼い主さん負担。

感想：猫活動していると友人知人には猫を渡しつくしているので、里親募集をする時は里親募集サイトなどSNSを利用するしかなく、時間がかかります。でも猫活動と全く関係ない人が友人知人へ里親募集情報を流すと案外早く里親補者が見つかる、というあるある。



ケース② 40代と80代の父子家庭、猫12匹。(生活保護受給)

相談者：居宅介護支援事業所のケアマネさん

相談内容：「生活保護の父子家庭のお家で猫が増え、マンション管理会社から退去するように言われている。猫は窓から外中自由に暮らしている。どうしたらいいか。」

回答：退去させることは簡単ではないと思う。引取りはできないが、不妊手術支援であれば取り急ぎ可能なので、飼い主さんに不妊手術をする了解を取ってください。管理会社には状況が悪化していかないように対策を取るので住み続けさせてもらう方向で交渉してもらえないでしょうか。

結果：全頭の捕獲と不妊手術支援を実施。外中自由飼育なので、1回では全頭捕まりきらず、2日に分けて手術を実施しました。結果12匹の手術対応をし、うち3匹の子猫はNPOで引取り、里親さんへ譲渡。

費用負担：不妊手術費・送迎費・子猫医療費 NPO 負担。

感想：多頭崩壊のお家は臭いがひどいので、退去してもらいたいと思う管理会社や近隣住民の気持ちは痛いほど分かる。でも、多頭の猫と生活保護で引っ越せる物件なんてほぼ皆無なので、なんとかか少しずつ改善していくのを見守ってほしい・・・。



ケース③ 70代女性1人暮らし猫6匹犬1匹。(生活保護受給)

相談者：区役所職員さん

相談内容：高齢者の自宅室内で繁殖を繰り返し、猫が増えてしまっている。室内は猫の糞尿と物でゴミ屋敷になってしまっている。これまで行政が11匹引き取ったが、殺処分になってしまった子も一部いる。ハイシニアで飼い主さんが看取れると判断された3匹と、全く人馴れしておらず、捕獲できずに引取りを逃れた3匹の計6匹が室内に残っている状況。室内の環境改善もしたいが、猫がいるので掃除も入りにくい。

回答：飼い続ける支援の方向に入り変えるなら、未手術の子たちを捕獲をして動物病院に連れて行くついでに、手術済みの3匹も預かり、猫0匹の状態を最長1泊2日作ることができます。その間に大掃除支援に入ってもらえるのでしょうか？

結果：つながる体制推進員さんが主導し、10名ほどの関係者が一堂に集まる関係者会議をして、大掃除と猫の一斉手術を同時開催することに決定（一人の高齢者の為にこれだけの人数を集めるのは、調整に時間かかってケースの進みが遅くなるのでは？という懸念もありましたが、案外すぐに会議の招集があり、一気にすべての関係機関の調整がその1時間の会議でできたため、結果ケースの進みとしては早かった。つながる体制推進員さんの仕事っぷり素晴らしい。という感想でした）。福祉職員さんや行政の方による大掃除支援の日に合わせて、朝に猫を全頭捕獲し（ねこから目線。のスタッフに手伝ってもらいました）、スペイククリニックへ搬入対応をしました。これまで捕まえられなかった猫たちをどうやって1時間で室内捕獲するのか見たいと、3名ほど区役所の職員さんが見学に来られました。また後日、わんちゃんも未去勢だったことが分かり、手術支援を実施しました。

費用：捕獲送迎費とウイルス検査費用、犬の手術費はNPO負担。猫3匹の手術費はhappy Tabby clinic（八尾市）の個別支援プロジェクトで無料手術していただきました。

後日談：一旦とても綺麗になった室内だったが、飼い主さんだけでは維持が難しく日に日に汚部屋に戻って行く・・・。犬を毎月8千円のトリミングに連れて行っていることを支援者が知り、その価格より安い価格でねこから目線。に毎月スタッフ2名体制で1時間大掃除に入ってもらおうと提案。できる範囲でワンちゃんのトリミングも対応してほしいと依頼され、継続関わりケースとなった。

感想：行政職員さんの把握力と提案力、継続的な関わりの姿勢が素晴らしい。参考までに大掃除の費用は交通費込みで2人体制1時間7,000円、1人体制で4,000円。家中にこびりついた猫のうんちを剥がし、おしっこが染み込んだ床を磨き、水垢がついた水皿を洗う。仕事として依頼してもらえるのはとてもありがたいが、かなり過酷ではある。それに掃除後は一旦帰宅してシャワーを浴びて着替えないと次の現場に行けないので会社としては正直キツイ・・・。



ケース④ 70代女性一人暮らし猫5匹。(生活保護受給)

相談者：地域包括支援センター

相談内容：行動意欲がなく、ほぼ寝たきり生活をしている高齢者の自宅で子猫が産まれていた。2階建ての2階部分は猫のトイレと化している。大掃除をしたが、猫を飼い続けるのは困難かもしれない。不妊手術は嫌そう。

回答：なぜ不妊手術が嫌なのかが気になる。可哀想だと言いつつも、実際はお金がかかるなら手術が嫌だという感じなら、費用はNPOで負担すると伝えたらコロっとOKしてくれる人も多い。とりあえず一緒に家庭訪問して飼い主さんと話すことは可能です。

結果：ワーカーさんと一緒に家庭訪問。費用負担が無いと分かるとすんなり不妊手術も了承してくれました。それどころか、子猫も手放したい意志が確認できたので、母猫の避妊手術支援と、子猫3匹の引取りをNPOで対応しました。

費用：手術費、搬送費、子猫医療費NPO負担、子猫は箕面市の保護猫カフェさんが協力くださり、保護譲渡対応していただいた。

感想：避妊手術くらいであれば、実費でも低価格な不妊手術専門病院さんなら5,000円程

度で実施してもらえる。1匹しかいないのであれば、それくらい
の費用負担はしてほしいと思うが、5,000 円を本人さんに捻出し
てもらふ為に何度も説得に通う手間や数ヶ月かけて費用をためて
いくことを考えると、『もう面倒くさいから NPO で負担しよう』
としてしまう。でも 2023 年度の人もねこも一緒に支援プロジェ
クトへの寄付は今（3 月）時点では 12,000 円ほどしかなく、同
じ思考回路で対応してしまったケース①で使い果たしているの
で、結局自分のポケットマネーから捻出することになる。件数が
増えてくるとかなり自分の生活に響く。活動資金集めもいいかげ
んなんとかさせねば・・・。



ケース⑤ 40代と小学生の母子家庭 猫6匹犬3匹。(生活保護受給)

相談者：人間の病院の相談員さん

相談内容：現在入院中の患者さんが自宅で猫と犬を沢山飼っており、心配で退院したいと言っている。経済的に厳しくフードの寄付をもらえるところがないかと相談された。子どももペットも手放す事にはとても拒否的な方。

回答：飼い続ける方向の支援は可能だが、他の福祉職の方がペットを手放させる説得をされると飼い主さんが混乱するので、他の支援さんともつながって方向性の確認をさせてほしい。また飼い主さんに不妊手術ができているのか、何匹いるのかも確認させてほしい。

結果：病院にて、主治医、相談員さん、支援センター担当者さん、訪問看護ステーション担当者さん、NPO から2名、飼い主さん、の7名で話し合い。飼い続ける方向で合意。

猫は6匹いて、うち3匹がまだ未手術。犬は3匹おり、うち1匹が未手術でマーキングがひどいという事が分かった。退院の日に家庭訪問をして支援物資を届けつつ、室内の状況を把握。翌々週に猫3匹不妊手術支援と犬1匹の去勢手術支援を対応。

費用：猫の手術費、送迎費は NPO 負担、犬の去勢手術費は飼い主さん負担。継続サポート案件。

感想：飼い主さんが不妊手術の必要性をきちんと理解されていて、手術が必要な猫も3匹しかおらず、支援者の方々のサポート体制も良く、めちゃくちゃ対応が楽なケースでした。ありがたい。



ケース⑥ 80代女性一人暮らし 猫6匹
(生活費は年金8万円のみ、債務返済もあり)

相談者：動物病院の獣医さん

相談内容：非常に状態の悪い飼い猫ばかりを診察に連れてくる高齢の飼い主さんがいる。自身でも掃除ができなくて家がひどい状態になってしまっていると言っている。NPOから連絡してもらったので、相談に乗ってあげてほしい。

対応：連絡をすると、「元々保護猫活動をしており、飼っている6匹は全頭不妊手術が済んでいる。近所の公園などを回って、ノラ猫さんへの餌やりは今も毎日行っている。体の自由が利かなくなり、掃除ができなくなってきた。室内は糞尿と物の山。ヘルパーさんに入ってもらったので、NPOのケアマネスタッフから、担当地域の地域包括支援センターに連絡を取り、飼い主さん宅と一緒に訪問するが、まさかの地域包括支援センターの方が「ペット不可の住宅で猫を飼って汚部屋になっているのは完全に自己責任。支援対象ではない。」と本人に言い放ってしまう。NPOのケアマネスタッフが地域包括支援センターへ何度も話し合いを試みるが、電話を取り次いでももらえず、折り返しも無く、話し合いが難航。自己責任だから支援しない、というのはおかしいのではないかという旨の手紙を送って話し合いの場をやっと後日持てることに。NPOのみで大掃除支援と困りごとの聞き取りを実施中だが、飼い主さんの気持ちもコロコロ変わり、かなり難航中。

感想：今年はかなり、多頭崩壊に至ってしまう飼い主さんに対しても寄り添った対応をしてくださる福祉職の方にあたる事が多く、忘れかけていたが、「なんで猫の問題を福祉職がやらないといけないんですか。」という主張は根深くある、というのを思い出させてくれるケースでした。結局は担当になる人次第なところが多い現実。「自己責任って言いだしたら、足腰が悪くなっていくことだって本人の運動不足だと言えるし、高齢者が要支援になる理由なんて全部自己責任なんですよ。でもね、理由がなんであれ、今すぐ支援が必要な状況で、本人が助けてほしいと言っているのに何もしないとは職務放棄ですよ！」とNPOに新しく加わってくれたケアマネスタッフが怒りまくっていて頼もしかった。笑

ケース⑦ 50代カップル 猫1匹 (生活保護受給)

相談者：本人から直接。他の多頭飼育支援中ケースの飼い主さんからの紹介らしい。

相談内容：1匹だけメス猫を飼っている。発情期がひどく手術したい。手術費は安ければ出せるが病院送迎ができない。

対応：不妊手術専門病院の予約と送迎を対応。

費用：送迎費はNPO負担、不妊手術費5,000円は飼い主さんが負担。

感想：1匹だけの飼育で、飼い主さん本人からの SOS は一番スピード解決できて楽である。そして最も予防的な支援だと言える。

ケース⑧ 40代夫婦 猫1匹（生活保護受給）

相談者：本人。知り合いから聞いたらしい。

相談内容：1匹だけメス猫を飼っている。発情期がひどく手術したい。手術費は安ければ出せる。病院の送り迎えもできる。

対応：低価格の不妊手術専門病院の予約代行のみ。

費用：交通費、避妊手術費、飼い主さん負担。

感想：病院の紹介と予約代行だけで済んだ最も楽だったケース。予防的に支援ができて非常に嬉しい。こちらもあり合いからの紹介らしい。生活保護世帯界限で私の個人ケータイ番号が出回っているのだけ若干気になる。

ケース⑩ 80代女性 猫24匹

相談者：区役所職員

相談内容：近所でノラ猫に餌をあげ、連れて帰ってきている室内には物が山積しており、何匹いるか不明。離れて暮らす息子さんと連絡が取れたが猫をどうしたらいいか。息子さん含めて関係者会議をするので、一緒に来てほしい。

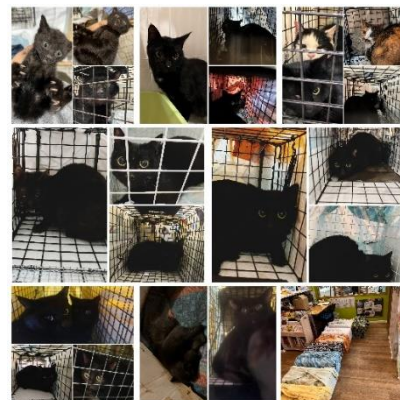
回答：会議参加OK。とりあえず室内見たいです。

対応：物が多すぎて頭数不明、特殊清掃とリフォームを入れるため、室内捕獲と1ヵ月間の猫の預かり対応をすることに。はじめは6~10匹くらいかなという予想でしたが、片っ端から捕獲をしたところ、24匹居ました・・・。飼い主の息子さんと相談しながら対応中。現在進行形。子猫5匹は箕面市の保護猫カフェさんが保護してくださった。

費用：捕獲病院送迎実働はNPOが対応。医療費、交通費、一時預かり費は飼い主さんの息子さんが負担。今回もhappy Tabby clinic（八尾市）の個別支援プロジェクトを飼い主さんの息子さんから申請してもらい、成猫18匹は無料で不妊手術してもえた。4匹が約5匹ずつ妊娠しており、残念だが合計20匹の堕胎手術になった。

感想：黒猫湧出でる泉が室内のどこかにあるんじゃないかと思うくらい、保護しても保護しても次から次へと黒猫が出てきて恐怖でした。結局24匹中22匹黒猫でした。これからどうしよう・・・。

一気に、この1年間を振り返ってみました。そこで気が付いたことですが、昨年までの対応ケースだと猫さんの飼育頭数が10匹以下という事はほぼありませんでした。つまり、深刻化してからの相談がほとんどだったと言えます。それに比べて今年の相談は、猫の頭数が10匹以下のケースが6件もあました。その要因として考えられることは2つあり、1つは深刻化する前に「このまま放っておくともっと深刻になる」と福祉関係者の方が先を見越して動いてくださるようになったという意識の変化または知識の広がりがまず挙げられます。研修会などの成果だと嬉しいです。2つ目は、対応したいんだけど、自力では難しい当事者に直接NPOの情報が届いたことが挙げられます。これは狙ったことではありませんが、支援した生活困窮世帯が増えたことで、利用者からの口コミで広がっていったと考えられます。



福祉と猫の勉強会・交流会

社会の関心が変わってきたなと感じた事といえば、2023年7月に人もねこも一緒に支援プロジェクトとして初めて主催したイベント「猫と福祉の勉強会&交流会」もあげられます。きっかけは大阪府内でケアマネとしてバリバリ働いている2人から、「自分の専門を生かして猫問題の役に立てないだろうか」という話をいただいたことです。色々話をする中で、福祉職の方は、何かしらの理由で猫ボランティアさんに怒られた経験がある人が少なくなく、「猫ボラさん=怖い」という印象を持ってしまっている方が少なからずいることを教えてもらいました。確かに私も「高齢者の家に猫が2匹取り残されてるんで今すぐ引取りにきてくれませんか？え？お金かかるんですか？ボランティア団体ですよ？」という電話がかかってくると、『そんな簡単に引き取れないし、ボランティアって大半は自分で生活費と活動費を仕事で稼ぎながら隙間時間に頑張って動いている生き物なんですよ・・・』と心の声が嫌味っぽく出そうになってしまうことがあります。猫ボラからしたら、仕事ではないこちらの事情も分かってほしい！とつい感情的になりがちですが、福祉職の方からしたら、「そんな事情しらなかったし、行政から助成金が潤沢に出てるものだと思っていた。」と思うのも当然です。本当にお互い住む世界が違って接点が無かっただけです。



2021年「多頭飼育崩壊は社会福祉と動物愛護の多機関連携が必要です。」と環境省がガイドラインを発表しました。これも意識改革の一助になったと思いますが、実際に問題に直面してから、連携を取ろうと思っても人間福祉と動物愛護では上述の通り相互理解が無き過ぎて、いざ同じテーブルについて話し合おうとしても苦戦してしまう事が多くあります。だからこそ、問題が起きる前に練習試合できる場を作ろう！ということで、福祉系の

先人の知恵から

43

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

ここまで続けていると同じような諺を載せないようにと過去の諺を振り返る。まあ、似ていてもご勘弁と言うことで、少し飛ばしつつ、最後まで行きたいと思っている。

今回も「タ行、チ行、ツ行から」以下の7つ。

- 短気は損気
- 単系線たんしせんを成さず
- 短を捨て長を取る
- 知恵多ければ 憤いきどおり多し
- 父父ちちちちたり子子ここたり
- 塵ちりも積もれば山となる
- 杖すがに縋るとも人に縋るな

<短気は損気>

短気を起こすと、人との交わりが壊れたり仕事も上手くいかなかったりして、結果的には自分の損になるということ。

子どもたちの中には、半分ゲーム依存になっている子がいる。こういう子どもたちは、結構イライラしやすく、ちょっとしたことで切れる。その結果友人関係を壊してしまう。ただでさえ、ゲーム依存で不登校気味な子が、友人関係を切ってしまうと、学校に行く理由がさらに減る。したがってそのまま不登校が続いてしまうことさえある。そういう子どもたちによく伝えるのがこの諺である。

ある子がカウンセリングに来た時に、話している中で、突然切れ、そのあたりにあったティッシュボックスなどを投げた。物を投げることを制し、イライラするなら帰ってよいと伝えたところ、帰っていった。しかし5分くらいで戻って来た。落ち着いたからと。こういうことが大人の引きこもりにもみられる。大人の場合、帰ってくるまでに何日もかかることもある。

暴力的なことは許さないなので、そういうことがあれば出て行ってもらおう。そして頭

を冷やしてもらおう。これで関係が切れるかと言うとそうでもない。彼らにとっては話し相手がほかにいないからである。最近はオンラインで仲間を作っているから、カウンセラー以外にも話し相手はいるかもしれない。それでも戻ってくる。オンラインでも仲間関係を壊してしまうことさえあるから。

戻ってきたところで、普通に「お帰り」と言う。謝っても謝らなくても、そこには触れない。その代わり、人と関わっていくことの大切さ、友人を持つことの大切さ、意見がぶつかっても、喧嘩をしても仲直りして、関係を修復すること、それは人間にしかできず、それが今後の人生において大事な力になること、などを伝えている。

物を投げたり、怒って帰ったりしても、その後戻ってきてからは二度とそういう行動は見られない。しっかり話しあうことがいかに大事かということでもある。

英語でも同様の諺がある事から、全世界共通で、短気を起こすと自分のためにならないと言われているのがわかる。この諺は伝えるが、自分の損になるから短気を起こさないとは中々ならない。誰でもカッとすることはある。大事なのはどうやってその気持ちを抑えるかだ。アンガーマネージメントなどを学ぶ人も増えた。深呼吸をする、その場を離れる、10数える、等短気を起こしやすい人には様々な方法を伝えてはいる。それでも気持ちが抑えられず、カッとなって、何か問題行動を起こしてしまったら、どうその後始末をするか、それが問題でもある。その後始末が上手くできることも短気の対処法になるだろう。

英語では・・・

Anger and haste hinder good counsel. (怒りと焦りは良い助言の邪魔になる)

Short temper is bad luck.

Haste makes waste. ともいう。

＜単糸線を成さず＞

人間は一人では何もできないというたとえ。蚕が出した一本の糸は、何本かより合わせなければ線にならず、何もできないことから。出典にはこのあとに、「^{こしょうあによ}孤掌豈能く鳴らんや (片方の手だけでは音が出ない)」とある。

出典 ^{すいこでん} 水滸伝

子育て中の母親と話していると、父親が非協力的と愚痴を言うケースは多い。仕事をしていて忙しいのは仕方がないとしても、家にいる時は、少しでも手伝ってほしいと思うのは当然だろう。しかし、詰ったすりすれば、父親はへそを曲げるだろう。そこで母親たちにこんな諺があるよと伝える。

子どもを育てる際、父母が揃っているなら、二人で育てるとバランスが良い。糸が一本だけでは切れやすく、二本より合わせることで太く強くなって、切れにくくなる。二人一緒が良いのだ。二人で協力し合うことで、子どもは健やかに育つのだ。諺を出しながら、このように言うと、父親にも説得力があるのではないかと伝える。

上手く父親に伝えることが苦手な母親が増えているので、何かしら具体的な言葉、セリフを用意しなければならない時代にな

っている。諺はそんな時、とても役に立つ。

＜短を捨て長を取る＞

短所や欠点を捨てて、良いところだけを選び取ること。是非を見極め、優れた点を自分のものとする。出典には「若し能く六^{ろく}芸^{げい}の術を修めて、この九家の言を觀、短を捨て長を取らば、則ち^{はんぽう}方方の略に通ずべし(かりに儒学の六芸を習得し、この諸子九家の思想を読み、短所を捨てて長所を取ったならば、あらゆる方面の^{たいりやく}大略に通じることができる)」とある。

出典 漢書

人はついつい悪いところ、欠点、短所ばかりに目が行く。子のマイナス面ばかりを取り上げて、そこをつつく親がいる。そうになると、子どもは自信を無くし、自分はダメな人間だと思うようになる。苦手なものは苦手とし、得意を伸ばす。これは発達障害の子どもへの対応でもこうあるべきと言われていることだ。

しかし、未だに、家庭でも、学校でも、社会でも、長所を認め伸ばす方向には中々っていない。数学ができる子がいても、国語が苦手だと、国語を頑張れという。縄跳びが苦手な子がいれば、何度も何度も練習して、跳べるようにしようとする。頑張っても何かを達成することはよい経験ではあるが、頑張ってもできないものもある。その判断は大事である。「やればできる」「頑張ればできる」と言うのは簡単だが、やる方は大変なのだ。

そこに時間を費やすより、得意分野を伸

ばす方が、子どもは頑張れる。もっともっと得意分野を伸ばすと、伸びのない分野についても、子どもが頑張ろうとするようになる。それを待って応援する方がずっとスムーズに伸ばすことができるだろう。

＜知恵多ければ^{いきどお}憤り多し＞

知恵や知識を多く身につけてくると、人は世の中の矛盾や不合理に気づくようになり、理想と現実のはざまに立って悩み、憤慨することが多くなるということ。

「旧約聖書」の「伝道の書」にあることは。
In much wisdom in much vexation.
から。

子どもたちが中学生くらいになると、大人に対し厳しい目を向けるようになる。大人の汚さ、醜さ、ずるさ、そんなものにもだんだん気づくようになる。世の中の不条理、政治の怪しさなどなど。

理想と現実のギャップにも気づく。それは自分自身も含めてである。自己評価が下がったりするのもそのせいである。

急に子どもが反抗的になって、批判してくるようになると、「可愛くて素直だったあの子が・・・。」と嘆く。どう対処したらよいだろうかと悩む。

そんな親に対してこの諺を伝える。子どもが成長したから、子どもが様々な知識を得て、理解してきたからこそ、大人への厳しい目、政治や社会への厳しい目が生まれたのだと。親として、大人として、子どもの正義感やまっすぐな考え方を認めていけばよい。その中で、子どもは自ら、何が正しくて何が間違っていて、そして世の中で生きて

いくうえで、ぶつかったり、自分を曲げたりしていかざるを得ないのだと学ぶのである。

この時期になったら、親は、子どもから少し離れて、見守ってあげることが大事になる。もう、幼くて、親を求め、親の言いなりになっていた過去の我が子ではないのだ。

＜^{ちちちち}父父たり^{ここ}子子たり＞

父が父としての道を行えば、子も子としての道を尽くす。家族がそれぞれになすべきことをすれば、一家は安泰であるということ。。

出典 論語

モデリングと言う言葉がある。誰かをモデルとし、そのモデルを意識することで、自分自身をそのモデルに近づけようすることである。師とする人、尊敬する人等がそのモデルとされることが多い。父親や母親を尊敬する人もかなりいると思う。そういう人は自分の父親や母親をモデルとして、自分も父親や母親のようになりたいと思い、日々意識的にも無意識的にも、言動を真似ていく。そうしているうちに父親や母親と似た人間として成長するのである。

父親が社会生活上の意味を強く持つモデルであるのに対し、母親は、子育ての師であり、愛情をどのように与えるかというモデルでもある。最近はその違いも無くなってきてはいるが・・・。

父母は子に「父親とは」、「母親とは」と改めて何か教えたり指導したりするものではなく、自分の言動を見せることで子に伝えていく。モデルとはそういうものである。

“背中で語る”“背中を見せる”と言うのが

まさにそれであろう。

家族といえども共同体である以上、それぞれ役割がある。子のいない夫婦であれば、夫は夫としての役割、妻は妻としての役割を果たす。子がいれば、父親は父親として、母親は母親として、その役割を果たす。そういう姿を見ていれば、子はこの役割を自ずと見つけ、その役割を果たしていく。

例えば、夫が夫としての役割を十分に果たしていなければ、妻は不満を感じ、夫婦は揉めることになるし、場合によっては離婚という話になる。子どもがいる家族で、母親が母親の役割を果たしていなければ、父親か子どもがその役割を担うことになってしまう。そうすると、誰かが必要以上のストレスを受けることになり、家族が上手く回らなくなるだろう。ヤングケアラーという問題にもつながりかねない。

子どもは子どもらしく子どもの役割を果たすことが、子どものいる家庭では大事である。そのためには両親が、子どもらしい役割を果たせるよう子を守らねばならない。と言うことはすなわち、両親がそれぞれの役割をしっかりと果たすということに他ならない。

家族の役割が上手く果たされていない時、この諺を出して説明する。

＜^{ちり}塵も積もれば山となる＞

わずかなものでも、積もり積もれば山のように大変な量になるということのたとえ。小事だからといっておろそかにしてはいけないといういましめ。「塵積もりて山となる」ともいう。いろはがるた（江戸）の一つ。

この諺は有名なので、だれもが知っているだろう。ほんのちょっとしたことでも、積んでいけば大きなことが成し遂げられる。例えば毎朝3回腹筋をしたとして、それを毎日続ければたかが3回でも腹筋が付く。日々の努力が成果を上げるということは誰もが知っているが、いきなり、腹筋30回で頑張ろうとしても三日坊主になるのがおちである。ほんのちょっとしたことを毎日続けることの方がずっと効果的である。

この諺と一緒に説明するのが、角度である。今進んでいる道をそのまま進むのと、たった一度角度をずらして進むのと、その未来の自分の位置を考えてもらう。先に行けば行くほど、今のまま進むのとは大きな開きが出る。たった一度、されど一度なのである。その一度を時々繰り返していけば未来はもっと大きく変わる。

人は変化に対し少なからず抵抗がある。現状維持が一番安心なのである。しかし、何かしら不都合があるなら、変化をせざるを得ない。そんな時にこの諺を使って、ほんの少し、ほんのちょっとした変化、ほんのちょっとした努力、半歩くらいの前進を提案する。そうすると変化へのハードルはぐっと低くなる。ちょっと変化した先は、今までとは大きく違うものになるのだ。

＜杖に^{すが}縋るとも人に縋るな＞

むやみに人の行為や助けをあてにしてはいけないといういましめ。人に頼り過ぎてはならないということ。

杖と言うのは大体が丈夫にできている。体重をかけるのであるから当然である。簡

単に折れるようでは使い物にならない。

しかし人は杖とは違う。そもそも、杖は自分の思う位置に置くことができる無機物であるが、人は自分の思い通りにはならない。その人の考えや意志、思いと言うのもあるし、気分もある。両足があって勝手に動ける生き物である。だから、そもそも杖のように頼るには無理があるのだ。

それでも人は、人を頼っては裏切られたり、思うとおりにならなかったりして、頼った相手に対し文句を言っている。

子どもは親に頼らねば生きていけない。従って親は杖のようにどんと、強く構えていていただかねばならない。しかし、親も人である。不安定な人も、精神的に病んでいる人も、自分自身を支えることで手いっぱいの人もある。そんな時は、代わりの杖になりうる人を探さねばならない。祖父母であったり親戚のおじさんおばさんであったり、或いは全くの他人だったりもする。誰かに頼らねば生きていけない時期は、頼ればよいし、しっかりと支え、助けてくれる人もいる。そういう人を不幸にも見つけられないと、アダルトチルドレンになってしまうだろう。それはまた別の話である。

子どもといえども、小学校高学年にもなれば、自分のことは自分でかなりできる。親に頼らねばならないことは減るはずである。まして中高生ともなれば、電車やバスに乗って動くこともできるし、更に自分でできることは増える。高校生であればアルバイトをして働くこともできるのである。

そして18歳で成人である。成人であれば、契約もできるわけだし、自分のことはすべて自分でできるレベルになっているということになる。

ご飯を作ってもらい、洗濯も掃除もしてもらい、衣服は買ってもらい、場合によってはレポートも書いてもらう。そんな高校生や大学生を見ていると、頼りすぎと言わざるを得ない。親も手を出しすぎるのだが、親にこれだけ頼っていると、結局他人に対しても頼ることが当たり前になってしまうことも多い。しかし、他人は他人である。当然思うようにはならない。それで憤慨していても悪いのは他人に頼った自分である。

誰かを頼るときは、頼って大丈夫なほど、心も体も安定して、どんと構え、心の広い人なのか、ある程度信頼できるのか、そんなことを考えた上で頼るほうが良いだろう。身近にいるからとか、仲が良いからとか、そういう理由だけで頼って裏切られても仕方がないのである。だからと言って、全く人を信じず、頼らないというのも問題ではある。自分でいくら悩んでも解決できない時は、誰かに頼ることも必要だから。

ただ、人は杖ではないということだけはおぼえていたい。

出典説明

水滸伝・・・

明時代の長編小説。作者は元の施耐庵しだいあんとも、また施耐庵の原本を明の羅貫中らかんちゅうが改訂したともいわれるが不明。宋の時代に、宋江そうこうを首領とする百八人の盗賊集団が山東省の梁山泊に立てこもって官軍に抵抗し、やがて滅びていく物語。百二十回本、百回本、七十回本がある。『三国志演義』『西遊記』『金瓶梅きんぺいばい』とともに「四大奇書しだいきしよ」の一つ。日本には江戸中期に伝えられ、江戸文学や講談などに影響を与えた。

漢書・・・百二十巻

中国の正史の一つ。『史記』に次いで二番目に成立した正史で、高祖から平帝までの前漢二百三十一年間の史実を記した歴史書。後漢の班固はんこが、父班彪はんひょうの着手した修史を引き継いで完成し、班固の死後、妹の班昭はんしやうが表十巻と「天文志」を補った。『史記』が上古から漢代までの通史であるのに対し、『漢書』は前漢一代だけの断代史であり、以降の正史の典型となった。

論語・・・二十巻

儒教の経典。『大学』『中庸』『孟子』とともに四書の一つ。孔子の言行や門人たちとの問答を記録した書で、孔子の死後に門人たちが編集したものとされる。孔子は諸国を回って仁の徳による政治を説いたが、本書は孔子の人物や思想を知るうえで極めて重要な資料である。

唐書・・・二百二十五巻

中国の正史の一つ。唐代の歴史を記した『旧唐書』と『新唐書』の総称。とくに『新唐書』を指す。九四五年に完成した『旧唐書』(二百巻)を宋の欧陽脩おうようしゅう・宋祁そうきらが補正して編纂し、千六十年に完成したのが『新唐書』である。

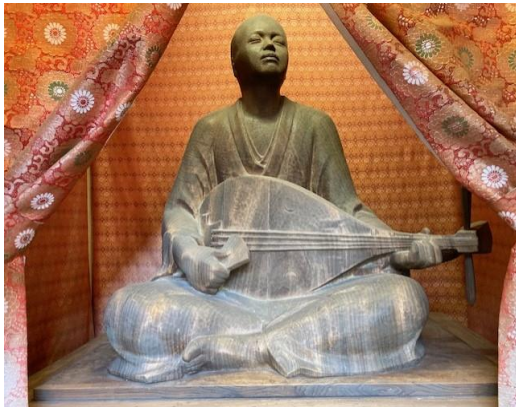
うたとかたりの対人援助学

第28回「広瀬浩二郎のユニバーサル論」

鵜野 祐介

はじめに 一赤間神宮の「耳なし芳一」像一

今年（2024年）2月、山口県下関市の赤間神宮^{あかま}を訪ねました。拝殿に向かって左手奥に耳なし芳一堂があり、その傍らに平家一門の墓が安置されています。芳一の木像の背後から、琵琶の調べに乗せて「祇園精舎の鐘の音…」と語る平曲が流れ出し、さざ波のように14基の小さな墓石に打ち寄せていました。そしてそれらを覆いかぶさるように茂る照葉樹の梢から、数知れぬ鳥たちの囀^{さえず}りが降り注いでいました。目に見えない精霊たちが集まっていたのかもしれません。



2022年7月、日本昔話学会（於関西外国語大学）で広瀬浩二郎さんの講演を聴きました。国立民族学博物館教授の自称「座頭市流フィールドワーカー」です。講演の中でも「耳なし芳一」や琵琶法師の話があり、いつかこの地を訪れたいと期していました。それと同時に、広瀬さんが構想している「ユニバーサル・ミュージアム学」についてまとめておきたいと考えてきました。私自身が十年来温めてきた「ユニバーサルデザインとしてのうたとかたり」論と響き合うところがたくさんあるからです。

今回、広瀬さんの3冊の近著を精読し、私の着眼

点から抽出した文章を、項目別にして再構成してみました。ぜひじっくりとお読みください。

1. 点字とは

点字は一点ずつ、一文字ずつ書き進めていきます。点が文字となり、文となる。また、指を上下・左右へ自由に動かし、能動的に読むことができるのも点字の特徴です。点字は人生と同じだなあと感じます。行きつ戻りつ、じっくりと。点を積み上げ、知識を体得する。先が見えないからこそおもしろい。点字は視覚障害者の生き方のシンボルです（2017：26-27）。

点字は、さわる文化のシンボルである
点は文字、文字は文となり、
人生を盛り上げ、歴史を掘り下げる
点字は人生と歴史を身体に刻み付ける
不規則かつ規則的な点の配列は、
僕たちが地球に触れた痕跡、そして生きた証
手を伸ばせば、もっと触れることができる
人間、世界、宇宙に （2017：100）

2. 「バリアフリー」「インクルーシブ」「アクセシブル」vs. 「ユニバーサル」

…バリアフリーとユニバーサルとの違いを整理しましょう。僕は全盲の視覚障害者ですから、五感ではなく四感しか使えません。バリアフリーとは「障害者の足りない部分を補う＝補助」の発想に根ざしています。…一方、「障害者の残存能力を保ち最大限活かす＝保助」の思想に基づき、既存の情報を再解釈・再創造するのがユニバーサルです。…障害者の「生き方＝行き方」（ウェイ・オブ・ライフ）を非障害者、マジョリティに応用するのが、ユニバーサルのもう一つの要件だといえます（2017：191-

192)。

…既存の枠組みそのものを変えるのがユニバーサルである。視覚障害者対応の一環で、さわる鑑賞を取り入れるという発想ではなく、普段は視覚に頼って暮らしている健常者の鑑賞を「見る」から「さわる」へ変化させる。…マイノリティの「生き方＝行き方」を導入することで、新たな「ユニバーサル＝普遍的」博物館、ツーリズムを構築できると、僕は確信している（2022：32）。

マジョリティが保持してきた価値観・世界観にどうやって、どこまでマイノリティを包含できるのかを検討するのが「インクルーシブ」である。同様に、既存の価値観・世界観からマイノリティが排除・疎外されないために、具体的な方策を提示するのが「アクセシブル」だろう。これに対し、マジョリティの価値観・世界観そのものを改変し、新たな普遍性を築くのが「ユニバーサル」である（2023：18-19）。

バリアフリー的な障害者対応とユニバーサルは異なる。「誰もが楽しめる」を具現するには、社会の多数派である健常者とミュージアムの関係をどうやって、どこまで変えていけるのかを検討しなければならない（2023：106）。

たしかに障害者と健常者が個性を尊重し合うインクルーシブ社会は、僕たちがめざすべき理想である。しかし、ここで僕は誰が誰をインクルード（包含）するのかと考えてしまう。健常者が障害者をインクルードする一方向の発想をどうやって乗り越えていけるのか。僕たちは少数派が主体となる逆方向のインクルージョンを提案していかなければならない（2023：164）。

インクルーシブが既存の価値観・世界観にさまざまな人々を取り込む試みだとすれば、ユニバーサルは新たな生きかたを開拓する挑戦といえる。健常者の見識・見解を前提とする博物館に視覚障害者が足を踏み入れる。視覚障害者には「見学」という博物館の常識が通用しない。ここで役立つのが聴覚や触覚を大切にしてきた視覚障害者の経験、盲学校教育の蓄積である。さわる展示、五感を活用する学習プログラムの立案は障害者支援ではなく、健常者をも巻き込むユニバーサル（普遍的）な博物館を築く第一歩となるに違いない（2023：165）。

3. インクルーシブ教育への提言

僕が弱視学級の教員から学んだことを要約すると、

以下の二つになる。「弱視であることを恥ずかしがらなくてもいい」（自信）、「見えない・わからない時は、自分が困っていることをきちんと周囲に伝える」（勇気）。どうすれば視覚障害児・者が自信と勇気を持つことができるのか。これは二一世紀のインクルーシブ教育においても最大の課題だろう（2022：106）。

現在のインクルーシブ教育は障害児・者個人の学習権保障に力点が置かれており、当事者コミュニティ（集団）とのつながりが弱い。地域の学校に通う視覚障害児は大半の場合、クラス、もしくは学校全体で一人というマイノリティである。つまり、学校内で同じ視覚障害の仲間に出会う機会がほぼない。…インクルーシブ教育を推進する上で、特別支援学級の充実、障害児・者同士の交流を図るサマーキャンプなどの企画が今後の重要課題になるだろう（2022：117-118）。

近年では「社会モデル」という理念が障害を定義する際の国際標準となっている。障害は個人の属性ではなく、個人と社会の関わりから生まれるものである。つまり、社会の努力によって障害は除去できると考えるのが社会モデルの根幹となる思想といえる。

英語で障害者は「Disabled」と称される。これは、社会によって「できなくさせられている」という意味である。…ちなみに、社会モデルを採用すれば、「害」を生み出すのは社会の責任ということになるので、「障がい」への表記変更はナンセンスである。「障害がある」原因を社会に求め、それを改善していこうとする大きな潮流は、二〇世紀の障害当事者たちの運動の成果、市民意識の成熟と位置付けることができるだろう（2022：124-125）。

見えないからこそ、できることがあります。できないことを数え上げるのではなく、できることをさがし、どうすればできることを増やせるのかと考える。発想の転換が必要でしょう。

視覚障害者自身の意識に加え、受け入れる一般の人たちも「障害者は別世界の存在ではなく、地続きで自分たちとつながっている」との意識、つまり「他人事」ではなく「自分事」としてとらえることが大切でしょう。（2022：163）

4. 障害の宇宙モデル

…「社会」を前提としていては、障害者（マイノリティ）のより良い生の達成、マジョリティとの共生の進展には、自ずと限界があるでしょう。排除と包摂の歴史は半永久的に繰り返され、人間は次々に新

しい「障害」を創り出す。

…ここで僕は「障害の宇宙モデル」という試論を提案します。「障害」という社会通念を広大な宇宙に解き放つのが宇宙モデルの本義です。この私論に従うならば、ユニバーサルデザインとは宇宙的デザイン、すなわちさまざまな社会通念（人間の常識）を宇宙に解き放つためのデザインということができるでしょう。宇宙は無限の可能性を秘めていると同時に、否応なく人間に不可能を突きつける機能をも有しています（2017：207）。

宇宙という観点に立てば、「障害／健常」という陳腐な二分法は改変を迫られるでしょう。「障害の宇宙モデル」はまだ大風呂敷を上げたばかりで、これからしっかり理論武装していかなければなりません。天文・教育などに関連する学際的な研究と、真のユニバーサルデザイン（「障害」という社会通念を宇宙に解き放つデザイン）を切り開く実践的研究との融合。そんな理想を追い求める識者たちの活動を通じて、「障害の宇宙モデル」という新パラダイムが成熟していくことを切望します（2017：209）。

ユニバーサルとは「普遍的」だけでなく、「宇宙的」とも解釈できる言葉である。宇宙には、あちら側とこちら側の区別がない。僕たちが暮らす地球も、宇宙を構成する一つの惑星に過ぎないのである。

…あちら側とこちら側、支配する者と支配される者、私たち彼ら。二項対立の壁、人と人を隔てる垣根を取っ払うことが文化人類学の課題とされてきた。…多彩なマイノリティ研究が進展する中で、障害に関してはまだ壁・垣根が残っていると感じる場面が多い。あちら側（健常者）の視点で、こちら側（障害者）の生活を取り上げる研究が主流となっているというのは言い過ぎだろうか。こういった現状を打開していくためには、僕のような障害当事者による発信が必須である。やはり、「宇宙人」を育てるためには、「めくらが威張る」実践を続けていくことが大事だろう（2023：178）。

5. ろう文化と視覚障害者文化

目が見えない・見えにくい「視座」から見常者中心の社会のあり方を問い直し、従来型の価値観・人間観の改変を迫る。こんな思いを込めて、「視覚障害者文化」を掲げることにしました。

聴覚障害者（ろう者）は手話の使用者であるという自信に立脚し、「ろう文化」を宣揚しています。近代以降の視覚障害者は、どちらかというと見常者への同化意識が強く、独自の文化を標榜する動きは弱かったと

いうのが僕の印象です。これは言語である手話と、文字である点字の違いに由来するのかもしれませんが。

「ろう文化」ほどラディカルでなくてもいいので、視覚障害者文化を探究してみよう。そして、そんな新しい文化をみんなで育てていきたいと決意しました（2017：144）。

視覚障害者と聴覚障害者は同じ「障害者」に分類されるわけですが、それぞれの属性、ニーズはかけ離れています。単純な話、視覚障害者は聴覚情報で、聴覚障害者は視覚情報で外界を把握するのです。物音、人声から情報を得ることができないワークショップは、視覚障害者にとって居心地が悪いといえるでしょう。しかし、居心地の悪さの先には新たな気づきと発見があります。普段は直接交流する機会が極端に少ない視覚障害者・聴覚障害者が、ワークショップの中で互いに居心地の悪さをなんとか乗り越えたいと願う。これこそが「ユニバーサル」を開拓する知的冒険、「難しいけれどおもしろい」応用問題の出発点となるのです（2017：204-205）。

僕は、言語として手話を理解することができません。でも、時に力強く、時に繊細に動く「手」から、聴かせたい（感じさせたい）、聴いてほしい（感じてほしい）熱意がひしひしと伝わってきます。手話にも「言霊」が宿っていることに理屈抜きの感動を覚えました。それは「喋る手」（ろう者）と「感じる手」（全盲者）の衝撃的な出会い、相互接触（触れ合い）の場が現出した「手放しの歓喜」ともいえるでしょう。

「手話は言語である」とよくいわれます。僕は点字と手話の比較に興味があり、ろう文化関係の本を何冊か読むことができました。だから、手話が言語だというのは僕の中では一つの見識だったのです。一般に、豊富な見識を持つ人が有識者として尊敬されます。見ることによって「識」が蓄積されるというのが世間の常識です。見ることができない視覚障害者は、点字ディスプレイ、活字読み上げ装置などの視覚代行機器を導入して、見識を育んできました。

そもそも見識があるのなら、聴識や触識があってもいいのではないのでしょうか。人々が多様な「識」を持ち寄れば、豊かな社会を築くことができます。障害者は、マジョリティとは異質の「生き方＝行き方」（ウェイ・オブ・ライフ）を経験することで、ユニークな「識」を会得した有識者なのです。今回、僕はろう者の「喋る手」に触れて、「手話は言語である」ことを確信しました。それは目で見るだけではわからない身体知、自らの手で能動的につかんだ触識ともいえるでしょう（2017：205-206）。

ワークショップ「手話の人と旅する宇宙」に参加し

て、僕は最初、孤独感と無力感に苛まれました。宇宙空間に投げ出されれば、人間は「できない」ことがあまりにも多い現実気づきます。考えてみると、視覚障害者が見常者中心の社会で生きていくということは、日々宇宙旅行しているようなものなのかもしれません。

日常的に「できない」に直面する障害者は、不可能を可能に変える強さと優しさを保持しています。僕がワークショップで出会った「喋る手」にも、この強さと優しさが脈打っていました。誤解を恐れずに言えば、常ならざる「識」を操る障害者は、宇宙時代のパイオニアなのです。果てしなく拡張する宇宙には、排除も包摂もありません。目に見えないもの、耳に聞こえないものに満ち溢れている宇宙に飛び出せば、視覚障害、聴覚障害という社会通念自体が成り立たなくなるでしょう（2017：208）。

6. 触文化

触覚を意識することは身体性の回復・開拓につながる。人間は空気・世界と触れ合うことで生きているので、触覚は人類にとってユニバーサル（普遍的）な感覚ともいえるだろう（2023：14）。

五感人間の感覚、潜在能力に意識を向けるための有効な言葉だが、一方で僕はこの語の頻出に多少の違和感を抱く。

そもそも、人間の複雑な感覚を五つに識別できるのか。日本文化は、目に見えないものを尊ぶ伝統を持つ。「草葉の陰」という表現が示すように、死者の霊は目に見えないが、確実に生者の周りにおり、日々の暮らしを見守っている。何らかの場面で第六感（五感以外の感覚）の存在を体感したことがある人は少なくないだろう（2023：62）。

視覚による情報伝達が困難な盲学校では、さわることを中心に、実体験が重視される。手・体を動かす経験を通じて、物事を「みて」いるのである。視覚に依存する健常者にこそ、「みる＝験」の豊かさ、奥深さを実感してほしい（2023：65）。

さわるとは、単なる視覚の代替手段ではない。世の中にはさわらなければ分からない事実、さわると、より深く理解できる事物の特徴がある。これらは「触文化」（さわる文化）と呼ぶことができる。…新型コロナウイルスの感染拡大により、さまざまな場面でさわるのが制限されている。しかし、触れ合いは人間のコミュニケーションにとって不可欠であり、非接触社会から触発は生まれない。こんな社会状況だからこそ、僕たちは触文化の意義を積極的に発信していくべきではなかろうか。ミュージアムは触文

化を育て、鍛える拠点となるに違いない（2023：106-107）

7. 近代的な二項対立の人間観を乗り越えて

近代以降、人類は「目に見える」世界を拡張することが進歩なのだと信じてきました。しかし、視覚で捉えることができる事物は表面的なものです。「目に見えない世界＞目に見える世界」。少し宗教っぽくなりますが、人間は「目に見えない」世界で生かされている。広くて深い「目に見えない」世界に飛び込み、一生かけて研究してみたい（2017：44）。

本来、「失明」と「得暗^{とくあん}」は表裏一体であり、目が見えなくなるとは、明を失うと同時に、暗を得る効能を人間にもたらす。近代化の流れの中で、人類は視覚に過度に依存する生活を送るようになり、得暗の価値が忘却されてしまった。「失明＝得暗」の本義を探究することによって、人類は近代文明の桎梏から解放されるのではなかろうか（2022：16）。

一般に、失明とは「見える」から「見えない」への転落と考えられがちだが、見え方のゆるやかな変更・移行と定義する方が実態に即している。「私たち」（見える人＝健常者）・「彼ら」（見えない人＝障害者）は、二項対立の存在ではない。「私たち」と「彼ら」の棲む世界は地続きであり、両者の間には多彩な見え方のグラデーションが広がっている。高齢化社会の到来に伴い、人の見え方は今後ますます多様化していくのは間違いない。地続きの認識が定着すれば、障害に対する偏見も是正されるだろう（2022：18-19）。

盲学校の名前を変えるならば、「触覚・聴覚支援学校」とすべきではないか。…二十一世紀の特別支援学校が「支援する人＝健常者」「支援される人＝障害者」の二項対立を助長してはなるまい（2022：20-21）。

誤解を恐れずに言うなら、点字の発明は、盲人を視覚障害者化したのである。僕は「盲人」「視覚障害者」を以下のように提示している。

盲人…目が見える人とは別世界の存在として生きた前近代の目が見えない人。琵琶法師・瞽女・イタコたちの盲人文化は独自性を持つが、排他的な側面も有していた。

視覚障害者…近代以降の目が見えない・見えにくい人。目が見えないことはマイナスであり、克服すべき「障害」と意識される。近代の視覚障害者史は「見えなくてもできること」を増やす苦労と工夫の

歴史といえる。盲人は目が見えない人のみを指すが、視覚障害者には弱視者（目が見えにくい人）も包含されていることにも注意したい（2022：29-30）。

特別展の目的は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の具体像を示すことだった。この「ユニバーサル・ミュージアム」は和製英語である。通常、英語で「Universal Museum」といえば、総合的な調査研究・展示を展開する大規模な博物館を指すことが多い。…

ユニバーサル・ミュージアムを成立させる要件として以下の二つを挙げることができる。

①従来の視覚優位・視覚偏重の点字・教育プログラムのあり方を再考し、積極的に触覚活用を促す。

②点字・ワークショップなどの企画段階から障害当事者が主体的に参加し、マイノリティの発想、生き方（Way of Life）をユニバーサル化（普遍化）するよう心がける（2022：48-49）。

僕は盲人文化ではなく、触文化を標榜することで、ユニバーサル・ミュージアム実現への道を模索している。日本初のユニバーサル・ミュージアムは、欧米的な「ソーシャル・インクルージョン」とは一線を画する共生の可能性を提示できるのではないか。かつて琵琶法師や瞽女が音と声で健常者を魅了したように、イタコが目に見えない霊界と現世の媒介者となったように、ユニバーサル・ミュージアムには「健常／障害」という近代的な二項対立の人間観を乗り越える力が内包されていると確信する（2023：21）。

点字がない時代の盲人たちの「行き方＝生き方」はどんなものだったのか。…

①前近代の社会は視覚依存の文化ばかりではなく、聴覚・触覚型の文化など、複数の文化が混在していた。文明化を指向するそれぞれの文化が共存共榮していたともいえる。

②『平家物語』に代表されるように、盲目の宗教・芸能者は視覚（文字）に頼らない独自の文化を創造し、それを師匠の手から弟子の手へ、口から耳へと伝承していた。

③琵琶法師の口承文芸、イタコの口寄せ（シャーマニズム）などの盲人文化は、非視覚型の文明を創出する多様な種を内容していたが、その萌芽的可能性は視覚優位の近代化の過程で圧殺されてしまう（2022：110-111）。

8.「誰一人取り残さない社会」への違和感、「from」の思想

近年、SDGsとの関連で「誰一人取り残さない社会」という語をよく耳にする。…そんな僕だが、「誰一人取り残さない」には強烈な違和感を抱く。「取り残さない」って、誰が主語なの？「そもそも、誰が誰を取り残さないのだろうか」。「取り残さない」という語には、マジョリティ側の表面的な優しさ（危うさと怪しさ）が内包されているのではなかろうか。…ひねくれ者と言われてしまうかもしれないが、僕はマイノリティとして生きること、マイノリティがごく自然に暮らせる社会を創ることにこだわってきたし、これからもこだわっていきたいと思っている。…ユニバーサル・ミュージアムの具体像を探究してきた僕は今、自信を持って「誰一人取り残さない」と「誰もが楽しめる」はまったく異なる概念であると断言できる。

…さあ、僕は「取り残す」側ではなく、あくまでも「取り残される」立場を堅持しよう。「取り残される」者たちの言葉が「誰もが楽しめる」社会、文明をひらくことを信じて！（2022：265-268）

ユニバーサル・ミュージアムを構想する際、僕は「人に優しい」と「人が優しい」を区別してきました。「人に優しい」の背後には、多数派から少数派への親切の押し売り、「してあげる／してもらおう」という一方向の人間関係に陥る危うさが見え隠れします（2017：202）。

…読み聞かせという言葉に、僕は違和感を抱く。読むのも聞かせるのも主体は大人である。子どもの感性を重視する別の用語はないものだろうか。

『音にさわる』では、「触れ聞かせ」を提唱した。この絵本では、桜・セミ・落ち葉・雪などの触感が隆起印刷で表現されている。絵本に触れるのは読者である。能動的にイラストに触れる行為を通じて、絵本から目に見えないメッセージ、四季の音が聞こえてくる。つまり、聞かせる主体は桜やセミなのである。ややもすると、読み聞かせは「読む」→「聞く」の一方向になりがちだが、触れ聞かせは双方向の対話を促す。読み聞かせ活動に触れる要素が加わり、昔話の再評価が進むことを期待したい（2023：72）。

ユニバーサルを具体化する三つの視座

1. 「with」：健常者（マジョリティ）が障害者（マイノリティ）を包含し、社会全体が「普通」であることを志向する。この思想を体現する語が「with」です。

2. 「for」：障害者のために運用されるバリアフリーツアーには、マイノリティが主体的、能動的に参加できる魅力があります。……マイノリティの立場を尊重し、「for」の精神に徹するという点で、バリアフ

リーの視座は今後も大切にしていかなければなりません。

3. 「from」：僕は「with」と「for」の不十分な点を補うのが「from」であり、この「from」こそがUT [universal tour]の眼目だと考えています。UT が商業ベースで成り立つためには、健常者にとっても楽しめるツアーでなければならないでしょう。旅行を通して障害者の気持ちによりそうのは大事ですが、介助の延長ではツアー参加の積極的動機とはなりません。…「with」や「for」の主体は健常者（マジョリティ）になりがちです。「from」（障害者発）の観光プランがどこまで健常者を引き付け、巻き込んでいけるのか。更なる実験の蓄積に期待したいと思います（2017：250-254）。

日本の障害者福祉の先達・糸賀一雄は「この子らを世の光に」という名言を残している。「この子らに世の光を」という従来の福祉のあり方を根本から問い直す糸賀の寸言は、今もなお色あせない。糸賀の理念を一步進めて、僕は「この子らから世に光を」と言いたい。「この子らから」の「from」の思想には、琵琶法師の平曲のように、障害者が主導するユニバーサルな文化を発信しようという決意が込められている（2023：165）。

9. 触角を取り戻せ

人間よ、触角を取り戻せ
耳を失った芳一は、
全身で事物の本質を掴み取る極意を身につける
目で見、耳で聴くという束縛から離れ、
芳一は自由に歩き出す
できる人と出来ない人、勝者と敗者
文明と未開、健常と障害
目で見、耳で聴いているだけでは、
人間は二項対立の価値観を乗り越えられない
芳一は語る、目がなくても景色はがあると
芳一は唄う、耳がなくても音楽はがあると
(2022：246)

琵琶法師や瞽女は、自身の触角を鍛えるために歩いていた。触角は、彼ら独自の芸能を発展させるために不可欠な武器だった。『平家物語』や瞽女唄は、単に福祉的な文脈で支持されてきたわけではない。盲人たちが各地を歩き、触角でとらえた森羅万象の気配が、音と声による語りに集約された。それゆえに、『平家物語』や瞽女唄は、目が見える者には、創造できない優れた芸能として評価されたのである。歩くことは語ること、唄うこと、さらには生きることと直結していたといえるだろう（2022：27-28）。



羅万象とつながることを「統魂」と定義したい（2023：180）。

おわりに ユニバーサルデザインとしての うたとかたりー

広瀬さんの議論を「うたとかたり」の観点から整理してまとめると以下になるでしょう。

うたやかたりを含む文化伝達において、「享受者（受け手）」が用いる主要な感覚器官は、一般的には「聴覚」や「視覚」と考えられているが、実際には、複数（多感覚）、五感全て、さらには「第六感」をも連動されながら統合的に働いており、その中心となるのは「触覚」である。

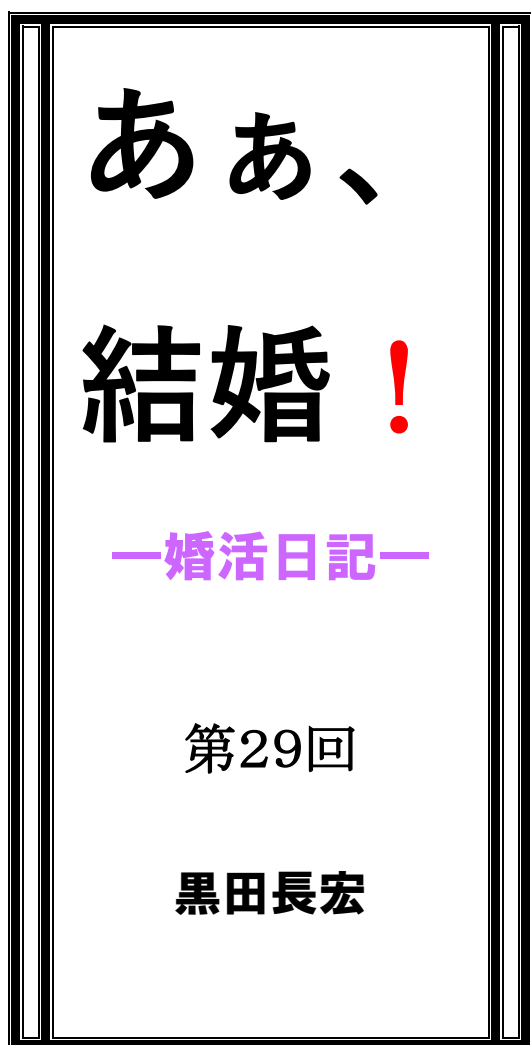
つまり、「全身の触角を通じて森羅万象とつながる」ことが肝要であり、その時、「視覚障害者」「聴覚障害者」「〇〇障害者」などとラベリングされ分断されたマイノリティとしての存在から、「触文化」を共有する「ユニバーサル（宇宙的・普遍的）」な存在への人間観の転回が生起する。そして、うたやかたりにはこの転回のスイッチを押す可能性を秘めている。

私自身もまた、これからも「ユニバーサルな文化」の探求の旅を続けていきたいと思っています。

<引用・参考文献>

- ・広瀬浩二郎『目に見えない世界を歩く 「全盲」のフィールドワーク』平凡社新書 2017
- ・同『音にさわる——はるなつあきふゆをたのしむ「手」』絵・日比野尚子、偕成社 2021
- ・同『世界はさわらないとわからない 「ユニバーサル・ミュージアム」とは何か』平凡社新書 2022
- ・同『ユニバーサル・ミュージアムへのいざない 思考と実践のフィールドから』三元社 2023

（＊広瀬さんのポートレートは 2017 帯カバーより。）



<2023年11月26日>

私の出来る方法で最大の場合は、「婚難救助隊」という名前を付けた YouTube であるが、登録者数が大事であり、既に1000動画を超えてしまった後に、登録ボタンをようやく意識して、ここ数日で、登録ボタンの設置と、動画に「登録お願いします」というテキストを付けることを始めた。まだ工夫できる点が YouTube 以外にもあるのかも知れないのだが。年齢の社会イメージに負けてはいけないと思いたいのだが。

<12月17日>

56歳という年齢も「先入観」で結婚を難しくするんじゃないかと思っている。思っているというより、そうしてしまっている。朝ドラの「ブギウギ」では女性のほうが9歳年上というのが「先入観」になっている。実際の婚活の現場でも、例えば相手が8歳以内など、「先入観」に抑制されてしまう。

<12月31日>

今年も結婚することが出来なかった。それは不可能なほどに難しく思う。

<2024年1月6日>

元日から大変な事が起きた。関東でも久しぶりの揺れだと思ったが、テレビをつけたら大事だった。そして翌日の2日。被災地へ支給しようとしていた海上保安機が日航機と衝突するという付随したような大事故が起き、海上保安官5名が死亡したが、後日、テレビを付けたら、知ったような名前が出てきた。そしてそれは高校時代の弓道部で一緒に部活をした男性だった。彼は最初の仕事が決まったときにも、年賀状だったろうか、通知を受けていたという記憶がある。彼は最初と最期に私に通知してくれるほどの律義さを示したのだろうか。

私は婚難救助隊などと銘打って、YouTubeをしているが、思わぬ事故で突然に久しぶりに、私に高校時代を思い出させて亡くなられた彼は、この事故さえなければ、自衛隊を50代半ばまで勤めあげ、中国の動向を意識したからか、

50代半ばとは、今後どう進んでいけばいいのかと再び考えざるを得ない年齢であり、海上保安庁という場所への転身を選んだのだろうか。まさかそれが命を失うルートになろうとは思ひもしなかったであろう。

私はこれを提出するまで生きているかはわからないとしても、まだこうして書いている時点で生きている。彼は自衛隊から海上保安庁という進路ならば金には困らない、きっと東日本大震災や熊本の地震そのほかの災害でも活躍してきた立派な人生を送ってきたに違いないと思うが、比較する必要もないにせよ、私は、遅ればせながら、かなり遅ればせながら、YouTubeを活用して、結婚難から孤独死まで起きてしまっている、この日本の現状に、決してそれは自己責任などではないはずだ。社会のせいだ。日本のせいだ。結婚難問題を当事者として、もっと憤らねば、真剣なアピールは出来ないだろうに。突然の彼の訃報は、私の甘さを指摘されているように思われた。

<1月28日>

前回、高校時代の部活の同僚の死を報じたが、1月23日に午前3時に私は胸に締め付けられる不快を感じ、救急車を呼ぶべきだったのだが躊躇し、来院して検査して突然車いすに座らされ、高速道を通り救急病院に搬送された。ネット情報では既に遅いくらいだったが、カテーテルでステント処置を受け、23日から27日朝まで入院していた。そして

今朝実家でこうしてパソコンの前に座っている。

私は自らの結婚難問題をこの世でなんとかして欲しいから、こうしてネットや許可を与えてくれたところでパフォーマンスさせていただいているが、ご存じのように、このところ、精細もない短い投稿の連続だと思う。それは今後もわからないのではあるが、自らの焦燥感として、今思えば、(思えるからであるが)全然自らも含め、結婚難問題解決になんにも寄与できない状況のままである。そしてかなり高度に死をまじかにしてしまい、私の願いはこの世では未遂に終えていたことになる。

インパクト部分として書いておかねばならない。

くなぜ、結婚している人がいるのに、結婚したいのに結婚できないまま孤独死する人がいるのですか？私のその犠牲者の一人で終えてしまうのですか？原始からの生命の流れも止めざるを得ないままに・・・>

テレビ新聞ではほとんど隠されるだろうが、有名 SNS では、あえて抽象的にとどめるが、週刊誌報道による芸能人の性的暴行の話題が連日流れ、アダルトビデオ業界というグレーゾーンの関係者や、過去に性的スキャンダルにさらされた評論活動をされている人物などが反応して何度もその事件をコメントしている。

なぜ、一方で結婚したいのに結婚できず、少子化問題まで出てきてしまい、一方ではフリーセックスに罪も恥も感じない男女が現れてしまっているのだろうか。

私はその貞操的な感覚の不統一性が、社会の乱れ全体に影響しているのだと思っている。

私は書いておかねばならない。

日本の男女関係の乱れた時代のせいで、私は結婚もできず子孫も途絶えさせてしまうことになるのか。そして56歳で心筋梗塞を発症してしまったというハンディキャップを背負ってしまった。自らの不摂生や認識の甘さがあるとは言え、洒落にならない日本のまま生まれたのに一矢も報えず死んでいくのか。なんの影響もこの世に与えられずに……。

結婚したい人は結婚できる国にして欲しい。結婚したい人がほとんどになる国にして欲しい。

その基本路線の中で、身体的精神的など不都合な人のケアを必要とする温かい心の社会にして欲しい。

現在までのように、女性が男性暴力（実際にそれがあつたのを今回の入院でも見せつけられた面もあるが。妻娘を早朝呼び出してわめく悲しき老人男性。その拝啓には病気による都合、薬物投与の影響、身体的不快感その他あるにせ

よ、客観的には深夜に病室の壁を蹴り、女性看護師がほとんどつきっきりになり、同室者は眠られず、などなどに遭遇した。)どころか、男性をこきおろすまでになったことが男女平等なのか。そうした平等はラフな関係でも尊厳の仕合という感受性とは違っている。霊性の消えたラフな関係。アメリカのミュージックビデオなどみると、誰も批判しないが、あのいやらしさはなんなのか。それは自由や平等の一つの表現だとしても、なにか質的に感性的に、例えば清らかさというような面を飛ばしたうえでの男女平等のようなパフォーマンスではないのか。それが少しずれると性的にフリーな感覚の男女のパーティーになってしまうのではないのか。

そして一方、その影として、結婚したいのに結婚できず孤独死に追い込まれてしまった人達を生み出していくのだ。

現在のところ、私は母親が78歳存命で孤独死ではなく、死んだら逆縁なのだが、他の人達も、実は孤独死を、命を助けられたのに申し訳ないが、しかも職場もそういうところではあるが、病院や介護施設などで、貯めてきたお金を切り崩しながらなんとか死んでいくのだろう。血縁のない家族というのも大事な精神的支えになる希望のパターンかも知れないが、ほとんどがこのままでは、企業や役所などの血縁家庭以外の場所で＜お金＞を得て、夜勤もあつたりクレーム対応もしたり（実際、患者をはかっている

のかも知れないが、つっけんどんな女性看護師もいる。人手不足もあろう。

一方で、若い女性である女性看護師が老人とは言え、男性の下世話をするを得ない。プロ意識とは言え、私もおしめの交換と身体の洗浄でそういう場面に遭遇したが、金目当てのビデオプロダクションに参加できる変態たちは、そういう場면을茶化すようにアダルトビデオのネタの一場面として、その行為の意味を改変してしまうのだろう。もっと考えれば別に、機械を使う方法など発明して、女性看護師は男性の下世話をしなくて他の、血圧や脈拍などの計測をさらに丁寧にする時間捻出と考えられないのかは、きっと、一般社会が、フリーセックスに寛容になり、貞操感覚を減少させてしまったところからの無視であろう。

文章表現には、文献を調査して記す方法もあろうが、実体験して気づき、記すことができる方法もあるのだろう。なるべく病気での実体験はしたくないのだが。

今回の入院で差し込み便器というのを知った。私は尿道につけられたように肛門に差し込むのかと本気で思って聞いてしまったが、廊下で看護師が同僚に、「なんであんな発想するんだろう」と驚いていたのが聞こえた。なんのことはない。超小型の便器を人体とベッドの間に差し込むだけのことだった。だけどこれがおむつに出すよりも精神的には助かった。これも、提灯のじゃばらのように

して平らから高さをつけたり、ベッドの中央に窪みがあればもっと仰向け排便は楽だろうと思った。

他にも、今回私は意識を失わなかったのだが、その当人にリアルタイムで心筋梗塞とか言われると

死ぬのかなと思いながら小一時間待つのは精神的に発狂しなくなるような人もいるかも知れない。私はもう発症からわけのよくわからないままに流されてしまった。無知が原因だ。

無知と言えば学校教育だって、性教育だって物的性教育だったりするだけなのだろう。コンドームがなんだかんだいう前に家族の大切さ、男女の精神的つながり、そうしたことを教育してあれば、氷山の一角の芸能界で、婚外交渉を強制した、しないなどという疑惑なんかなかったはずだ。

そうした性のゆがみが、論は省略するが、キックバック事件や原発再稼働にも通じているのだ。

もとをただせば、男女の愛しみから生命は生まれる。それを混乱させてしまっている中で何もできずに死の危険が私に近づいた。私自身が甘かったから、私の知る限りの人類の状態にあるのだ。

〔PBLの風と土 第28回〕

担い手を理論がつなぎ方法論でつなげる

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でPBL（Problem-Based Learning）を導入していることで知られています。

連載1年目は現地報告を中心に、連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにオールボー大学以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、連載5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題しています。

1. 変容の契機が奪われることへの危惧

2024年1月1日、能登半島を大地震が襲った。地震発生時は京都市左京区の鹿ヶ谷にある法然院での新春法話から自宅へと戻る途中だったため、直接の揺れを体感することはなかった。しかし、スマートフォンやラジオ放送などから伝えられる速報から、大規模災害となることが見込まれた。今年は2004年10月23日の新潟県中越地震から20年、年を越せば阪神・淡路大震災から30年、ということをも、長きにわたるボランティア・NPO関連の仲間たちと口にするが増えた中での令和6年能登半島地震である。1995年が「ボランティア元年」とすれば「ボランティア30年」の今、30年という時の流れを見つめ直した際、とりわけ対人援助領域において、よりよい社会システムの創造・維持・発展へと導かれてきたか、今こそ見つめ直す契機となるのではなかろうか。

とりわけ、今回の地震において発災当初から顕著となったのは、ボランティアの自粛論と迷惑論であった。東日本大震災の際も、例えば「SmaSTATION!!!」（テレビ朝日系）の3月19日の放送回で「今すぐ行くべきではない？」という問いを掲げ、これに対し「一般のボランティアが求められるタイミング」は「ボランティアセンターが立ち上がるなど受け入れ態勢が整ってから」と示された。この論拠は、発災直後には人命救助が行われており、ライフラインの復旧とあわせて物資の輸送が行われることから、現場にボランティアが駆けつけることで

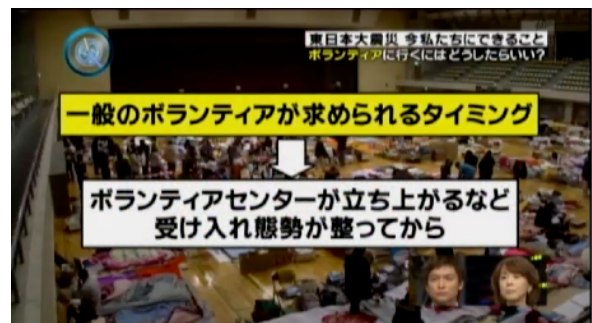


写真1：「一般の」と付されてボランティアも区別
（2011年3月19日「SmaSTATION!!!」放送画面を筆者撮影）

混乱をきたすため、と説明がなされた¹。無論、そうした側面がないわけではないが、被災地NGO協働センターの村井雅清さんが2011年6月に緊急出版した『災害ボランティアの心構え』において「被災地に迷惑がかからないようにボランティアを管理しなくてはいけない、現地で活動する際の規範をマニュアル化して守らせないといけないという方程式が、いつの頃からかできてしまった」（村井, 2011, p.27）と批判するように、ボランティアの重要性和可能性が一側面を引き合いにして否定される構図はボランティアの本質を見極めきれぬまま、制度化や秩序化が進んできたと言わざるをえない。

そして東日本大震災から13年を迎える中で起きた令和6年能登半島地震では、「行かないことが支援」という言葉がインターネット上のSNSで飛び交うことになった。[2023年1月31日の朝日新聞](#)では、災害心理学が専門の宮前良平・福山市立大学講師が「これまでも寄付など『行かなくてもできる支援』はありましたが、今回はさらに進化し、ボランティアとして現地

に行くこと自体が批判されました」と述べている。確かに、半島部での地震ゆえに交通集中を避けるため、年始早々の発生ゆえに帰省中の住民も多いだけでなく住民以外の支援対象者が一定数いるために支援態勢の構築に時間を要するため、あるいはマニュアルが整備されてきているゆえに所定の手続きに沿った対応がもめられるため、といった具合に、合理的な理由も複数挙げられるだろう。とはいえ、阪神・淡路大震災の際に「行け」とも「行くな」とも言われぬままに現地に駆けつけた者として、またそうした災害ボランティアを契機として日常的な地域参加の大切さを痛感して現在の仕事や暮らしを送っているものとして、さらには東日本大震災の発災当初に示されていたボランティアの自発性を抑える言説に対して代替する物語を提示することができなかったもどかしさを忘れ得ない者として、何より「立命館大学サービスラーニングセンター長」の立場に就いている者として、何か響く言葉を紡がねば、という衝動に筆者は駆られた。その結果、[1月10日](#)と[1月31日](#)と[2月29日](#)に「令和6年能登半島地震のボランティアの参加を考えている学生・院生の皆さんへ」を発表している。

翻ってみれば、本連載においては特にこの数回にわたって、サービス・ラーニングにおけるSOFARモデルの理解を通じて、パートナーシップの意義について取り扱ってきた。関連するE-T-T連続体 ([Bringle et al., 2009](#)) などを引き合いに出すなら、ボランティアの自粛論や迷惑論は、パートナーシップの構築を通じた変容的な関係の創出や地域社会そのものの変容への契機を根本から奪うものである。そこで今回は前回第27回の予告に基づいて、第26回では簡潔に触れるに留まったIUPUI教育学部における教育実践を紹介し、変容的な関係のもとでのパートナーシップ構築に関する理論とそのための方法論について紹介する。これらの知見がサービス・ラーニングの教育実践のみならず、前回の時点では想像だにできなかった大規模災害から復興や、対人援助における多彩な現場においてもまた、「する一される」という固定的な関係を打開する手がかりとなれば幸いである。

2. IUPUI日本語プログラムでの実践例

今回取り上げるのは、アメリカ合衆国のインディアナ州の[インディアナ大学-パデュー大学インディアナポリス校 \(IUPUI\)](#) の教育学部によるCEISL ([The Collaborative for Equitable and Inclusive STEM Learning](#) : 公正で包摂的な社会をめざすSTEM学習のための協働プロジェクト) である。これは本連載[第26回](#)で調査の全体像を紹介したように、2023年3月5日から3月9日にかけて、筑波大学の唐木清志先生を代表者とするJSPS科研費21K18479「[初等中等高等教育におけるパートナーシップに基づくサービスラーニングの実装化](#)」により訪問した際に紹介を受けたものである。プロジェクトの名称に「公正で包摂的な社会 (Equitable and Inclusive)」と掲げられている背景は、本連載[第27回](#)でIUPUIがあるインディアナポリスにおいて「[Learn Indy Eastマップ](#)」が制作され、そこには地区内における子どもの貧困 (Children in Poverty) の度合いが色づけされている、といった状況からも想像が及ぶであろう。そのため、このプロジェクトでは、教育学部を経て教育者となっていく学生たちのサービス・ラーニングにより、子どもたちのICTのリテラシーが高まるよう、豊かなパートナーシップの構築が不可欠とされている。



図1：IUPUI教育学部のCEISLのホームページ
(<https://ceisl.iupui.edu>)

CEISLのホームページによれば、CEISLは研究助成をもとにCOVID-19を受けて教育学部内で結成されたプロジェクトであるという。その目的は「学習のためのユニバーサルデザイン(UDL)」の理念のもと、教員、家族、学校、地域社会に各種のテクノロジーを利用した学習を支援すること、と記されている。こうしたコロナ禍における学習機会の保障の問題は、前述のとおり、インディアナポリスでは子どもの貧困度を地域社会の課題の1つとして取り上げているとも無関係ではないことが想像できる。既にコロナ禍は一定の収束期にあることもあり、2022年度から2023年度にはインディアナ州教育省(the Indiana Department of Education)の生徒の学習回復プロジェクト([SLR-P: Student Learning Recovery Project](#))の資金により、地域の公立学校でのサービス・ラーニングが展開されている。²

今回の筆者らの訪問では、教育学部のジェレミー・プライス([Jeremy F Price](#))助教授から、SLRPに採択された「It Takes A Village: Student Learning Resilience Project」の事例を伺った。プロジェクト名を直訳すれば「生徒のレジリエンス学習計画」となるよう、社会から疎外されている人々が主体的に学ぶ自立的な学習者になることを支援する取り組みで、いわゆる「Student Success」をめざすものである。そのために教育学部生がピアサポーター(student-teachers)となるサービス・ラーニングとして、メンタリング・プログラムが展開されており、学校と家庭と地域社会がつながり、結果としてコロナ禍での不平等な教育機会

からの回復だけでなく、教員と学校の持続的な能力向上への教育基盤の形成に貢献する取り組みである³。具体的には、英語と数学に力点が置かれ、筆者らには教育機会の不公平について深化を図る挑戦の1つとして直接的に学生が地域貢献する「STEM Studio」、修学に際しての家庭や地域からの声の欠如に対する挑戦の1つとして「Family as Faculty as an Infrastructure」、各々の活動が紹介された。

連載第26回でも紹介したとおり、CEISLではこれらのプロジェクトの開発や評価に(1)批判的サービス・ラーニング(critical service learning)、(2)SOFARモデル、(3)アクターネットワーク理論(Actor network theory)、これら3つの理論を複合的に組み合わせて援用している。1つめの批判的サービス・ラーニングとは、現在はミシガン大学の[タニア・ミッチェル](#)教授とインディアナポリスにあるマリアン大学などで[マーク・ラッタ](#)先生([Mitchell, 2007](#); [Mitchell & Latta, 2020](#))によって示された観点で、教室と地域社会とを往復する中で変容的關係がより広範に浸透するように互いの力関係や立場を見つめ直しつつ信頼を深めていくことが重要であることを明快に示す枠組みである。2つめのSOFARモデルについては本連載で繰り返し取り扱ってきたとおり、大学側のアクターを学生・教員・職員や役員など執行部の3者として地域側のアクターをNPOなどの地域団体と地域住民との2者に区別した上で、5つの立場が適切な関係を取り結ぶことができるように関係性の構造を分析する枠組みである。そして3つめのアクターネットワーク理論(Actor network theory)は、フランスの哲学者ブリュノ・ラトゥールが人間を中心とした主体と客体の二分法からの脱却のために提唱したもの⁴であるが、その中でも「Links & Knots」([Latour, 1999=2007](#))と呼ばれる概念を取り上げ、Links and Knots(リンクと結び目)、Autonomization(自律化)、Alliances(同盟)、Mobilization(世界の道具)、Public Representations(公衆の意見表明)の5項目の相互関係に着目し、適度な緊張関係こそが変容への契機と捉えるものである。

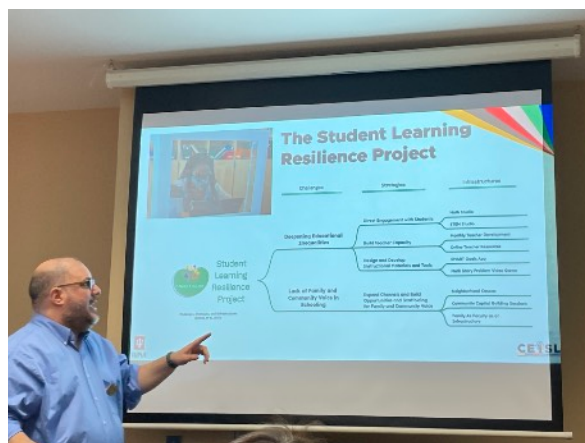


写真2：It Takes A Villageについて説明するプライス先生
(写真3・図3の写真も含め2023年3月7日、筆者撮影)

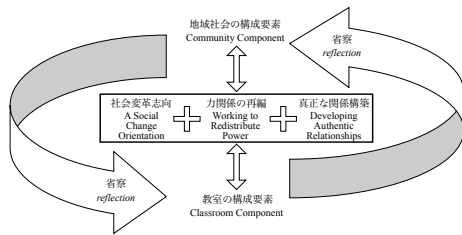


図2-1：批判的サービス・ラーニング (Mitchell, 2008)

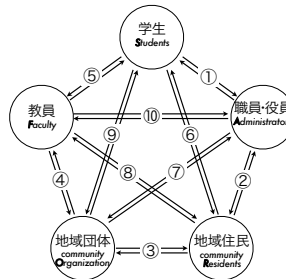


図2-2：SOFARモデル (Bringle et al., 2009)

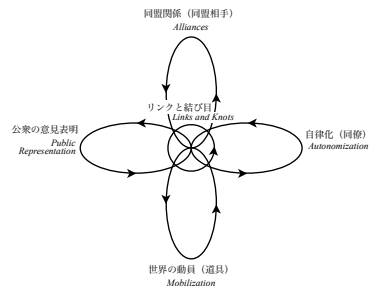


図2-3：Links and Knots (Latour, 1999=2007)

図2：CEISLが用いる3つの理論の概念モデル (Price & Santamaría Graff, 2023、図2-1と図2-2の訳は筆者による)

3. 理論を踏まえたワークシートの活用

このように、外部資金のもと、地域社会の課題に向き合いつつ、理論的な枠組みを用いてプログラムを構築・評価・そして再設計などに取り組んでいるCEISLでは、図2に示したとおり、3つの理論を象徴する図解をもとに、実践を整理するワークシート (Price & Santamaría Graff, 2023) を作成し、インターネットで提供している。ワークシートは4枚からなり、1枚目は映像資料を見て特にSOFARモデルとアクターネットワーク理論の特徴を要約する、というものだった。2枚目から順に、批判的サービス・ラーニング、SOFARモデル、そしてアクターネットワーク理論に基づいて現場の活動の特徴

を整理するように構成されている。実際、筆者らが訪問した際にもワークシートが机上に配布されていたが、1枚目については「もう皆さんはよく知っているだろうから」と省略され、2枚目以降を積極的に活用してみてはどうか、と促された。

批判的サービス・ラーニングのワークシートでは、大学と地域が互恵性に基づいた信頼関係を構築するために、搾取的 (Exploitative) 関係、交流的 (Transactional) 関係、融合的 (Transrelational) 関係、変容的 (Transformational) の4段階に区別し、どのような状態のときに各々の水準であるのかを整理するものである⁵。この4つの段階の区別は、関係本連載第19回などで取り上げたBringleら (2009) によるE-T-T連続体をさらに拡張したもので、SOFARモデルをもとにした尺度評価のツールであるTRES2のバージョン2として、2022年春に公開されたClaytonら (2022) のワークシートにも組み込まれた区別である。この4つの水準の区別のもと、CEISLのワークシートでは自分たちが取り組むサービス・ラーニングの目標を確認した上で、そうした理想像を実現するために、どの水準に留まってはならないのかを明確にするように問いが投げかけられている。具体的には搾取的関係とは「ある当事者が他の当事者を犠牲にして利益を得る」状態、交流的関係とは「短期的なタスクの完了を目的とする」状態、融合的関係とは「関係性の説明責任を念頭に置いて設計されている」状態、変容的関係とは「長期的な持続可能性を通じて全関係者が成長・変化する」状態、と定義され、自らの現場の現状把握や理想像や避けるべき状況への分析能力が問われるものとなっている。

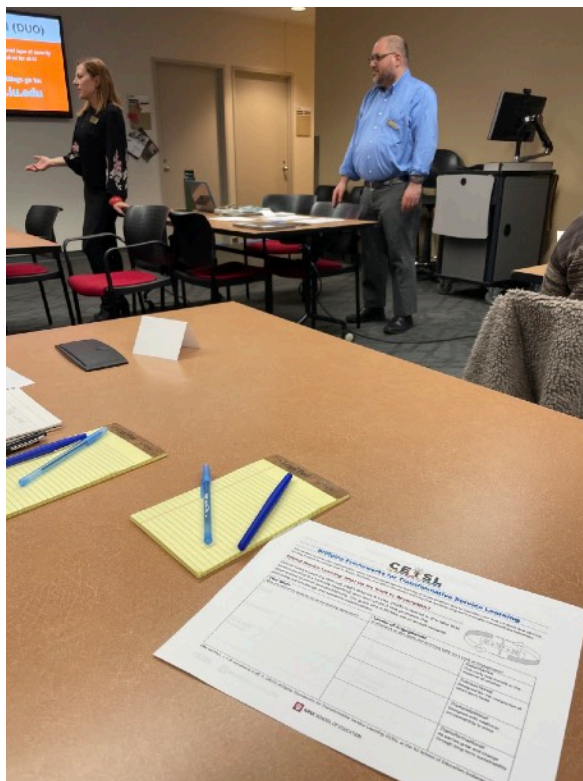


写真3：CEISLのワークシートを提供し活用が促された (右がブライス先生、左がサンタマリアグラフ先生)

続くSOFARのシートは言うまでもなく、5つの担い手が誰かを明らかにするものである。ただし、このシートの特徴は「誰が関わるか」だけでなく「誰が関わらないか」を明確にする点にある。つまり、安易に「みんな」が関わればよいサービス・ラーニングが実現できるわけではない、ということの証左でもある。同時に、学習者のみならず地域社会の変容も、必ずしも全ての関係当事者が関わる必要がないことを気づかせてくれる。

そしてアクターネットワーク理論のシートでは、Links & Knotsの5つの観点を洗い出していく。端的に整理すると、一定の緊張関係と相互交渉によって生産的な活動をする過程はどんなものか、誰の主体性や資源が尊重されるか、どんなパートナーシップや協力関係が必要か、どんな資源が必要か、いかに学びと成長の成果を共有するか、である。いずれも抽象度が高い問いである。それらを言語化されれば、よりよい活動と学習が実現するという企図だろう。

Bridging Frameworks for Transformative Service Learning

Critical Service Learning: What Do We Want to Accomplish?

Critical Service Learning (Mitchell, 2009; Mitchell & Latta, 2020) is rooted in the idea that service learning is a mutually-beneficial, long-term project that promotes the integration of power and positionality. The goals and activities are oriented towards promoting social change and authentic relationships.

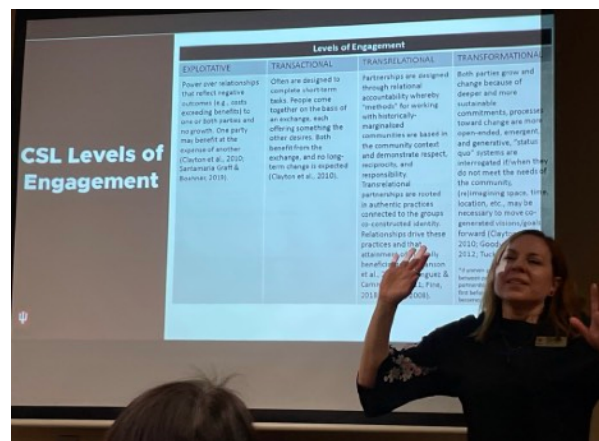


Your Goals	Levels of Engagement	Outcomes
What are some of the goals for the service learning experience?	Exploitative One party may benefit at the expense of another	
	Transactional Designed for the completion of short-term tasks	
	Transrelational Designed with relational accountability in mind	
	Transformational All parties grow and change through long-term sustainability	

CEISL IUPUI SCHOOL OF EDUCATION 2

CSL Levels of Engagement

EXPLOITATIVE	TRANSACTIONAL	TRANSRELATIONAL	TRANSFORMATIONAL
Power over relationships that reflect negative outcomes (e.g., costs exceeding benefits) to one or both parties and no growth. One party may benefit at the expense of another. (Clayton et al., 2010; Santamaría et al., 2019)	Often are designed to complete short-term tasks. People come together on the basis of an exchange, each offering something the other desires. Both beneficiaries the exchange, and no long-term change is expected. (Clayton et al., 2010)	Partnerships are designed through relational accountability whereby "methods" for working with historically marginalized communities are based in the community context and demonstrate respect, reciprocity, and responsibility. Transrelational partnerships are rooted in authentic practices connected to the group co-constructed identity. Relationships drive these practices and drive outcomes. (Clayton et al., 2010; Santamaría et al., 2019)	Both parties grow and change because of deeper and more sustainable commitments, processes toward change are more open-ended, emergent, and generative. "Status quo" systems are interrupted if/when they do not meet the needs of the community. (re)imagining space, time, location, etc., may be necessary to move co-generated vision/identity forward. (Clayton et al., 2010; Santamaría et al., 2019; Tuckman, 2012; Tuckman, 2013)



Bridging Frameworks for Transformative Service Learning

SOFAR: Who is involved—and who is not involved yet?

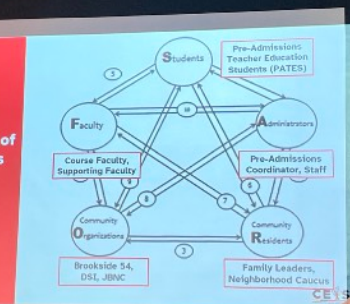
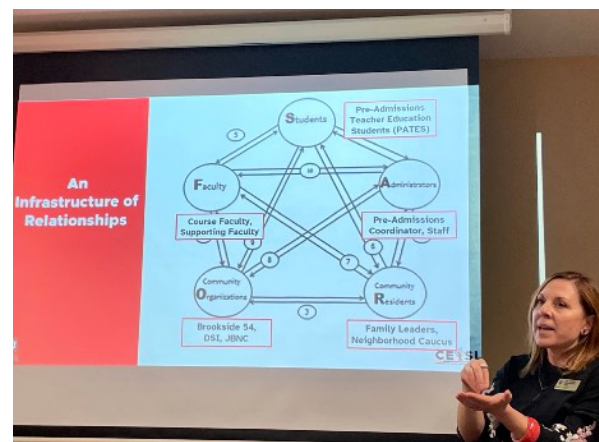
The SOFAR mode (Bringle et al., 2009) helps us think through who needs to be represented in transformative service learning. This includes a mix of institutional and individual actors, from both the university/school and the community. Just as helpful is understanding who is not yet involved and represented so that you can bring them in and learn with them.



Who Is Involved?	Who Is Not Yet Involved?
Students	Students
Community Organizations	Community Organizations
Faculty	Faculty
Administrators	Administrators
Community Residents	Community Residents

CEISL IUPUI SCHOOL OF EDUCATION 3

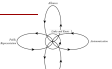
An Infrastructure of Relationships

Bridging Frameworks for Transformative Service Learning

Working Through Links and Knots: Strategizing Transformation

The concept of links and knots is from Actor-Network Theory (Latour, 1999), and helps us to highlight how we are going to bring all the people and resources together to work towards our goals for the service learning experience. As these people and materials work together, tensions may arise, giving rise to the "links and knots." The goal is to treat these tensions as productive and opportunities for learning so that transformative service learning can occur.



Aspect	Links and Knots
Links and Knots	What pathways will be co-constructed and what possibilities will be opened through productive tension and negotiation?
Autonomization	Whose agency and capital will be recognized and honored?
Alliances	What alliances and partnerships need to be built?
Mobilization	What resources and groups need to be mobilized and set in motion?
Public Representations	How are you going to share what is learned, grown, and sustained?

CEISL IUPUI SCHOOL OF EDUCATION 4

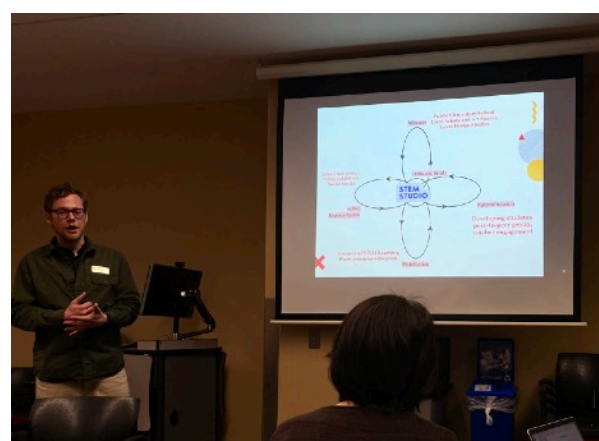


図3：CEISLのワークシートで提示される3つの理論とそれらをもとに実践の特徴を整理して説明を受けている様子（筆者撮影、写真3枚目はウクライナ侵攻によりロシアからIUPUIへ2022年9月に戻ったフルブライト修了生のプラノフ先生）

4. 理論的・方法論的な枠組みの深化へ

以上、1年にわたりIUPUIの訪問調査で得た知見を紹介してきた。本稿に先立ち、2月17日にはJSPS科研費21K18479の成果報告を行う公開研究会が聖心女子大学で開催された。追って報告書も刊行される予定である。

繰り返し述べているように、サービス・ラーニングに関する知見は、地域参加学習はもとより、多様な主体の連携・協力による対人援助の実践の設計・評価にも援用可能と捉えている。したがって、今回、冒頭で触れた令和6年能登半島地震におけるボランティアの自粛論や迷惑論に対する考察にも援用可能である。予備的な考察としては、「行かないことが支援」に対する筆者の違和感は災害からの復興という、自ずと変容的関係の構築が求められる現場にもかかわらず、その担い手になることへの径路を断つ

ことが求められることによる。言い換えれば、禁止のルールで縛り、「しない」ことの正当化を貫く言説の提示である。こうした表現は批判的サービス・ラーニングやアクターネットワーク理論を緻密に用いたものではないが、CEISLのワークシートから整理が可能である。

そこで連載開始から8年目を迎える次回以降は筆者が関わってきた教育実践を取り上げ、どのようにして活動の担い手と現場が変容していく方向へと向かうかについて、これまで紹介してきた理論や方法論を用いて整理していく。

「しない」ことが正当化される時代に、現象の記述やその意味の認識に留まらず、よりよい関係性の構築に向けた可能性も分析していく、ということである。「したい」気持ちが第三者によって抑えられることなく、多様な担い手が協働できる環境を創出する知恵を探究したい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- Bringle, R. G., Clayton, P. H., and Price, M. F. 2009. Partnerships in service learning and civic engagement.: A Journal of Service Learning & Civic Engagement, 1(1), 1-20.
- Clayton, P. H., Camo-Biogradlija, J., Kniffin, L. E., Price, M. F., Bringle, R. G., & Pier, A. A. 2022. The Transformational Relationship Evaluation Scale II (TRES II) Reflection Framework. [Learning Tool] <https://doi.org/10.7912/zy6w-xj66>
- Latour, B. 1999. Pandora's hope. Essays on the reality of science studies. Harvard University Press. (川崎 勝・平川 秀幸(訳). 2007. 『科学論の实在——パンドラの希望』 産業図書)
- Mitchell, T. D. 2007. Critical service-learning as social justice education: A case study of the Citizen Scholars Program. Equity & Excellence in Education, 40(2), 101-112.
- Mitchell, T. D. 2008. [Traditional vs. critical service-learning: Engaging the literature to differentiate two models.](#) Michigan Journal of Community Service Learning, 14, 50-65.
- Mitchell, T. D., Latta, M. 2020. From Critical Community Service to Critical Service Learning and the Futures We Must (Still) Imagine. Journal of Community Engagement and Higher Education, 12 (1), 3-6.
- 村井雅清. 2011. 災害ボランティアの心構え. ソフトバンククリエイティブ.
- Price, J. F. & Santamaría Graff, C. (2023). Bridging Frameworks for Transformative Service Learning. CEISL at the IU School of Education-Indianapolis. <https://hdl.handle.net/1805/31869>

【注】

- ¹ SmaSTATION!!!は2017年9月23日の最終回終了後も、ホームページで各回の内容をまとめた「SmaTIMES」が公開されているものの、2011年3月19日の放送回は文字化されていない。<https://www.tv-asahi.co.jp/ss/contents/backnumber/>
- ² インディアナ大学の2021年7月20日付のプレスリリースによれば、インディアナ大学システム（IUブルーミントン校、IUPUI、IUコモコ校）として、インディアナ州教育省より4.4百万ドルの資金を得たとの報告がある。IUPUIは、教育学部に2件、地域貢献室に1件、これら3件で合計300万ドルを超える助成金を得たと記されている。
- ³ 注2で紹介のプレスリリースには「Build the capacity of the teachers and the school to make this an opportunity for sustained resilience rather than simply a recovery from the COVID-19 pandemic's inequitable impacts」とある。
- ⁴ アクターネットワーク理論は実に複雑な理論である。本稿での日本語訳は川崎・平川（2007）に沿った。なお「入門」と付した書籍などもあるが、平明な理解は困難と思われる。一方で提唱者のラトゥールによる語りとして、2021年の京都賞受賞時の講演素材が文字と映像で公開されているので参照されたい。https://www.kyotoprize.org/laureates/bruno_latour/
- ⁵ Transrelationalには日本語の定訳が存在しない。北海道大学の結城雅樹先生が1999年に東京大学の博士論文として「超関係的」と掲げたものがTransrelationalの訳に対応するものの、E-T-T連続体の連続性において「交流」と「変容」のあいだに位置づけるものとして、明快な区別がつくための語用となるように、本稿では筆者が「融合」を当てた。



「常識を疑え」

ＪＲ茨木駅近くの接骨院が、私の仕事場です。

毎日、患者さんから、いろんな訴えがあります。

「先生、今日は首から肩にかけて、三角形に痛いです」
「痛むところが三角形なんですね。どうされたのですか？」

「何もしないのですが、とにかく痛くて・・・」
触診をさせていただくと、筋肉の緊張が強くて、あちらこちらがガチガチに硬くなっていました。

「何か緊張することでもありましたか？」

「そういえば、サークルでトラブルがあって・・・」
「トラブル？」

「指導してくれる先生に対して、とても失礼になるミスがあって、中心メンバーで謝りに行ったのですが、許してもらえなくて・・・」

「それは大変でしたね。それで体が緊張してしまったんでしょうか？」

「それは、おおいにあると思います」

「体が左にねじれているようですね」

「ああ～、謝りに行ったとき、先生が左の方にいらっやいました」

このようにこころの緊張で体も強く緊張し、体がねじれて痛むこともあります。

施術で体の緊張や痛みはいったんとれましたが、こころの緊張はもとのままです。

痛みの三角形が再発しないよう祈るばかりでした。

その後一週間たって、三角形に痛む患者さんは、「許してもらえました」と明るく来院されました。

体の硬さは残っているものの、体中ガチガチということはありませんでした。

世の中には、ミスに厳しい先生もいれば、ミスしたくらいでは気に留める素振りも見せない先生もいます。

恩師の佐々木雄二先生はそんな先生でした。

私をご迷惑をかけても「うん、わかった。じゃあ、こうしよう」とそれだけなのです。

お人柄に温かみを感じました。

執筆者短信に書きましたが、歯科医師の故・山下幸先生も温かいお人柄でした。

接骨院をやりたいというと「がんばりなさいよ」と励ましてくださいました。

開業したら自宅に往診させてくださったり、ご友人を紹介してくださったりしました。

バイオフィードバックの装置や録音テープなども譲ってくださいました。

私が山下先生に「接骨院で心理療法も提供したい」「心身両面からサポートできるようになりたい」などと、えらそうなことを言っていたからかもしれません。(残念ながら、いまだにその目標は達成できていませんが・・・)

その山下先生がよくおっしゃっていたのが「常識を疑え」でした。

山下先生は、麻酔を使えない患者さんに催眠をかけ、痛みを和らげながら歯の治療をされていました。

歯科医学の常識では考えられない治療だと思います。おそらく、教科書には載っていないのではないのでしょうか。載っていても、ごくわずかな紹介に留まるのではないのでしょうか。

よくそんなことにチャレンジされたなあ后感心します。

常識を疑うには勇気がいります。人と違うことをするのに
も勇気がいります。

しかし、常識が必ずしも真実とは限りません。

常識とは違うこと、常識に反することの中に、正解がある
こともあります。

「常識的見解に矛盾するように見える見解、あるいは真理
に矛盾するように見えて、実はそうではない説」をパラド
ックス（逆説）と呼びます。

「常識を疑え」ということは、「常識的見解に矛盾するけ
れども真理をつく見解、つまり逆説を持て」と言い換えて
もいいのではないのでしょうか。

世間一般で言われていることや、お上の言うことには、疑
わしいものがたくさんあります。

とりわけ健康・医療の分野には、たくさんあります。

「ワクチンで予防ができる」

「ワクチンで重症化が防げる」

「風邪は風邪薬で治る」

「検診を受けていれば、がんが早期に見つかって治る」

「最高血圧を130mmHg以下に抑えないと病気になる」

「コレステロールは低い方が良い」

「健康のためには運動しなければならない」

信じたい人は信じればよいと思います。

うさんくさいなと思う人は信じなくていいし、自分なりの
正解をさがすのがいいと思います。

「常識を疑え」というのは非常識になれということではあ
りません。

へりくつをこねろということでもありません。

「より真理を追究せよ」ということなのだと思います。

真理に近づくためには、仮説を立てて、検証を繰り返すことが必要です。

私は、当マガジン43号にも書いたように、次のような仮説を立てています。

「体の痛みなどの症状の多くは、組織の伸びすぎや縮みすぎによって発生する。

伸びすぎた組織は縮め、縮みすぎた組織は伸ばすと症状が改善することが多い。

縮めても伸ばしても改善しない場合は、伸びすぎや縮みすぎ以外の原因によって症状が発生しており、その原因を取り除くようにすると症状が改善することが多い」

この仮説は、いまでも私の基本のスタンスです。

日々の仕事の中で、何度も何度も検証し、それでも変わらない、ゆるぎないものです。

ただ、日々施術をしていると、果たしてこれは縮みすぎなのか、伸びすぎなのかどちらなのだろうと鑑別に迷うことがあります。

「縮みすぎているが伸びすぎてもいる」

「縮みすぎたところを無理やり伸ばしている」

「縮みすぎた筋肉の中にも伸びすぎた組織がある」

「伸びすぎた筋肉の中にも縮みすぎた組織がある」

「ある方向に縮みすぎているが、別の方向には伸びすぎている」

縮みすぎか伸びすぎかは、ひとつの筋肉という大きなレベルでみることもできます。

ただ、それでは症状がうまく説明できないこともあります。

そんなときは、症状が出ている小さな部分ごとにみていくと理解しやすくなります。

筋肉でも、筋腹なのか、筋腱移行部なのか、腱なのか、筋線維なのか、筋膜なのかで分かります。

長い筋肉や広い筋肉は、上より、下より、内より、外より、中枢より、末梢より、あるいは中間などで分かります。筋肉が重なっているところは、表層か、深層か、中層かなどで分かります。

関節なら、軟骨なのか、骨なのか、関節包（関節の袋）なのか、靭帯なのか、支帯なのか、筋肉なのか、腱なのかで分かります。

このように細かく分けていくと、縮みすぎか伸びすぎかはだいたい判断できます。

縮みすぎ・伸びすぎが同じ筋肉の中にある例

左の図は、ふくらはぎの筋肉に2カ所痛むところがあるのを表している。上の×印が縮みすぎているところで、下の×印が伸びすぎているところ。下の図は、テーピングで処置をした例。

伸びすぎた部分にテーピングをして縮め、足関節を反らせた状態で固定することで縮みすぎた部分を伸ばしている。
詳しくは <http://efficie.com/index1-6.html>

しかし、縮みすぎたところと伸びすぎたところが隣接していて、境目がはっきりしないというようなこともあります。また、広い範囲で縮みすぎや伸びすぎが生じている場合は、どこがそうになっているのかははっきりしないこともあります。

体の縮みすぎ・伸びすぎは、患者さんによってシンプルであったり、複雑であったりします。

もちろん、まったく縮みすぎ・伸びすぎが見当たらない方もいらっしゃいます。

そういう人はめったに接骨院には来ませんが、たまに「問題がないかみてほしい」といわれることがあり、そういう人の中に、まったく問題が見当たらない人がいらっしゃいます。

それと、患者さんが完治されたときは、縮みすぎ・伸びすぎはどこにも見当たらなくなります。

以前にも書きましたが、体をゆがめている人は、よりゆがめるような施術をするとゆがみが改善します。

常識的に考えれば、体をゆがめる施術は危険です。

常識を疑ってこそ、そういう逆説的な施術ができます。

一見縮めているのかと思える方に伸ばすことで、縮みすぎている筋肉を伸ばすことができる場合があります。

このようなストレッチングを私は「パラドキシカル・ストレッチング」（逆説的伸長）と呼んでいます。

いっぽう、一見伸ばしているのかと思える方に縮めることで、伸びすぎている筋肉を縮めることができる場合があります。

このようなコントラクティングを私は「パラドキシカル・コントラクティング」（逆説的短縮）と呼んでいます。

パラドキシカル・ストレッチングとパラドキシカル・コントラクティングについては、次の号で述べたいと思います。

ではまた

現代社会を『関係性』という観点から考える

㊟「自分には支えてくれる人がある」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へ

更生保護官署職員 三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

1 はじめに

連載 14 では『「開く」ことと「閉じる」こと』と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題し、我意を通し続けた結果「閉じる」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、「地域社会」との「関わり方」を考えると題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では「地域社会」で生きるということについて考えてきたともいえます。まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。こうした点について連載 19 では「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということと題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では「自分は誰かとつながっている」という感覚を持つために私が必要だと痛感している『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、連載 20 では、『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、Society から Home へ矮小化していく社会について私見を述べさせていただきました。

本連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込んでいきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる「家族助」について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさと題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながるなどについて、引き続き連載 25 では「知らないことが不安や排除につながる」ということというテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じている「理想とされる家

族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただきます。

連載原稿として一定の一貫性は保持したいと考えており、連載 14 以降では、これまでの連載をまとめる短い文章を記載していることを御了解ください。

2 「愛と仕事」と「居場所と出番」

毎回購読している機関紙に「諸説あるがフロイトは人間にとって大切なものは何かと聞かれ「愛と仕事」と答えたそうである。(中略) 愛も仕事も「自分が必要とされ自分にやるべきことがある居場所」という言葉に置き換えられるように思われる。長い目で居場所づくりを支援する、それが更生保護の役割の 1 つだと思える」といった内容のことを記載されています。

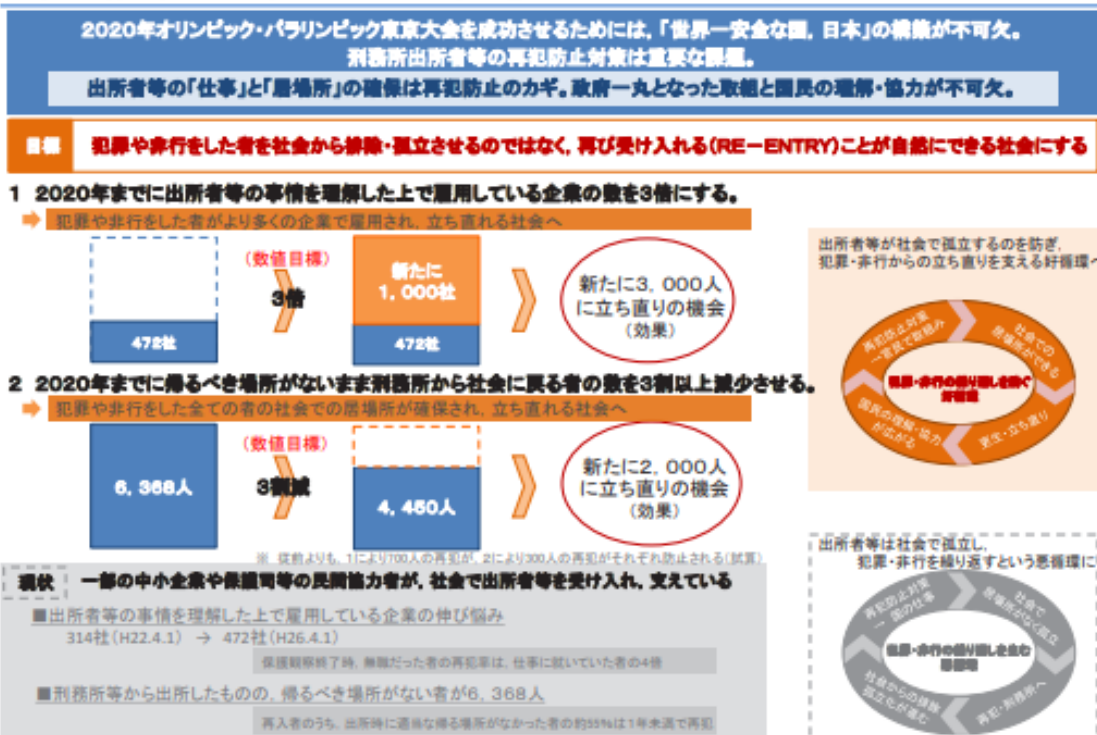
刑事政策に携わるものにとって、刑務所出所者等の「居場所と出番」を確保することは、再犯防止・更生支援のための喫緊の課題とされてきた経緯があります。

居場所とは、まず「出所後の住まい」であり、出番とは、まず「仕事」を表すものとされてきました。出所後の住まいの確保については、従来から刑務所出所者等を長年受け入れてきた更生保護施設に加え、自立準備ホームなどの整備が進められるようになりました。

平成 30 年版再犯防止推進白書 9 頁より引用

2014 年（平成 26 年）12 月には、「宣言：犯罪に戻らない・戻さない～立ち直りをみんなで支える明るい社会へ～」（以下「宣言」という。資 1-4 参照）を犯罪対策閣僚会議において決定した。宣言においては、犯罪や非行をした者を社会から排除・孤立させるのではなく、再び受け入れることを自然にできる社会にすることを目指し、刑務所出所者等の「仕事」と「居場所」の確保に向けた具体策を示すとともに、2020 年までに「犯罪や非行をした者の事情を理解した上で雇用している企業数を 3 倍にする」、「帰るべき場所がないまま刑務所から社会に戻る者の数を 3 割以上減少させる」という数値目標を設定した

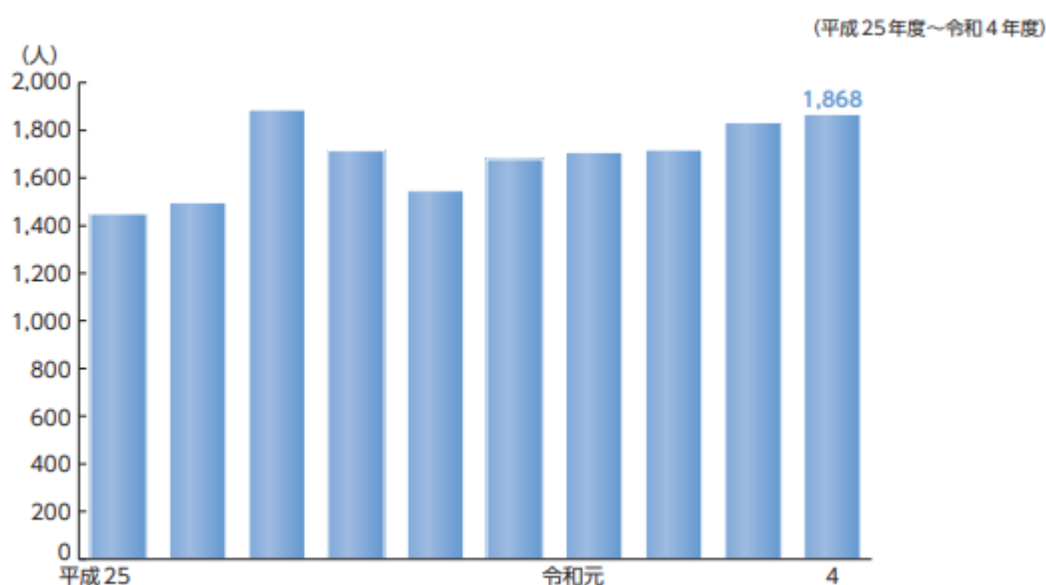
宣言：犯罪に戻らない・戻さない ～立ち直りをみんなで支える明るい社会へ～



参考：令和 5 年版犯罪白書 98 頁より引用

適当な住居の確保が困難な者について、更生保護施設だけでは定員に限界があることなどから、社会の中に更に多様な受皿を確保する方策として、「緊急的住居確保・自立支援対策」が実施されている。これは、あらかじめ保護観察所に登録した民間法人・団体等の事業者に、保護観察所が、宿泊場所の供与と自立のための生活指導（自立準備支援）のほか、必要に応じて食事の給与を委託するものである。この宿泊場所を自立準備ホームと呼ぶ。令和5年4月1日現在の登録事業者数は、506（前年同日比 33（7.0%）増）となっている。自立準備ホームへの委託実人員の推移（最近10年間）は、2-5-6-4図のとおりである。4年度の委託実人員は1,868人、委託延べ人員は12万7,486人であった。自立準備ホームには、薬物依存症リハビリテーション施設も登録されており、薬物依存のある保護観察対象者を委託するなどしているところ、同年度の同施設への委託実人員は318人、委託延べ人員は2万2,002人であった（法務省保護局の資料による。）

2-5-6-4図 自立準備ホームへの委託実人員の推移



注 1 法務省保護局の資料による。
2 前年度からの繰越しを含む。

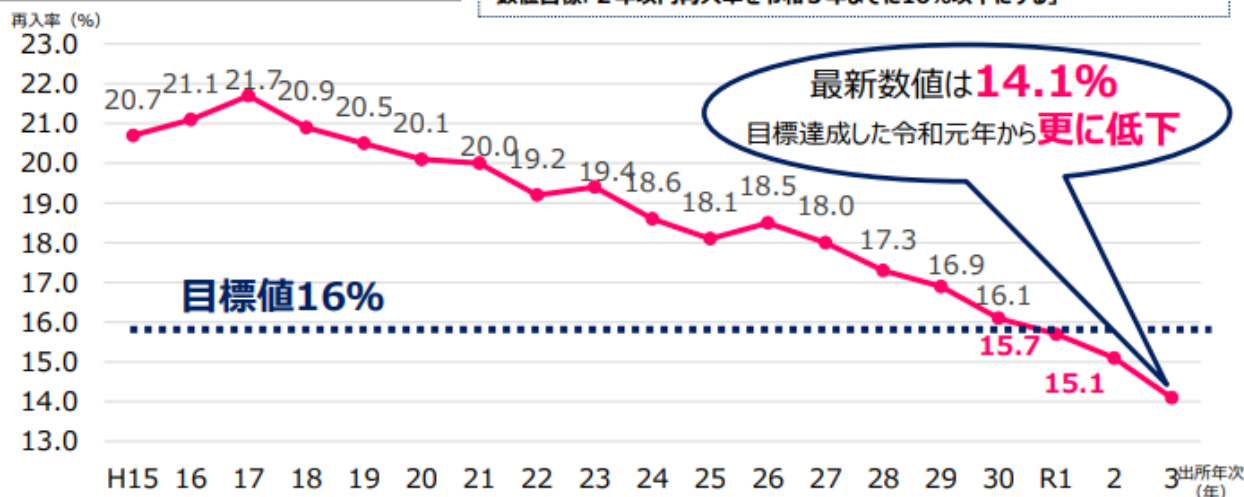
仕事、すなわち就労については、これも制度化される前から民間の方々が取り組まれていた協力雇用主について、平成後半期から刑務所出所者等就労支援事業が実施されることになり、平成27年度からは保護観察対象者又は更生緊急保護対象者を雇用し、就労継続に必要な技能及び生活習慣等を習得させるための指導及び助言を行う協力雇用主に対して、刑務所出所者等就労奨励金を支給する制度が実施されるようになりました。自治体によっては、公共工事入札の際の様々なインセンティブがなされるところも増えていきました。こうした後押しもあり、保護観察所に登録する協力雇用主は年々増加していきましたが、登録するだけでなく、実際に刑務所出所者等を雇用する協力雇用主をせめて1500社にする取組がなされ、それは令和元年に達成されています（その後のコロナ禍等により減少）。

参考：再犯の防止等に関する施策の成果指標（出典：令和5年版再犯防止推進白書の概要）

再犯の防止等に関する施策の成果指標

出所受刑者の2年以内再入率

「再犯防止に向けた総合対策」（平成24年7月20日犯罪対策閣僚会議決定）
数値目標「2年以内再入率を令和3年までに16%以下にする」



3 「愛と仕事」とは「目に見えるもの」ばかりではない

一方で、福祉との連携等によって、「居場所」を確保する「だけ」で全ての課題・問題が解決するわけではないと私は考えています。

本人や状況を多角的にアセスメントし、マッチングを慎重に行うことは勿論のこと、ただ「社会資源を見つけてそこにつなげる」だけではなく、「つなぎ方」について支援者は常に目配りをする必要があると考えています。

そして、心身の状況や年齢によっては、「一般的就労」が難しい人もいます。では「福祉的就労」「ソーシャルファーム」につなげばよいという方向性も確かにあります。

ただ、そういった「目に見える居場所」だけではなく、地域社会でできる限り多くの「つながり」をつくっていくことで、彼らが支えられていくこともまたあると実感しています。

ある刑務所出所者の方は、出所者支援に熱心な NPO 団体に「つながり」、その団体の代表者の方を心から慕っていました。不遇な成育歴ななかで受刑を繰り返したなかで初めて信頼できる「社会の人」との出会いでした。その代表の方に深い恩義を感じ「その方を裏切らない」という気持ちが支えとなって、彼は再犯することなく相当年数を過ごすことができました。ただ、ある時その代表の方が急死されてしまいます。もともと対人関係が不得手な彼にとって、その代表の方は「唯一無二」の社会での味方であり、亡くなったショックのあまり、社会に留まる支えを失ったような気持ちになり、半ば刑務所志願のような形で再犯に到ったのでした。

出所者支援に限らず様々な対人援助の場面で、いわゆる「力量のある人」が「スーパーマン」となってしまうということは、組織の運営だけではなく、支援を受ける方にとってはどうなのだろうと私は常々考えています。

地域生活は専門職だけによって支えられるものでもなく、人のこころもまた同様だと私は考えます。「いってらっしゃい」「寒いですね」といったちょっとした声かけや、御近所の子どもさんが笑顔で駆け寄ってくれるなど、そういった「普通の日常」が、安心感に大

きく寄与するのではないのでしょうか。

そうしたことを考えると、「愛の反対は憎しみではなく無関心」と称されるとおり、関心を向け合うこと、それも「詮索する」といったネガティブなものではなく、「心にかける」「気持ちにかける」といったポジティブな体験が、「こころの居場所」になるものだと考えています。

私たち刑事政策の現場の人間は、処遇を行う一方で、地域活動・広報啓発活動にも力を入れています。私自身もこの業務に従事することも多いですが、単なる「行政説明」「お願い」に終わることなく、どうやって聞いて下さる方々の「気持ちを動かし」「行動につなげていくのか」ということを心掛けています。

4 「愛と仕事」について考えさせられる映画

触法精神障害者の施策に関する仕事をしている時に会った書籍の1つに『「死にたい」気持ちをほぐしてくれる シネマセラピー上映中 (2012 高橋祥友)』があります。

「ゴッドファーザー」など多くの映画に主演した名優アル・パチーノが初めてアカデミー主演男優賞を受賞した映画「セント・オブ・ウーマン 夢の香り」については、御覧になった方も多いのではないのでしょうか。

この映画は、初演時(1993年公開)、そして自身が業務や社会生活、家庭生活で様々な体験を重ね年齢を重ねていくたび、新たな感慨をかきたてられる映画だと考えています。

「孤独な盲目の退役軍人と心優しい苦学生の交流を描く」といった紹介のされ方をすることが多い映画ですが、主演の2人は多くの喪失体験や苦悩のなかで出会います。

アル・パチーノが演じた「中佐」ことフランクは、軍人としての仕事に生きがいと大きな誇りを感じていましたが、戦傷のため盲目となり不本意ながら退役、姪の家で世話になる毎日を過ごしています。姪夫婦は素朴な人柄でこの「中佐」を心配していますが、「中佐」の強い厭世観(アルコールの過剰摂取やうつ病)が影響し、姪一家との関係は良好ではありません。フランクは離れのような部屋で終始酒を飲み過去の栄光を思い出しながら日々を送っています。

一方の主人公であるチャーリーは奨学金制度でボストンの全寮制高校に入学した苦学生です。成績優秀でありながらも、裕福な子弟が集う自身の在籍校やそこでの交友関係、今は義理の親がいる実家など、環境面では決して恵まれている境遇ではありません。同級生たちが豪華なバカンスを楽しむ感謝祭の時も、年末年始の帰省費用を稼がねばならず、フランクの姪が不在中にフランクの世話というアルバイトをすることになります。

このアルバイトを決心した時のフランクは、級友たちが校長の愛車にイタズラを仕掛ける場面を偶然にも目撃してしまい、級友たちからは口止めを、校長から「犯人の名を明かせば名門大学への推薦を約束し、断れば退学にする」と迫られ、大きな苦悩を抱えていました。

アルバイト初日からチャーリーはフランクの立てた「計画」に翻弄されることになります。チャーリーは「盲目となった自分にはすでに軍人としての役割は果たせず生きる意味もない」と考えて、この旅行中に自殺を「計画」を立てており、そのために自分が輝いていた時代の思い出があるニューヨークへの旅行を敢行します。

この時のチャーリーはまるで「双極性障害」のような様相を呈しており、気分が高揚した時には、女性をダンスに誘い盲目ながら見事なタンゴを披露し、しかも女性の着けている香水を見事に当ててみせます。そして、自分の「計画」に同行してくれたチャーリーのことを、年長者として少しずつ気に掛けるようになります。ただそれは上から目線の押し

つけではなく、「この車（2人が乗っているハイヤー）が重いな。お前さん（チャーリーのこと）、なんか重いもんしよいこんでるだろう」と声をかけるのです。フランクは「見えない」ゆえに「感じる」ところがあったのでしょうか。そのうち、「人間ざらい」なはずのフランクは、「もう1日だけ側にいてくれ」とチャーリーに頼むまでになるのです。

こうして2人の距離が少しずつ縮まっていくなか、フランクはチャーリーに敢えて遠い場所で売っている葉巻を買ってくるように頼み、その間に拳銃自殺を図ろうとします。その時「嫌な予感」がして引き返したチャーリーは、自殺を試みるフランクを発見し、その時自分が持っている精いっぱいの言葉と行動で必死にそれを止めようとし、フランクは自殺を思いとどまります。

私たちはとにかく「見えるもの」に意識が向きがちです。しかし、フランクやチャーリーの「気づき」は、相手のことを慮っているからゆえんのものだと感じます。

特に、「自殺予防」の観点からこの映画を見てみると、ちょっとした雰囲気の違い、言葉のトーンなどがら、自殺の予兆を読み取るの大切さを思い知らされます。この映画の主人公2人は援助職でもなんでもありません。軍人として多くの部下を率い多くの死を見てきたフランクには社会人としての経験の蓄積があったのかもしれませんが、チャーリーはアルバイトで雇われた学生に過ぎません。ただ、相手のことに思いを寄せて気にかけていくことで、実は多くの気づきが得られるのだと思いますし、私自身も「経験」だけに慢心せず、人に寄り添える存在でありたいと見るたびに考えさせられる映画です。

旅行が無事終わり、フランクは「校長の車へのいたずらに対する懲罰委員会」の場に列席し、膨大な寄附をし保護者に庇ってもらえる立場の同級生とは異なり、たった1人孤立した状況で退学処分の危機に立たされます。しかしそこにフランクが現れ「自分はこの青年の父親とはとても親しい間柄であり、彼のことを頼まれた」と、まさに「保護者代わり」としてフランクに寄り添うように同席します。

そしてフランクはこの懲罰委員会において、いたずらに学校の名誉にこだわる愚かしさを痛烈に批判するとともに、「どんなに問い詰められてもいたずらをした友人の名前を売らない」チャーリーの誠実さを自分の経験に基づいて述べ、最後に「どうかこうした青年の未来を奪わないで学業を続けさせて欲しい」と聴衆に訴えかけます。

このフランクの演説は学生や教諭陣の心を打ち、満場の拍手のなかチャーリーの退学は撤回されます。

フランクは「自分にできることはなんでもする」「身元引受人がいる時にはいつでも自分に言ってくれ」といった親身の言葉かけをチャーリーに行い、家に帰っていきます。これまでどう接してよいのか分からなかった姪の子どもにも不器用ながら声をかけ、それを暖かく見守るチャーリーの姿で映画は静かに終わります。

「自殺予防」という観点からこの映画を見直してみると、人との誠意あるつながりや自分にもまだ青年の未来を変えることができる役割などがあると実感したフランクが再び生きようとする力が描かれていることに圧倒されます。

アル・パチーノは『ゴッドファーザー』等で著名な俳優ですが、（盲人としてのリアリティーを出すため）瞳を全く動かさない演技、「計画」の終着点である自殺を思い詰めつつも気分も高揚する双極性障害のような状態を見事に演じていると感じました。

5 「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じるができる社会へ

人が生きていくうえには、「自分には支えてくれる人がいる」という実感、「まだできる

ことがある」と感じるができる「場」が必要であると、この仕事をしていると感じることが数多くあります。

私自身も、慢性的な疼痛を伴う疾患により杖歩行を余儀なくされた時、今までのような仕事やボランティアができなくなるのではないかということへの不安で一杯でした。

多くの方が気遣ってくださいましたが、その一方で装具などを持っていることへのルッキズムなどはそれがインパクトが非常に強い言葉であるため、気持ちが不安定になることもあり、健康時に比べると狭量になっている自分に気付くこともままあります。

御自身が最高学府の医学部卒だと言われた「お医者様」を受診した際は「自分の同期も随分いろんな省庁で働いているが、女子学生は真面目だから公務員試験に『受かってしまおう』だよな」「でも女性は男性に比べて体力面では劣るから、結局はこうやって体を壊すんだ。資格もあるんだからもっと楽な仕事を選べばいいのに。」と言われたこともあります。働き方改革なども随分進められ、私自身も先輩職員の開いてくださった道でなんとかやってきたので、これはかなり堪えました。

ただ、同席されていた健康管理者の役割の職員の方が（私より先に）この言葉に憤ってくださり、セカンドオピニオンやサードオピニオンをとってでも仕事を続けていくようにしようと励ましてくださり、今は温存的な療法を行う医師のもとで、装具をつけながらですが、なんとかフルタイムで稼働をつづけています。支えてくださった方々の言葉が、なんとか私を今の社会につなぎとめてくださったともいえます。

そして、かつては自分が40歳になった時の夢として描いていた「お琴は大学時代の部活で免状をいただいたから、三弦（三味線）にチャレンジしたい」（和物の習い事はお金がかかるので大卒すぐの身には無理なことでした）ということは身体の不具合でかなえられませんでした。様々な方との御縁で子ども食堂やそのネットワーク、震災遺児孤児支援などの端に関わらせていただくこと、それも表立った活動ではなくバックアップ的な支えをすることが生きがいになり、学びの機会にもなっています。

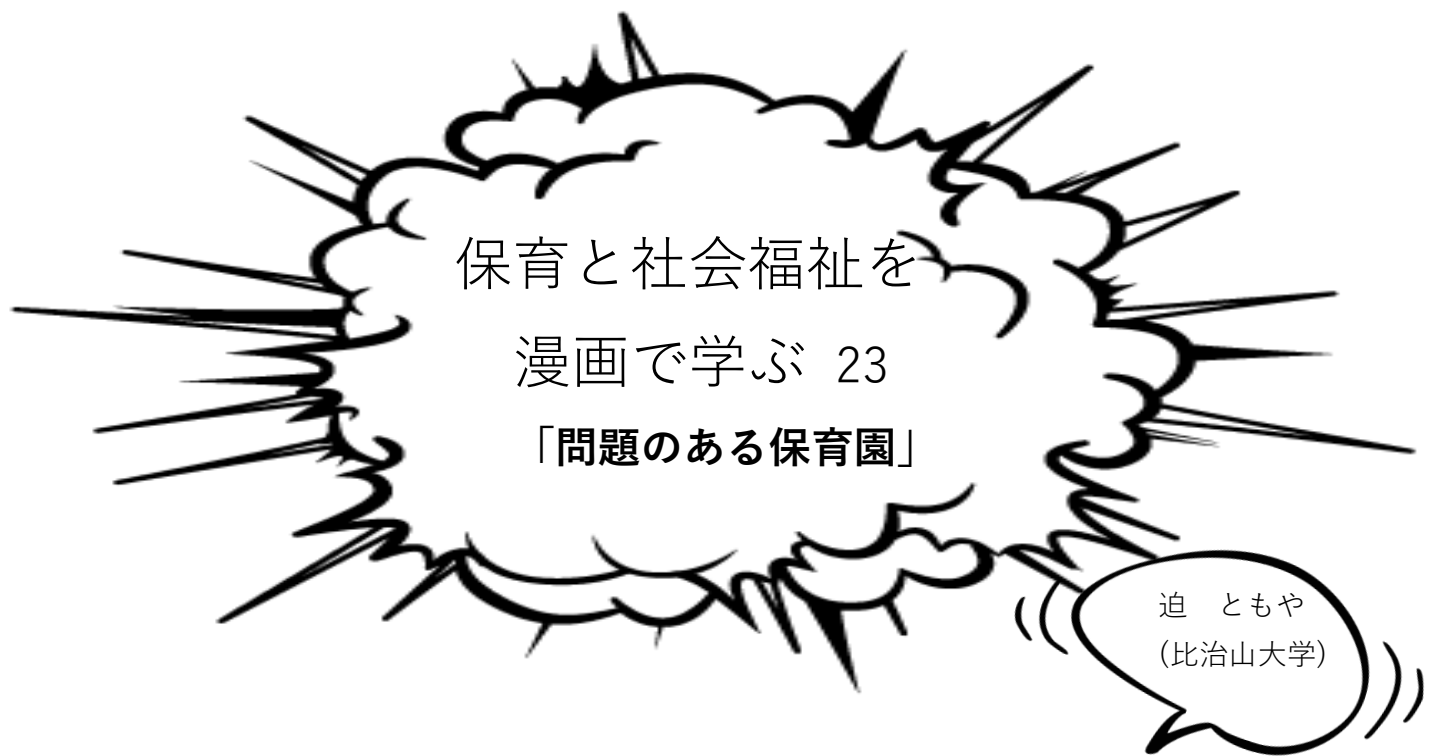
「社会は心的外傷に満ちている」と言い残したのは「心の傷を癒すということ」の著者である精神科医師の安克昌氏です。今年も1月1日から能登地方で大きな災害が発生するなど、心を痛める出来事が続いています。こんな時だからこそ、気持ちをかける、心を寄せるということが、気付きとなり、物言わず苦難を抱えている人を助ける端緒になるのだと思います。

引用文献

再犯防止推進白書（平成30年版 令和5年版）（法務省）

書籍：「死にたい」気持ちをほぐしてくれる シネマセラピー上映中（2012 高橋祥友）

「心の傷を癒すということ」（安 克昌）



さいおなお氏の漫画、『問題のある保育園』を紹介します。さいおさんは保育園で3年間勤務した後、独立してベビーシッターをしながら漫画を描かれています。『問題のある保育園』には、ドキュメンタリータッチの保育園あるあるエピソードが満載。「保育の仕事って大変というけど、何がどんなふうに変なの？ 毎日子どもと遊んで、楽しそうじゃん？」と思う方は、ぜひご一読ください。

本エッセイの筆者は、保育士や幼稚園教諭を目指す大学生と日々接しています。保育のイメージが「なんとなく楽しそう（楽しそう？）」という学生たちが、実習で鍛えられたり、心を折られたりする様子を目にしています。筆者自身も小さな保育園で園長をしていましたので、実習生や養成校の先生方の対応をする立場でした。「あの園はブラック」と言われたいよう注意をしながら、近隣の園の噂などにも聞き耳を立てていました。

現在、日本では保育者（仕事として保育をする人）の公的な資格・免許として保育士資格と幼稚園教諭免許があります。養成校である大学などに在籍して保育士資格を取得するためには、座学での単位取得に加えて、保育所または保育所機能のある認定こども園と児童福祉施設で、計3回の実習が必要です。それぞれの実習で「80時間以上、10日間以上」の実習が必要です。幼稚園教諭免許の取得についても同様に、座学に加えて「160時間以上、4週間以上」の実習が必要です。幼稚園実習は2回程度に分けて実施する養成校が多いです。養成校には短期大学、専門学校、四年制大学など、在籍期間が違う学校がありますが、在籍期間が短いほど座学と実習の間隔が短くなり、スケジュール設定が厳しくなります。筆者も二年制の短期大学で勤務した際、学生たちが全員でマラソンを走るときのようになり、自分も同じペースで伴走をしていた記憶があります。

大学3年生、はじめての保育実習。さいおさんは2歳児クラスに。実習日誌は1日分がA4用紙で4枚。当日分の下書きと前日分の清書で2回書く。もちろん手書きだ。実習から帰宅して日誌作成。疲れて寝ても、起きたら実習先へ。2歳担任のキビシ先生は、さいおさんが挨拶する際、カバンをおろしていないことを注意するが、他の先生が同じことをしていてもスルーしてしまう。キビシ先生はさらに、「帰り際ってちゃんと先生全員に挨拶してる？」「されてないっていう先生いたからさ、実習に来てる立場も考えるんだよ」と注意。

さいおさんは内心、「保育士さんって意外と上下関係厳しいんだなあ…」とつぶやく。

園の荷物おきで作業中のさいおさん。他の保育士から「どうですか、実習生？」と聞かれたキビシ先生は、さいおさんがものかげで聞いているのに「ダメっばいですね」と言ってしまう。めげそうになりながらも「あと少し」と頑張っ、て、なんとか2週間の実習を終わらせた。（「序章 保育の世界へようこそ」より）

実習生をみる保育者の視点は、「保育者として働く人」と「学生さん」の二重になっているように思います。「保育者として働くなら、これくらいできないとね」というものと「学生さんだから、ここは鍛えて、伸ばしてあげないとね」というものです。この二重の視点は、ときにダブルスタンダードの原因になります。同僚にしない注意の声を、実習生にしてしまうのはその典型例。「理不尽な扱いをされた」という学生の訴えに繋がりがねません。実習生自身にも「社会人」と「学生」の二重の役割を求められることが分かっていたら、うまく対応できるかもしれないのですが、友達や先生たちがいる学校を離れて自分ひとりの実力を試される場にいることだけで精一杯の実習生もたくさんいます。

普段なら乗り切れることが実習の場では上手くできなかったり、逆に学校では今ひとつの評価しかもらえない学生が、実習の場では輝きを放ったりと、現場のもつ力は不思議なものです。

大学卒業後、就職した保育園。さいお先生は1年先輩のユガミ先生と2歳児クラスに配属されている。人一倍甘えん坊のAちゃんはユガミ先生のお気に入りだ。さいお先生に抱っこされる様子を見たユガミ先生は「え〜、Aちゃんはユガミせんせいのこと好きなんじゃないの〜？ 裏切者めっ」と言い放ち、「Aちゃんのコップだけナイナイしちゃお」とコップを片付けようとする。Aちゃんは愛情を試されて泣いてしまう。

さいお先生が、ユガミ先生の言動を園長に相談したところ、ユガミ先生は園長に呼び出されて注意を受ける。しかしユガミ先生は「すれ違っちゃった」としか捉えられず、園長が見ていないところでAちゃんの感情をおもちゃのように扱い続ける。ユガミ先生はAちゃんと遊んでいるつもり。だがAちゃんを泣かせる「遊び」はどんどんエスカレートすることに…。

（「第2章 新卒保育士 vs 歪んだ愛の先生」より）

新卒1年目の保育者は、たとえ1年だけでも先輩の先生には、違和感を伝えることが難しいです。自分はまだ慣れるだけで精一杯なのに、相手は勤務園のこと、園児達のことをよく知っている。そうすると、「なんか変だな」と思いながらも「どこでも、こんな感じかもしれない」「自分が考えすぎなのかな」と違和感を飲み込むことになりがちです。

ここで大事になってくるのは、園長や隣のクラスの保育者が気にかけることです。自分のクラスの様子を客観的にみることは簡単ではありませんが、隣のクラスの話は案外気づくものです。保育者の力量だけでなく、園児達との相性もあるのでしょう。「隣の〇〇組さん、すごく落ち着きがないなあ…大丈夫？」などと感じさせられることがあります。若手の先生がいるなら、躊躇なく声をかけて、よりよい保育のためにできることを一緒に考えるようにしたいものです。これはきれいごとではなく、風通しのよい組織を作るために大事なことだと考えています。

さいお先生のエピソードでも、ヘルプに入った他の先生が、実はユガミ先生がAちゃんを泣かせすぎ

ていることを気づいている、という場面が出てきます。気づいているなら、早めに声をかけるか、せめて園長には伝えておく等して欲しいものだと思います。2歳児のAちゃんは、自分がされていることを遊びなのか、いじめなのか判断できません。親に伝えることも難しい年齢です。また親も、送り迎えの際の様子しか見ることができません。お迎えの際にお子さんが泣いてしまっても、保育者が笑顔で「日中は楽しく遊んでいますよー」と言うなら、それを信じる以外にありません。

10月、運動会が終わってほっとしていると「じゃあ次は発表会だね」。1月の発表会の準備が始まる。2歳児クラスの劇の準備では、クラスの子全員のセリフを多すぎず、少なすぎずに調整し、登場回数も同じくらいにしなければならない。手作り衣装は、試作品を作って園長のOKをもらってから、クラスの人数分を作る。「持ち帰り仕事と残業は禁止」だが、さいお先生たちは園長の退勤後に職員室でこっそり制作せざるを得ない。12月中旬、練習が佳境に入ると園長が全クラスに厳しい指導を行い、普段は視野が広く穏やかなシヤヒロ先生まで園児を叱りつけてしまう。

発表会当日、どうにか全ての出し物を終わらせ、解放感にひたると、次は節分、ひな祭り、卒園式…。
(「第4章 発表会の舞台裏」より)

保育の現場では行事が多く、毎月何かの準備と振り返りに追われます。同時進行でいくつかの行事担当になることも。行事のたびに手作り物を作ることになると、サービス残業や持ち帰り仕事が多くなります。それは保育者の業務負担を圧迫し、追い詰められた保育者が園児に乱暴な言葉をぶつける原因になります。行事の見直しや、手作りものの簡略化は、ICT導入と同じく、保育者の業務負担の軽減に必要な工夫だと考えます。

保護者の目線からは、わが子の成長が感じられる行事は嬉しいものです。しかし、「行事のために園児に出し物をさせる」のであれば、果たしてどれだけの教育効果があるのでしょうか。歌や鼓笛隊、ダンスや劇など、やりたい子は楽しいでしょう。でも、静かに絵本を読んでいた子もいるはずです。「大好きな先生が言うからやらなければ」と思わせたり、「協調性を育むため」と行事を意味づけたり…本当にそれが良い保育なのでしょうか。

保育者自身も、絶え間なく行事の準備・練習・後片付けをしながら日々の保育ルーティンをこなすために、かなりの無理をしているはずです。しかし、行事で感じられる園児たちの成長の姿や、園児の生々しい感情と触れ合うこと、保護者からの感謝の声と行事が終わった時の解放感などが無いまぜになって「やってよかった」という強い達成感が味わえます。準備で散々追い込まれて、辛くなればなるほど「大きな報酬」に感じられるのでしょうか。ただ、もしも「過剰な負担と大きな達成感のループが癖になって、困難な状況を変えようとしなくなっている」のであれば、言い方は悪いですが、DVの被害者が加害者から逃げようとしなくなる構造と、それほど違わないように思うのです。

つまり、DV被害者はひどい目にあわされても、謝罪されると「この人(加害者)には自分しかいない」と感じさせられてしまい、そう思えることが報酬になって、加害的な状況から逃れられなくなるということです。行事を推進する園長らをDV加害者と同じだと言いたいのではなく、保育の過剰な業務負担がDV的な状況を生んでいるのではないかと、という問題提起です。実は園長も、この状況に巻き込まれている被害者のひとりかもしれません。

保育園などの行事は、言うまでもなく園児のためのものです。年齢別クラスで「〇歳児組は△△をすることになっている」みたいな縛りはなくして、異年齢グループで音楽が好きな子ども、劇が好きな子ども等に分かれて出し物をすることはできないでしょうか。クラスごとの活動時間の制約などがあって難しいかもしれませんが。

保護者目線からは「うちの子の出番が少なすぎる」とか「〇〇ちゃんよりうちの子の方が上手なのに」とか「みんな平等に」とか、色々な要望が出ると思われます。保育者は様々な配慮点をふまえてできる限りの工夫をするのですが、全ての保護者の要望をかなえることは容易ではありません。無理をすると、やたら登場人物の多い大味な劇になったり、繰り返しばかりの楽器演奏になったりします。

どれだけやっても改善を求める意見は際限なく出てくるものなので、熱心な保育者ほど疲れ果ててしまい、「誰のための、何のための行事なんだ！」と爆発してしまいそうになります。

「不適切保育」が様々に報道されています。保育の営みは、一部分をある角度から切り取れば「不適切」と見えてしまうことが多く、現場で奮闘する保育者の心を折るような論評がされてしまうことも事実です。ただ、保育現場で当たり前のこととされている業務や、保育者の言動の中に、実は「問題」と隣り合わせのものがあるかもしれない。そんなことを考えさせられる一冊です。

紹介作品：

さいおなお（2023）『問題のある保育園』オーバーラップ

※本エッセイで紹介した作品中のセリフなどは、読みやすくするために、意図を損なわない程度に改変している場合があります。

※ご感想・ご意見などは筆者のメールアドレスまでお寄せください。⇒ sakotomoya@gmail.com

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 25～

<連想ゲーム>

杉江 太郎

～旧ジャニーズ～

ジャニーズと聴いて何を思い浮かべるか。ある人は、代表による性加害を思い浮かべ、ある人は、紅白歌合戦に誰も出なかったことを思い浮かべ、またある人は、推しのグループを思い浮かべるかもしれない。思い浮かべる内容は、人によって様々で、文脈や時期によっても様々であろう。特に、ジャニーズの場合は、性加害が報道される前と後ではその思い浮かべる内容は大きく様変わりするはずである。もし、ジャニーズについて語る場合、加害に対する怒りの文脈なのか、解散したことに対する寂しさの文脈なのかによって扱い方が変わり、そのあたりに臨機応変に対応しようの思えば、幅広く情報を持っておく方が良いだろう。

何かについて議論をする場合、その言葉についての情報を幅広く知り、常に更新されていることがその議論の内容に影響する。対人援助においても、ひとつの言葉を聴いて、多くのことを連想できる方が、情報収集をする場面や、次の一手を考える場面で、効率的に事を進めることができるだろうし、単純にひとつの事柄に対して多くのことを知っている方が、話

題の幅を広げることが出来るのではないだろうか。

～遠くの病院～

例えば、私の職場でこんなことがあった。同僚が集めた情報の中に、対象の子どもが〇〇病院に受診したことがあるという話が含まれていた。それ以上の聞き取りは出来ておらず、受診の内容は不明である。その病院は、子どもの住む地域からは少し距離があり、わざわざその病院を受診しなくても、近場には同じ診療科の病院はたくさんある。ただ、近場の病院と違うのは専門外来があるという点であった。私自身、専門外来のある受診先を探す際に、市役所の関係部署からその病院を勧められたことがあった。その経験があったこともあり、その地域から、遠くにある〇〇病院を受診しているということは、その専門外来を目的にしている可能性が高いという連想に繋がった。私は、その同僚に私が以前に〇〇病院を紹介された市役所の関係部署に相談歴がないか確認して欲しいと伝えたところ、まさにその関係部署から勧められて〇〇病院を受診していたことがわかった。

いずれはたどり着く情報であったかもしれないが、情報収集にスピードが求められるような場面もあり、一度のやり取りでより多くの情報が集まるに越したことはない。その同僚も次に〇〇病院の話聞くことがあれば、市役所のとある部署を連想させるかもしれない。一度経験して知識が増えることで、次に同じ場面に出くわしたときの一手が変化するのである。

～システムを知る～

ひとつの事柄に対して、多くを連想できるようにするためには、上記したようにそのシステム＝体系を知っておく必要がある。「〇〇病院に受診→〇〇病院は遠い→でも専門外来がある→市役所のとある部署から勧められているかも→とある部署に相談歴があるかも」という体系を知っておくと、〇〇病院と聞いた時点で、とある部署を連想させることに繋がる。

この社会は様々な制度で溢れている。私の仕事は子どもを中心として、その家族と社会制度とを結びつけることも含まれている。制度の利用を勧めるに当たり、制度そのものを知っておく必要もあるが、それだけではなく、その制度の体系を知っておかないことには、繋がるものも繋がらない。例えば、子どもを保育園に預けて就労したいという親がいたとする。窓口は市役所であり、その窓口を勧めれば良いのかと言われたら、そうではない。そ

の地域の保育所の空き状況、申込みの期日、保育所の利用条件、保育所の利用料金、家から保育所までの距離、申請にあたっての必要な書類、申請をしたとして最短でいつから利用出来るのかなど、保活という言葉があるように、保育所利用に至るまでの体系は様々であり、利用という結果に辿り着くには、クリアしなければいけないことは多い。当然、窓口に行けば、伝えられるような内容ではあるが、あらかじめ伝えられて、知っておくことで、その手続きを進める際に、手間を減らすことに繋がり、効率を上昇させるだろう。

～知っているというフリ～

聞こえが悪いかもしれないが、知っているというフリも良くする。情報収集をする中で、相手が語る前に、先に情報を手にしている場合がある。当然、守秘義務があるので、当事者に対して情報を得ていることを口にするのではない。要は、知っているけど、知らないフリをしなければいけないのである。

知らないフリをするだけなら芸がなく、知らないフリをしつつも実は知っていたというフリをすることがある。例えば△△に住んでいるとか、□□に勤めているというような情報があつたときに、知っているところなら良いが知らない場合、まずはネットで調べ、その話題が出たときのために準備をしておくのである。居住地であれば、おおよその場所、近くのス

ーパー、公園、学校までの距離など、職場であれば、場所、業務内容、会社の場所などを事前に把握するようにしている。そして、実際のところ、その話題に近づくように話をもっていくのであるが、その話題になったときに、「それって～の近くですよね」とか「～で有名な？」などと返すことで、知っているけど知らないフリをしつつ、でも知っていたフリをするのである。このことの効果は調べたこともないので知らない。ただ、関係機関の方にも対して同じようなことをすることもあるが、「良くご存知ですね」「なぜそんなことを？」と反応されることが多いし、そこだけで留まらず、その先の会話にも繋がっていくような気がしている。要は会話を広げるために情報収集しておき、連想の幅を広げられるようにするのである。

積を広げていく。網を張るイメージで常に知見を広げ続けたいと思っている。

～日々の情報収集～

日頃から情報収集は欠かさないようにしている。その方法は、新聞、小説、雑誌、Yahoo、Twitter など様々である。地域のニュースから、専門分野に関する事など、情報の幅も広い。Yahoo はあらかじめ、キーワードを登録しておくとそのキーワードに関連する記事を集めてくれるので便利である。無知は罪だと、大昔に偉い人が言っただけ。知ろうとする努力や工夫をすることが仕事の質を高める。対人援助学マガジンも情報収集のツールとして役に立っている。広く浅くその面



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～番外編⑨～

ちからのカタチ



松岡園子

先月、2 か所で自分の体験を多くの方へお話する機会に恵まれ、10 代の頃を振り返る時間をいただきました。その時に改めて考えたことをまとめておこうと思います。

私が 12 歳の時、入所した児童養護施設での生活を拒み、統合失調症を患う母とふたりで暮らす生活を無理やり実現したと話すと、とても驚かれることがほとんどです。当時、いちばん身近だと思っていた親戚や、福祉関係の方々が考えた最善策と、子どもだった私の最善策が完全に食い違いました。

10 代の私はなぜ、母とふたりで暮らしても「大丈夫」と思えたのだろう。今もし、当時の私のような子どもが近くにいたら、私はどうするだろう、などと考えてしまいます。

周りの大人が無理だろうと思った環境で暮らしてきた私に、特別な力があったわけではありません。でも、乗り越えていくための力がないと、やっていくのは難しかったと思います。乗り越える力は、周りの人に育ててもらったような気がしています。

必要な力の形は、時の経過や成長、母の病状の変化とともに変わってきたと思います。子どもから大人になるにつれて、手放していった方がよい力、新しく獲得していった方が楽になる力。私自身、うまく変化させることができていたわけではありませんが、乗り切る時にはそれに必要な力を育てて、時期が来たら、また別の力に変化させていく……というのがいちばん良いのかもしれないと思っています。

今回は、私が 10 代だった頃にどんな力を育ててもらったのか、また、今はどんな力が必要だと感じているか、書き出してみることにしました。

「信じる力」

母の幻聴がひどく、何もできない状態で中学生の私とのふたり暮らしなど、到底できないだろうと周囲に思われていた時のことです。私にもできるかどうか、わかりません。

母と一緒に暮らさず、安全な児童養護施設へ入所した方が良いという親戚と意見が食い

違い、無理やり元の家で母と生活することを選んだ私には、もう助けを求める身内はいませんでした。大人なんて嫌い、怖い、信じられない。

心の底にある「絶対にやってやる」「見返してやる」という気持ちだけで、しんどい時でもなんとか立っていたような気がします。初めは、母と離れたくない一心でしたが、生活が続いていると、思い通りにいかないこともたくさん出てきます。次第に、自分だけの力ではやり遂げられそうにないことでも、近所の人や友達の両親など、大人の知恵を借りることで乗り切れたり、私が苦戦しているのを見かねた人が助けてくれたりと、大人の人の世話になる機会が増え、そこから、信じて大丈夫な大人もいると思えるようになっていきました。「大丈夫」と人を信じることができるようになると、「できるかも」と自分も信じることができるようになっていった気がします。

「巻き込む力」

統合失調症を患う母とふたり暮らしだった 10 代前半は、年齢的にも経験的にも、未熟であると感じることが多く、周囲の大人の人の力を借りるために、自分の問題に周囲を巻き込む力が必要でした。自分の状況を話し、厚かましいぐらいお世話になったり、助言をもらうなど、周囲の親切心に甘えていた時期でもあります。

母が病気を抱えているために、してもらえないことを他で埋めるか、自分が我慢するか、母ができないことを自分が代わりにするか。そうした判断も当たり前のようになっている時期だったと思います。他の家庭との違いを知りながら、「でも、うちはこうだから」と諦めたり、強がったりしていた時期です。

母に「こうしてほしい」と求めることもありましたが、「病気だからできない」と言われ、希望をなくしたり、病気に甘えていると母を責めた時もありました。私にすると、ちょっとした気配りをするだけのことや、人の傷つくことは言わないことなど、小さい時からそのように周囲からしつけられ、そう振る舞うのが常識のように感じていたことだから、そうできない母に対して余計に腹が立つのです。

自分の要求はどんどん言うのに、人が大変そうにしている姿を見ても、知らん顔の母だったのですが、のちに、気配りの度合いは人それぞれで、母はあまり気にならない方で、私はそうしたことに敏感なのだと思うようになりました。家で母とふたりで過ごしていると、衝突したり気分が落ち込んでしまうことも多かったですが、私が出かける時に母も一緒に来てもらったり、家に友達を招くことで、周りの人達も巻き込んで母と一緒にみてもらうことにしました。そうすることで、皆で母をみているような気がして、楽になりました。

「手放す力」

やがて、時が経ち、中学生から高校生へと成長していくに従い年齢的な制限が解け、自分の判断で動くことができるようになってきます。周囲を巻き込む必要が次第になくなり、自分で考えることが増えていきました。周りを頼らなくなるにしたがって、相談をすること、

連絡をすることも減ってきます。それまでお世話になっていたのに薄情かな……と罪悪感にさいなまれることもありましたが、頻繁に相談を持ち掛けていた人と、距離を置くことが増えてきました。

人に頼ったりお世話になっている間は、その人のいうことをきかなければいけないという不自由さも感じていた私は、それを手放していくことで自由になっていったような気がします。その代わりに自分で責任をもって考え、行動することを少しずつ学んでいきました。

「自分に許可を出す力」

30代になり、自分にされた要求を断っても良い、しんどい時は楽をしても良いと自分に許可を出すことが苦手になっていると気づきました。母との間で条件反射のように、固定された役割パターンが習慣化していることになかなか気づけませんでした。

頼まれたら、その通りに予定を合わせ、頼まれなくても前もって「こうしておこう」と先回りしがちですが、それが習慣化すると、相手中心の人生になってしまいます。怖いのは、それを自分で気づくのが難しいことです。「する」ことには慣れているのに、「しない」ことには気づきにくく、抵抗を感じるのです。

そう気づいてからは、「これは、絶対に私がしないといけないのかな？」と一旦、考えてみるができるようになってきました。でも、母にしても頼むのが習慣になっているため、私が断ると「なぜ？」となるのです。母の場合は、「できない、おねがい」との返答が返ってきました。そこで本当に「できない」のか「やりたくない」のかを考えることにしました。

先日、近所のポストまで手紙を投函しに行くことを頼まれたことがありました。母はゆっくり杖をついてですが、歩くことはできます。確かに私が行けば、早いでしょう。でも、母は「できない」わけではありません。杖をついて歩いて行くことを「やりたくない」気持ちもわかります。早い人に頼んだ方が楽でしょう。でも私は、自分でポストまで行ってもらうことにしました。歩かなくなると、筋力も衰えてしまいます。

スマホを使って調べ物をしてほしいと頼まれた時も、母のスマホを使って自分で調べてもらいました。やり方を伝えれば時間はかかりますが自分でできますし、できると自信にもつながります。私は、「面倒なこと、やりたくないことをやってくれる人」にはなりたくないです。母にできないことはもちろん、代わりに私がしますが、相手の状況を見て、「ここはできそう」と思う部分があれば、多少時間や費用が余分にかかっても、自分でしてもらう方が、お互いに無理なく過ごせるのではないのでしょうか。

こうして振り返ってみると、10代の頃は母や周囲と「くつつく力」が必要で、成長に従って「離れる力」に変わっていったのかなと思います。



原田牧場 Note

page 16

私が「さる語」と呼んでいる北海道独特の言葉があります。

例1「この炊き込みご飯、食べらさるわー」

自分の意思とは関係なく勝手に食べてしまうわ

例2「リビングの電気つけっぱなしになってたよ」の返事が

「そうだった？スイッチが押ささってたみたい」

自分の意思ではないところで勝手に押されてたようだ

自分がやったことなのに、勝手にそうなっちゃった感を出す言葉。

例1は、勝手に食べ進んじゃうくらい美味しい、という褒め言葉の意味もあるので笑って済みますが、例2の場合は、責任はどこへ？

誰かのせいにしない、されない、平和な言い回しのようだけど…うーん。

来道当初は聞きたびモやっとしたものです。

大阪で仕事をしていた頃は、事の白黒をはっきりつけ、担当のすみ分けや責任の在りどころを明確にした方がお互いに仕事を進めやすい環境でした。行き詰まったら担当先が変わったり、もっと自分に合う部署へ異動すれば、また良い流れに乗れる。引越しや転職もあり。「環境を変える」が難しくない場所だったのです。田舎ではそうもいきません。隣近所の牧場とは代々繋がりがりますし、働きに来てくれる方々も町内会のご近所さん。

コンビニ、修理工場、運送業者も昔からの顔なじみ。多少問題が起こっても白黒ははっきりさせて雰囲気悪くしたくない。お互いわかっていて、わざわざ突き詰めない。やすやすと環境を変えられない土地柄だからこそ生まれた言葉があるんだな、とわかってきました。

牧場では予期せぬトラブルが起こります。何をやるかわからない牛のことなので、誰のせいでもないですが、発端を突き詰めていくと何%かは人災です。人ができる範囲で最大限気をつけるべきことを探るために、スタッフの皆さんに原因はなんだったか？と聞いたり、自分に問うたりしてみます。

「春は菌の活動も活発になり、乳房炎に注意が必要とわかっていたのに見過ぎた」「牛が異常にしつこく蹴ってきたのでアレっ？とは思っていたけど熱までは測らなかった」「脱臼しないように滑り止めをもっと撒くべきだった」 どうしたら防げたかと考えるうちに、ああ、自分が悪かった、熱心なスタッフさんたちは気に病みます。（私も気に病んでリピートで夢に出てくるタイプ）かわいそうな牛の姿を見るとより切実ですが、熱心で繊細な方は「さる語」のニュアンスを取り入れてもいいと思います。

さぼっていたわけでもない、考えていなかったわけでもない、一所懸命やってもトラブルが起こることはある。その時はまた考えて、自分のせいにしすぎないで、みんなで共有していけばいいのです。

牛のことを、何をやるかわからない、なんて言いました。確かに最悪事態からイタズラまで多種多様なことをやりますが、私たちが驚くような生命の強さ、ミラクルを起こすこともあります。何をやるかわからない牛と付き合う中で、思考や感情や感動や可能性、振り幅いっぱいやり甲斐をもらっています。

「さる語」を聞くようになって18年経つと、ただの無責任語と思っていたのが、違う風に聞こえてきます。

誰のせいだっていいんだよ、深く考えなくていいんだよ。

そうなっちゃった！ってだけ。許しあっていこうよ。と。

その土地土地で暮らしやすく考えられた言葉かぁ。いいもんですね。

そろそろ使ってみようかな（笑）

筆者 原田 希

1973年 大阪府吹田市生まれ

2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ

2017年 北海道農業士に認定 北海道指導農業士の夫とともに

新規就農者の支援や女性農業者向けの勉強会のお世話係を担当

<連載>

ザイコロジ

④

そだちと臨床研究会

川畑 隆

カツサンド

カツサンドを食べましょう
カツサンドを食べましょう
コーヒーとサラダとそして
カツサンドを食べましょう
とってもおいしそうだから
カツサンドなんて久しぶりだから
コーヒーとサラダとそして
カツサンドを食べましょう

僕がカツサンドをひとつ
タバコの灰の上に落したよ
君はアララアと悲しんでくれて
僕は転んだやつが恨めしくて
君がカツサンドを僕にくれた
そしてもうひとつ僕にくれた
僕はレタスを一枚
君にあげたよ

ニコッと笑う君を見て
カツサンドがおいしかったよ
君が食べるって言いだした

カツサンドがおいしかったよ
スパゲッティもタマゴサンドも
ハンバーガーもあったけど
カツサンドがおいしかったよ
今日の昼ご飯

君と一緒に食べた
カツサンドがおいしかったよ

M地下

レタス1枚かい？ プチトマトは？ 付いて
なかったんです。カツサンドをどこで食べたか
…M地下です。同志社大学今出川キャンパスの
明徳館の地下、生協の食堂と売店のあるあのち
よっと古めかしい空間。でも熱気にあふれてい
ました。ちくわの天ぷらのA定食が110円、一
番高いSランチが280円。いつかあのSを食っ
てやるぞと思いながら、ちくわの穴から大きな
カツを覗きました。ちなみにその頃は、銭湯60
円、市電・市バス60円、王将の餃子が6個で
60円だったんじゃないかと思います。食堂はガ
ッカン、学生会館にもありました。王将といえ
ば、その頃は王将と眠眠が二大勢力。眠眠の餃
子は少し小さくて柔らかだった気がします。ジ
ンギスカン定食、湯麺がうまかった…。

そのM地下のカツサンド。当時はそうでもな
かったのですが、今となってはこの歌が好きで、
歌ってたら楽しくなります。

祭りの夜

祭りのおはやしと 人のざわめきが
夜の長さをあからさまにする
歩こうか 人の波にもまれて
昼間の世界は遠い昔のよう

ちょうちんの灯りがあやしく照らす
浴衣姿が長い夜をつくる
自分の気持ちを言葉にできずに
君はかえって黙ってしまう

もう何も言わなくてもいいんだよ
僕の胸に顔をうずめて
もうすべて空っぽでいいんだよ
夜の流れに心をまかせて

そんなに苦しい顔はやめて
心の底におぼれてしまえばいい
そうだ僕といるそのことだけでいいんだ
すべては夜の流れるままに

もう何も言わなくてもいいんだよ
僕の胸に顔をうずめて
もうすべて空っぽでいいんだよ
夜の流れに身をまかせて眠れよ

静 (しずか)

裏寺町の「静 (しずか)」。居酒屋です。裏寺町にまだあります。それも当時と同じ姿で。同じというのは、店の中の壁の落書きもっていうこと。大学1年の頃から大学対抗春歌 (しゅんか) 合戦を繰り広げたあの場所が、そのまま残っていました。店主の代はかわっても、学生たちの昔を残したかったんじゃないかと思うと、思わず同年代の現店主を抱きしめたくまりました。その静の近くで繰り広げられる祇園祭、そしてその宵山、宵々山…。祭りの夜は長かったのです。

しかし、よく呑みました。「洋酒喫茶」が流行っていた時代です。木屋町の「白夜」とか「ワインリバー」とか。男性バーテンダーでした。ウイスキーのキープは高いので、ジンキープして、ジンライムばかり呑んでました。ところ

が女性バーテンダーにかわったのです。人見知りでとくに女性に弱い私の足は、ワインリバーから遠のいていきました。行きつく先は居酒屋でした。あっ…そこまで書いて、「グラスホッパー」があったじゃないかと思い出しました。河原町三条東の東宝公衆があったビルの地下、青い光の魅力的な店、生演奏もあったんじゃないかな。友だちとよく行きました。次の『阪急電車』もそこを出てからだったんじゃないかと思います。いや、グラスホッパー？ 違います…グラスホッパーは別のところで、エート…、エスパースジロー???

阪急電車

ああ この九時過ぎの河原町の虚しさ
っていったらない
酒もさめかけてあいつがいない
今まで抱いていた肩がない
とても身近に感じていた温かさが
ない
阪急電車よ
あいつを遠くに連れてかないで
俺のそばに連れ戻せ

さっきあいつと入ったパブの前を
通り過ぎる
きょうもまた終わった短い時間が
抱きしめたくても抱きしめられない
帰り道
あいつを俺の全身に感じていたいのに
阪急電車よ
俺にかわってあいつを抱きしめろ
俺にかわってなりふりかまわず
抱きしめろ

次に逢える日はいつだろうって
頭の中でカレンダーをめくる

あいつの面影だけ抱いて今夜も眠るのか
明日からしばらくは
またそばにあいつがいない
それが落ち着くのか
それともいらだつのか
阪急電車よ
俺にかわって俺の正直さを出せ
そして酔い覚めのあいつに
おまえはどうだって訊いてみろ

阪急電車よ
今日のおまえのその意地悪が終わったら
今度はあいつを乗せて
精一杯速く走ってこい

いじける

祇園祭の宵山を味わっても、「♪祭りのあとのさびしさが、嫌でもやってくるのなら…」(『祭りのあと』)と吉田拓郎が唄っても、その寂しさを感じるだけの祭りが私にはない…。そして、岸和田のだんじり祭りに心をすっかり持っていかれている人のそばで、いじけるのはこんな感じかと思いがらいいじけていました。北九州の小倉に住んでいたのは小3から高3まででしたが、地元出身でないせいか小倉祇園太鼓には参加のチャンスはありませんでした。『俺にはふるさとの祭りがいい』…このいじけた感じが今でも気に入ってます。

俺にはふるさとの祭りがいい

きょうもまたどこかの街で
お祭り気分にあいつがいない
生まれ育った街で親も子も
顔を見合わせては微笑み合って

きょうもまた知らない街で
自分たちの祭りを歌ってるらしい
生まれ育った街で男も女も
自分たちの役を演じてるらしい

目をつぶって耳の奥は賑やかで
遠くのお祭りは頭の中で回る
俺も走って行って仲間に入ればいいけど
のけ者の俺の顔が苦笑いさ

俺にはふるさとの祭りがいい
お囃子の賑やかさがいい
今夜もまた酒を飲みながら
一人のお祭りだよと酔いしれる

目の前に浮かんでは消えてゆく
楽しさに酔いしれた顔　そして顔
俺にもふるさとの祭りがあれば
同じ顔ができるかもしれないのに

修学院こそ学生時代

大学に入学して八瀬から修学院へ、卒業してからは香里園から堀川今出川、結婚して楠葉、宇治の小倉、そして今の宇治の黄檗…50年の間に住んで廻りました。それ以前は、鹿児島市の伊敷（いしき）町に生まれてそこに8年、北九州の小倉の大分寄りの朽網（くさみ）に3年、小倉の南貴船の最初の家に4年、次の家に3年、住みました。生まれてからの住みかを数えると、今の家で11軒目になります。

その中で一番狭い生活空間は修学院の四畳半で、共同洗面所・トイレ・炊事場、徒歩3分のところに銭湯と学生食堂、そして酒屋がありました。学生時代がいっぱい詰まっていました。

その小さな部屋に小さなこたつ、バイトで買ったラジカセ…そして『日曜日の午後』。

日曜日の午後

雪が舞ってるから来ないんですね
本当は出かけようとしたんですね
君の足音を聴き分けようと
僕はドアのほうばかり見つめてました

日曜日の午後 冷たい部屋の中
時間はどんどん過ぎてゆき
僕は部屋の灯りをつけました

この前の僕が嫌だったんですか
僕といるのが楽しくないんですか
また僕の悪い癖だよ あの時
君の心をしっかり掴みたかっただなんて
後悔さ

日曜日の午後 こたつの中
なんてバカな僕なんだろう
僕の部屋に来いよなんて
約束もしていないのに

日曜日の午後 部屋に一人
ちっちゃく溜息なんかついてさ
僕はラジオのボリュームを
いっぱいに上げました

まだ雪はチラチラ舞ってます

Oくんのこと

修学院の下宿を思い浮かべると、Oくんが出てきました。『日曜日の午後』の「君」ではありません、念のため。

Oくんの顔を見つけたのは学生会館大ホールでの日活ロマンポルノ上映後の客席でした。豊田勇造のコンサートや『日本の一番長い日』の

上映会では見かけなかったのにです。高校で同じクラスではなかったけれど見た顔でしたし、大仏さんみたいな顔をしていたので覚えていました。それで声をかけました。彼も見えた顔だったようです。それから、馬が合うというか、お互いに呑むのも好きだったので、学部は違ったのですがつきあいが始まりました。私の下宿はボロボロの四畳半でしたが天井はまっすぐ、彼の下宿は天井は斜めでしたが割ときれいな三畳間でした。いま書きながらそのことを思い出したのですが、当時はそんなことでけなし合ったりして遊んでたんじゃないかと思います。

夕方、私の下宿に彼がやってきて、鍋パーティをするのが定番でした。当時は携帯電話もないし大家さんに電話を取り次いでもらったりもしなかったと思うのですが、彼が訪ねてくる日には高い確率で私が下宿にいました。というか、O曜日は大丈夫というような了解事項があったのだと思います。近くのお店に行って、豚肉、豆腐、青ネギ、うどん玉…鍋の具はこれだけだったと思いますが、ビールの大瓶5本も併せて買いました。ビールが足りないときのために、安い赤玉ポートワインを買うこともありました。日によっては足を延ばして「修学院プラザ」で100円の鶏の皮の唐揚げも買いました。代金はもちろん割り勘です。買い物を終えていそいそと部屋に帰り、渦巻コイルの電熱器に鍋を載せました。鍋が煮立ち、ビールを注いで乾杯！のタイミングで、同じ下宿のMくんが部屋をノックするという、ありきたりの話なのですが、そういうことがよくありました。よくあったということは、Mくんは狙ってたのかもしれませんが。心の広いOくんと私でしたから、歓迎モードにはならなかったもののMくんにご馳走しました。次の回からはMくんが来ないようにと祈りながら準備をしたのを覚えています。不安は繰り返し現実になったわけです。

〇くんもよく呑みましたが、私もよく呑みました。いったいどれくらいの量を呑めるのだろう、それをいっぺん試してみようということで、夏の暑い日だったと思いますが、私は日本酒の一升瓶を抱えて彼の下宿に行きました。すると、今日はもう呑んだということで彼が横になっているその横で、私1人で呑むことになりました。茶碗酒です。喉が乾いていますからどんどんいけます。そしてそのまま眠ってしまいました。目を覚ましたとき、右手は茶碗を握ったままでした…というか、きっと茶碗に手をそえたままの形がテーブルの足によって支えられていたというのが正確じゃなかったかと思います。一升瓶をみると3合ほどが残っています。〇くんは呑まなかったそうですから、私1人で7合を呑んだことになります。2人以上で一緒に呑むなら7合もあり得るでしょうが、1人で7合はたいしたもんじゃないでしょうか。無理にでも「たいしたもん」にしたかったぐらい、しょうもないことに青春をかけていました。

〇くんは卒業後は郷里に帰って会社に勤めました。結婚披露宴でスピーチを頼まれた私は、日活ロマンポルノでの出会いを話しました。彼の友人たちからは大受けでしたが、彼のお母さんからはやんわりとにこやかに、おそらく批判されました。その後、彼はお父さんの後を継いで会社の社長になりましたが、京都で一度呑んでから20年以上会っていません。どうしているでしょうか〇くん、そしてMくんも。

そこにはいない人のこと

次の『つかのまの主人公』は就職して以降に書いたものですが、『日曜日の午後』と重なるところをはじめて見つけました。そう見ると他の歌詞もそうですが、相手がそこにはいないことが私にはテーマになるようです。

つかのまの主人公

いつ花は散ってしまうかもしれない
ふとそんな思いにとらわれてしまう
あなたがいつも座ってる椅子を見つめて
すすり泣いてみたりする
あなたの顔が私に笑いかけるほど
私から遠ざかってゆく
そんなとき癖のある足音が
私をあなたに引き戻す

つかのまの主人公 悲劇のヒロイン
またあなたがいるのが当たり前
当たり前の日常に入ってゆく私

何気ないこの毎日の中で
昨日と同じ風を感じることがある
当たり前のことがとても際立って
私に問いかけてくる
あなたのおどけた格好が
私を抱きしめて遠ざかってゆく
そんなとき玄関のチャイムの音が
私をあなたに引き戻す

つかのまの主人公 悲劇のヒロイン
またあなたがいるのが当たり前
当たり前の日常に入ってゆく私

ザイコロジー⑤と⑥では、就職してから以降の歌詞等を取り上げる予定です。

応援、母ちゃん！16

～ 人手不足と産育休 ～

たまむら ふみ

玉村 文



1. はじめに

もうすぐで産休、この対人援助学マガジンが発行されている頃にはすでに産前休で職場からは一旦離れている時期だと思います。ということで、前回の産育休から復帰し子育てしながら仕事に邁進した期間を振り返っておこうと思います。

今年度は時短勤務とはいえ、その時間を超過することが多い年でした。そこで2023年12月からは2時間の時短を1時間に短縮して実態に合わせて勤務することになりました。

職場での配置人数がマイナス1名からスタートした新年度だったこともあり、組織全体でも職員数が足りない、という人材不足が大きな要因ではありますが、子ども達も昨年度より1年分大きくなり少し余裕が生まれたことも幸いでした。

2. 人手不足

人手不足が顕在化するとされる「2030年問題」。すでに対人援助職種では顕在化しているようにも思えます。人材が獲得できず現場が疲弊していく事態がすでに生じているのではないかと思います。国は、定年延長を導入したり、高齢者や女性が働きやすい制度を整えたりと政策を打ち出していますが、対症療法的な対応にとどまっているように思います。人手不足に陥る現場だと、わたしのような時短勤務でも以前よりも肩身が狭くありません。これまで、時短勤務だと1人ではなく0.8人としてカウントされていたように感覚がありましたが、今では人間一人としてカウントされているように思えます。

このような人手不足問題の解消を目指して、一日のうちの大半を仕事時間として使うという働き方から、家庭や病気、副業との両立など、いくつかのタスクを両立するような生き方が多くなってきたように思います。人々の生活実態と仕事を切り離さないという点で、それぞれの生き方を肯定する面もありますが、ますますの多忙化も懸念されます。

3. 時短勤務の課題

ある日、現場の違う所属の男性から「自分も時短勤務を考えている」という話をされました。その男性が勤務している現場は慢性的な業務過多で、時短勤務制度を使っても、実質は時間通りに帰れないことが想定されました。そこで、時短勤務にすると基本給が下がることを伝え、時間通りに帰れないことの方が多いのであればメリットは大きくないのではないかと伝えました。有給休暇制度のなかに時間休という制度はあるので、早帰りの日を作る方が、基本給は下がらずに、しかし早めに帰宅できる日を作る方がメリットがあると考えたからです。

その後、その現場の上司が「時短勤務になってくれると、時短分のアルバイトを雇えるのに」とこぼしていることを伝え聞きました。時短アルバイトは時短分の埋め合わせという名目ですが、実際にはそれ以上勤務してもらい、実質増員されるような運用をしている現場が多いのです。現場の人手不足感が伝わってきます。

わたし自身は、2時間の時短勤務で申請していましたが、2023年の夏頃からは時間通りに帰宅できなくなり延長する日が増え

たこともあり、1 時間の時短勤務に変更しました。その結果、勤務実態と合致し基本給は上がったので良かったと思っています。保育園に迎えに行く時間が少し遅くなりましたが、子ども達も 1 年分成長し、元気に過ごせているからこそできたことです。

4. 男性の育休、時短勤務について

同僚の男性スタッフに時短勤務のデメリットの方を伝えてしまいましたが、それが男性だからという理由ではありません。男女ともに、育休や時短勤務を選択できることは、重要だと思います。特に、わたしは、過去 2 回の育休期間に、自身のキャリアの振り返りの機会となったり、資格取得をしたり、全国のママ友とオンラインでつながるプロジェクトに参加したりと、仕事をしているとできなかったことに挑戦する期間になりました。自分の新たな可能性も見えて、充実していました。

わたしの夫は上の子 2 人ともに育休を取得したいと希望はしていましたが、仕事の都合などで諦めてきていました。この度、3 人目を授かった際に「きっと育休を取得するのは最後になるよ、あとから振り返って後悔してほしくない」という気持ちで、育休取得を後押ししました。経済的には多少痛みはありますが、それ以上に得るものがあるのではないかと思ったのです。夫は会社と交渉し、初めての育児休暇を取得する予定です。

育児休暇は育児のための休暇ではありますが、仕事から離れる時間になります。政府の言う「リスク」の時間にもできるのかは、それぞれの事情や子どもの様子や周囲のサ

ポート状況によって変わると思うのですが、仕事から少し離れる時間は、今後長く続くだろう仕事との付き合いのなかで重要だと思います。

5. さいごに

産休育休で 1 年ほど仕事から離れる環境になることで、対人援助のスキルとしては低下し、むしろ助けてもらう受援力が高まることになると思います。一方で、支援現場の人手不足が深刻になると、助けてもらいたくともサービスを利用できない、制限される可能性が高まります。未就学の子ども 3 人がいて、子育てサポートの資源を使えない事態に陥ると死活問題です。例えば、出産後の産後ケアサービスや、ファミリーサポートなど、確実に利用したいサービスがあります。それらが活用できないと、3 人育児は窮地に陥る可能性が見えます。

現場の無理があってサービスが成り立っている業界は、他にもあると思います。24 時間営業のコンビニでは、フランチャイズのオーナーが無理をして連続勤務や夜勤を担うなど過労が問題となり、夜間は閉店する店舗も出てきました。対人援助の業界も、これまで以上にサービスの制限を行わなければならない事態に陥るかもしれません。そうならないようにと、IT ツールなどシステムの活用や、業務の効率化で維持しようと努力していると思います。人手不足の問題は、対人援助職者としてのわたしにも子育て親としてのわたしにも、言い換えるとサービス提供者としてもサービスの受け手としても問題の当事者になっています。

『老い』を描く

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

高齢化社会

日本の人口の減少は何年も前から続いているが、誰もが危機感を感じながらも一向に解決の兆しは見えない。

同時に高齢化社会の問題点も連動して随分前から語られてきた。
今回は私がこれまでに描いてきた作品の中から老人をテーマにしたものをチョイスして並べる事にした。

若者はこの先、自分の老後生活より、たくさんの高齢者の生活を支えてゆかなければならない現実と直面するのだ。
倍賞千恵子主演で作られた映画『PLA N75』は現代版姥捨山映画だが、そんな時代が来るのではと不安になる。



背負う物

(2005年作)

飛び出し注意



高齢者による交通事故は近年の大きな社会問題であり、免許証の自主返納を推奨する動きも盛んだ。しかし車を諦めた高齢者にとつての移動手段となる電車やバスの路線は次々と削減されたり廃止されたりして、高齢者には日常生活に不便を強いられる地域も増えている。そんな状況を見ているとなかなか簡単に免許証を返上する気にならない人も多いだろう。

調べてみると年間の交通事故死亡者の55%前後が65歳以上であり、この割合は死者数が現在より2000人ほど多かつた10年前からほとんど変化はなかった。

滋賀県は知る人ぞ知る『飛び出し坊や』の発祥の地であり飛び出し坊やの多い地域で有名なのだが、次は『飛び出し爺車』というのを作ってくれないかなという漫画である。



水位

病院を舞台にしたヒトコマ漫画は昔からある定番ネタである。
中でも点滴のシーンは最も病室の雰囲気作りに適した道具立てだ。
私も昔からこのアイテムを様々なアイデアと組み合わせ描いてきた。
私自身はこれまでの人生で入院生活は一度も経験する事は無かったし、点滴を受けた事も無いのだが、家内をはじめとする身内の入院生活の場面でそれを目にする度、克明に記憶してきた。



スパゲティ状態

点滴のある風景

昨年、生死を分ける大手術を経験した友人から描き下ろしのヒトコマ漫画を依頼された。それは24時間体制で自分を見守ってくれた病院のスタッフに感謝のしるしとして贈るのだと言う。

点滴のチューブと、手元に用意されたナースコールのボタンがモチーフだった。これが母親に繋がるへその緒のように思えて気持ちが落ち着いたのだと語る彼の言葉が強く心に残っている。



充電中



抜け殻

大手の企業を退職して経済的な不安は無いものの、毎朝起きると、愛犬の散歩以外は何もする事が無いのだと語る友人の顔に年齢以上の老いを感じた事がある。定年後の人生をいかに生きるかは誰もが直面する課題である。

夏に目にするセミの抜け殻は、長い地中での幼虫の時期を乗り越えてついに成虫となり華やかなステージへ飛び立った飛躍の象徴に見えるが、過去の社会での成功や肩書きを脱ぎ捨てた後に何かあるのかはそれぞれのそれまでの生き様によって大きく異なるだろう。人は自分自身の抜け殻に何を感じるのだろう。

川下の風景⑬

～人生は川の流れのように～

米津 達也

【伝え続ける努力をした 10 年】

社会福祉士養成校で相談援助技術を担当して 10 年が過ぎた。過ぎてしまえば光陰矢の如し。しかし、振り返れば決して楽な仕事ではなかった。何しろそれが本業ではなく、あくまでも副業的にやらせて頂いたわけだから、プライベートにおいても多くの時間を割かなければいけないし、普段の相談援助業務を理論と照らし合わせて評価するには、多くの書籍を読み、研修を受講せざるを得ない。時間給で計算すれば、昨今のコンビニバイトよりも効率が悪いわけだが、一方で主体的に学ぶことを続けた 10 年でもある。誰かに言われて研修を受講するでもなく、自ら手を伸ばし、足を運び、時間を割いて資料を作る作業はこれ上なく専門職として有意義な時間になる。人としても大いに成長できた。それは生活の理解や、世の中の仕組みについて多角的に視野を持つことができたことに尽きる。理論、スキル、知識、これらは掘り下げれば切りがないが、私は福祉について崇高な考えを持つわけでもないし、学生時代から多くを研究してきたわけでもないの、せめて私が暮らす世の中や暮らしについて様々な視方ができれば援助のスタンスも変わるだろうと思うことでしかない。

考えてみれば無謀な挑戦でもあった。この業界に在ると意外に人に何かを教えたい、と望む人が多いことに気付かされるが、私は別にそれを願っていたわけでもない。たまたま縁あって出会った人に声を掛けられ、たまたま面白そうだと思って引き受けたが、最初にテキストを頂いたときは何のことかさっぱりわからなかった。つまり、如何に自分が我流の援助をやってきたか、そういう視野の狭さを知るところから始まった。思えば、1 年目や 2 年目の学生の皆さんには申し訳ないことをした。よく年間 60 コマの授業が務まったと思う程にひどい資料も多かった。しかし、それをカバーできるだけの熱量はあったかも知れない。必死に自分の言葉で伝える努力はしていた。3 年目や 4 年目になると借りてきた知識が多くなった。伝えることの専門性は高くなったが、自分の言葉で語らなくなった。いや、語る術を失くしてしまった。熱量が失われた授業は、空虚な知識で埋まり始める。ようやく知識と言葉が合致し始めたのは 7 年も 8 年もやり始めてからだろう。自分自身の中に余裕も生まれ、本業の相談援助業務と理論が上手にかみ合うようになった。冒頭、とても長くなったが、こうして振り返ると、やはり一筋縄ではいかなかった 10 年だと改めて噛みしめている。

【知ることを目指したインターンシップ】

折しも、どこもかしこも売り手市場と言われる。祝日のワイドショーでは熊本の小さな町が半導体バブルに沸き、土地や人件費の価値が急騰。田舎の小さな町で何もかもが取り合いになっている。昨日は日経平均株価がバブル期以来の

最高値になった、とこれもまた私から随分遠いところで舞い上がっている話題を眼にする。老後の資金がどうのこうので新 NISA が云々と言われても、目先の生活運用で精一杯生きているのだから、こちらも興味は薄い。そうやっていろんなことに計画を立てて、豊かな生活を描い

てきても、「まさか、こんなはずじゃなかった」と老後の世界で苦しんでいる人々を多く視てきただけに他人の身勝手な投資話は鵜呑みにしていない。

多くの、特に地方の私立大学も学生獲得に苦慮し、我々のような地方中小企業も必死に働き手にPR活動をせねばならない昨今であるが、昨年から大学生のインターンシッププログラムを受け入れることとなった。今回参加した学生は兩名共に19歳。私の娘と同じ歳だ。奥手、人見知り、まあそんな若者もいるだろう。だが、思った以上に初日からコミュニケーションが上手く進まない。返事がない、反応がない、そうなるについこちらが一方的に喋ってしまって、気が付けば6時間ぐらい喋ってしまい、帰宅するとどっと疲れてしまった。缶ビールを飲みながら東京の娘に電話で相談したが、お父さんって怖そうだし、話掛け難いよね、と一蹴される始末。自他のイメージは合致しないものだ。

娘の時もそうだったが、19歳というのは丁度中学から高校に上がるタイミングでコロナ禍に見舞われた。卒業式、卒業旅行なども全て無くなり、一斉休校措置によって新しい高校生活も順当にスタートしなかった。中学は小学校の延長のようなところはあるが、高校生になると一気に社会が広がる。生物学的にも大きな成長をきたすし、生態学的にも能力と生息域は大きく広がる。その出鼻を休校という形で挫かれ、その後もマスクや隔離に抑圧された環境下で成長してきた。

インターン学生 of 二人を見ていると、彼らは昼休みになると向かい合って座っていても互いに言葉を交わすことなく、スマホの個人世界に没頭している。居場所がきちんとそこにあるの

だ。前述したように、彼らの様子を見て社会の犠牲者などとは言わせない。就職氷河期だから、コロナ世代だから、とそれを言い訳にしてこの先10年も20年も生きるのか。前を向いて生きろとは言わないが、ただ、スマホから顔を上げて社会を視て生きろとはいいたい。そう教えてこなかった大人たちに。

【彼らが知ったこと】

不安定ながらも5日間のインターンシップも終盤に差し掛かり、再び私のターンが巡ってきた。このプログラムでは最終日に成果発表をしなければならない。そんな奥手で、人見知りの彼らができるのだろうか。レポート提出にしようか。いろいろ考えたが、当初の予定通り、最終日に成果発表会をやることにした。それを作り上げる二日間。彼らの呼び方から変えた。勝手に愛称で呼ぶようにした。もちろん、彼らの同意を得て、嫌だったらちゃんと言ってね、と諭しながら実行したが、呼ぶこちらが気恥ずかしい。普段から人を愛称で呼ぶことなどない。それでも割にコミュニケーションは上手く行き始めたと思う。単なる時間の問題かも知れないが、何か変化を起こすのは相談援助の常だ。そして、彼らはちゃんとやり切った。8割ほどはこちらでお膳立てしたが、2割は自分たちの言葉でちゃんと語った。語ったという事実と、ちゃんとやり切ったという経験が大切だ。もちろん、それがどう今後の人生に活かされるかは知りようもないが、一歩でも進めた彼らを見送るのも私の仕事だと思っている。いつまでも付いて歩くわけにはいかない。

【統合的、包括的】

社会福祉士養成課程のカリキュラムがいよいよ

よ本格的に新カリキュラムに移行する。4 年生大学などでは先行しているが、私がお世話になっている養成校では 2024 年度からということになる。非常勤講師などは学校から毎年のオファーがあって仕事が成立するものだから、こちらがやりたいと言っても学校側の評価によって契約があるかは異なる。有難いことに、早々に新カリキュラムに対応したテキストが届いた。10 年親しんだボロボロのテキストとはおさらばだ。

新カリキュラムは、私が担当する『ソーシャルワークの理論と方法』の内容も大きく改変されている。より細分化され、実践的になっている。キーワードは統合的、包括的という言葉。少子化に伴う働き手の減少は福祉の世界においても深刻で、これからの社会が 8 掛け社会になるのなら、福祉はより厳しい 6 掛け社会となることを覚悟しなければならない。つまり著しく援助者の数が減少するなかで、いつまでも専門分野に囚われるわけにはいかない。それが、統合的、包括的を押し進める背景なのだろうと、世相も垣間見える。これ自体はなんぞ悪いことだとは思わないが、理論としての包括的視点と政策としての包括的視点にズレを感じている。毎年、有難いことに 40 名程度の学生と対峙する。彼らが折角志したこの道を、負担と業務だけが一方的に押し付けられる業界にならないように、この世界で生きる私も一助の努力をしたいと思っている。

2024.2.23 米津達也

こころ日記「ぼちぼち」 その③

なつかしい日々

最近、よく自分の仕事を振り返ることがある。30年以上の学校という環境での仕事は、私自身の半生でもある。何よりたくさん子どもたちとの出会いが、今になって蘇えてくる。今でも年賀状を交換する教え子がいる。

最近出前性教育に忙しいのだが、色々な学校へ行くと、なかには教え子が担任をしているクラスがあったりして、本当に年月の経過を実感する。

中学校で生徒会長をしていたH先生は、教師歴8年。子ども2人を持ち、1年の育休をとった父親だ。公務員でもある教員が、育休をとる男性はまだ少ない。学年主任のT先生は、「中学の時に性教育を教えてもらったこと、忘れられません」と言ってくれた。

現役時代は、毎日の学習と行事をこなすのに必死だった。特に担任を持つと、40人近い子どもたちの成長のために1年間の学級経営を立てる。どんなクラスにしようか、あの子にどう育ててほしいかなど、色々思い巡らしたものだ。書店に行っては、何かやれることがないかを考えることが楽しかった。30年前は、教員はもう少しゆとりがあった。教員が主催する研究サークルも盛んで、休みには地方へ出かけては様々な教材なども仕入れてきた。全国の先生達との交流の場もあり、できることは何でもやってみたいと思ったものだ。

子どものためというより、むしろほぼ自己満足だったかもしれないが、時には学級の様子が変わることもあったし、そのことがまた次への希望につがることもあった。

とはいえ、毎日の生活で一番に気を遣ったことは、当たり前だが子どもたちの一人

一人の「いのち」だ。喧嘩やケガ、事故など小さなことはあるが、「今日一日、みんなが無事でありますように」と願うこと、これも学級経営では欠かせない課題だと思う。

学級経営って何？

先日、久しぶりに本屋で教育関連コーナーをのぞいてみた。学級経営のハウツー本がずらり。学級経営という言葉は、もう死語に近く使わないと思っていたが、学級崩壊が問題になっているからか？たくさんの関連本に少々驚いた。

残念なことに、学校現場から漏れくる言葉に「学級崩壊」という言葉をよく耳にする。

子どもが学級から飛び出したり、立ち歩いたりなど、学習が成立しないことが多々あるとか。現場のことは現場の人にしかわからないのは重々知っているが、何とかならないのかなあと感じてしまう。



今学校現場は、世代交代の過渡期だ。ある時期、教員採用数が極端に少ないときがあった。その弊害が今起きていて、ベテランの退職者が多く、現場は一気に若い世代となっていて、20代の教員が半分以上を占めている。さらに妊娠、出産など休暇を取る先生も多い。学年途中での担任が変わることで、子どもたちの不安も増す。それによって不登校になるのも珍しくない。

若い教員であれば、思春期の子どもたちと年が近いから話題にも事欠かないのではと思うが、なかなかそれも上手くはいかないようだ。これといった解決策はないが、せめて学級経営のハウツー本で、何か変化を求めたい教員がいてほしいと思う。



時折、若い教員を話す機会がある。なかなか学級を一つの集団として見るのが苦手なようだ。問題のある子どもだけを何とかしたいという思いが強く、その子がいるから学習が進まないのだと言う。

学校は相変わらず、いや益々学力偏重に陥っているように思える。IT 授業も導入され、教員に求められる仕事も多種で多忙だ。毎日の残業に疲弊する若い教員の声は切実だ。そこに学級経営はどうなの？と指摘されても、ベテラン教員からのアドバイスももらえない状況では、何をどう学級を立て直せばいいのか、わからなくて当たり前だと思う。

教師の仕事は、ある意味「職人技」的な側面があると思う。先輩の授業を見て、使えるアイデアは何でも真似ていたことを思い出す。

変わらない学校

私の学校時代と比べてみると、変化したこと、良くなったことはたくさんあるが、変わらないこともまだまだたくさんある。

中学校であれば、校則だ。最近制服も女子、男子の区別なく、ズボン、スカートを選択できる学校が増えた。たまに、スカートを履いてくる男子がいるらしいが、頼もしいと思う。

髪の毛の加工も染めることもいけない。ピアスも…。そのことと学力とは関係ないのだが、教員は生徒指導と称して厳しく対

応する。一体だれが困るのか？という疑問が湧いてくるが、実際に現場にいと、それを批判することができなかった自分がいたことも事実だ。

相変わらず、前を向いて一斉授業。教室には、細かいルールが貼ってある。掃除当番表、仕事の細かいルールもある。「○○はしません」の文言が多いのも、日本の教育の特徴だと思う。まず禁止から入る。では「してもいいことは何？」と聞きたくなる。これは悪しき学級経営の一つだ。

みんなと同じことをしなくてはダメという空気があることで、居場所がなくなる子どもが増えている。不登校になるのは、その意思表示だ。



専門家に託す

学校での困りごとは、最近専門家に、あるいは学校以外の組織に託す傾向にあると思っている。

適応教室もその一つだ。学校への行き渋りが数日続いただけで、教員は不登校と決めつけてしまう。何とか適応教室で面倒をみて欲しいという思いが伝わってくるが、学校へ行かないことがそんなに問題なのか。今の学校なら、行かなくてもいいと私は思っている。学校はおもしろいかどうか、楽しく学べるか、自分の思いが言えるか。どうだろうか。

地域で、自身が運営する「性と生」の情報発信の場に、学校で起きた性の加害・被害の相談が増えている。人権の問題だと思うが、「性」のことは教員が苦手とする事柄なのか、どうも手に負えないことらしい。

いくら扱いにくいことであっても、「いのち」に関わることについては、何とか解決しようという気概があっても良いのではないかなと思うのは、私の我がままだろうか。

つづく

『父が自分の身を呈して教えてくれたことⅢ』

高名祐美

私は二人姉妹の長女。私はお寺に嫁ぎ、実家は妹家族があとをついでくれている。前回は、父の在宅看取り経験から、妹との関係を家族システム論で考えてみた。長女としての責任、MSWとして業務してきたなかから得た知識や経験。そんなことにとらわれていた自分を客観的にみつめなおすことができた。

今回は、妹と二人で行ってきた父の在宅療養準備について、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）の視点もふまえて振り返りたい。

Ⅱ 家に父を迎える準備～父本人の意志はどうだったか～

89歳で突然寝たきりになってしまった父。検査の結果は、原発不明がんの骨転移。医師の説明から、治療や症状改善が望めないだろうと判断した私は、病院での入院生活を続けるよりも在宅療養に移行できればと思った。しかし、父と一緒に生活しているのは妹家族。私が決めることではないと、口に出せずにいた。そして父の意向も把握してはいなかった。MSWの現役時代にACPについて学んでいたのに、自分の家族とは人生会議をしてこなかったと気づく。

注) ACP（アドバンスケアプランニング）とは今後の治療・療養について患者・家族と医療従事者があらかじめ話し合う自発的なプロセス

在宅酸素療法するようになった父。父が人生の最終段階にはいったと感じていたが、人生の最期をどう過ごしたいかというテーマで話し合う時間をもつことはなかった。しかし、家族を愛し家族と過ごす時間を大切にしてきた父が、最期を病院で迎えることは本意ではないように思った。最期のその時まで、自分の建てた家で、母親と過ごしたその部屋で、家族に囲まれて過ごしたいのではないかと私は推察していた。

入院して10日目。検査に行った父を待ちながら、父の病室で妹とふたりで話していると、妹がこう言った。「もしも前立腺がんでなかったとして、もう治療できないような具合なら私はうちへ連れてかえって、看てやりたい。動けなくてもいい。私頑張る」と。「うちへ連れて帰りたい」と妹から言葉があった。それは私の思いと一致していた。妹が頑張るなら、自分も姉としてできる限り応援すると、そのとき約束した。こうして父の在宅療養準備を姉妹二人で進めていくことを決断した。しかし、ここに父の意志は不在だった。

検査の結果、前立腺がんは否定され、残るは肺がんかと考えられた。それでこれまでかかっていた呼吸器内科の医師から説明を受けた。しかし肺がんとは診断されず、確定診断するにはまだまだ検査が必要、この病院ではできないとのことだった。私は、検査や治療のために、父を転院させようとは思わなかった。自分の働いてきた病院で最後までみてもらうつもりでいたし、これ以上父を苦しめたくないという思いは姉妹で一致していた。「診断や治療より、とにかく痛みや苦痛を少しでも緩和してほしい」と二人で訴えた。すると医師から、「それは在宅療養を選択するということですか。そういう前提なら・・・」と痛みに対しての緩和治療・ケアが提案された。こうして、積極的に検査・治療をしないことを父不在の場で決めることとなった。

家に連れて帰ると決断したあと、妹の行動力は目をみはるばかりであった。まずは自宅環境を整えようと、父の居室にあった家具ベッドをさっそく解体し、電動療養ベッドを搬入できるようにした。そして、父の部屋にある不要なものを整理し、「必要なものは何？どんなことを準備すればいい？」と。「お金に糸目はつけない。必要なものならなんでも揃える」。そんな積極的な姿勢が頼もしく、私は仕事でやってきたことを自分の父に実践した。まずは介護認定申請して、そして担当ケアマネジャーを依頼。病棟看護師から介護指導を受けられるように調整してもらうこと、退院前には関係者でカンファレンスを開催してもらうこと。担当となってくれている後輩 MSW に自分でやれることはすると伝え、院内外スタッフの調整を依頼した。そして「チームよしお」が結成された。在宅療養はチームづくりが肝要。チーム名のネーミングは、後輩 MSW だった。

父への説明は、妹と二人で行った。

父：（足をたたきながら）なんでこの足が動かない・・・痛い・・・

私：ころんだときに、背骨の骨が折れて、それで神経を圧迫して足が動かないんだよ。手術もできないところなんだって。骨が折れたんだから痛いんだよ。

妹：病院に居ても、わたしたちはなかなか会うことができないから。うちに帰ろう。そして看護師さんや先生にうちにきてもらうようにしよう。

父：うちに帰るのか？（目を見開いて）

私：そう。うちに帰ろう。準備するよ。

妹：うちにいてくれれば、私も楽だしね。

父：おまえらに迷惑がかかる・・・

私：大丈夫。いろんな使える制度や仕組みもあるし。そこはねえちゃんにまかせておいて。

妹：そうそう。ねえちゃんがちゃんとしてくれるし、私も頑張るよ。
こんなやりとりをしたあと、父は涙ぐんで私達にむかって手を合わせた。

ときはコロナ禍。面会制限があり、1日1回に15分・二人までという面会時間だった。まずその面会制限を解除されて、主たる介護者となる妹への介護指導が始まった。妹はさっそく「よしおノート」を作り、自分の任務を詳細に書き留めていった。病棟看護師や訪問看護師のアドバイスを受け、一日のタイムスケジュールを作成していった。行動が素早く、的確な動きをするので、病棟看護師さんにはいつも感心されていた。

その妹が尻込みしたのが、吸痰だった。吸痰チューブを口の中に入れて溜まった痰を吸引する行為。「これだけは怖い。他のことはなんでもできる」と。私も一緒に吸痰の指導を受けることになった。MSWとして在宅療養への支援には多く関わってきており、妹のように「痰をとるのは怖い」という家族にたくさん出会ってきた。妹もそのひとりだった。私は、そんな場面を数多く経験してきたせいか、「必要なこと。しっかりやればできるはず」と取り組んだ。父が思いの外、抵抗せずにチューブを入れさせてくれるので、指導されるまま機械を操作し、吸引することができた。看護師から「問題なくできますね」とお褒めをいただき、妹からは「私は怖い。吸痰は姉ちゃんにまかせる。よし。今日から吸痰隊長に任命する」との言葉。自分の役割が明確になり、ちょっと嬉しい。夜間もこれで痰をとってやること、口腔ケアをすることができると少し自信がついた。

指導を受けながら、退院前カンファレンスを開いてもらい、退院日も決まった。体を動かすと痛がることと、酸素が常時必要なため、退院の際に病院救急車で看護師がついて家まで送ってくれることとなった。そして訪問診療を一週間に1回、毎日2回の訪問看護を利用することが決まった。カンファレンス参加者は、私達も含めて14名。それぞれの役割を明確にし、「チームよしお」は動き出した。

（次回に続きます）

多様で持続可能な対人援助に必要な「知」について2

本間たけし（退院支援研究会 新潟）

ガリレイは、自然を数学的に理念化すると同時に
「生活世界」の隠蔽者となった
～E.フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』～

【第2章 広島で学ぶ「対人援助の多様性と持続可能性」】

10 G.バタイユ著 酒井健訳：『ヒロシマ の人々の物語』

我々は、1945年8月6日朝8時15分の少し前、「自分は何かの病気にかかったのではないか」という不安に駆られていた広島の一ひとりの人間に似ている。彼はその直後に死んだが、何が自分を待ち受けているのか知ることはなかった。しかし「賢者の啓蒙的な英知」が、「民衆の盲目的な知性」より常に正しいとは限らない。それらがパニックに陥る傾向（理性的な言説の領域）と、無関心の傾向（感性の領域では無関心は現実の問題だが、行為を決断する領域ではほぼ全面的な死を意味する）からなる流れは、約10年前（1937年にスペイン内乱、二・二六事件、日中戦争などが起きた）と同じである。パニックの中では、原爆投下が繰り返されれば予想される結末が大げさ（地球の消滅など）に語られてしまう。精神の日常的な尺度と原爆がもたらすものとがあまりにかけ離れているため、人は空虚の前で想像力を空回りさせるばかりだろう。

爆心地からの隔たりは地理上の問題ではなく、日本とフランスの人々の精神的コミュニケーションの問題でもある。ヒロシマとナガサキの原爆は、感性より思考に多く

を提供する。もしも事前に爆撃や退去の勧告も出されないまま、原爆がフランスのボルドーや、ドイツのブレーメンに投下されていたら、我々は原爆投下をけして「なかば科学的な実験」という意味合いでは捉えないだろう。この実験は想像力を動転させるほどの規模で、その悲劇的效果は確実であり、感性的な表現の外にある。

アメリカ人はフランス人より日本の近くにおいて、数年間破壊し合った悲痛な絆で結ばれていた。その上、アメリカ人は原爆を発明し、製造し、投下した事実を苛まれている。イギリス人の神経質な感性も同様に冒されているだろう。J.ハーシーの『ヒロシマ』は、被爆した生者たちが語らう原爆体験をつなげて細心綿密な物語に仕上げた最初の著作で、それが提供している本質的なものは、フランス人に欠けている「原爆による大異変についての感性的な表現」である。ヒロシマの人たちより、世界全体が地球を動転させ発明した人々をも呆然とさせた原爆投下による世界で最初の犠牲者になった。

（pp4-5,6-9）

ハーシーは、自分のルポルタージュを表現者たちの記憶に記録された多様な視像（Vue）の連続に留めるという表現方針を

とった。即ち、著者によって報告される表現者たちの記憶の内容が、動物的な体験の次元に留められている（激烈な外的・視覚的刺激が、内的に認識され意味付けられる暇がない）。トルーマン大統領は同じ大惨事を即座に歴史と政治の中に位置づけ、この投下によって世界にもたらされた新たな可能性を明示している。

『ヒロシマ』の第1章では、表現者のひとり谷本牧師の表現は、知性が錯誤に陥り感性的な側面しか持っていない。錯誤から見えて来るのは、もしも動物に記憶があればその記憶のようなものだろう。原爆投下とその直後の模様が次々に描かれ、この章全体がその事件の動物的な視像になり未来への展望を奪われている。第2章で谷本氏が幼児を背中におんぶしたまま叫んでいる女性を助けるために向かった救護所では、多くの負傷者が治療を待っていた。小高い丘の上からみると、ヒロシマ全域に色濃く恐ろしい毒気のような煙が幾重にも重なり立ち上って行く。どのようにして、これほど広域の破壊が静かな空からやってきたのだろうと自問する谷本氏は、少しずつ理性を取り戻し、この事件の人間的な意味を探し求め始める。原爆とは、人間の両手が未来の上にあえて意図的にぶら下げている可能性であり、ひとつの行動の手段なのだ。津波や火山の噴火が引き起こす恐怖には（付帯する）意味はない。何故ならば、津波や火山は、人に屈従を強いるために恐怖を引き起こしているわけではないからだ。一方、核分裂はひとつの「企て」であり、その目的は恐怖を引き起こす側の意思を相手に強制することにある。「企て」を不可能にする犠牲者たちの表現こそが、原爆投下を受ける側の人間

的な意味なのだ。そうでないならば、原爆は煙にあぶられた白蟻の巣という動物的な意味しか持たなくなるだろう。被爆して死なずにその証言者になった人々は、自分たちにふりかかった不幸の理解可能な表現を保持する力を失っていた。ヒロシマのおぞましさは、そのような観念のための熟慮や思考が僅かしか働かない地点に達していたことにある。思慮には、そのための配慮が存続する必要がある、このおぞましさの中でも配慮を生み出す希望があって欲しいと願う。その再来を危惧する不幸を知覚的（概観的）に表現すると、感性的な表現がもたらす情緒的な要素が欠けてしまう。この要素がないと思慮は効果のないものになってしまい生き生きとした反応があとに続かなくなる。

我々が感傷癖を捨てつつ、感性的感動の可能性の極限へ向かうとき、我々の目の前に現れるのは動物的な苦悩の果てしない不条理なのである。原爆のような大異変は、それが生起する瞬間に限定され、その瞬間の後の帰結への配慮を超える。従って感性的な感動は、政治活動のような行動の出発点にはなり得ない。極限に向かう感性は政治から離れ、この感性にとって世界は不条理だけに閉じられる。政治の道に入っていく感性は、劣悪でごまかしに満ちている。政治の目的に仕えることで、もはや奴隸的な、少なくとも従属的な感性にしかなくなっている。このように極限まで向かう「至高な感性」は、理性の限界から自由であり、明日への配慮からも自由である。

感性が「至高」であることにおいて重要な点をバタイユがあげている。

1. 何にも仕えず、従属しない自由で自立的な意識の状態

2. 富あるいはエネルギーの無益にも
思える消費
3. 「将来の目的を目指す企て」、「明
日への配慮」を振り払って、今現
在を十全に生きる現在重視の姿勢
4. 理性を否定するというのではなく、
理性の体制を超出する超理性的な
姿勢
5. 個人的で利己的な快樂実現ではな
く、他者あるいは外部の世界と深
く交わっている共同的な関係性
(pp11-14,15-17,19-20,40)

原爆投下という未曾有の状況に対するバタイユの言及に依拠し、対人援助の問題を語る際には、過剰に還元的にならない慎重さが求められる。対人援助の現場を俯瞰してみると、援助職側の経験と英知が、常にクライアントの感性や知性に勝るとは限らないことが分る。我々は援助の方向性を失いパニックに陥ったり、課題に対して無関心を装い思考を停止したりすることを避けなければならない。アウト・リーチの重要性が指摘されている今だからこそ、クライアントとの精神的な距離やコミュニケーションのあり方に敏感になり、自分の援助が相手を屈服させようとする、M.フーコーが強調する「専門家暴力」になっていないか配慮する必要がある。

11 石川学：『理性という狂気 G.バタイユから現代社会への倫理』

多くの科学者が「最先端の科学が統御し得ない怪物を生み出す前に、統御の仕組みを作ればよい」と指摘する。だが、成果を追求する理性の働きが、自らに歯止めをかけられるだろうか。現代は、理性的な活動が有益な結果をもたらすと無条件に信頼できる

時代ではない。理性の狂気に対しては、狂気を事実として踏まえた対処の方針や倫理を構築する必要がある。G.バタイユは、「我々は、大衆が権力の意識を持つのに貢献しなければならない。権力は集団的昂揚からもたらされ、集団的昂揚は、理性ではなく大衆の情念に触れる言葉から到来しうる」と述べた。バタイユは、執筆活動の舞台とする雑誌『アセファル (acéphale 無頭人)』を1936年に創刊し、世界に対し「頭＝理性」として役目を果たすような「隷属」から自由になるために、自らの「頭＝さ迷える理性」から逃げ出し、同時に「頭＝指導者（当時、ファシズムが台頭し始めていた）」への従属から人間を解放しようと呼びかけた。(p11,36-37)

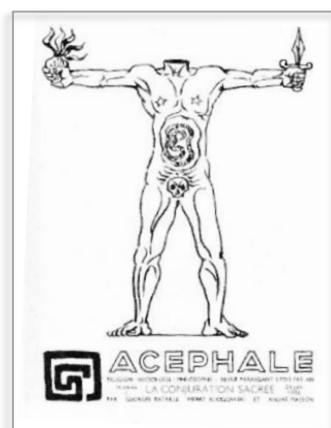


図7 雑誌『アセファル (acéphale 無頭人)』

国家の次元での「明日への心配り」は、理性の働きによるものであり、文明の進歩を支える「理性」こそが、国家間の戦争を引き起す原因になる。こうした認識の下で、バタイユは「至高な感性」をもつ人間に、戦争を放棄する可能性が託されていると考える。至高な感性の瞬間はある意味では動物的な純粋な感性に近い。動物的な感性は、「今ある不幸の代償として、未来に幸福が提供さ

れる」ことには関心を持たない。至高な感性は、理性の上位に位置付けられ、有効な活動の限界内では理性を認めるが、理性を超克し従属させる。こうした感性を持つ人間は、原爆の開発と使用を実現した現在においてこそ存在することが可能である。広島が、自分たち人間の理性がもたらした最大の悲惨であり、この悲惨がすでに到来している以上、今感じるままに振る舞うことに何の問題があるだろう。(pp59,62-65)

アメリカに次いで原爆を開発したソ連の経済は、余剰資産を生産手段の生産に捧げ最大の生産を目指して個人の意思を縮減・無化する。生産の余剰を国家の成長に費やそうとするソ連と、個人の自由を標榜し生産が爆発的総量に達したアメリカの経済的な拮抗が予測される。第二次大戦以前においては、理性から人間存在を解放しようとする実存変革の試みは、そのままの形で社会変革の試みに結び付いた。理性からの解放とは即ち、理性の支配下で虐げられている物質的に「低い」と見做されているものによる上下関係の価値逆転を意味し、同時に下層階級である労働者によるブルジョワジーの打倒という社会のヒエラルキー逆転へとつながった。バタイユの「アセファル」という「頭＝理性、指導者」を共に欠くイメージは、理性と指導者を打ち倒す欲求を呼び起こす試みであった。(pp73-76,79-80)

「悪や暴力」、「人類の破局」といった主題を取り扱うフランスの科学哲学者 J.P.デュピュイは、2004 年 12 月に発生したインドネシア・スマトラ島沖地震とそれに伴う大津波を、防波堤としての役割を果たすサンゴ礁やマングローブ林が人為的に破壊されたことや、タイ政府が観光業への配慮から

必要な警告を怠っていたことに諸悪の根源があり、この甚大な自然災害は人災に他ならないとした。だがしかし、同時にデュピュイは破局的な出来事をなんでも人間の責任とみなす見方には、「近代史上の形而上学のおごり」とでもいうべき傲慢さが潜んでいると指摘している。なぜなら、大地震や大津波と言った人為を超えた事象を、正しく対処すれば解決可能な問題へ格下げしているからである。「科学が進歩すればうまく対処できるだろう、責任と能力のあるものがきちんと対応すればうまく対処できるだろう」といった考えを持つ限り、対処は先送りされ破局が到来する、それから「人災」と言いたてても後の祭りである。(pp90-92)

対人援助の現場には、「一筋縄ではいかない難問」があふれ返っている。「時間と経済の成果追求」こそが、最優先事項と条件付けられた援助者の「難しい状況、答えのない事態にしばらく耐え続ける力」(J.キーツ：ネガティブ・ケイパビリティ)を伴わない理性で、それらの難問を解決することは難しい。目の前の悲惨な出来事を直線的因果関係の結果と**画一的**に捉え、「当事者 A、あるいは担当した機関や援助者 B 個人の責任」とみなし、**その場限り、先送りの**反省や謝罪をしているだけでは、「解決策」どころか現実的な「妥協点」さえ単なる「未解決問題」に格下げされる。我々が今大会のテーマに掲げ、求めている援助のあり方とは真逆の援助である。理知的であろうとして感情の素直な表出を避け、「悲惨な、嫌な」などの悲観的感性や情緒を無視してはならない。

バタイユは「至高な感性」をもつ人間にこそ、戦争という選択肢を放棄する可能性が託されており、「至高な感性」は理性の上位に位置付けられ、

有効な活動の限界内では理性を認めるが、理性を超克し従属させると考えた。対人援助の現場で、教科書的な理論をジグソーパズルのピースのように当てはめて行けば、必然的にクライアントにとって望ましい結果がもたらされると考えるのは、クライアントの感性（情緒的要素）を無視した賢者を気取る驕りである。対象関係論を代表する小児科医で精神分析家の D.ウニコットから「ちょうどよい母 = good-enough mother」というフレーズを借り、「ちょうどよい援助」のあり方について考えてみる。

後進やクライアントの成長を願い、あたたかい声をかけているだけでは、相手は援助者に幻滅し「成長」や「自立」が滞ることがある。前述の「難しい状況、答えの出ない事態に耐え続けられる」潮時を見極め、相手を見守りつつ、守る手を離すことも大切である。医療界では、2000 年前後を境に EBM(根拠に基づく医療)の重要性が強調され、業務に係る法整備がなされ、社会的弱者への配慮は深まり、クライアントが主体的に係るチームアプローチの重要性が強調されるようになった。だが、本来は利便性を高めるために導入された ICT（情報とコミュニケーションのツール）は、逆説的にクライアントとの接点を狭め、援助者の発言にはそれが依拠する evidence や fact の提示が必須になった。「インシデント・アクシデント報告」を例に挙げると、その原因究明や再発防止より、「反省や謝罪」が前提になり、「そこに至るまでの過程・事情」やその問題に携わったものの「情緒的な要素」は排除され、結果として援助行為自体が萎縮する傾向がみられる。家庭や施設内での「虐待」を容認する気は一切ないが、防犯カメラの映像や医療機関の受診記録に全てが反映されているわけではない。そのような問題は複雑で、時には「虐待と被虐待」の関係が逆転しかねない裏話が隠されていることさえある。バタイユ

が挙げた「至高な感性」の条件を自らに問いかけ、仲間たちに伝えるためには、日頃から理性と感性のバランスがとれた記録作成を心がけ、時間や手間をかけることを躊躇しない協働的対話のトレーニングを積み重ねることで、援助者もクライアントも社会と深く関わる力を身につけられるのではないか。これが「ちょうどよい援助」かなと、私は考える。

12 大江健三郎：『ヒロシマ・ノート』

原爆を投下する広島の人たちの人間的な力を信頼して、そこに出現する地獄は快復不能ではないと考え、アメリカ政府は原爆投下を決断したのではないか。広島の人々は徹底的に壊滅され、その市街全体が一個の（ナチスの収容所の）ガス室と化すことで、原爆を投下した者たちに彼らがどのように恐怖に満ちた悪をなしたのかを骨身に徹して理解させるということではなかった。原爆がある都市に投下するという決心を他の都市の人間たちが行うということはまさに異常だし、（事前に詳細なデータが無かったにしても）科学者たちに爆発後の地獄への想像力が欠けていたはずはあるまい。それでもその決定が成されたのは、この絶望的に破壊的な爆弾が炸裂しても、その巨大な悪にバランスをとるだけの人間的な善の努力により、この武器の悪魔的性格を人間が希望を見出しうる限界のこちら側まで緩和するであろうという「予定調和信仰風な打算」があったからである。

大江氏の、「予定調和信仰風な打算」すなわち、他の国や都市ならいざ知らず、日本のヒロシマなら地獄のような惨状から必ず復興するだろうという発想が、「トリニティ実験」まで行ったアメリカ政府側にあったとすれば、救いがたい図々しさで

ある。

広島医師たちが、原爆という「二十世紀の最悪の洪水」後、すぐさま始めた活動は目覚ましく感動的だった。しかし 13 年後の 1958 年に、広島市医師会が被爆生存者である医師会員に対し回答を求めたアンケートの背後に孕んでいるものは、道徳的な責任の追及に係る凄まじい告発である。質問は以下の 4 項で、回答は『広島原爆医療史』に整理されている。

一、貴下は原爆投下当時（昭和 20 年 8 月 6 日 8 時 15 分）どこにいられましたか。

兵役中 疎開中 在広島

二、貴下は被爆当時、被爆者の救護に従われましたか。救護に従われた方はその場所と期間をお知らせください。

場所＝ 期間＝

三、貴下は原爆による被害を受けられましたか（外傷、火傷、悪性症状など）

四、貴下以外の医師にして救護に従事された方をお知らせください。

このアンケートは、広島市の医師会員に対して、被爆時に彼らが責任を果たしたかどうかを問い詰めているのだ。もし、被爆はしたが直接的な被害を受けず、救護活動をしなかった医師がいたとしたら彼あるいは彼女は、このアンケート用紙を鋭い刃のように受け取るほかはない。広島に、被爆で救護活動の意思を失った医師がいたとしても、それは人間的に異常な反応ではない。このアンケート以降、彼らは安眠できる夜を持つまい。

被爆当時、広島市内には 298 名の医師・歯科医師がいた。しかし彼らは「防空業務従事令書」によって市外への疎開を禁止されていた。歯科医師、薬剤師、看護婦、助産婦、保健婦も同様である。原爆によって 60 名の医師が即死、救護活動を始めることが出来た医師は 28 名、歯科医師 20 名、薬剤師 28 名、看護婦は 130 名であった。彼らが治療に当たった市内の負傷者の数は十数万人に上る。両手を骨折し半身にやけどを負いながら救護活動にあたった若い歯科医師は、過労で神経衰弱状態に陥り、年長の医師に「戦争が終わった後まで、なぜ広島の間がこのような苦しまなければならないのか」と問い縊死を選んだ。それでもなお、自殺しなかった少数の傷ついた医師たちは全市をうずめる夥しい死者たちに囲まれ、ただ赤チンキと油（皮膚炎や軽いやけどに用いる酸化亜鉛を含むチンク油と思われる）で十数万人の負傷者たちに対処する勇気を持ち合わせていた。限界状況の全体の展望について明晰すぎる目を持つものには絶望しかないのである。限界状況を日常生活の一側面としてしか受け付けられない鈍い目（あえてそのようにしか限界状況を見まいとする態度）の持ち主だけが、このような状況に絶望せずそれと戦うことが出来た。

（pp121-123,126-129）

「終戦間近、赤紙招集を受けた 45 歳迄の医師 50 人に、『貴様たちは国家存亡を賭けたこの一戦に、今日まで従軍志願を積極的になさなかったのは何事であるか。国賊にひとしい奴どもである。その意味を持って今回その筋の命令により、懲罰招集として一網打尽に動員を行った～中略～貴様たちの頭の中は馬糞同様に軍人精神は

蚤の糞ほどもない。今後は専ら軍人精神充実に重点を置いて鍛えるから左様心得ろ』と訓示を垂れた軍医中佐も 8 月 6 日朝、即死した」

(井伏 pp303-316)

広島市内の高校生たちを対象に原爆症の総合的な調査を行う上での最大のジレンマは、それが必要な調査でありながら、広島の高中生たちや被爆 2 世たちが不安や動揺に陥る可能性に由来している。それは、これから生き続けてゆく人々の原爆症の問題なのだ。ABCC に始めてやってきたのは優秀な遺伝学者たちで、原爆医療史の当初から次の世代の原爆症の問題は、世界中の医師の注目の的だった。広島市内の全てのハイ・ティーンたちを対象とする原爆症の調査が、不安のうちに孤立している若者たちを、ひとつの連帯の広場へ連れ出して開放するものであることを希望する。(pp152-153)

1958 年に不撓の医療従事者たちに対し行われた医師会のアンケート調査も、原爆投下を決定したアメリカ政府に匹敵する厚かましさに、「調査に関する説明と同意」など全く念頭に置かれていないのがよく分る。戦争とは縁のない今でも、医療者は常に内外から「檄」ととばされる。66 歳を迎えた私自身が、忙しさのピークを越えることができたのは、50 代の終りに、その筋から「労災申請」を提案された過重労働による心身の変調がきっかけだった。若い対人援助者に是非とも知ってもらいたいのは、「限界状況を日常生活の一側面としてしか受け付けられない鈍い目」を持つのは最善の策ではない、家族や身近にいる人たちにとっては最悪の策にもなりかねないことである。また「アンケートや意識調査」について感じたことがある。多職種協働のトレーニングとして行われているグ

ループワークの付箋張りやアンケート調査も、適切なタイミングで結果の集計とそれに対する講評がなされなければ、単なる主催者の自己満足と言われても仕方がない。同業者に対するものであっても、対人援助の臨床や研究で必須なのは、「相手に理解・納得が可能な説明を尽くし、自主的な賛同を貰う」水準の信頼関係である。大江氏が望んだように、アンケート調査がきっかけになり、広島や長崎の被爆 2 世・3 世が懸念する難病への不安から解き放たれ、ひとつの連帯の広場に誘われることを切に望む。

1 3 三島由紀夫：『小説家の休暇』

ビキニ環礁の水爆実験「第五福竜丸事件」における補償問題で感じたことであるが、その実験を非人間的といい、反人道的というときに、我々の「人間なる概念」は、既に動揺をきたしている。政治的偏見なしに、水爆の実験をした国の人間が、被害国の人間に補償を提供する行為は、国際間の問題とか人種的偏見の問題を超えて知的な概観的な世界像に直面している人間が、自分の一部分である、そういう世界観と無縁な部分に慈悲を垂れていることを意味する。私は、それを人間相互の問題と言うよりも、人間一般の内部の出来事という風に理解する。我々が文明の利便として電気洗濯機を利用することと、水爆を設計する精神は無縁ではない。科学はそういう風に発達してきて、精神の歴史にも関わってきたのであり、火薬と活字の発明は、かつて手を携えて封建制を打破したのである。

現代 (1955 年) の「人間概念」には、恐るべきアンバランスが生じており、広島原爆被災者よりも、あの原爆を投下した人間に、こうしたアンバランスはもっと強烈

に意識された筈である。被災者には火と閃光と死を知的に理解する暇はなかった。原爆であろうと、大砲であろうと、小銃であろうと、被害者はいつも原始的な個体に還元され、死が彼を物質に還元してしまう。しかし原爆投下者はどうだったか。彼の肉体は小刀にも血を流し、うすい皮膚の下には、壊れやすい内臓が動いていた。しかも彼には距離があり、遙か高みから日本の地方都市を見下ろし、人間の同一の条件についての意識は隠蔽された。幾ばくかの技術と科学知識に恵まれていた投下者は、自分の感受性を、あの知的な世界像の下に押しつぶすことを知っていた。こうした小さな隠蔽と抑圧が、十分あの酸鼻な結果をもたらすに足りた。宗教及び政治における、唯一神狂的な命題を警戒せねばならない。現代の不可思議な特徴は、感受性よりもむしろ理性の方が人を狂信に導くことにある。

(pp83-85,143)

1954 年に起きた「第五福竜丸事件」において、アメリカ政府は被害者たちに賠償ではなく、「好意による見舞い」として 200 万ドルを支払い、日本政府はこれを容認した。新潟と熊本の水俣病でも、当初は加害企業から患者たちに、わずかな「隣人愛としての見舞金」が支払われている。三島氏は、原水爆の開発は「人間相互の問題」ではなく、「人間一般の内部の問題」と捉え、現代の不可思議な特徴は、感受性より理性の方が人を狂信に導く点にあると指摘した。私は三島氏が昭和 30 年に書いたこの日記を読み慄然とした。

加害・被害関係が明らかな「原水爆の実験や投下」とは異なるが、疾病や傷害に対する補償や援護を与える側の理性（どのような制度や基

準の下、どの程度の障害に相当する）だけで判断せず、受ける側の情緒や感受性の問題にも目を向けるべきである。バイステックの「社会的な問題の裏には情緒的要素がある」という言葉の真意は、援助者と被援助者という異なる立場の二者ではなく、人間一般の内部の問題なのかも知れない。

1 4 上野千鶴子：『生き延びるための思想』

敗戦時、ドイツには加害者性としてのシンボル「アウシュヴィッツ」があり、日本には受難のシンボルとしての「ヒロシマ」があった。日本では、一億総懺悔の無責任体制を背後にした「犠牲者性」が構築され、「加害者性」は陰に押しやられた。天皇の戦争責任と A・B・C 級戦犯、庶民とりわけ（自らの意思や周囲からの圧力で銃をとった）男性の戦争責任と、参政権さえなかった女性の戦争責任が同じ理由はない。参政権、自分の運命を自分で決める権利がなかった女性に、そもそも戦争責任はない。戦争末期、新型爆弾が広島に投下されたことを、天皇はじめ軍部は十分に知っていた。しかしこの新型爆弾によっても天皇と大本営は終戦を決意せず、長崎への投下でもまだ決意していなかったそう。天皇及び大本営が無条件降伏を受け入れたのはソ連の参戦がきっかけであることは歴史的事実である。戦闘員・非戦闘員を合わせて沖縄地上戦が 20 万人、東京大空襲では 10 万人以上が被害に遭ったが、新型爆弾を大きな犠牲として強調することは、ほかの犠牲を軽視することにつながる。非戦闘員への攻撃は、当時でも国際法上の戦争犯罪だった。近代戦は総力戦で、総動員体制を伴う空爆や原爆投下は戦闘員・非戦闘員を選ばないが、非戦闘員も間接的に戦争に

協力しているので、攻撃を受ける理由があるという。

戦後 50 年以上経っても、日本における「広島」の象徴性と、アメリカにおける「ヒロシマ」の受け止め方の間には落差がある。「ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下によって戦争終結が早まり、地上戦を回避し、米軍の犠牲者を減らすことに貢献した」というトルーマンの決断は、後から原爆投下を正当化するために作られた「神話」であり事実ではない。原爆投下の正当化というレトリックは今でもアメリカで支配的で、あの戦争は「ファシズムに対抗する自由と民主主義を守るための正義の戦争であった」という考えである。そしてアメリカ側の認識を支持補強してきたのは戦後の日本政府だった。1994 年のハーグ国際法廷で残虐兵器を巡る審理が行われた際に、外務省の官僚は「原爆は残虐兵器とはいえない」と証言した。同じ場に広島市長と長崎市長が乗り込み、外務省と真っ向から対立する証言を行ったが、生物化学兵器や毒ガスが残虐兵器に指定されているにもかかわらず、「原爆は残虐兵器とは言えない」というのが日本政府の「公式見解」だった。(pp168-176)

「戦争を知る人がいなくなると戦争が始まる」とよく言われるが、幸い我が国がこれまで 80 年近く戦争と縁がなかったのは、広島の語り部の活動は勿論のこと、言葉少ない戦前・戦中派に染みついた「戦争の悲惨な現実」と「戦争に対する感性・情緒」の賜だったと考える。もみじの天ぷらを見て、季節感より戦時中の食糧難を思い出した高齢の医師がいる。我が国のかじ取りである総理大臣は、麻生太郎氏（昭和 15 年生）以降、鳩山由紀夫氏（昭和 22 年）、菅直人氏

（昭和 21 年）、野田佳彦氏（昭和 32 年）、安倍晋三氏（昭和 29 年）、岸田文雄氏（昭和 32 年）など戦後派が多数を占めるようになった。戦勝国の代表者の理屈では、広島と長崎で戦闘員と非戦闘員の区別なく多くの人の命を奪った原爆は、「戦争の早期終結をもたらす、新たな戦争被害者を生まない、残虐ではない兵器」になる。ここにおいて、死亡者数という fact さえ「科学的証言」の論拠にはなり得ないことが分かる。戦争には加害と被害がつきものと言われる。だが、広島や長崎での原爆投下や東京大空襲、沖縄の地上戦に巻き込まれた非戦闘員たちも「正義の闘い」の加害者だったのだろうか。

「ケアの関係」は非対称的で、ケアするものの、ケアされるものと必ず強者と弱者関係がある。ケアするものはその関係から退出できるが、ケアされるものは（生きている間は）その関係から降りることはできない。そのようにニーズから降りることができない、問題から離れることのできない人を「当事者」だと言い換えることができる。だが、当事者研究を学問の場に持ち込もうとすると、学問の「中立性・客観性」という根拠がない神話をかざす抵抗勢力が現れる。当事者研究では、自分の経験を、安心できる聞き手のいるところで、悲鳴や叫びではなく筋道を立てて言葉にすることで、はじめて伝わる言葉・伝える言葉が生まれる。ケアは相手に対する介入だけによって成り立っているのではなく、相手の自発性や自立性への尊重と配慮によって成り立っている。「心にかける」と同時に手出しをしないで「見守る」、その両者が組み合わさって成立している。(pp347-359, pp387-388)

援助やケアの対象者が、自らの経験を、安心して語ることが出来る環境で言葉を紡ぐ。援助する側は、対象者の自発的で自立した行動を、心にかけてが手出しをせずに見守る。その関係性が、「ひとりで生き延びるための思想」とであると上野氏は結んでいる。

繰り返しになるが、「0 時 0 分 0 秒」で時計の針が 1 本に重なるように、医療の分野では 2000 年を境に PC や電子カルテの普及、医業（医療ではない）コンサルタントの台頭、EBM に対する唯一神の狂信が新たな市場モデルをもたらし今に至る。医療と連携する対人援助の分野でも、「費用対効果」が優れた合理的な計画を最優先に取り込むべく「企業努力」に励むことを第一の目標に掲げる組織は少なくない。それらの組織が行う援助やケアは、クライアントたちが求めるそれとは大きくかけ離れたものになる可能性を孕む。トルストイの短編小説、「イワン・イリッチの死」では、死が近づき、家族や同僚に見放された主人公イワンの繰り返す下男のアレクサンドルだけが聞き、むくんだ主人の脚を撫でさする。一体、誰が終末期の心身の苦痛や、慢性疾患に伴う人生への不安、社会への参加を閉ざされ抑うつ状態に陥った人の言葉に耳を傾けるのだろうか。「そこまで市場原理が大切ならば、教育や研修の段階から自他へのケアを放棄し、生物学的な知識と制度運用の機械的なスキルを身につけるのが早道だが、そうすると社会のネットワークは崩壊するだろう」と A. クラインマンは警鐘を鳴らす。「私たちは、まだその一歩を踏み出していない」と、私には明言できない。

1 5 中村雄二郎：『臨床の知とは何か』

自然科学の有効な部分だけをみて、現実とのずれに目を向けない人がいる。近代科学が、自然を専ら人間のために役立たせる技術の対象にした結果、生態系や地球環境

の破壊がもたらされた。生命の保全が最優先という前提に立てば、高度に自然科学化し、技術化した医療ほど「（人格を尊重した）人間らしい患者の扱い」から遠ざかる可能性がある。

「生きるということを人間の中心点として考えれば、そのまま「単に生き続ける」で差し支えないでしょう。然し美しいものや気高いものを一義において人間を評価すれば、その判断は間違ってくるかもしれません」（夏目漱石：『硝子戸の中』）

近代科学が見えなくしてしまった「現実」のひとつは「生命現象」そのもので、もうひとつは「対象との関係の相互性」である。例えば分子生物学が捉えているのは、分子レベルに還元された生命体の要素とその機械論的な組み合わせであり、生命現象、生命現象の意味、自律的な振る舞いや自己創造などは取り扱わない。「関係の相互性」についても、観測データは観測のための光や観測者の存在によって変化を被る。近代科学がこれほどまでに信頼され、説得力を持ったのは、「普遍性」「論理性」「客観性」という、自説を論証し相手を納得させるのに都合のいい性質を有するからに他ならない。このような原理を備えた、機械論的で力学的に選択され、整えられた理論によって「現実」は捉えられるのだろうか。

近代科学は何を軽視し無視しているのか。

1. 「普遍性」は有機的なまとまりを持った宇宙、他にない固有の場所としてのコスモス、生命体が個体や集合として生きる様々な固有の場所「コスモロジー」（固有な世界）という原理を重視しない。

2. 「論理性」は単線的因果関係を説く
のには適しているが、自然現象では
単線的因果関係は限られた場合しか
成立しない。「現実」はいろいろな側
面を備えており、環境との相互関係
が複雑な、生命体や人間の事象では
その傾向が強まる。サイン（記号）は
一義的であるのに対しシンボル（象
徴）は多義的なので、「論理性」が排除
したのは、事物の多義性「シンボリ
ズム」（象徴表現）である。
3. 「客観性」は、主観と客観、主体と客
体（対象）の分離・断絶を前提とす
る。客観や対象は、主観や主体の働
きを受け被る受動的なものである。
人間の営みとしては、ある場所や時
間の中で、自分の身体を他人の視線
にさらして行う「パフォーマンス」
（身体性のある行為）を通した対象と
の交流の中で事象を捉える。

（pp4-11）

知としての「機械論」が成功を納めたの
は、事象の自然で必然的な因果関係を環境
との複雑な相互関係の網の中から取り出し
たからで、このような捨象や抽象が、我々の
実際の行動に役だつからである。そのよう
な近代科学の「機械論」的方法が、結果とし
て人間が実際的な行為をとるときのもの
の見方と一致し、次第に近代社会での人間の
「常識（コモン・センス）」を形作った。近代
科学から、人々が自己を解放できない別
の理由は、制度化された科学の外部へ出る
ことを恐れる研究者たちの関心が既成の方
法の推進と部分的改良へ向くからである。

（pp14-23）

フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と

超越論的現象学』の中で、「学問の危機は何
よりも学問が『生』への意義を失い、単なる
『事実についての学』に還元する実証主義
的な傾向のうちに見られる。近代人の世界
観は専ら実証科学によって規定され、また
実証科学がもたらす繁栄によって幻惑され
た。それを徹底することは、真の人間性にと
って決定的な意味を持つ問題（生）から目を
そらすことを意味する」と述べている。物理
学的な客観主義の出発点は、数学が物質の
世界をその空間的・時間的な形態を理念化
し、理念的な客観性を創造したガリレイの
「自然の数学化」である。数学は経験的・直
感的な多様な形態を含む空間と時間という
生活世界の、漠然とした一般的形式から客
観的な世界を作り出した。また測定術と結
びついて、事物の空間的認識という帰納的
な予見をした。

フッサールは、近代科学をガリレイに代
表させ以下のように性格づけた。

1. 自然の数学化が、物質世界の理
念的客観化と測定術を結びつけ
帰納的予見を可能にした。
2. 直接には数学化し得ない感性的
性質にも、数学的対応物を想定
し因果性系列の地に存在すると
いう仮説を立てることにより取
り組んだ。
3. 数学の技術化とそれに基づく事
物の「意味の空洞化」は、数学
の自己適用による。
4. ガリレイは、数学的に理念化さ
れた自然の発見者であると同
時に、生活世界の隠蔽者とな
った。
5. ガリレイは、あらゆる精神的な
ものを捨象することで物質的な

事物だけが残し、完結した物質界としての一義的な自然が得られるとした。

デカルトが数学的合理主義の考え方によって哲学を〈普通数学〉として構想し、新しい合理主義と二元論の基礎付けを目指しながら、その合理主義を根底から突き崩す思想、超越論的な主観主義による懐疑「デカルト的判断停止」を想定したことから、フッサール自身は「超越論的現象学」を打ち立てた。そこにおいて、客観的科学が見ようとしなかった「生活世界」、「偏見（ドクサ）」として蔑視されることが多かった領域を、フッサールは以下のように捉えようとし、価値転換を行った。

1. 客観的・論理的なものではないが究極的な基礎付けをなすもの
2. 主観的なものの固有な存在様式をなすもの
3. 根源的明証性の領域
4. 科学の世界を基礎づけ、その独自の普遍性において科学を包括するもの
5. われわれの実践と密接に結びつき、その基盤および地平をなすもの

ポランニーは、化学者としての経験に基づいて近代科学の普遍性・論理性・客観性という神話を打ち砕き、科学の対象からの切断を退けるため「暗黙知」を自然科学研究のうちで見出した。それは、以下のような特徴を持つ。

1. 我々は自分たちが言明できることよりも多くのことを知り得る。
2. このような知識は、我々の個人的な裏付けを持っている。

3. 我々の認識の枠組みの実在性と性格は、焦点的にも捉えられず、我々の行動のうちにただ順次的に表れる。

例えばピアノの習得や医学的診断において、個別的な知識の習得は無論必要であるが、それだけでは有効に演奏や診療は行えない。それらの個別的な知識はひとつの全体として統合され、「諸要因の細目」「統合化された全体」「それらを結びつける個人」によって初めて理解できる。人が諸要因から全体へと注意を向け、その両者を結びつけるように働き、諸要因を知るのが「副次的意識」で、全体を知るのが「焦点的意識」である。今日の「生命現象」の重視を、「生命の偶像支配」と指摘した I.イリッチは、「生命あるいは命は、もともとは福音書中にあるキリスト教的概念で、今日エコロジーなどで言われる個々の命や人間生命は、19世紀初頭にラマルクが提唱した生物学・進化論とともに現れたものである。そこに現れた実体的な生命という概念は、人格的な個人という正当な概念を無効にする恐れがある」としている。いたずらに生物学的レベルで生命を実体化すると、単なる所有権の対象としての財産のようなものになり、経済的な行為や管理の対象となる恐れがある。アメリカの「生命倫理」の議論に見られるように、実用主義や功利主義的な傾向が強い、世俗化による人的資源への墮落が問題になる。(pp28-36,37-44)

ハイデガーは、「技術は単に応用自然科学にとどまらず、生態系の一部そのものとの相互作用のうちで成り立つものとして捉えられるべきものだ」と指摘する。技

術は、科学が明らかにした自然の潜在的な力を道具やその延長にある機械を媒介にして、開発、変形、貯蔵、分配する働きを持っている。

科学と機械という生命原理から遠く隔たった構築物に媒介されていると、それらを含む技術を「生命的世界＝生活世界」にフィードバックさせることが難しくなり、その事実思い至ることさえ困難になる。これらの技術的所産の反生命的な帰結は、かつては核爆弾、細菌兵器、化学兵器などの兵器について、今日では遺伝子操作やフロンガスや酸性雨などのもっと広い範囲の技術的な所産にもいわれるようになった。技術が何か特別なものと考えられていたのは、「生態系＝生活世界」という拘束条件が無視され、制作活動とその目的が乖離していると思われていたからである。(pp75-76)

ニーチェによれば、演劇の本来の特質は、人間と世界を凝縮して重層的に捉え描き出すこと、等身大の日常的な人間ではなく、可能的な人間を表現することによって、人間の隠れた本質を描き出すことにある。ここにおいて大きな意味を持つのは対話ではなく、「コロス(舞唱)」である。コロスは何よりも民衆の無意識を現わし宗教的である。ディオニソスの祭りでのサテュロス(豊穡と欲情の化身)のコロスがその典型で、人間の最も気高く強い情動の表現であり、人々を世俗的な国家や社会の生活から宇宙的な自然に引き戻す力がある。(pp115-117)

「普遍性」「論理性」「客観性」という機械論が持つ特性は、どのひとつをとってみても科学の知にとって強力な論拠にな

るが、これら三つは密接に結びついて働くことで論拠として一層強力になる。たとえば、客観主義によってとらえられたあるメカニズムは、普遍主義によって一層その自立性が高められるとともに適用範囲が広まり、さらに論理主義が結びつくことによって、説得力を増すだけでなく、技術的再現が可能になる。しかし現実や自然から人間は手厳しいしっぺがえしをされるようになった。(pp130-131)

「説明と同意」という問題の基礎となるのは、人間同士の思いやりであり、人格的な主体同士の関係である。この関係は、同等な権利主体同士の単なる法的な関係を超えている。人格的な主体同士の関係であることによって、そこに誠実さと信頼があることになる。つまり医療行為を巡る人と人に、契約関係であるよりはむしろ協力してより良き医療行為を行うための人と人とのパートナーとしての関係である。十分な説明を受けてする自由な同意には、単なる法的な権利・義務関係を超えた、そのような関係を具体的に表現し確認するものでなければならない。(pp202-203)

「科学と現実」に関する問題の総括を試みる。近代科学が軽視した「現実」は、「生命現象」そのものと「対象との関係の相互性」であり、近代科学の「普遍性」「論理性」「客観性」は、それぞれ「固有の世界」「事物の多様性」「身体性のある行為」を併せ持つ人間の「生活世界」を排除してしまった。そして「トリニティ実験」から広島と長崎への原爆投下、さらに「黒い雨訴訟」に至る近代史の中には、「都合の悪い部分を隠した普遍性」や、「柔軟に修正がで

い論理性」、「ある立場の人にしか理解・承服できない客観性」をみることができる。

現実や現場（臨床）より「高尚なもの」と誤解されている学問や思想の「立ち遅れ」は、個人の尊厳や地域社会崩壊の危機をもたらし、次の世代が無条件に満喫して然るべき生活環境の破壊をもたらしている。この課題を解決するために必須なのは、過去や未来を含む自他への思いやりであり、人格を有する主体としての対象との関係の相互性である。援助行為を巡る人間同士の間には、定式化された契約関係より、一貫しているが、状況によっては主客が交代することも可能な合意に基づくパートナー・シップが求められる。

1 6 牧野雅彦：精読アレント『人間の条件』

「思考」は芸術作品の源泉だが、偉大な哲学には思考が変形も変容もされずにそのまま表現されている。それに対し、我々が知識を獲得したり貯蔵したりする「認識」の主要な表現が科学と考えることができる。認識は、ある仮説を検証できればひとまず終わりを迎える。思考は、終りもなければ、外から与えられた目的もなく、具体的な成果や答えをもたらすことは無い。だが思考もその結果を人から人へと渡していくためには、「事物」とそれを加工する「制作」が必要になる。こうした永続のための手がかりを残すこと、そこに人間の諸活動における制作の役割がある。最も優れた「工作人」である芸術家、詩人、歴史編纂者、記念碑建設者、作家がいなければ、それを目撃した者たちの驚愕や感慨を伝えることはできない。人々が行為し、語る物語だけでは、残り続けることはできないからである。芸術作品は、そこに込められた思考や「意味」によって永

続するのであって、作品の持つ「有用性」や「効用」によってではない。

（pp180-181,184-185）

「行為」の予測不能性は、始まりも目的とする終りもなく、行為の結果としての「物語」そのものから生じる。行為している今という瞬間が流れ去り、過去になってはじめて物語は成立する。行為の結果もたらされる物語の性格や内容がどのようなものであれ、その行為の意味が完全に明らかになるのは、それが終わり、行為の舞台から退いてはじめて分るものである。プラトンは「行為者は自らの行為の結果を制御できない」という「行為」の特質に疑念を持ち、出来事の舞台の背後に潜む物語の作者を想定した。これは、歴史が人間の行為が織りなす出来事の連鎖であるにも関わらず、人間はその作者ではないという難問を解こうとする試みである。キリスト教の「摂理」、アダム・スミスの「神の見えざる手」、ヘーゲルの「世界精神」もその延長線上にある。行為のこうした性格のために、人間関係は特有の脆弱性を持つ。人間関係の網の目の中で行われる行為は、ひとつひとつの行為が、さらに新たな「行為（action）」となって影響を拡げて行き、閉じられた円環の内に留まることはできない。プラトンは、過程としての性格を持つ「行為」に代えて、確固として持続するものを作り出す「制作」によってこれに対処しようとした。（pp190-181）

認識を通じて知識を獲得し蓄積していくのが科学であるが、認識は仮説が検証されればその過程を終える。思考と行為の結果としての「語り」は、それとは反対に終りもなければ、外から与えられた目的もなく、具体的な成果や答えをもたらさ

ない。思考もその産物を永続させ、人から人へと渡していくためには、事物とそれを加工する制作が必要である。行為の予測不能性は物語そのものから発生する。この行為の特性から、人間関係のネットワークの中で行われることは、理論化や説明が可能な、明瞭で力強い印象を与える科学とは相容れず、例えば語り部の活動が確かな現実や経験に基づくものであっても、「曖昧で主観的な」と表現されることが少なくない。これが「主観的で曖昧ではない」ことを認めたのが「黒い雨訴訟」の高裁判決であった。自らを省みれば明かであるが、「語り」は環境や相手によっては、良識的な範囲の妥協を必要とすることも忘れてはならない。

17 東畑開人：『普通の相談』

これまで、「学派的心理療法」で前提とされてきたのは、文脈を失い、真空の宇宙に浮かんだ「理念的面接室」である。S.フロイトの診察室が、20世紀初頭ウィーンのブルジョワ文化を文脈としていたように、全ての面接室はローカルな社会的環境に取り巻かれている。「〇〇療法入門」書などにもっとも欠けているのは、それぞれの心理療法が如何なる地域の、如何なる施設で、如何なるクライアントに対して提供された、あるいはされているものであるかという社会的条件である。ローカリティを廃した理念的面接室を前提とすることで、「学派的心理療法論」は普遍的なメソッドとして自己を提示し、心理学的な宇宙に議論を絞る。

(pp38-40)

(普通の相談では)臨床家が理解したことをきちんと説明するが、いわゆる解釈的な介入ではなく、説明は心理教育に近い。クライアントの心だけではなく、置かれている環境や周囲の人についても具体的な説明を

行う。それがクライアントの抱えている苦悩のメカニズムを明確にし、自己理解を促し、今後の見通しや、今必要なことについてのアドバイスを可能にする。重要なのは知的な説明であり、知識の提供であり、言葉をインストールし熟達することである。心理臨床家は感情や情動を重視する傾向にあるが、心がすぐには納得(受容)できないことでも、頭で理解しておくことには価値がある。それは、ままならない自己を認識することにもつながるし、言語的に問題が共有されたことそのものが治療関係を強固にしてくれる。普段の人間関係でなされるアドバイスには、ほぼ必ず自己開示が含まれており、経験談、臨床経験、人生経験はアドバイスを効果的に伝えるレトリックになり得る。精神分析的な心理療法では、そのような発言は「自己開示」として慎重に取り扱われているが、それなりの理由があり、「過剰にならず、局所的に」を心がける。大切なのは説明とアドバイスがセットになっていることで、アドバイス無き説明は、現在だけが与えられて未来が欠如しているから「放置」になるし、説明なきアドバイスは納得感が伴わないので無効である。平凡で誰でも思い付きそうなアドバイスが思ってもみななかったと受け止められ、生活の改善につながることもある。(pp54-55,56-58)

カントによれば、「世間知」とは「学校知」と対置した知のありようで、学校を出た後に世間を生きて行く上で学ばれる人間と社会についての知である。学校で「専門知」を勉強すると同時に、人生に挑み、生活を営んで行く中で、人間とは如何なる存在であるのか、社会とはどのような場所であるのかを少しずつ知って行く。どのようにすると

生きやすく、どのようにすると生きづらくなるのかを学ぶ、一般的には「常識」とか「良識」と呼ばれるような知の総体が「世間知」である。職場の同僚を怒らせてしまった時、「ちゃんと謝って、しばらく距離を置けばもとの関係に戻れるだろう」という判断は、その同僚を熟知し、これまでの経験の集積から得られた対人関係についての世間知から回答が導き出される。「世間知」には「人間とは如何なる存在か(フォークサイコロジー)」と、「社会とはどのような場所か(フォークソシオロジー)」という構成要素がある。フォークサイコロジーの重要な機能は、自分や他者の逸脱的な行動を、「あれは～だったから」と物語化することである。その物語を理解したら適切な介入を行うことが大切だ。フォークソシオロジーは、私たちの身の回りにある具体的でローカルな環境について、「～ならこう立振る舞うのが良い」というアドバイスになる、「先輩の知」である。先輩はそれぞれのローカルな環境に慣れ親しんでいる人のことで、その知を、身を以て蓄積している。その場所には如何なる社会的力動が働いているのか、それは私たちをいかに傷つけ、支えるのか。そこにはどのように適応して、適応できないのかなど。

体系的な理論であり、ユニバーサルに適用可能な知として精錬された「学派知」に対して、「現場知」は断片的でローカルな知の集積である。それぞれの臨床現場や職種には固有の作法や習慣があり、ひとまとまりになって小さな治療文化を形成する。「学派知」だけでは現場で働くことはできない。「現場知」を学ぶことで、同じ職場で働く人たちとの共通言語を使えるようになり、組織の一員として支援を担当することができ

るようになる。連携を可能にするのもこの「現場知」で、訓練期間中でも「学派知」が過度に重視されると弊害がある。「現場知」にはハードな面とソフトな面がある。ハードな面はその現場を巡る法律や制度、経営など社会制度と連動するので異なる職場でも同業では共通する点が少なくない。ソフトな現場知はよりローカルで心理的、経験的なもので人間的なものである。そのような現場知が活用されてトラブルが穏健に処理されて行く。それがどのように修復され、如何なる場合には後遺症を残すのかが分ってくる。これがインストールされると後輩の指導ができるようになってくる。

(pp98-102,121-125)

前項の中村の議論からも分かるように、確かに対人援助の臨床や研究に「科学性」を求めると、社会的条件・ローカリティを排した理念的面接室の中で援助を行うことも起こりうる。クライアントを取り巻く現実を考慮に入れず、普遍的であろうと意図しすぎた援助は有効ではない。すぐに腑に落ちる状況には至らなくとも、援助者とクライアントが、解決に必要な方策をその段階で可能な範囲、互いに理解し合おうとするのは良いことである。暴力的にならないよう配慮し、クライアント自身が「見て見ない振り」や、意図せず誤解したりしている心理状況、置かれている環境や周囲との関係性についても説明的に言及する必要がある。独善的な学派的思考や本質を違えた知識に還元して途方に暮れるくらいなら、少々垢抜けなくとも、日々の決まり事や手順の中で、クライアントと手を携えて解決の道を模索するのも悪くないような気がする。

【あとがき】

広島大会のテーマに、「対人援助の多様性と持続可能性」が掲げられたのは、岡崎正明・迫共両大会長はじめ実行委員の多くが「画一的で、その場限りの対人援助」に、少なからず問題意識を持たれていたからなのではないか。昨今は、対人援助職も例外なく所属組織や行政に対し定期的な「成果報告」を求められ、「根拠に基づいた援助を行ったか」「それは科学的な援助であったか」、さらに「援助は遅滞なく行われていたか」と問われる。現場スタッフやクライアントに対し、意識調査や満足度調査を行っている組織もあるが、実はそれも、「業務の質向上」と同時に「経済と時間の目標を効率的に達成させる」ことの意識化が目的であったりする。

前号・今号では、広島と長崎への原爆投下から、最近の「黒い雨訴訟」結審に至るまでの歴史を学び、「科学」にも不確実性や非合理性があり得ることを再確認した。さらに、フッサールらの言葉を通じ、中村が指摘したように、「科学」が科学であるために捨象してきた「生活世界」が、対人援助の分野で

はクライアントのみならず、援助者自身にとっていかに大切なものか痛感した。そのことを伝え続けるひとつの方法として、バタイユの「至高な感性」に基づく「語り」という行為がある。①「その時、雨はどこにどれくらいの時間と量、降ったか」を調べることも大事だが、②「誰が、いつ、どのような雨にどれくらい逢って、そのことでどう感じたか」が分かる語りも大切である。「一瞬にしてバケツをひっくり返したような雨に遭い、8月なのに身も凍る思いをした」という語りは、①においては不要な情報かも知れないが、②では語りの信憑性を高める。

多様で持続可能な対人援助には、裏付けになる科学性は勿論のこと、その科学性を基礎付け、包摂する、実際の経験や感性に基づく「語りを語る上での良識」が求められる。そして対人援助の効率も軽視できないが、その場合、功利主義者ジェレミー・ベンサムが述べたように、「全ての個人が一人として数えられ、如何なる個人も一人以上と数えない」ことが大前提になる。

【参考文献 2】

10. G.バタイユ著 酒井健訳：ヒロシマの人々の物語.景文館書店.2020.
11. 大江健三郎：ヒロシマ・ノート.岩波新書.2023.
12. 石川学:理性という狂気 G.バタイユから現代社会への倫理.慶應義塾大学教育研究センター選書.2020.
13. 三島由紀夫：小説家の休暇.新潮文庫.2020.
14. 上野千鶴子：生き延びるための思想.岩波書店.2013.
15. 中村雄二郎：臨床の知とは何か.岩波新書.2015
16. 牧野雅彦：精読アレント『人間の条件』.講談社選書メチエ.2023.
17. 東畑開人：ふつうの相談.金剛出版.2023.

【引用文献 2】

4. M.フーコー著 箱田徹訳：ミシェル・フーコー 権力の言いなりにならない生き方.講談

社現代新書.2022.

5. M.L.リトル：ウィニコットとの精神分析の記録.岩崎学術出版社.2010.
6. E.フッサール著 細谷恒夫・木田元訳：ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学.中公文庫.2011.
7. M.ポランニー著 高橋勇夫訳：暗黙知の次元.ちくま学芸文書.2015
8. M.ゲルヴェン著 長谷川生涯訳：ハイデッガー『存在と時間』註解.ちくま学芸文庫.2015.
9. A.クラインマン/江口重幸/皆藤章著 皆藤章編・監訳：ケアをすることの意味.誠心書房.2017.
10. K.L.ラジク/P.シンガー著 森村進/森村たまき訳：功利主義とは何か.岩波書店.2018.



miho Hatanaka,

前回まで 2 回にわたり、スクールカウンセリング担当校区の教職員に対するメンタルヘルス研修での話の前半部分を記した。子どもの自殺に関する内容である。

今回は後半の、大人のメンタルヘルスに関連した内容として Well-being ついて考えるために行ったワークの話。



【第 13 話 スクールカウンセラーのしごと；教職員研修の話 その 3】

それでは後半は、大人のメンタルヘルスについての内容に移ります。

今日は 2 つのワークを行って、その体験を通じて先生方それぞれに感じとっていた
だく部分に委ねようと思います。

ではまずちょっと、体を動かしてみましょうか ——

＊ 一つ目のワークは、私が認定講師として継続的にプラクティスを行っている MBSR（マインドフルネス・ストレス低減法）のプログラムを基にした椅子に座って行う yoga と短いメディテーションのワークであった。

続いて『“生きる” ことについて考えるワーク』と題した下記の内容を、ワークシートを用いて自身の死生観について考える時間をもった。さらに「子どもたちから死について問われたらどのように答えるか」を問うた。


今から3か月をどのように過ごしますか？


あなたは、ある特別な病気にかかって、
 医師から余命3か月と宣告されました。
 あなたはこれからどのように生きていきますか。

この病気は、
 死の直前まで元気に活動することができ、
 あなたが望めば誰とも会うことができ、
 お金は十分にあると仮定します。

どこへ行きたいですか？
 誰と会いたいですか？
 何をしたいですか？
 誰にどんなことを話しますか？
 最後の一日をどのように過ごしますか？
 最期の時は、誰がそばにいてほしいですか？
 どのような言葉を遺しますか？
 人々はあなたを
 どういう人だったと
 言うでしょうか？

＊ ワークを通して考えたことや気づきなど、自由にご記入ください。


子どもの問いに何と答えますか？


「先生、どうして人は
 死んではいけないのですか？」

お配りしているワークシートでは、2つのことを問いかけています。一つ目は「今から3か月をどのように過ごすか」ということについてです。シチュエーションとして、自分がある病気に罹り医師から余命3か月と宣告された、と。そのような想定で“これからの時間をどのように生きるか”を考えてみていただけますでしょうか。ただしこの病気は特殊な病気で“死の直前まで元気に活動することができる”ということ。また“望めば誰とも会うことができる”とします。例えば私であれば、BTSが好きなのですけれどもその「推しに会える！」というようなことですね。それから“お金は充分にある”と。ですからもうどんどん使っていただいて結構です。ワークシートの吹き出しには具体的な問いが書いてありますのでそれぞれについてお答えください。「どこへ行きたいか」、「誰と会いたい」、「何をしたいか」などです。それから二つ目。これはもしも先生が日頃接している子どもから「どうして人は死んではいけないのか？」と尋ねられた時にどのようにお答えになるかということです。少し考えてもらって、浮かんでくる言葉を書いていただけたらと思います。

ところでどうして私がこの問いをここに含めたかを少しお話します。今、私はこの場でカウンセラーの立場で話をしていますが、助産師でもあります。以前はお産にも携わり、この20年ほどは小・中学校を中心に多くの学校で性教育を行ってきました。性教育では出産や赤ちゃんの話もするのですが、やはり重要だと思うのは第二次性徴の話と妊娠に関する話です。子どもたちは学校の授業の中でも、例えば小学校4年生の時には第二次性徴について学んでいますし、5年生ではメダカと人の誕生について学びます。ですから言葉としては「受精卵」や「精子」「卵子」は知っているのです。でも月経や射精が自分の身に起こることとして正しくは理解できていないことや、「どうやって精子と卵子が一緒になるのか？」はわからない。精子は男の人の体の中にあるもので、卵子は女の人の体の中にある。「それがどうして一緒に？」、と。子どもたちは賢いですよね、肝心なところが抜けているじゃないか、と。当然の疑問だと思います。でもご承知の通り学校では性交については教えないことになっています。ですから私の授業では、子どもたちは胎児や妊婦についての疑問と同じレベルで性交について問ってきます。まあ他にも子どもたちは知りたいことが山ほどありますので、体に関するいろいろな質問が出てきて、中には「体の骨が全部なくなったらどうなる

のですか？」といったような質問もあるわけですが、とにかくそのようなやりとりを重ねるうちに、おもしろいことに必ずといっていいほど「生きるって何なのか？」「死ぬって何なのか？」、そういった問いが出てきます。「人は死んだらどうなるのか？」「自分は生きている価値があるのか？」「どうして人は死んではいけないのか？」。これはもう、哲学というのか、答えなどない、人類の永遠の、と言ってもよい問いですよ。それを「あなたはどう思うのか」「私は、こう思う」と。私もよくよく考えてその時なりの言葉で返していくのですけれども、ただこのやりとりをすることは、何か子どもたちに安堵を与えるようにも感じます。大人と子どもでも先生と生徒でもなく、ひとりの人対人としての対話。わからないことだらけだけれども、子どもが自分の体やいのちをタブー視することなく意識し、“生きる”とか“いのち”といったものを自分のこととして考えてよいことがわかるからではないかと思います。“あなたの問いにはそれほど価値がある”ということ、そして“そのようなあなたは大切な人なのだ”と、そんなメッセージを送る機会でもあると思うのです。今日はぜひ先生方にも考えてみていただけたらと思いました。よろしくお願いします。

* * * * *

さて、今日はたくさん話をしました。まとめにかえて1つ。子どもたちとの『一人5分間、個人面談』を先生方へのお薦めとして挙げたいと思います。市ではスクールカウンセラーの業務の一つとして、小学校5年生に対する全員面接を実施しており、私も春に全員と話をしました。一人あたりにすると5分から7分ほどなのですが、この時間で結構いろんな話ができるのです。もちろん前もって担任の先生から情報をいただき、私からもアンケートを取って準備はするのですが、この5分という時間。5分が難しければ一人3分でも。そうやって先生と子どもの一対一の時間を持つことを毎日一人ずつでも全員との間で続けていくようなことができれば良いなと思いました。現実にはなかなか難しい面もあるかもしれませんが、ただ、私たちカウンセラーは子どもたちが「困った時」に登場する役割です。そこに至るまでに、日ごろから身近な存在である先生との間に“自分のための時間”が設けられていて「困っていない時でもお話ししよう」「あなたと私でお話をしよう」という仕組みが出来ていれば、子どもの心は支えられ、安心できるのではないかと思います。自信のない子ども、生きづらさを抱えた子どもは自分のことを大切に思える気持ちが少ないと感じます。気軽に「ちょっとお話してみる」というライトタッチが重要です。子ども自身が「自分は大切にされているのだ」と感じられる機会になればと思いました。よろしければぜひ。

最後に。カウンセラーとして子どもたちと接していて、心と体の健康は繋がっていることを強く感じます。ごく基本的なことではありますが、先生方もご自身の栄養・睡眠・運動、この3つを大切に、生き生きとご活躍になれますように。これは子どもたちのためにも。心から願っております。今日はどうもありがとうございました。

<参考文献> 福島脩美：自己理解ワークブック.金子書房.2005

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第23回：第3章-その8-

「対人援助実践のリポートを企画した取り組みとそれの省察 —学会企画ワークショップという実践報告をふりかえって—」を 終えて

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

2020年、2021年の対人援助学会年次大会において、3つの企画ワークショップで日々の実践をリポート（再起動）すべく、自分たちの実践の核となる“想い”を、作品の紹介を通して紹介してきました。なんとなく過ぎ去っていく日々の実践をする中において、この作業は、再び魂を込めるために大切なものでした。

また、先生方、それぞれに歩まれてきた道は大きく違うものでしたが、熱い想いに感化され、励まされ、明日の実践への活力を得ることができたワークショップでした。

これまで紹介してきた本や映画を表にまとめたものが、以下のもの（次頁）になります。それぞれの作品の紹介は、対人援助学マガジン45号以降のバックナンバーをご覧ください。幸いです。

さて、これらのワークショップを経て、私の中で何が変わったのかをお伝えして、僭越ではありますが、今回の企画の総括とさせていただきます。

「自分の正義をしきりに力説する者すべてに、信頼をおくな！」は、20世紀の思想に大きな影響を与えたニーチェの言葉です。現代に生きる私たちは、個々人が自分固有の感覚や考えをもっていることを認めあっています。「みんなちがって、みんないい」という社会の中で、「私は、本当はこれが正しいと思うのだけれど…」と言うことはできても、「まあ人それぞれだから」と、なんとなく妥協してしまい、自分の理想を伝えることがしにくい世の中であるとも思います。絶対的な真理のない、誰もが意見を主張できる中で、それぞれの理想を押し付け合わずに協力していくことの難しさを、現場の実践では感じています。

そのような悩みの中で、このワークショップの話をいただきました。直接的に伝えることが難しいよう

な事柄でも、作品を通じて自分の想いを人に伝えることができるという体験をすることができました。職場においても、冗談やメタファーなど、何かしらの媒介を使いながら、バックグラウンドの異なった相手に自分の想いを伝えることが、以前より上手にできるようになったような気がします。

このような機会を与えてくださいました渡辺先生、小幡先生、長谷川先生、神山先生に感謝を申し上げます。

表 3つの企画ワークショップで紹介された文献および映画

プレゼンター	この1冊(2020)	さらなる一冊(2021)	この1本(2021)
小幡	行動分析家の倫理～責任ある実践へのガイドライン～(2015) 発達障害に関する10の倫理的課題(1998) 支援者が成長するための50の原則～あなたの心と力を築く物語～(2006)	療育とはなにか(1990) 自閉症の世界～多様性に満ちた内面の真実～(2017)	ペイフォワード～可能性の王国～(2000)
渡辺	真理の探究～仏教と宇宙物理学の対話～(2016) 科学するブッタ(2013) When 完全なタイミングを科学する(2018) 医療現場の行動経済学(2018) 心を整える(2014)	目に見える世界は幻想か？ 物理学の思考法(2017) できる研究者の論文生産術(2015)	グリーンブック(2018) キンキーブーツ(2005) 素晴らしきかな人生(2016)
長谷川		人生行動科学としての思春期学(2020) ダリとの再会(1982)	クレヨンしんちゃん嵐を呼ぶ モーレツ！ 大人帝国の逆襲(2001) 誰も知らない(2004)
神山		真のダイバーシティを目指して(2017) GIANT KILLING(2007～)	レナードの朝(1991)
二階堂	はじめての応用行動分析(2004) 自由への旅「マインドフルネス」実践講義(2016)	言語と行動の心理学 行動分析学を学ぶ(2020)	生きる(1952) プリズン・サークル(2020)

ーつづくー

公的扶助。なんのために、誰のために。

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

公的扶助の素晴らしさ

公的扶助ってご存知ですか？

我が国（日本）の社会保障制度の4つの柱の1つであり、社会保険、社会福祉、公衆衛生に並ぶ仕組み、それが公的扶助です。この制度は、貧困者や低所得者に対して、健康や生活を最終的に保障するように働いています。

おそらく、読者の皆様の大半は、「公的扶助？そんなことは当たり前に知っているよ」と、ご失笑なされることでしょう。でも大事なことなので、あえてもう少し、それについて記していきます。

公的扶助は、生活保護法に基づいて困窮者を支援します。具体的には、生活扶助（食費、被服費、光熱費等）、教育扶助（学用品費等）、住宅扶助（家賃、地代等）、医療扶助、介護扶助、出産扶助、生業扶助（生業費、技能習得費、就職支度費）、葬祭扶助の8項目のうち、必要な項目の必要な金額を合算して生活保護費（単給または併給）を支給するのです。

支給される金額は、扶助の種類だけで決まるわけではありません。生活保護によって保障される生活水準（生活保護基準）は、被保護者の年齢、世帯構成、居住地等によって異なるからです。なお、この基準は国が定めており、毎年、改定されています。

生活保護の手続きの流れは、事前の相談、保護の申請、保護費の支給となります。相談や申請の窓口は、住所地の福祉事務所です。福祉事務所を設置していない町村の場合、町村役場でも申請の手続きができます。市町村役場におけば、相談する・しないは別として、きっとたくさんの生活保護に関わる資料をゲットすることができるでしょう。

このような制度は、憲法第25条（生存権の保障）を具体化したもので、生活に困窮するすべての国民に対し、その困窮の程度に応じて必要な保護を行い、健康で文化的な最低限度の生活を保障するとともに、その自立を助長するために整備され、機能しているのです（資料1参照）。

資料 1

日本国憲法（昭和 21 年憲法）第 25 条

第 1 項 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。

第 2 項 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上 及び増進に努めなければならない。

このように公的扶助とは何かを振り返ってみますと、いろいろ気づくことがあります。例えば、公的扶助の「扶助」という言葉。よくよく考えると、扶助の「扶」も「助」も、「助ける」という意味なわけです。そうとなると、いわば、「助けまゝくる」という言葉になるわけです。戦争、戦闘、闘争などといった言葉と、真逆の意味といってもいいのかもしれませんが。そういえば、社会福祉の「福祉」は、「福」も「祉」も、「幸せ」を意味します。「扶助」にしろ、「福祉」にしろ、本当に素敵な意味があるなぁと感じるところです。

実際、さまざまな事由で生活がままならなくなっても、この公的扶助ないし生活保護制度によって支えられ、困窮事態を脱却できた方がきっと、数えきれないほどいらっしゃるのでしょう。病気、怪我、障害、失業、災害、事故、犯罪被害、盗難、家族離散、テロなど、いろいろな事由で、人は容易く困窮状態に陥ります。安易に述べるつもりはありませんが、そのような境遇に陥ったショック、絶望、悲しみ、苦しみを支えるための 1 つ手立てが、公的扶助であると思います。そう、これもまた、立派な援助の 1 つなのです。

諸外国をみますと、公的扶助制度のあり方は多様ようですが、いずれにせよ、趣旨として、意味として、機能として、非常に尊い制度であると感じています。

話は変わって

話は変わりますが、私はある時、この公的扶助が、一体誰のために、なんのために在るのかということを、深く考えさせられました。その時はじめて、公的扶助が、役に立たないのではないか、あるいは、人の助けにならないのではないか、と疑ったのでした。

以下はあくまで、私の体験談となります。つまり、単なる、些末な一事例のご紹介となります。

登場する人物を匿名化するため、すなわち、登場する人物が特定されないよう、少々、事実と反する表現が含まれていたり、あるいは、そもそも一部情報が省略されておりますことをご了承ください。また、私の感情、意見、思いは、あくまで当時の、そして、まったくの個人的な見解となります。私の勉強不足があることはもちろんですが、もしかしたら一部の描写に対して、指摘、批判、お叱り等をお受けするかもしれません。ただ、本稿の趣旨は、

「対人援助実践をリポートする」ことにありますから、あえて私の、自分の至らなさを赤裸々に告白させていただこうと思います。

自立がみえるというのに

私がまだ、ソーシャルワーカーとして未熟だった頃、たくさんの要援助者・被援助者（以下、クライアント）と出会いました。以前に述べた通り、私は、障害者福祉領域で活動しておりましたので、当然、クライアントは、いわゆる、身体障害、知的障害、精神障害、発達障害、難病等を抱える児童や大人の方々でした。

各種障害等をお持ちであっても、比較的軽度、または、十分にリハビリテーションや各種訓練をお受けになれば、自立が可能な方は決して少なくありません。ちょっとした工夫、ちょっとした勉強、ちょっとしたサポートを組み合わせ、それこそ自助努力を含めていろいろ計画して、実践していけば、それこそ、自立生活は目に見えてくるのです。

私も実際、そのようなケースをいくどか、目の当たりにしたことありました。「ああ、この方ならば、ここまでいける」、「このケースならば、援助者の手を必要としない生活まで届く」といった見通し、手応えをしっかりと感じ、また、連携する方々とそれを共有できたこともありました。しかし、時にはそれが空転することもあったのです。

それは、肝心の御本人に、あるいはそのご家族に、「自立したい」という意志がほとんどみられないケースでした。

公的扶助は権利

成人男性 A さん。その方には、就労する意欲が全くありませんでした。どんなに成績が芳しくなくても教育機関を修了すれば、のんびり悠々自適な生活を送る気でいました。

A さんには、精神疾患（いわゆる軽度）の診断がでていました。その診断を得て、A さんに、「嗚呼、自分は障害者なんだ。障害者として生きるんだ」という自覚が芽生えたそうです。

その一方、A にかかわる私達は、A さんは十分、就労できるレベルに達せられるという評価を得ていました。四肢および体幹は健全、言語に基づく意志疎通も当然良好であり、精神疾患の陽性・陰性症状もほとんどみられないので、周囲の理解を得られればなんら問題なく、就労・自活生活できると見込んでいたのです。また、A さんのご家族は医療関係者であり、経済状況もすこぶる恵まれていたので、一見、なんの問題もないケースと思われていたのです。

それがゆえに、A さんから、次のように言われたときには、ショックというか、違和感というか、ただ、言葉を失いました。

「ああ、自分は（今、通学している教育機関を修了すれば）、生活保護を受けて生活していくんで、大丈夫です。」

A さんのご両親は明らかに高所得者でした。そして、生活保護は原則として世帯単位とな

ります。よって、私達に、Aさんのケースにおいて生活保護という発想は、まったく生まれ
ていませんでした。でもAさんは、「世帯分離」という手続きによって、生活保護受給が可
能になると見込んでいたのです。すでに成人に達しているAさんが、教育機関修了となっ
て実家をでて単身生活に移行し、単身世帯として、生活保護を受給する・・・それは、理屈
として、不可能ではなかったのです。

私をはじめ、多くの関係者で、Aさんに対し、説明・説得のようなかかわりを展開しまし
たが、Aさんの意志は頑なでした。Aさんの強い意志は、次のような内容でした。

- 1 就労して、社会で生きていくことに、とても耐えられない。
- 2 家族と一緒に住み続けることに、とても耐えられない。
- 3 生活保護受給は、権利であるから、なんら問題ない。
- 4 生活保護受給をしながら、TVをみたり、ゲームをして、人生を謳歌したい。

「そんな発想は良くないよ」と、誰かが、Aさんに言いました。

「なにが悪いんですか？どこか間違えていますか？」、Aさんは答えました。

その後は、もう、平行線でした。私達とAさんの話は、常にどこかがずれたまま、進ん
でいくのでした。

公的扶助は誰のためか？

よくよく考えてみますと、Aさんの主張に対して「悪い」とも「間違えている」とも反論
することはできないと、私は気づきました。

無論、いわゆる倫理感や一般論に基づけば、やはり改めたほうが良いと主張できますが、
それでも、Aさんが考え抜いた価値や人生観に対して、誰が、何を根拠に、「悪い」とか、
「間違えている」と言えるのでしょうか？

Aさんに対し、やる気がない、だらしない、幼稚だ、未成熟だと、叱咤・批判する方も少
なくないでしょう。また、Aさんのような人に対して公的扶助は存在しているわけではな
いと、指摘する方も少なくないでしょう。いくらでも、Aさんの考え方や振る舞い、あるいは
Aさんのご家族に対して、文句をつけられるでしょう。

それでも、Aさんは、生活保護受給を希望して、受給して生きていこうと、一貫した考え
方を示しているのです。Aさんには精神疾患の診断がついており、その事実が、Aさんの考
え方を確かなものにしたのかもしれません。Aさんのご家族も（すでにいろいろなことを諦
めている様子で）、Aさんの好きなように生きなさいと言っています。実際にAさんが生活
保護を受給できるかどうかはわかりませんが、Aさんの考え方や振る舞いを、根本的に覆す
のは極めて難解なことでした。

もし、本当にAさんが生活保護受給となり、本当に「TVをみたり、ゲームをして」人生
を全うするのならば・・・。そんな想像をした時、私は生まれて初めて知る、ある感覚に襲
われるのでした。それまでに理解していた公的扶助の意義、趣旨、理念が変わる、という変
化でした。

一つづくー

島根の中山間地から Work as Life

第12回

「衣食足りず、礼節を忘れる」

野中 浩一

1. 「高齢者 926 万人」の支えがなくなる日

中国春秋時代の政治家、管仲^{かんちゆう}は「倉廩実^{そうりんみ}つれば則ち礼節を知り、衣食足れば則ち栄辱を知る」との言葉を遺している。日本では「衣食足りて礼節を知る」として知られた言葉である。

これまでの日本では、寒さをしのぐ手段をもち、飢えや渴きを満たす手段があり、およびそれらが後々も続くであろうという見通しがもてていた。2009 年以降、日本の人口が減少に転じてから 15 年が経った。図 1 のとおり、生産年齢人口が減っている一方で労働力人口は増えている。その理由は、女性と高齢者の労働参加である。つまり 70 歳前後の世代が多く勤労していることが、人口が減り続けている日本において暖かな生活と食料が保障される、大きな支えになっているのである。ちなみに 2021 年の労働力人口は 6,907 万人、うち 65 歳以上は 13.4%で 926 万人である。

同時に、今後これらの世代が労働市場や社会生活からリタイアする中で、今まで当たり前受益していたものが、この数年で急速に失われる可能性が考えられる。特に高齢就業者の割合が多い「農林業」、食や住に直結する「運送業」や「土木建築業」では既に影響が出始めている。さらに今後は、「運輸交通業」、「電気・ガス・熱供給・水道業」といった生活インフラにも今以上の影響が出ると懸念している。言うまでもなく、これらの分野以外にも、医療、福祉、教育、宿泊、製造など、どの分野も人が不足している。

一方で、ここ最近の日本の産業界を見るに、そうした人手不足の中だからこそ、業務の量や質を簡単には減らすことができない苦しさが充満するように思う。人が充足していた時代の流れを引き継ぐ中で、管理者・労働者ともに業務量や業務時間が過剰になりやすい状況があるのではないだろうか。できないこ

とが増える中でも無理せざるをえず、疲労とストレスが溜まり、仕事上のミスやトラブルや事故が発生しやすくなっているように感じている。

こうした人手不足に端を発した現代日本の課題が解消に向かわない理由は、戦後の日本が処理してきた課題と違うからであると考えられる。何が違うかと言えば、①中央による上意下達の法律や予算だけでは解決しない点、反対に、②近視眼的な制度や規制がさらなる混乱や歪みを生む点が違うのである。加えて歴史を顧みるに、困窮する順番は「地方」や「(人・もの・金・情報の) 資源が手薄なところ」からであり、③その対策をする側の中央の政治家や官僚はその多くが都市に居住しており、人・もの・金・情報の資源が比較的豊かであるため、地方困窮の危機感が(頭では分かっている)わが身に沁みにくいいため、これまでの政策の発想の延長線上でしか対策ができない点も課題へのアプローチを難しくしているのではないだろうか。(※1)。

コロナ禍のときにマスクや体温計が高騰し買いにくくなったケースとは違い、前述したような農林業や運送業、土木建築業や運輸交通業の影響は、短期間で改善されることはない。むしろ年月が経つほど深刻化するものが多いだろう。個人個人の危機感の蓄積に物価の高騰や大震災などが重なった時、風評による集団パニックや集団暴力を呼ぶ恐れもあると懸念している。

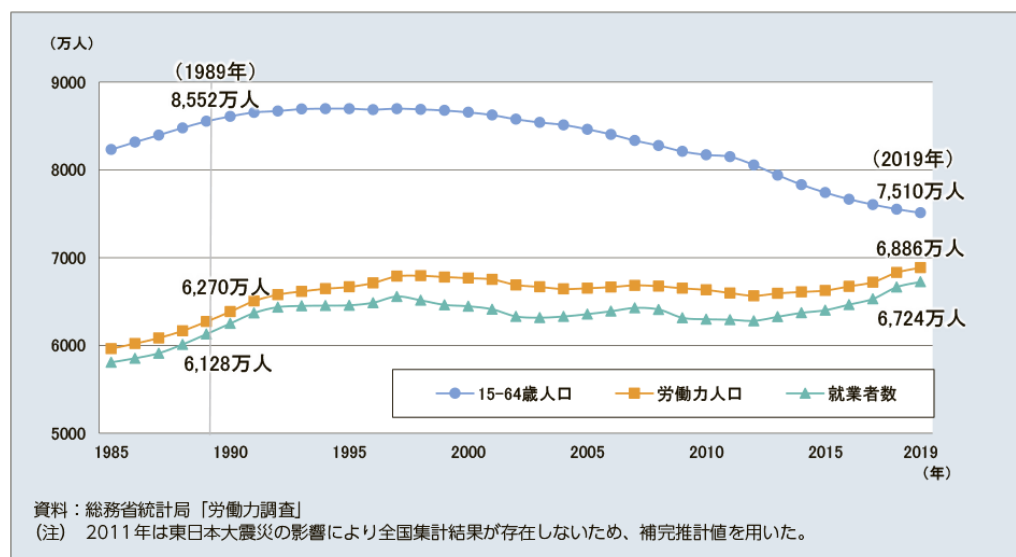


図1 労働力人口・就業者数の推移

(出典：厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-03-03.html>)

2. 労働の中核世代が「10 年で 600 万人」いなくなった国

世界では、産業革命が始まった 1750 年に人口が 7.3 億人であった。その後 1850 年に 12.6 億人、1950 年に 25 億人になり、1990 年には 53 億人、2024 年現在は 80 億人を超えている。

興味が湧き、中沢新一著『100 分 de 名著 野生の思考 レヴィ=ストロース』を読んだ。人類学は門外漢であるが、今の社会に繋がる道筋が示されていると感じられた。曰く、エントロピー（※2）の低い社会では「構造が循環的に作動することができる」が、対してエントロピーが増大していき秩序が解体してくると「構造がうまく機能しなくなる」とのことである。こうした社会の変化の原因の 1 つとして、レヴィ・ストロースは「人口増大」を挙げている。人口が増えすぎると構造に収めることが難しくなるというのである。地域社会や学校や家庭が解体している現代日本、無秩序で複雑な方向に向かっているグローバル化した世界、変えることも戻すこともできないのは、このあたりにも理由があるのかもしれない。

視点を日本に戻すと、言うまでもなく、世界に先駆けて日本は高齢化と人口減少が進行し続けている。表 1 は 1920 年以降の出生数と死亡数、それらを差し引いた自然増減数を表している。日本の総人口は 2008 年（平成 20 年）の 1 億 2808 万人がピークであり、2024 年（令和 6 年）2 月 1 日時点の概算値は 1 億 2399 万人である。また、労働の中核をなす 15～64 歳人口は 1995 年（平成 7 年）の 8,726 万人をピークに、2012 年（平成 24 年）10 月 1 日時点で 8,017 万人、2022 年（令和 4 年）10 月 1 日時点で 7,420 万人である。27 年間で 1,306 万人減、この 10 年間だけでも 597 万人減となっている。

この人口減少という現象をどう捉えるかは判断が分かれるところである。養老孟司は『日本の歪み』の中で、「少子高齢化は一種の自然現象だから、素直に受け止めたらいいいも悪いもないはず」「なんとかしようとするのがおかしいのではないか」との視点を提示している。また、この著書の冒頭で「どこかに正しさがあるという思い込みこそ、『近代日本社会の歪み』そのものだったのかもしれない」とも述べている。

表 1 出生数、死亡数、自然増減数

年	1920年	1930年	1940年	1950年	1960年	1970年	1980年
	大正9年	昭和5年	昭和15年	昭和25年	昭和35年	昭和45年	昭和55年
出生数	2,025,564	2,085,101	2,115,867	2,337,507	1,606,041	1,934,239	1,576,889
死亡数	1,422,096	1,170,867	1,186,595	904,876	706,599	712,962	722,801
自然増減数	603,468	914,234	929,272	1,432,631	899,442	1,221,277	854,088

年	1990年	2000年	2010年	2020年	2021年	2022年
	平成2年	平成12年	平成22年	令和2年	令和3年	令和4年
出生数	1,221,585	1,190,547	1,071,305	840,835	811,622	770,759
死亡数	820,305	961,653	1,197,014	1,372,755	1,439,856	1,569,050
自然増減数	401,280	228,894	-125,709	-531,920	-628,234	-798,291

(出典：e-Stat 人口統計調査 <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003411561>)

(出典：環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/>)

3. 解体

ここ最近、私の周りで「離婚」に関する話を聞くことが増えた。1件や2件ではない。また同時に、会社から「人が大勢辞めていく」話をいくつも聞いている。たまたまかもしれないが、そうでない気もしている。安易に結びつけるのは怖いようにも思うが、前述したような時代と社会の変化の中で個人への負荷が増すと、家庭や会社組織でもその負荷がぶつかり、はじけることがある。蓄積されたストレスがぶつかり、いさかいや混乱が増加しているように感じている。

国は予算(金)と法律(制度)でものごとを変えようと試みる。しかし家庭や小さな会社などの課題には、制度を重ねるほどに不要な負荷をもたらし、構造の解体を促してしまう難しさがある。家庭や地域、小さな会社などエントロピーが低い社会を活性化するうえで大事なことは、①自由度を高め、②当事者目線で不足を支援し、③(家庭であれ組織であれ)運営し続けられる見通しを担保することではないだろうか。17年間の経営者としての経験から、そのように感じている。

4. 不安と緊張の中で、相互理解は成立するか

人は、ときに非合理的な選択をしてしまうことで知られている。他者に^{おもね}阿^{おもね}るような意思決定をしたり、誤謬^{ごびょう}を犯してしまったり、自身を律することができなかつたり、経験的・感情的になって合理性を欠き、判断を誤ってしまったりすることがある。このような人間の情報処理については、直感型のシステムと熟慮型のシステムの二重過程理論で説明されることがある(※3)。こうして必ずしも合理的ではいられない

人間は、良し悪しに関わらず、他者や集団に同調したり、目先の利益や欲に牽引されたり、感情の揺れや葛藤の中で、自己や他者を抑圧することがある。

人間の中には「正しさ」があると幻想したくなるが、実際には安定を求めながらも「揺らぎ」の中で生きている。この人の中にある揺らぎの振幅は、社会（世界や自国や環世界や身近な他者）の安定・不安定と繋がっている。では、秩序が解体され混乱が生じている「非常時」に、人と人とは、特に対立する人や集団が「理解し合うこと」は可能だろうか。

平成の時代のように、多くの中流階級に人・もの・金・情報が行き届き、心身・経済ともに余裕がある場合、お互いが理解し合えないまでも、譲歩による妥結は難しいことではないだろう。多くの人が絶望や孤独や無力から守られていて、地域社会の日常に良い循環が巡っていることは大きな支えになり、人と人とは諍いを避けて融和を目指す方向に向きやすいと考えられる。

一方で、生活や仕事での先行き不安がある中、人手不足の影響から介護や育児のアウトソーシングが難しくなり、仕事も人が足りず繁忙し、家庭と仕事の両立が難しくなった場合を想像してみたい。強い疲労感、先行きが見えない不安感、不眠と動悸の中、人と人とは穏やかに会話することは難しいだろう。このように日常が非日常に変わり、その非日常が日常に置き換わったとき、人と人、もしくは国と国とは、対話もままならない中で、どう理解し合えるのだろうか。

ストレスと判断の関係について、ターリ・シャーロット（2019）は「ストレスを受けると、私たちは危険感知に固執するようになり、うまくいかない可能性に目を向ける。それによって極度に悲観的な見解が生まれ、結果として過度に保守的になってしまう」と述べている。一方で、恐怖心や危機感を和らげるような材料を得ることによって、「自分の心の状態を意識的に変えて、本能的なパターンを打開することができる」とも述べている。

こうした保守的かつ過敏な状況の中で、人が人を受け入れ、建設的な方向に向けて動くために必要なことは何だろうか。同じくターリ・シャーロットの著書から言葉を借りると、人は自分の先入観に反することは受け入れ難いことから、まず「意見の食い違いよりも共通点に注目すること」が大事であると言う。そして効果的に伝えるために「気持ちを共有すること」、加えて行動を導くうえで、肯定的なフィードバックなど「即座の快楽やポジティブな期待感があること」、さらに主体性に基づく選択肢があるなど、「自分が関与したという適度なコントロール感の認識があること」が必要となる。人には、重要だが不愉快な情報は避ける傾向があるため、「相手が知りたがっていることに即した、ポジティブな観点から伝えるこ

と」も大切なことである。以上のように、人は基本的に自分の信念を重視し、快樂へ向かって進み、苦痛から遠ざかろうとする。

5. ネガティブの川から、ポジティブの砂金を拾う

高度に専門化した日本の社会は、「木を見て森を見ず」の状態にある。複雑化した社会だからこそ、全体を俯瞰して見るのが大切であると感じている。また、目に見える希望や分かりやすい打開策など、ビッグポジティブに一喜一憂しないことが、道を踏み外さないためのコツであると考えている。臥薪嘗胆の構え、目の前を覆う無数のネガティブを選り分けながら、その濁流の中から 1 粒の砂金（小さなポジティブの種）を見つける感覚が、今後の四半世紀を見据えた場合に大切ではないかと想像している。

また、人口減少下で起こりうる非常時を支えるうえで、集団の力、特に地域や家族など、身近な社会が機能することが、言わずもがな必要であると考えている。今後 20 年、人口減少が深まるほどに発生するだろう課題と、それに付随して発生する「絶望感、孤独感、無力感」に対して、そこに生きる人と人とがどのように集い、「明日への希望と、寄り添い合う関係と、今できることがある実感」がもてる集団を創造していけるかが、心理と教育に携わる私の関心である。私も含めた日本人の多くが、「衣食足りず、礼節を忘れる」ということにならないように。

今回の文章では、かなり大風呂敷の空理空論を広げたように思う。今回を経て次回以降は、タイトルのとおり、島根の田舎、私にとって身近な地域を舞台として論を展開する新シリーズを開始し、地域の人や家族の変化に焦点を当てていく予定である。そうした目に見えて触れることができる身近な世界を通じて、個人の手には負えない大きな変化に対して、1 人 1 人のウェルビーイングに向けた、小さく着実な「今ここ」の取り組みを発信していきたい。

注釈

※1 この点は、失礼な決めつけであるかもしれない。ヒューリスティックな危機感に基づく庶民感覚と、分析的な思考でものごとの対処をする（庶民感覚への理解が疎かになった）俗にいう上級国民感覚と、その乖離が大きくなり、意図せず対立が生じることを危惧している。

※2 エントロピー：本文においては、人間社会における乱雑さや不確かさの意。

※3 二重過程理論には批判もあり、議論の最中である。

引用・参考文献

- 金子充（2014）『二重過程理論』日本マーケティングジャーナル Vol.33 No.3 pp163-175
- 中沢新一著（2016）『100 分 de 名著 野生の思考 レヴィ＝ストロース』NHK 出版
- 高橋昌一郎（2012）『感性の限界 不合理性・不自由性・不条理性』講談社
- ターリ・シャーロット著 上原直子訳（2019）『事実なぜ人の意見を変えられないのか』白揚社
- 養老孟子 茂木健一郎 東浩紀（2023）『日本の歪み』講談社
- 第一生命経済研レポート 2020.10 (https://www.dlri.co.jp/pdf/dlri/04-20/2010_b.pdf)

かぞくのはなし きむら あきこ

第8話 子育てひとくぎり

この春、私の子育ては、ひとくぎりを迎える。28歳、25歳、22歳の三人の子ども達を育ててきた。末っ子が、大学を卒業し、社会人の仲間入りをする。

末っ子は、高校3年生の12月に大学の進学が決まっていた。そして、翌1月には自宅から離れ、長女と一緒に生活を始めた。ちょうど、コロナ感染症が始まった時期で、高校の卒業式も、大学の入学式も参加できずに時間は流れた。最初の2年は、ほぼオンライン授業。3年目によりやうく登校授業が主になった。4年になった6月には就職が内定していた。ほとんど、親に心配をさせない末っ子だった。つかず離れずの生活をしつつ（とは言え、車で10分、距離にして6キロ程度）、私が寂しくなると、誘っては一緒にご飯を食べたりしていた。これからもそれが続くと思いきや、末っ子の赴任先は地方に決まった。転居の準備をしつつ、う・・・む、寂しい。

一番目の子は、高校卒業して大学に進学したものの、前期をもって「自分の道ではない。」と大学を辞めて働きだした。二番目の子は、高校卒業後には、留学をしたいと言ったが、私の資力が足らずに、資金を貯めるために卒業後の留学を保留にした。そのうちに、目指していた語学力は留学をせずとも身につけ、結局留学をせずに就職を果たした。そして、末っ子は、様々な条件をうまく使って大学へ進学した。末っ子自身の努力と、そして上の二人の歩みもあってこそその大学生活成就だったのではないかと思っている。個人の努力だけではない巡りあわせの持つ運もあっただろう。

28年前、初めて子どもが生まれた時、「いつかは巣立っていくのだから、子どもの人生と自分の人生を混同しないように・・・」などと意識をもって子育てをスタートしたのは、今でもはっきりと覚えている。無我夢中の子育ては、肩に力が入っていたし、今振り返ると、世間一般よりは、厳しい価値観で子ど

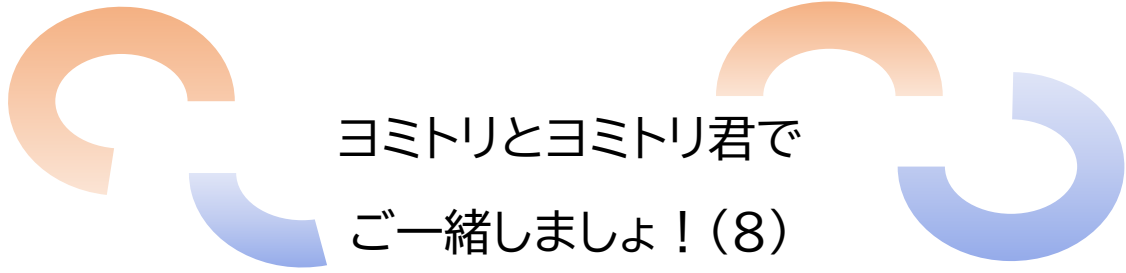
もを育てたと思う。それは、子ども達からも思い出として語られる。内容によっては、本当に申し訳ないほど、厳しくしてしまったと感じている。そんな未熟な親であった私に、最大の寛容さをもった三人の子ども達は、優しく育った。

子育て時期には、自分が自由に使える時間やお金もなかった。今は、少々時間や楽しむ程度の経済的な余裕もある。けれども、それらを一人で使いこなす要領が私には足りない。考えてみると、時間やお金は、誰かのために使う方が自分の満足になるのかもしれない。それも、あまり健全とは言えないのか？ふと、「空の巣症候群というやつなのか？」と自覚した。いや、そんなことを言ったら、子ども達に心配をかけてしまうだろう。これからは、それぞれが、大人として、自分を大切に、楽しみながら人生を歩んでいきたい。子育ての時期は生きていくことに必死だった。子ども達には、働く背中しか見せてこなかったような気がする。楽しく、自分のご機嫌を取りながら、のほほんと生きる姿が私には足りない。これからは、楽しくのほほんと、お気楽に軽やかに生きていく姿を子ども達には見せていきたい。

未婚率の上昇や、合計特殊出生率の低下が言われて久しい。結婚や子どもを持つことへの価値観の変化も否めない。多様な生き方が尊重されて良いのだから、一概に結婚や出産についての価値を語ろうとは思わない。ただ、私自身の人生においては、結婚も出産も、そしてできれば避けたかった離婚も含めて、自分の生きてきた歩みに悔いはないし、どの経験も良かったと思える今がある。だから、これからの人生を歩む子ども達にも、自分が良いと思える人生を歩んで欲しいと思っている。例え、結婚しなくても、子どもを持たなくても、又は、その逆に、結婚をすることも、子どもを持つことも、選んだ人生を謳歌して欲しいと思っている。誰のためでもない自分の人生を大切に楽しむことが、あなたの周りの人を幸せにしているのだよ・・・と、子ども達と、私自身に言ってあげよう。

ここからが、人生の第二ラウンド開始！

おわり



ヨミトリとヨミトリ君で 一緒にしましょ！（８）

高木久美子

意識があるのに、わかっているのに、言葉を発しているのにそれが伝わらないことについて、どう向き合い、取り組んでいくかということは、人の尊厳に関わる大切なことです。技術と技能を心で繋ぎ、障害のある方のコミュニケーション支援・レクリエーションの楽しい機会の提供を目指して非営利で活動しています。活動を通して学んだこと、感じたことなどを書いていきます。

「ヨミトリ君を愛しいと感じます」

対人援助学マガジン前号の投稿締め切り日だった 2023 年 11 月 25 日から 3 か月。対人援助学会年次大会@広島 of 興奮冷めやらぬ中、指筆談ヨミトリとヨミトリ君にとってこの 3 か月はまさに激動の日々でした。実は 2021 年 11 月にヨミトリ君 1 号が試作機として誕生してから高木にとってはずっと激動状態のような気もしますが、ここのところその激動度が加速している感じです。もちろん嬉しい悲鳴です。いつもの「ヨミトリとヨミトリ君で一緒にしましょ！」では各 3 か月の間の出来事からピックアップしてそれらの出来事から学んだこと、感じたことを書いているのですが、今号は趣向を変えて、日誌風に細かい出来事を含めて赤裸々に！ご紹介してみたいと思います。表記のスタイルは対人援助学マガジン編集長の団士郎先生の連載ご投稿「晩年D・A・N通信」を真似してしまいましたーm(_)_m。

■ 2023 年 11 月●日

12 月の東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」(以下ひまわり)主催の講演会の準備が進行中。会場参加に加え、Zoom 配信が決まる。ヨミトリ君開発者の岡田さんから対談コーナー登壇用スーツ調達完了の報が届く。

■ 2023 年 11 月●日

遷延性意識障害となられた方のご家族からヨミトリ君についてのお問合せ。意思疎通の方法をいろいろ検索されていてヨミトリ君を見つけられたとのこと。遷延性意識障害者の関連団体の会員さんでなく、ダイレクトでお問合せをいただくことが増えてきた。

■ 2023 年 11 月●日

ヨミトリ君 4 号のBluetoothマウス化計画が想定以上に順調で嬉しい驚き。完成すれば iOS でもAndroidでも特別なアクセシビリティ設定なく自由自在に操作可能！（の予定）。

■ 2023 年 11 月 ● 日

ひまわり講演会講師の國學院大學教授 柴田保之先生との講演会打ち合わせZoomミーティング。ヨミトリ君 3 号で書字のデモも加えることに！打ち合わせだけでも楽しくて、当日成功の予感しかない。

■ 2023 年 11 月 ● 日

ヨミトリ君エントリー中のヒーローズリーグの審査期間中。何かと入賞に縁のないヨミトリ君(;;)。今回こそ！

■ 2023 年 11 月 ● 日

X(旧 Twitter)(@goisshoshimasho)に投稿。「指筆談について多角的なアプローチでデバイス化またその研究が進んでいることをとても嬉しく思います。自分の目がその動きや言葉の表出を捉えないからといって、重度障害の方々が皆話せない、わからないと決めてしまうことの無邪気さから脱すると、意思疎通の深く豊かな世界への扉が開きます！」

■ 2023 年 11 月 ● 日

ひまわり講演会配布資料原稿データ完成。オンライン印刷発注。手軽に印刷ができる時代で助かるなー。岡田さんからヨミトリ君 4 号機のマウス化計画完了の報。それにしても、システムエンジニア、早い…。

■ 2023 年 12 月 ● 日

愛知県大府市のボランティアネットワーク「コラビア」の交流会に出展参加。市や福祉協議会の職員さん、地域のプロボノのスタッフさん、参加ボランティア団体の皆さん、そして一般入場者の方々がたくさんヨミトリ君の説明を聞いてくださって、実機の操作体験をしてくださいました。嬉しかった。なんと展示部門の審査で優秀賞受賞のオマケ付き！ついにヨミトリ君で悲願の初受賞体験(;;)。

■ 2023 年 12 月 ● 日

10 月のひまわり三重交流会で司会とお話を担当して下さった遷延性意識障害の Y さん。ひまわり講演会でプログラム後半の「遷延性意識障害当事者の方 3 名によるヨミトリ君操作コーナー」の出演に加え、高木と一緒に再び司会のタッグを組むことに！私「Y さん、三重交流会に続いて講演会でも弾けようね(≧▽≦)」。Y さん「高木さん、今度は真面目にやりましょう」。

■ 2023 年 12 月 ● 日

いよいよ明日はひまわり講演会。新潟の M さんがご両親と前泊で名古屋に来てくださる。昼食の場所にちょっと悩んでいたけど、最近激混みの名古屋駅は早めに離れて、名古屋駅と

宿泊ホテル最寄り駅をつなぐ地下鉄の途中駅にある脳卒中障害者のいきがいづくり NPO 法人ドリームのカフェを思いつきご案内。ドリームは段差がなくMさんの車いすもスムーズに入店できた。高木仲間の職員さん、当事者スタッフさんのご好意でテーブルを付けて広くスペースを用意してくれてあったので、Mさんの食事のケアもそこでゆっくりやっていただけた。が、昼食後の講演会リハーサルはまさかの難航…。MさんもYさん同様講演会ヨミトリ君操作デモの重要プレゼンターの一人。10月のヨミトリ君長野合宿以来2か月ぶりの再会だけどMさんのヨミトリ君操作技能はすごいので、皆本番の心配は全然していなかったけど、それでもヨミトリ君4号での書字は初めてなので、なんとしても今日リハーサル兼練習をしておきたい！ところが、Mさんは少し4号を触っただけで、「きょうはもうよみとりくんやりたくない」と。ガビーン。啞然とすごろ親。「そこをなんとか」と必死に説得する。固まっている開発者岡田さん…。結局Mさんのやらない意志は固く、リハーサルは早々に終了し、ホテルへご案内となった。でも早めにホテルにチェックインできたので、たっぷり2時間、Mさんと怒涛のトーク再び！たくさんたくさんお話ししました。Mさん、明日頼むね。

■2023年12月●日

日本意識障害学会、全国遷延性意識障害者・家族の会助成、東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」主催、静岡県遷延性意識障害者家族会共催で、國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 柴田保之先生をお迎えし、2023年度講演会「誰もが言葉を持っている遷延性意識障害者の意思疎通の扉を開く～指筆談のデバイス化に見えた希望」開催。ひまわり行事史上最多のご参加をいただき、前半の柴田先生ご講演、後半の柴田先生とヨミトリ君開発者岡田浩さんの対談。そしてYさん、Mさん

Nさんの遷延性障害当事者3名によるヨミトリ君操作デモと、柴田先生の指筆談介助による3人の意見表明が行われ、最後に活発な質疑応答と、熱気と笑いと涙に包まれた最高のひと時。柴田先生、岡田さん、そしてMさん、Yさん、Nさんありがとうございました！操作デモの素晴らしさだけでなく、ヨミトリ君についてのそれぞれのコメントもとても励まされるもので、嬉しかった。ご来場・オンラインご参加くださった皆様ありがとうございました。そしてお手伝いくださったボランティアの方々、お疲れ様でした。本当にありがとうございました！

■2023年12月●日

講演会のアンケート回答を見る。全体の高評価ありがたし。ものすごい量の自由記載欄コメント。今後のひまわりへ行事への参加ご希望、講演会ご参加の方からの早速のヨミトリ君体験お問合せ。講演会アーカイブ動画も公開直後からご視聴数多数。これまでのひまわりの意思疎通の取り組みへの評価と、今後につながる希望と期待がひしひしと。「歴史的な一日になりましたね。この一日の一員だったこと誇りです」とのボランティアスタッフさんのコメントに感涙。昨日のNさんは、髪を編み込んで、とてもかわいかったなー。リハーサルの時に言ってくれたコメントも素敵で「よみとりくんはとてもたのしいですが、さいきんはとてもいとおしいそんざいだともかんじています」と。すべてのことに感謝の言葉しかない。より一層がんばらないと！

■ 2023 年12月●日

講演会の時の当事者の方の言葉をふりかえって考えている。「右に動かそうとする時、手を持ち上げて右にずらしてとか理屈で考えるより、『右！』と身体に命じるといふか念じるような感じの方が自然に右に行けるんです。」想起とか想念はどこを伝わって運動に至るのか。脳血流はどの行程で流量を変えるのかとか。脳の筋肉も動いているはずだし。あれ、脳に筋肉ってあるのかな…。

■ 2023 年12月●日

ヨミトリ君をがんばってくれている遷延性意識障害者の皆さんがヨミトリ君 4 号のマウス操作を少しずつできるようになっているので、このところ支援先で岡田さんが「将来ヨミトリ君 2 台使って両手で操作できるようになればPCもタブレットも完全操作できます！」と見通しを言うてくださるのだけれど、さすがにそこは釘を刺した。だって同席して聞いているご家族が強烈に引いてるんだもん。空気読んでほしいシステムエンジニア。ご家族がプレッシャーを感じてしまったら先へ進むどころか、「とても手に負えません。もうけっこうです」になってしまう…。「エンジニアの宿命というか、開発というのは現状維持は許されないの…」との言葉に、たぶん 2021 年にヨミトリ君が始まって以来の議論。「上っていく階段に踊り場が必要なんです。ずっと寝たきりで意識あるかどうかもわからないと思われていた方たちなんですよ。ヨミトリ君で誰の介助も受けずにゲームができて、それって人によっては、たとえば、地下から何十年ぶりに地上に上がれて『わあ、お日様の光ってこんなにきれいだったんだな』と思うような感じなわけです。久しぶりのその景色を先ずはじっくり楽しみたいんです。きっと、で、まだ完璧にその景色を思い出してなぞっていたい時に、『次の階はもっときれいですよ。さあ上りましょう』と言われても、『ちょ、ちょっと待って。もう少しここにいたい』と。先ずはその景色を堪能したいその時間がどのぐらいか、次の階へ違う景色をみるために上がるタイミングはいつなのか、そこってすごく慎重に見極めたいんですよね。当事者やご家族の正直な思いを教えていただくにはプレッシャーは絶対禁物！」岡田さんの気持ちはよくわかります」と脳血流のAI解析による意思疎通支援研究の増尾さんがエンジニア側に加勢したので 2 対1になったけれども、ここは譲れない。ヨミトリ君プロジェクトコミュニケーター兼コーディネーターとして、必要なストップは随時かけさせていただく！

■ 2023 年12月●日

11 月にお問合せをいただいていた、遷延性意識障害になられた M さんのご家族とメールでのやり取りや Zoom での打ち合わせの後、ヨミトリ君体験で訪問。目を閉じておられる時間が長く、当初「目を閉じている＝覚醒していない」との周囲のご判断だったけれども、実際にはMさんは目を閉じておられてもヨミトリ君の操作を少しできた。「意識があるとは思っているけれどもそれをICT機器で確認したい」というご家族のご依頼だったので、初回は私は指筆談でほんの少しの時間しか参加しなかったけれども、Mさんはものすごくしっかり書いてしっかり言葉を伝えられたので、それなのにヨミトリ君操作のパフォーマンスがそれに見合わ

なかったことに違和感があった。指筆談できればヨミトリ君の操作ができるし、ヨミトリ君操作ができれば指筆談も同じようにできるはずなので(一定レベルの指筆談介助者であれば)。次回の作戦を練る。

■ 2023 年12月●日

Mさんのヨミトリ君ご支援の 2 回目。ヨミトリ君操作時のデータ解析の数値をご家族にお見せしたところ、Mさんはほとんど目を閉じていたけれども覚醒していてヨミトリ君を操作できていたことを確認、納得していただけた。よし。ヨミトリ君支援が指筆談ヨミトリによる技能とヨミトリ君の技術の両軸で行うことを旨としていることをあらためてお伝えし、前回の指筆談時の覚醒度に比べてヨミトリ君操作のパフォーマンスが出なかったことへの対処をするために、指筆談でMさんのヨミトリ君操作感をお聞きしなければいけないと説明。結果、指筆談もヨミトリ君もどちらもしっかり成果を出す事ができた。初回に通常お聞きする見え具合、聞こえ具合、痛みの有無に関する質問に対し、「はなしかけるこえがおおきすぎていやです」とはっきり。目を開けられない時間が多いので、より聴覚が鋭敏になれるのか、普段声の小ささを指摘される岡田さんの声すらも「おおきいです」と。これは、毎日の生活で都度、周囲の話しかける声が大き過ぎると感じておられるなら相当なストレスになっているはず。すぐにご家族と同席されていたケア従事者の方に伝える。ご家族も 2 回目はとても手応えを感じてくださった様子で、指筆談に関しても「Mの顔が満足感にあふれていたのがわかりました。良い時間でした」と言ってくださり、取り組みで気持ちが通じ合ってよかったなー。

■ 2023 年12月●日

ひまわり講演会のアーカイブ動画を観てのヨミトリ君体験のお問合せをいただく。Sさんのご家族から。メールでのやり取りとZoomでのミーティング。事前のご説明をお聞きすると、これまでの意識障害当事者の方の状態としてはもっとも重いと思われる。でもご家族の「お医者様からは状況として厳しい診断を受けたけれども、最近、なんとなくですが、わかっている時があるのではないかと感じる時があって」と。手も少しだけですけど動く時があるとのことで、本当にご家族の気づきに勝るものはないのですよねー。「ひまわりの外山代表が言われた『ヨミトリ君の成功率100%はマズイです』が、うちのSが記録更新になることを願っています」とご家族。年明けにお訪ねすることに。

■ 2023 年12月●日

神経難病のALS患者のYさんから、「病気の進行で最近文字板が指しにくくなってきた」とSOS。ご家庭の事情でしばらくヨミトリ君はお休みしていたけど、年明けから再開決定。一緒にいろいろ考えて工夫していきましょうね。

■ 2023 年12月●日

短い間隔で 2 回お伺いした M さんのヨミトリ君の詳しいデータ解析が終了の連絡。早速ご家族に送付。やはり 2 回目のパフォーマンスが素晴らしい。特にヨミトリ君 4 号での書字が

凄かったとのこと。やはり、ヨミトリ君と指筆談の両軸で、覚醒を大前提に意識障害当事者ご本人に丁寧にメカニズムを説明して、これからやっていただく操作について先ず理解と関心を持っていただくことが大切ということをお前回あらためて感じる。岡田さん詳しい解析お疲れ様でした。Mさんからはヨミトリ君の貸出しの可能性についてご質問があった。ヨミトリ君に期待していただけてありがたいけれども、Mさん、4号が軽く操作できて使いやすいと言われていたけど、お貸出しするにはもう少し検証が必要か。

■2023年12月●日

神経難病の進行で寝たきり・発話不能になられているTさんの対話支援に。Tさんはヨミトリ君も頑張っておられるけど、特に指筆談での対話を楽しみにしてくださっているので、はりきって出かける。来年2月のTさん外出支援が決まる。出かけて話したいご希望を長く言われていたので予定が決まってよかった。ヨミトリ君のご支援の増加と共に、当事者の方々と指筆談でお話しする機会が増えている。実践の積み重ねが確実に私の指筆談の技量を高めてくれている。結果読み取るスピードが上がっている。当事者の方が早く書けるのがいいと言ってくれる。同じ時間でお話しできる量が増え必然的に内容も深まる。そういえば最近指筆談を長くやっても全然疲れない。ただ書かれる言葉の重みはすごい。そこで自分がへたばっていてはだめだ。修養と鍛錬。覚悟を持て。これにて2023年の活動納め。ヨミトリ君の取り組みを共にがんばっている意思表示に困難をお持ちの皆さま、お疲れ様でした。ご支援・応援してくださっている皆様ありがとうございました。さて、ヨミトリ君、来年はどんな年になるかなー。楽しみ。

■2024年1月●日

神経難病の進行で寝たきり・発話不能になられているTさんの対話支援に。Tさんはヨミトリ君も頑張っておられるけど、特に指筆談での対話を楽しみにしてくださっているので、はりきって出かける。ちょうど小学生のお孫さんが遊びに来ていて、なんと指筆談の基本の腕のアシスト動作を体験してくれた！「一緒にやってみて」とお誘いしたら、にっこり笑って一緒に手を添えて。うれしかったー。なによりTさんが「とてもうれしい」と何度も書かれとても喜ばれた。心の優しい少年で、大好きなおじいちゃんの役に立ちたいという気持ちが溢れてる。私は密かに「小さな紳士」と呼んでいる。

■2023年12月●日

ヨミトリ君のご支援の増加と共に、当事者の方々と指筆談でお話しする機会が増えている。実践の積み重ねが確実に私の指筆談の技量を高めてくれている。結果読み取るスピードが上がっている。当事者の方が早く書けるのがいいと言ってくれる。同じ時間でお話しできる量が増え必然的に内容も深まる。そういえば最近指筆談を長くやっても全然疲れない。ただ書かれる言葉の重みはすごい。そこで自分がへたばっていてはだめだ。修養と鍛錬。覚悟を持て。これにて2023年の活動納め。ヨミトリ君の取り組みを共にがんばっている意思表示に困難をお持ちの皆さま、お疲れ様でした。ご支援・応援してくださっている皆様ありがと

うございました。さて、ヨミトリ君、来年はどんな年になるかなー。楽しみ

■ 2024年1月●日

ご新規のご依頼の S さんのヨミトリ君体験から新年が始まる。ヨミトリ君のお試しと、指筆談の習得にも強い意欲を持ってくださっている。まだ日常的に意思疎通の介助に入られている方がいないため、お話しができるか、まったくの未知数。ただ、ご家族の「確証はないですけどわかっているのではないかとときがあります」、このお言葉を皆で大切にキープしてトライを開始。指筆談。すごい覚醒度。ヨミトリ君は目視に至らない微小動作認識の面目躍如！とにかくご家族が覚醒度に驚愕、そして歓喜。医療・介護のケア従事者の方々を含め周囲で関わる方々に、自分を見てほしい、自分に話しかけてほしいという切なるメッセージ。個々の方のプライバシーを侵害しないよう留意しつつも、同様に遷延性意識障害の診断を受けながら実はいわゆるロククトインシンドローム(閉じ込め症候群)の状態であられる方々の事例をお話させていただく。けっして独りではないよとお伝えするために。お互いの痛みを思いを馳せることで、間接的でも繋がっているのだということ。そして、いつか実際にお会いできる機会を持てる可能性があることを。その時直接お話しできるようにヨミトリ君も頑張ります。2 回目の体験の日程を決め終了。

■ 2024年1月●日

解析していただいた S さんのデータをご送付。次回に向けての期待をひしひしと、嬉しく、感じる。

技術職のご家族がおられるのでヨミトリ君の製作への興味もお持ちいただき、プロジェクトとしては新たな展開。ありがたい。

■ 2024年1月●日

Windows OS 対応に加えて、ヨミトリ君の iOS への対応着手。遷延性意識障害ご家族の間でも iPad は根強い人気。でも大丈夫かな。システムの構築の仕方が全然違うみたいだけど…と、最近聞きかじりのエンジニアリング用語を多用したがるのでひんしゅくを買っているのを自覚している。

■ 2024年1月●日

ひまわり三重交流会、講演会で大活躍してくださった Y さんのヨミトリ君始め。講演会の労を称え、今年もがんばりましょうと誓い合う。「じぶんようのあいぱっどがほしいです。あとばいすおねがいします」と Y さん。岡田さん喜ぶ。開発の励みになるとのこと。プラス対話支援プログラムでとことん話したいと。ご指名いただきました。がんばる！

■ 2024年1月●日

ALS の Y さんを久しぶりに訪問。連絡くれていた通り、文字板を指すのが以前に比べて更に大変そうなお様子。しかし残存の指の力は、遷延性障害の方々よりは何倍、何十倍もあるの

で、Yさんがヨミトリ君 4 号を操作する時は相当感度を落とさないといけない。次回はまた以前使った高精度ジャイロのスイッチタイプでヨミトリ君を操作してレースゲームをやっていたらこう。

■2024年1月●日

ビッグニュース♪「Kariya Micro Maker Fair 2024」への出展決まる。錚々たる企業、有名高専、オリジナリティあふれるモノづくりの団体が集う祭典に参加できるのはものすごく楽しみ。障害福祉の分野の出展は少ないみたいだけど、交流や情報交換ができるといいな。はりきる！

■2024年1月●日

講演会で音楽アプリをヨミトリ君で操作して、音楽療法の先生と演奏コラボをしてくださった N さんのヨミトリ君始め。先生も毎回同席してくださり、まずは講演会の話で盛り上がり、その後 iPad でのヨミトリ君マウス操作をお試しいただく。初めての挑戦ですごく上手にできた！Nさんすごい！3 月は先生の教室の生徒さんが一同に会する発表会。今年の発表会はNさんはヨミトリ君で参加したいと早くから言ってくださっていて嬉しい限り。持ち時間が Max10 分とのことで、どんなステージングにするか、次回のヨミトリ君までに N さんに考えておいていただくことに。楽しみ。

■2024年1月●日

初めて指筆談の実践者の方からヨミトリ君についてのお問合せをいただく。指筆談の実践者の方にこそ支援にヨミトリ君を活用してほしいとずっと願っていたのでとても嬉しい。

■2024年1月●日

かねてご依頼のあったYさんの対話支援。ご自宅から車で 20 分ほどの農業公園に散策がてらおしゃべりに。普段はお母さんが指筆談でコミュニケーションを取っておられるけど、今日はお母さん抜きで話したいということで、Yさんはやる気満々だけど、公園まで車で送って来てくださったお母さんは気になって立ち去りがたく、普段はとっても優しいYさんに「おかあさん、はやくいってください」と促される始末。たくさんお話しして、気が付けば 2 時間余に時間が経過。いろいろな考えや思うことを話してくださって、Yさんが 2 人兄弟の姉と弟で、私と同じなので、私も珍しく弟のことを話して聞いてもらったり、共感できることがたくさんあったし勉強になった。楽しかった。Yさんからも「はなせてよかった。とてもたのしかったので、ぜひちかいうちにまたこのようなきかいをもちたいです。よろしくおねがいします」とリピートいただきました！

■2024年 2 月●日

同じ週末に、岡田さんヨミトリ君支援、私は指筆談での対話支援の分業。Tさんは久しぶりの；お出かけで、なにしろ冬の寒い日に近く場所だけど車いすで行くので風邪を引かないよう

に身支度がたいへんで、お支度をされている間に、「べつにでかけなくてもいいよ。たいへんだし」と消極ムードに。あわわ、それはだめなので、「最近になく良いお天気でお散歩日和ですよ。太陽に当たってビタミンDを吸収しましょう！」とお声掛けする。いざ外に出てみたら、本当に良いお天気で風もなくとてもおだやかな暖い日で、Tさんもだんだん乗ってきた。目的地はご自宅の近くにお住まいのご兄弟のところ。ご年配で骨折をされて間もないお兄さんが、兄嫁さんと立って待っていてくださってTさん、Tさんの奥様、ヘルパーさん、そして私の一同大感激。Tさんが「きてよかった。ひさしぶりにあえてうれしい。なつかしい。こどものときのことをおもいだす」とたくさんかいてくださって、お兄さんご夫婦がそれをしっかり温かく見てくださっていて、話しかけてくださって、良い機会に立ち会えてうれしかった。

■2024年1月●日

岡田さんから、単独支援大成功の報が。遷延性意識障害のEさんは、妹さんの指筆談のアシストを受けて、最初からとても上手にヨミトリ君を操作されていたとのこと。いろいろスイッチを試して来たけれどもなかなか合うのがなくて、でも自力での意思疎通を絶対あきらめないとEさんもご家族も強い意志でがんばって来られて、ヨミトリ君に出会えてよかったととても喜んでくださった由。私もEさんの「翼が生えたようです」とのメッセージを拝見し、感激だった。

■2024年2月●日

Eさんのご支援に行く直前に完成したヨミトリ君 4 号のバリエーションがすごいことになっている。4 号は精度がすごく高くいろいろなことができることがわかりみんながんばって挑戦していたけど、ものすごく高精度な分、軽く押せるけど操作技能が要求され、実は根を上げる寸前の奮闘状態だった当事者の人がちらほら多数…。機器としての動作も当初の想定より不安定になる時が見られたので、岡田さんが意地でがんばって、メカニズムとしては少しシンプルになったけど、その分操作性が格段にアップして、ガムテープで止めたままの状態を持ち込んだEさんのところで先ず大絶賛。熱望されそのまま置いて来て、続いてNさん、Yさんと、もうパフォーマンスがすごいことになった。どうしよう。

■2024年2月●日

Tさんにも 4 号シンプルバージョンをお試しいただく。これまで聞いたことのない絶賛の嵐！「すごくかるくうごかせる。とてもしげんにそうさできる。おもうとおりうごかせる。おかださん、よくここまでにされましたね」岡田さんもうれしそう。Tさんの奥様はあまりにすいすいとTさんが操作されるので驚いて言葉がない。でもTさんのお顔をじっと見ておられて、私たちには絶対わからないその小さい表情変化から、Tさんが集中して嬉しそうに操作されていることをしっかり感じ取っておられた。Tさん凄いけど、奥様凄すぎ。

3 月は皆さんどうなってしまうのか！！進展が本当に楽しみ。みんなでがんばりましょう！

以上、ヨミトリ君の激動ぶりはいかがだったでしょうか。これで？激動？
まだまだ修行が足りないですか？！

とにかくこれらの出来事を通して一番言いたいことは、「全身の麻痺で身体が動かせなかったり言葉を発することができない＝意識がない」ではないとお心に留めていただきたいということです。病気や事故でそういう遷延性意識障害と呼ばれる状態になった方々の中で、実はいわゆるロクトインシンドローム(閉じ込め症候群)の状態である方がどれだけたくさんおられるか。私はその書かれる言葉を読み取って対話をし、なんとしてもお伝えしていかなければいけない。コミュニケーターとして全身全霊で取り組みを続けます！

No Promises. Just Possibilities.

確約はないです。でも可能性を信じましょう！

あなたがわかっていること伝えたい。

情報を必要としている方、表出しているのにまだ伝わっていないあなたの大切な方に、

ヨミトリ君が届きますように

ご一緒しましょ！

ヨミトリ君HP

<http://www.aizyoushien.com/index.php/yomitol-kun-project/>

東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」

<http://site.wepage.com/himawari>

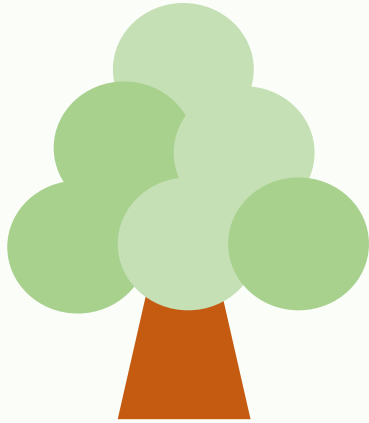
ひまわり講演会アーカイブ動画

<https://www.youtube.com/watch?v=0TWzZ0GX4qo>

<筆者プロフィール>

インドネシア語・英語通訳・翻訳を経て、介助付きコミュニケーション「ヨミトリ」による意思疎通支援をライフワークとする。コミュニケーション支援の任意団体「ご一緒しましょ」代表。脳卒中障害者のいきがづくり「NPO 法人ドリーム」理事。「東海地区遷延性意識障害者と家族の会「ひまわり」会員。第 52 回 NHK 障害福祉賞優秀賞。ヨミトリ君共同考案者。

ご一緒しましょHP <https://www.goisshoshimasho.com/>



こかげのにちじょう⑦

～過疎地の県立高校への進学～

鳴海 明敏

2月某日

中1の4月に入所し、約2年間学園で生活して、中3の4月に家庭引き取りで退所したりエさんから、高校受検に無事に合したとの電話。

両親と、姉、本児と双子（二卵性）で生まれた弟の5人家族。入所前は、母親に対して、蹴ったり、噛みついたり、興奮すると1～2時間も暴れていたという。入所してからは、距離を保ちながら、少しずつ交流をして、なんとかお互いに折り合えるようになり、中3の4月に家庭引き取りとなった。退所後、時々電話をくれていたが、近所に住む母方の祖母の家に逃げ込みながら、なんとか中学校にも通っていた様子。

高校受検が迫り、母親が見つめてきた高校は、他県の過疎地にある県立高校。過疎化で子どもの数が減少し、他県からも積極的に受け入れするようになったという高校。寮があって、個室で、月4万円。寮から学校までは歩いて通うということらしい。

せっかく親元に戻ったのにとも思うが、姉も、不登校で引きこもり、双子の弟も多少発達遅れがあるということだったので、独立心が旺盛で、都会の空気が嫌いな彼女のためには、いい選択だったのかもしれない。学園生活の中で、彼女は母親と一定の距離を置きながらいい関係を維持する、とすることを学んだということなのだろう。

2月某日

ゲームのことで親から注意されると暴れたり、通信制高校のスクーリングに通えないなどの理由で入所したマサオくん。スクーリングのために自宅に外泊（校舎が親元にあるので）させたところ、そのまま帰園を拒否したことから、しばらく措置停止となっていた。

その後、スクーリングに行くいかないで母親ともめて、母親が突き飛ばされたり、警察を呼んだりということがあって、結果的に彼は学園に戻って生活している。

学園での生活は、自分の部屋に居ることが多く、今のところ何も問題はない。通信制高校のスクーリングには行けていないが、課題を無事に提出したので進級は出来るとのこと。問題は、4月以降のスクーリングだなあ。（了）



#7 あらゆる年齢の可能性をひらく 現象学としての書道

生涯発達支援塾TANE 櫻井育子

はじめに

人間は、生まれたときから、どんどん寿命が短くなっていく。小学校のころに、「大人になるということは死ぬことに近づいているのだ」と気がつき、怖くなったことがある。まだ、そのころは「死」とは何か分らなかった。小学校4年生の2月、祖母が突然亡くなった。とても好きだった祖母の死は、わたしにとっては初めての「死」の体験であり、そこで祖母が教えてくれたことは本当に大きく、そして今でもわたしは支えられている。その6年後に祖父が亡くなる。そのとき祖父がいわゆる「認知症」の初期症状のような状態や、介護というものも少し体験した。これもまたわたしにとっては大きな学びだった。「歳をとる」ということ、発達、そして「すみあそび」が気づかせてくれたことをまとめたい。

歳をとるということへの価値観

そもそも「発達」という言葉は、生まれてから死ぬまでの人間の「変化」のことを指す。とはいえ、日本では「アンチエイジング」という言葉通り、歳をとることを好む人がまだ少ない。最近でこそ、白髪をそのままにする「グレーヘア」などが増えてきたように思えるが、相変わらず広告では、「いつまでも若い」「同じ年齢には見えない」「シワが消えた」(!?)などの過剰さである。これはジェンダーの問題も絡んでいるな、と思うのだが、特に女性にいたっては、「妙齢」(もはや使用禁止になりそう)などの言葉が示すように、「結婚適齢期の女性」という年齢制限、出産できる年齢制限など、何か見えない制限時間と戦わされている。こうしたことへの微妙な気遣い、あるいは無意識の差別、気にしていたらキリがない。そしてまた、自分自身はそういう価値観ではないと思っている方々も、「こういうふうに、世間は考えているんでしょ」という「他者の価値観への思い込み」も存在している。

できないことが増えるという思い込み

特別支援教育の現場にいたとき、「言葉が話せません」「指示が理解できません」「暴れてしまう」などという保護者からの相談をよく聞いていた。特別支援を学んできた人間であれば、そういった相談に対して、「そうですね、それは困りましたね」などとは間違っても言わない。もちろん、「ではそれをできるようにしましょう」などとは、絶対に言わない。ところが、そういうことが起きてしまうのがいわゆる「健常者バイアス」というものであり、保護者も先生も周囲の大人も、「なんとかできるようにして、困らないようにさせたい」などと言う。困っているのは本人ではなく、「指示が通らない」「言うことを聞いてくれない」「意味が伝わらない」と思っている周りの方であることが多い。それは、本人が「できない」ことに起因しているのではなく、

コソダテノシンリ (6)

中谷陽輔

連載第 6 回目です。前回の[第 5 回目](#)では、コソダテにおける大テーマ、「コントロール」について書いてみました。

続いての今回は、コソダテ支援における大テーマ(だと筆者が考える)、「質」と「量」について書いてみたいと思います。

コソダテ界隈の支援職の「質」と「量」

2024(令和 6)年 4 月 1 日から「こども家庭ソーシャルワーカー」という新たな子ども家庭福祉分野の認定資格が創設されることになりました(厚生労働省, 2022a, 2023)。本資格は、2022(令和 4)年 6 月改正児童福祉法に基づき、子ども家庭福祉の現場における実務者の専門性の向上を目的としたものです。

個人的な意見として、コソダテ界隈の支援職の専門性向上は歓迎する一方、「今なお“量”が圧倒的に足りない現場における“質”の向上を目的とする制度設計」に、ある種の危うさも感じています。

たとえば、子ども家庭福祉の専門機関として、一番有名といえる「児童相談所」。2017(平成 30)年度における児童福祉司(児童相談所における福祉職)は 3,240 人、児童心理司(児童相談所における心理職)は 1,360 人でした。

それが近年の児童虐待相談対応件数の増加を受けて、児童虐待防止対策体制総合強化プラン(厚生労働省, 2018)により、2018(平成 31)年度からの四ヶ年計画で児童福祉司は 2,020 人程度の増員、児童心理司は 790 人程度の増員、など体制強化が図られました。2021(令和 3)年度にはこれらの増員目標を1年前倒しで達成しつつ、さらなる体制強化のため「新たな児童虐待防止対策体制総合強化プラン」を決定し、2024 年度までに児童福祉司を 1,060 人増員、2026(令和 8)年度までに児童心理司を 950 人増員することなどを目標に掲げています(こども家庭庁, 2023a)。この増員目標が達成されると、2024 年度で児童福祉司が 6,850 人となり、5年あまりで倍増、という配置人数となります。

このように児童福祉司の配置基準、すなわち児童相談所の職員の「量」は、改善されてきているものの、それでようやく、人口当たり約 2~3 万人に 1 人程度です。今なお増加の一途をたどり、すでに年間 20 万件を超えている児童虐待相談対応件数と比しても、十分な「量」とは

言い難いでしょう。

各所で論じられているように(川松, 2020; 鈴木, 2021; 高橋, 2003 など)、海外と比較して、人口比に対する子ども家庭福祉の専門職の人数は、一桁ないし二桁ほど少ないのが日本の現状となっています。

さらに、アメリカやイギリスなどと比較(川松, 2020; 増沢, 2014)すると、それらの国では、警察や司法が、日本以上に一時保護や虐待対応に関与していたり、児童相談所に相当する機関の専門職一人当たりの担当ケース数が、これまた一桁ないし二桁ほど少なく、やはり児童相談所の業務量と、人員のバランスは十分でないと言わざるを得ません。

もちろん、単純な国際比較には慎重になったほうがいい面はあります。ただちなみに、警察官の人数は約 26 万人だったりする(警察庁, 2023)ことを考えると、国内比較においても、人口約 500 人に1人の警察官、人口約 2~3 万人に 1 人の児童福祉司というのは、どうしてもアンバランスだと感じてしまいます。

すでに増員を図っている児童相談所の人員について、新規に採用された職員の方たちの早急な「質」担保の意味でも、こども家庭ソーシャルワーカーの制度は必要なのだろうとは思いますが。実際、児童福祉司および児童心理司の平均勤続年数は、2021(令和 3)年 4 月現在で約半数が勤続 3 年未満となっています(厚生労働省, 2022b)。現状の人員でより「質」を向上するための施策は、最善手かどうかはさておき、重要な観点だとは思いますが。

ただ私としては、どうしても、増やすなら少なくとも万単位を目指すべきではないだろうか、むしろこれまでなぜこんなに少なかったのか、と穿った考えをもってしまいます。

そして、児童福祉施設の代表格である「保育所」。私自身、子どもの養育で大変お世話になっています。そんな保育所における保育士の配置基準が、諸外国に比べて日本が著しく低い現状は、以前よりもよく指摘されるようになってきました。

日本の保育所では 2023 年度現在、保育士 1 人に対して、0 歳児は 3 人、1~2 歳児は 6 人、3 歳児は 20 人、4~5 歳児は 30 人というのが国としての最低配置基準となっています(児童福祉施設の設備及び運営に関する基準 第 33 条)。

なお、この基準は、「異次元の少子化対策」の一環として、2024 年度から 76 年ぶりに見直されます。具体的は、4~5 歳児の基準は保育士 1 人に対して 30 人から 25 人へ、3 歳児の基準も 20 人から 15 人へ、見直される予定です。基準が制定された 1948(昭和 23)年当初と比較して、3歳未満の児童への配置基準は改善されてきましたが、3歳以上の児童に対する配置基準はほとんど変化がなかったことを考えると、画期的なように思えます。

一方で、経済協力開発機構(OECD)に参加する他国の基準ではそもそも、20 人を超える 3 歳以上の子どもを、1 人の保育者がアシスタントなしに担当することは想定されておらず、日本の配置基準は OECD 参加国中で最多となっています(鹿嶋, 2022)。どうやら、異次元の少子化対策をもってしても、日本における保育士の配置基準は、まだまだ次元が異なるようです。

しかも、保育士確保が困難であるという理由で、現時点では見直し前の基準でも構わないという経過措置がとられることとなっているうえ、経過措置の期限は未だ定められていません。実際、保育士の有効求人倍率は、2012(平成 24)年の 1.05 倍から 2021 年現在で 2.50 倍と大きく増加しており、全職業計を上回る高い水準で推移しています(厚生労働省, 2022b)。保育士資格を持ちながらも働いていない潜在保育士の多さも指摘されています。

これらの背景として、インターネット社会において、保育士の給与水準の低さが顕やかになってきたことは、決して無関係ではない、と考えられます。

コソダテ支援に関するリアルな「量」としてのお金

国家資格職の中でも、保育士の給与は特に低いとされていました。ただ国は、保育士をはじめとする保育人材の処遇改善について、2013(平成 25)年以降、さまざまな取組みを実施し、年々改善傾向にあります。

たとえば、2017(平成 29)年 4 月から、待機児童ゼロの実現や保育士の処遇改善のため、全ての保育士給与が 2%(月額約 6,000 円)引き上げられました。また、2022(令和 4)年 2 月から「保育士・幼稚園教諭等処遇改善臨時特例事業」によって、保育士の給料は 1 カ月あたり約 9,000 円アップしています。これらの取組みにより、民間の保育士等について見ると、2013 年度から 2021 年度までの 9 年間で合計約 14%(月額約 4 万 4 千円)の改善が実現しましたが、なお全産業平均と比べて低水準にあります(厚生労働省, 2022b)。

日本における児童福祉施設の根幹である、保育士という国家資格が、名実ともにより安定感のあるものになってほしいものです。それがひいては、日本のコソダテの充実に直結すると考えています。

そもそも日本は、教育における公費負担割合が非常に少ない、すなわち子どもの教育にお金をかけない国として有名になってしまいました。特に就学前段階における公費負担割合は、45.4%と OECD 中で最下位となっています(文部科学省, 2017)。就学前段階における教育・保育の私費負担、つまりは家庭からの持ち出し費用の負担が、保護者に多くのしかかっていたのが日本です。

また、日本が社会的養護に費やす予算は GDP(国内総生産)の約 0.02%である一方で、アメリカやカナダは州によって 2.6%、デンマークが 0.75%、ドイツが 0.23%の予算をかけています(日本社会事業大学社会事業研究所, 2016)。これまた先進国の中でも、一桁から二桁ほど低い水準なのが日本の現状です。

かたや諸外国において近年、子どもの発達や将来を左右する幼児教育・保育の重要性が、エビデンスをもとに強調されるようになってきていました(秋田・古賀, 2022; 浜野, 2021; 鈴木, 2014)。

また、「家族関係社会支出(社会保障費の中の子ども・子育て関連の支出)」と出生率が正の相関関係にあること(山口, 2021)や、保育サービスなど子育て支援への支出が経済成長率にも寄与していること(柴田, 2016, 2017)も、実証的に示されてきています。

つまり、子どもにとっても日本社会にとっても、国として子ども関連の支援のためにお金を充てるとすることは、有望かつ必要不可欠な投資先であると考えられます。

日本政府も、シルバー民主主義と揶揄されたり、先進国最悪と言われる厳しい財政状況があったりながらも、2023 年末にようやく、少子化対策として総額 3.6 兆円規模の「こども未来戦略」をとりまとめました(こども家庭庁, 2023b)

岸田文雄首相は 2023 年 2 月 15 日の衆院予算委員会で、子ども関連予算を 2020 年度の国内総生産(GDP)比 2%から倍増する考えを示していました。つまり、2020 年度時点での家族関係社会支出が、約 10.7 兆円(国立社会保障・人口問題研究所, 2022)と、GDP 比 2.01%であったのを倍増して 4%ほどにする、言い換えれば家族関係社会支出を約 10 兆円増やすことを示した、ということになります。

実は日本は、2010 年代に入り、「社会保障と税の一体改革」の流れの中で家族関係社会支出への資源投入はすでに増えてきています。それまでは GDP 比 1%にも満たなかったのが、2%を超えている 2022 年度現在ではすでに倍増し、かつては全く届いていなかった OECD 平均に迫る勢いとなっている、といえます(子ども家庭庁, 2023c)。

そう考えると、「こども未来戦略」における総額 3.6 兆円というのは道半ばではあるものの、仮に 10 兆円という倍増が実現するならば、出生率向上を達成した諸外国と同水準、むしろ家族関係支出が OECD トップのスウェーデンと同水準の割合となります(子ども家庭庁, 2023c)。ちなみに、全国 62 の中核市の中で人口増加率第 1 位として有名になった明石市は、人口約 30 万人に対する子育て関連予算を倍増させて約 250~300 億円にしたようです。明石市の取り組みを仮に日本全体の人口、約 1 億 2 千万人に拡張するとすれば、これまた約 10 兆円規模となります。

政府は 2030 年代初頭までに予算倍増をめざすと明言しています。本当に実現すれば、確かに「異次元の少子化対策」とはなりそうです。

コソダテ支援においては「量」から始めて「質」への転換を待つ

“It takes a village to raise a child”というアフリカのことわざがあります。

直訳すると、子ども 1 人を育てるには 1 つの村が必要、ということになります。人間が成長していくためには、村など社会全体からの、多様な人の知恵・愛情・力などが必要ということで、地域ぐるみの子育て、社会全体での子育て、を指す言葉として、世界中で引用されています。

子どもを育てるために、コソダテとともに携わり、支援する人たちそれぞれの「質」の向上は必要かもしれません。ただそれ以上に、多くの人々がコソダテに関わることの重要性を思い出さ

せてくれるのが、このことわざです。

“量質転化の原則”というの也有ります。哲学者ヘーゲルが説いた、弁証法の基本三原則の一つであり、量の変化が一定水準に達すると、質が変化する、といった原則です(ヘーゲルは、水の温度変化により、氷や水蒸気のように質が変化するという喩えで説明しています)。積み重ねが必要な学業やスポーツなどで、根性論のようにとにかくやるべしという用いられ方をたまに目にしますが、そういった考え方とは一線を画しています。むしろ、「質」の変化を前提とした理論やモデルをもちつつ、練習・学習や試行回数などの「量」を一定水準以上しっかり確保する、ということが重要な考え方です。

いずれにせよ、手順としては、「量」を増やすことが先となります。いくら完璧な「質」の何かを為そうとしても、動く「量」がゼロならば、何も変化は起こりません。逆に、ただ「量」をこなせばよいとがむしゃらに動いたとて、なかなか「質」はついてきません。

繰り返し述べているように、今現在の日本において、コソダテに携わり支援するための人数やお金の「量」は、圧倒的に足りていません。そのような中で、現実に打ちのめされないように、少しずつでも、できることから変化を起こすこと、たとえば自身のスキルアップや連携によるネットワークづくりなどにより、支援の「質」を上げていくことは重要です。

ただ現状の「量」が著しく不足しているにも拘らず、「質」が上がったら何とかなるとするのは、あまりにも楽観的で、コソダテの現実から乖離しています。

そもそもの「量」を数倍～数十倍に増やしていく必要性から目を背けず、その両輪としてはじめて「質」を上げる、という議論をしてほしいと考えています。

…私自身、親や養育者としての「質」を求められてばかりいるような風潮を感じるがあります。そんな自分だからこそ、他者に頼ることや、セルフケアすることを厭わず、自らを支援する「量」を忘れずにいたい、なんて思っています。

みなさんのコソダテ支援は、十分な「量」が確保されているでしょうか。

【引用・参考文献】

秋田喜代美・古賀松香（2022）. 世界の保育の質評価 明石書店

浜野隆（2021）. 幼児教育・保育の国際的動向 比較教育学研究, 63, 2-17. Retrieved February 25, 2024 from https://www.jstage.jst.go.jp/article/jces/2021/63/2021_2/pdf

鹿嶋桃子（2022）. 「OECD 国際幼児教育・保育従事者調査 2018 年報告書」に関する研究ノート:「構造の質」に着目して 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要(9), 23-35. Retrieved February 25, 2024 from https://www.jstage.jst.go.jp/article/ojccrc/9/0/9_23/pdf/-char/en

川松 亮（2020）. 児童相談所における子ども虐待対応の現状と課題 住民と自治(684), 6-11. Retrieved February 25, 2024 from <https://www.jichiken.jp/article/0161/>

警察庁（2023）. 令和 5 年 警察白書(第 7 章 警察活動の支え:第 1 節 警察力を支える活動基盤の整備) Retrieved February 25, 2024 from https://www.npa.go.jp/hakusyo/r05/pdf/10_dai7sho.pdf

こども家庭庁（2023a）. 児童虐待防止対策部会(第1回)「参考資料5:新たな児童虐待防止対策体制総合強化プランについて」 Retrieved February 25, 2024 from https://www.cfa.go.jp/councils/shingikai/gyakutai_boushi/277bd31e

こども家庭庁（2023b）. こども未来戦略～次元の異なる少子化対策の実現に向けて～(令和 5 年 12 月 22 日閣議決定) Retrieved February 25, 2024 from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/fb115de8-988b-40d4-8f67-b82321a39daf/b6cc7c9e/20231222_resources_kodomo-mirai_02.pdf

こども家庭庁（2023c）. 参考資料集 Retrieved February 25, 2024 from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/81755c56-2756-427b-a0a6-919a8ef07fb5/18e3aa55/20230402_policies_03.pdf

国立社会保障・人口問題研究所（2022）. 令和2年度社会保障費用統計の概要 Retrieved February 25, 2024 from <https://www.ipss.go.jp/ss-cost/j/fsss-R02/R02-houdougaiyou.pdf>

厚生労働省（2018）. 児童虐待防止対策体制総合強化プラン(平成30年12月18日児童虐待防止対策に関する関係府省庁連絡会議決定) Retrieved February 25, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/content/000468293.pdf>

厚生労働省（2022a）. 令和4年6月に成立した改正児童福祉法について Retrieved February 25, 2024 from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/jidouhukushihou_kaisei.html

厚生労働省（2022b）. 令和4年版 厚生労働白書——社会保障を支える人材の確保—— Retrieved February 25, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/21/>

厚生労働省（2023）. こども家庭福祉の認定資格(こども家庭ソーシャルワーカー)検討概要(第53回社会保障審議会児童部会:資料6-2) Retrieved February 25, 2024 from https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/jidouhukushihou_kaisei.html

ヘーゲル,G.W.F.(著)・松村一人(訳) (1978). 小論理学 岩波文庫

増沢 高（2014）. アメリカ・イギリス・北欧における児童虐待対応について(厚生労働省児童虐待防止対策のあり方に関する専門委員会(第3回)資料3) Retrieved February 25, 2024 from https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000060829_6.pdf

文部科学省（2017）. 内閣府経済・財政一体改革推進委員会:第2回経済社会の活力ワーキング・グループ(平成29年3月13日)資料4 Retrieved February 25, 2024 from <https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/reform/wg7/290313/shiryoku4.pdf>

日本社会事業大学社会事業研究所（2016）. 社会的養護制度の国際比較に関する研究調査報告書(第3報):平成26年度 厚生労働省児童福祉問題調査研究事業 課題9 Retrieved February 25, 2024 from <https://www.jcsw.ac.jp/img/facilities/research>

[h business/kadai9-3.pdf](#)

柴田 悠（2016）. 子育て支援が日本を救う（政策効果の統計分析） 勁草書房

柴田 悠（2017）. 子育て支援と経済成長 朝日新書

鈴木正敏（2014）. 幼児教育・保育をめぐる国際的動向——OECD の視点から見た質の向上と保育政策—— 教育学研究, 81(4), 460-472. Retrieved February 25, 2024 from https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyoiku/81/4/81_460/pdf

鈴木崇之（2021）. 児童福祉制度の国際比較に関する基礎的研究——日本とフィンランドの児童保護制度を中心に—— ライフデザイン学研究, 16, 439-458. Retrieved February 25, 2024 from <https://researchmap.jp/Takayuki Suzuki/misc/33895197/attachment file.pdf>

高橋重宏（2003）. 児童福祉分野における職員の専門性及びその国際比較に関する研究（総括研究報告書）：厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究）平成 14 年度研究報告書 Retrieved February 25, 2024 from <https://mhlw-grants.niph.go.jp/project/6683>

山口慎太郎（2021）. 子育て支援の経済学 日本評論社

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育て＆子育て支援まみれの日々を送っている。プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)

教室の窓から

令和 6年
(2024年) 2月
来須 真紀

今回は少し視点を変えて

今回は少し視点を変えて、「学校のあれこれ」ではなく、教員から見る学校あれこれと母親から見る学校あれこれも違いについて一例をあげてみたいと思います。※注！！これはあくまでも一例であり、私の個人的な考えのみではないということを付け加えておきます。

学校からのプリントあれこれ

学校からは毎日のようにたくさんのプリントが配られ、連絡事項が書いてあります。



プリントは学校と家庭をつなぐ大切なものだから、学校での様子や連絡事項をしっかりと書かなきゃ。主任や管理職の点検もあるから時間がかかるけど、頑張らなきゃね。でも正直しんどいな。時間かかるな。

きょうだい3人だとプリントも×3で、目を通すのも時間がかかるわあ。同じプリントも3人分持って帰ってくる。あら、このプリントだれが持って帰ったんだっけ？そして、随分先までの連絡まで書いてあるのね。忘れちゃいそう。忘れちゃいけないって思うとちょっとプレッシャーーとわ



音読の宿題あれこれ

毎日の宿題。大切なのはわかります。毎日添削する先生が大変さもわかります。家庭学習の習慣もつけてほしい。それも分かります。



音読は、学力の基本よ。どこかの脳科学者も言っていたけど、音読を毎日することで脳の発達も促されるから、しっかり取り組んでいかなきゃ。そのためには、ご家庭にお願いすることも大切。家庭学習の習慣をつけてもらわなきゃ。

音読は、学力の基本よ。分かってる。どこかの脳科学者も言っていた。音読で脳の発達も促されるって。でも、嫌がる子どもたちに毎日音読と計算カードの点検。点検項目もたくさんあるのね。。しかも×3。きょうだい同士でさせると必ず喧嘩勃発



授業参観あれこれ



授業参観が一番怖いよね。保護者の方々は学習指導要領のことなんて分からないだろうから、活動の意図は伝わりにくし。。わが子のことを中心に見られる。だから全員が活躍できるような内容考えないとね。発表とか討論とかそんな企画がいいかしら。てか、参観日多いよね。毎月毎月悩んでしまうわ。あ、来月なんて授業研究会もあるから大変。忙しくなるわ

え、今月もまた参観日？さすがに月1回の参観日は、仕事休むの申し訳ない。参観日いかなかったら子どもたち残念がるし、私も子どもたちの様子見たいし。困ったわ。そういえば見に行った時の授業って結局何を学習したのかしら。なんだか特別な発表とか活動ばかりで、普段の子どもたちの様子ってよく分からないわね。正直、参観授業って退屈なのよね。



子ども同士のトラブルあれこれ



学校でのトラブルは、おうちの方も心配されると思うから、学校で解決しなきゃ。あーでも、このトラブル。地域の活動や放課後の子どもたちの関係ともからんでいるわ。複雑ね。学年主任は「学校外のこと、ノータッチでいなきゃ仕事が増えるだけだ」って言うし、生徒指導の先生は「家庭や地域から情報を集めて、サポートしないと」って言うし。とりあえず、ご家庭に報告しないといけないのに何が事実か分からないわ。

え？うちの子が学校でそんなことしたの？原因は何かしら？そういえば、こないだの子ども会の行事の時に子どもが何か言っていたわ。関係しているのかしら？放課後のことや子ども会のことで学校を頼るわけにはいかないし、困ったわ。また、あのお母さんに謝らなきゃいけない…。でも、うちの子だけが悪いのかしら…。なんだかモヤモヤするわ。



立場変われば…？

立場が変われば感じていること考えていることがわかるのは、当然のことです。自分自身もこんなに感じ方が変わるとは思ってみなかつたです。どちらが悪いとも良いというわけではなく、立場が変わると見ている視点が違ってくるということだと思います。学校は、子どもたちを集団として見るのが多く、また、学力の保障という観点で言えば、子どもたちの未来(高校受験に向けて)みていることが多いのだと思います。一方母親というのは、子どもの将来はもちろん大事。だけど家族との日常、今は切実な問題。このような視点の違いが、一つの物事をみるにあたっただけの違いになっていくのだと思います。だからこそ、お互い話をし、お互い妥協点を見つけることが大切なんだと思います。学校には柔軟さ、家庭には踏ん張る力が、あればいいのかな？皆さんは、どう思われますか？

社会科の授業を対人援助学の視点から⑤

2024年2月22日 内田一樹

1. 2年目を終える

そもそもこのマガジンに投稿するきっかけとなった、選択講座「東北と復興」。2年目が終わろうとしている。今年は、昨年度よりも関わる人やフィールドワークで行く場所が増え、それだけたくさんの方のことを生徒達と考えることができた。

合わせて、この選択講座「東北と復興」についても様々な研修会の場で報告をさせていただいた。民間の授業サークルや教育団体、学校の公開教育研究会等である。生徒達に報告してもらうだけではなく、私自身が授業カリキュラムや授業内容について様々な場所で意見をいただくことができた。それらの体験を通して、より自分自身の中에서도思っただけではなくそこに言葉がついていくようになってきたように感じている。

昨日、学校の各教室に「防災マニュアル」をつくって配布した。これは昨年「東北と復興」を受講した生徒の声、学校の避難訓練をもっと他人事ではなくて自分事として学校全体で考えたいという意見からはじまった。私を含め数名の教員と(今年度から校務分掌で防災の担当にもなった)、中高の全校生徒の中から有志を募り、週に1回集まって話してきたことの一つの集大成である。生徒と教員を合わせて毎回10名弱の集まりは「防災を考える会」として、学校の防災における生徒が感じている様々な課題が出された。避難訓練におけるみんなの態度や避難経路に対する疑問、生徒だけではなくて教員の側の意識も低いということも意見として出された。そしてそれらの課題を解決していくためにみんなで考えた結果、最終的には「防災マニュアル」をつくって各教室に置こうということになった。もちろんすでに学校には生徒、教員用の防災マニュアルはあるのだが、それをさらにアップデートして作成された。もちろん生徒達もマニュアルで全てが解決するとは考えていないが、しかし以前よりも防災について考えてくれる人が増えてくれるのではないかと期待し、形にできたことを嬉しく感じているようだ。

これは学校にある身近な問題を生徒達自身が変えていこうとする第一歩であるとは私に思っている。しかし昨年、こうした生徒達発信の動きを研修会で報告したとき「学校の避難訓練を作るのがゴール?」「防災だけを考える講座なの?」といった反応が多かった。これは防災を考えることだけが本質ではなくて、生徒達が自分達の周りの問題を自分達で変えていこうとすること、そしてその思いを実際に自分達が主体となって一つの動きとして形にすることができたという実感が大切である。しかしそのことを私が伝えきれなかったのか、「防災」という言葉が持つ力が大きすぎたのか。

実際、昨年「東北と復興」について報告する中で感じたことは、この講座は何を目指しているのかということが伝えきれなかったということである。それだけ「東日本大震災」、あるいは「震災からの復興」という言葉を受けて感じることは様々あるということだと思う。防災、巨大堤防、原子力発電所、伝承、政治……。そしてそれは東北ではない地域で多く感じた。特に社会科として「東北」を「教材」として、上述したキーワードについての一定の社会認識を身につけさせるべきだと感じている人(社会科教員)が多いように感じている。この感覚が個人的には不思議に思ってしまった。それがまだ私が伝え切れていない部分だったのかな、言葉にできていない部分だったのかなと

思う。私は「東北」を「教材」にして教えることはできない。なぜなら私も何も分かっていないからだ。「分からない」からこそ「東北」へ行く。同じような事に興味関心を持っている高校生達とともに「考える」。もちろん教員としてツアーやどこに行くか、誰と会うか等は用意する。それはどちらかというと環境を整備しているイメージに近い。高校生達と同じ地平で、一緒に受け止めて考え合う。この講座の目的は声に耳を傾けて、それに対して応答していく営みを積み重ねることである。これは過程であり、ゴールでもある。この営みは、これからの市民社会を生きる市民としての資質を養うことに繋がっていると思う。社会構造を説明できること、政治を論じることだけが、市民の資質ではないはずである。誰かの声に耳を傾けて自分に出来る事をしていく対人援助も市民としての資質であると思う。専門職としての職能だけではなく、市民社会における資質としての対人援助。それは声を聴いて自分にできることをしていく共助かもしれないし、公助を求めて声を上げていたり、大きな問題に対してみんなで社会を動かすための運動をしていたりすることかもしれない。

2. 高大連携シンポジウム

2月11日に東京大学で「学校インターンシップの可能性」と題して、シンポジウムが行われた。私の勤務校は東京大学と高大連携 協定を結んでおり、その仕組みを利用して選択講座「東北と復興」においても、大学生・院生に伴走をしてもらっている。昨年度は5名、今年度は2名に関わってもらった。今回のシンポジウムはその報告会を中心に行われた。それぞれ新鮮な発見がある報告会であった。

「東北と復興」の授業においては、今年度伴走をしてくれた大学生から高校生達とかかわったことで自分自身にとってどのような意味があったのかが語られた。福島県出身のその大学生からは、高校生との学び、ともにかかわって話す中で、自分自身の「『当事者』としての立場が複雑さへのフタになっていた。」と振り返っており、その言葉が大変印象に残った。自分自身も東京へ出てくる中で「当事者」として外部から見られることが、かえって東日本大震災に関わる様々なことについて考えたり、口にするのを難しくしていたりしていたことに気付いたということであった。そしてそれらは講座を通して答えの出ていない問いに対して高校生達が学び、考え続ける姿勢を通して得られたものだったようだ。その大学生自身の物語に高校生との関わりが新たな意味づけを与えたことを知った。実際、この講座を受講している生徒の中には当事者性が高い人たちも一定数いるため、そのことも影響しているのかもしれない。

シンポジウムの最後には東京大学院教育学研究科の小玉重夫教授が指定討論で話されており、その中で高大連携の可能性の一つとして「中高生が大学生の教員養成に関わる」ということが語られていた。実際に教員になりたい人が高大連携で高校に来て、高校生と関わる。そのことによって大学生自身が自らの物語に新たな意味づけを加えたり、大学生が教員になるというプロセスに高校生が影響を与えたりするというのもつ意義を感じた。ただし、それらは今後も継続していく中で



さらに実質をつくっていくものかもしれない。私自身大学院生の時に対人援助実習として高大連携に関わっていたからこそ、余計にそう感じている。

3. 来年度に向けて

今度の3月には宮城県仙台市にあるせんだいメディアテークの3がつ11にちをわすれないためにセンター(通称、わすれン!)の企画展「星空と路」に、この講座として出展をさせてもらうことが決まっている。これは今年度スタディツアーに参加した生徒が、ツアー後もわすれン!の担当者の方達とやりとりを続けていて決まったことである。(詳細は、<https://recorder311.smt.jp/information/66310/>)

自分達自身の学び、考えてきたことを改めて東北の方達にお返しする応答の一つの形だと私は感じている。講座が3年目を迎えるにあたってより関係性が密になってきているように感じている。

3年目となる来年度は、カリキュラムの内容を改めて考えなおしたい。昨年ある場所で報告した際に、講座の内容が社会認識をつくるようなものになってきている、と指摘された。それは1年目に比べて2年目をポジティブに評価した文脈ではあったが、一方で対人援助学を志す高校生にタネを植えるような講座を目指す中でそれで良いのかという疑問はある。しかしそのタネはまだ私自身の中で鮮明な輪郭を描けていない、あるいは言葉を持ち得ていない、あるいは見つけていない。3年目となる来年度はそのことを意識してカリキュラムを編成してみようと考えている。

ある訪問看護師のアタマの中

4

～精神科訪問看護の意義～

山岸 若菜

はじめに

「精神科の訪問看護って何するんですか？」とよく聞かれます。

少し前までは「医療処置もほぼないので、ただ話を聞いてるだけです。」とやや自虐的に答えていました。

でも最近は、精神科に限らず訪問看護の目的は、病気や障害を持ちながら、社会の中や家で生きていくための方法を利用者さんと一緒に探すことだと言えるようになりました。

精神科の訪問看護を利用する人は「自分の人生を病気に隠れて生きてるな」と感じる人が多いです。

病気はそれ自体、とてもしんどいものですが、同時に病気であることで、人生の色んなしんどさから逃げられることもあります。

だからこそ、長くなればそれなりに居心地が良く、病気の後ろに隠れてしまうのではないかと思います。

自分のものであるはずの人生を病気に乗っ取られてしまっている姿は少し悲しいです。

精神科訪問看護では、病気のしんどさはあったとしても、飲み込まれすぎずに自分の生活を取り戻していくお手伝いをしています。

その目的に向かう手段として『話を聞く』のです。

なかなか道は長いです。

はじめの第一歩は、下を向いて独り言のように話していた利用者さんが、前を向くまではいかなくとも、チラッとこちらをうかがって見てくれるようになることです。

見た目ではなくて話す姿勢の話です。

今回はその「チラッ」を感じた時のことを書こうと思います。

自殺の話しかしない人

自分の担当ではありませんでしたが、とにかく自殺の話ばかりする利用者さんがいました。

「死にたい」という気持ちのことを希死念慮と言います。

本気の希死念慮が高まってくると、実行する危険があるので、訪問看護に行くときは要注意で気が抜けません。

担当者が何を言っても死ぬ方法の話になるので手詰まり状態ということで、担当交代して行ってみることになりました。

ピンポンとインターホンを鳴らして出てくれた Oさんは 40代半ばの女性でした。

ガチャッと玄関を開けるなり、

「はじめまして。私死にたいんです。」

早速やな！

とりあえずご挨拶してから・・・と中に入れてもらおうと、Oさんの部屋は綺麗に片付いていて、可愛いらしい感じでした。

スヌーピー関連のグッズが多くぬいぐるみがたくさんあるのですが、なぜか全員ずいぶん眠そう？

変なスヌーピーやなと思いながら話を聞き始めました。

〇さんの話を聞き始めると、本当に自殺の話ばかりでした。

「有次の包丁がたくさん天井にくっ付いていて、その天井が落ちてきて死にたい」

「壁に有次の包丁が付いていて、その壁が迫ってきて刺されて死にたい」

「有次の包丁を床に立てて置いて、そこに倒れこんで死にたい」

などなど、色んな死ぬシチュエーションの妄想が止まらないような様子でした。

が、

いやいやいや。

希死念慮とかよりよっぽど気になることあるやん？

でも初回から聞くことでもないので、世間話ができる程度に打ち解けるまで、しばらく訪問を続けました。

「お部屋に置いてあるスヌーピーグッズ可愛いですね。」

とスヌーピーに話を振ってみると

「そうでしょ。私オラフが好きなんです。」

オラフて誰??

自分が知っているスヌーピーの仲間は、チャーリーブラウンとウッドストックと、毛布をくわえてる子だと伝えると、実はスヌーピーには6匹の兄弟がいるのだと教えてくれました。

その6匹兄弟のうちの1匹でぼっちゃりした眠たそうな顔したキャラクターがオラフだということでした。

置いてあるグッズのスヌーピーが全部眠たそうなのは、オラフやったからかーと納得しました。

オラフはどんくさいけど優しい性格で、そこが好きなんですと話してくれました。

そんな楽しい話をした日にも、包丁で死ぬ妄想話は続いていましたが、訪問を続けるうち、死にたいという言葉はちょっとびっくりするけど、〇さんは本当に死にたい訳ではないし、自殺の話をしてる訳でもないんだなと思えるようになりました。

そこでようやく初回訪問から気になっていたことを聞いてみることにしました。

利用者さんがチラ見る瞬間

「あの、包丁は有次でないとあかんのですか？」

すると 〇さんは、

「包丁といえば有次やし。切れ味良さそうやし。ヘンケルスではちょっと違うんですね。」

なるほど。

「あー。洋包丁は研いだりしなさそうですもんね。和包丁の方がすっぱりいけそうな気がします。そこに着目するとは 〇さんはなかなか面白いセンスをお持ちですね。」

と答えると、それまで見たことないいい顔で「ほんとに？私面白い？」と嬉しそうに答えてくれました。

よし！キタ！

これが 〇さんがこちらをチラ見してくれたと思った瞬間です。

この日 〇さんは有次の包丁の魅力を熱く語ってくれました。

さぞかし〇さんの持つてる有次の包丁は良く切れるんでしょうねと言うと、

「持ってませんよ。」と笑っておられました。

持ってへんのかいつ！

妄想話のメリットとデメリット

〇さんは両親をすでに亡くされていてお兄さんと二人暮らしをしていました。

経済的には安定しているし、どうしても働かないといけない理由はありません。

でもずっと家の中で過ごす生活で〇さんは満足なのか？と聞いてみると、これまでに精神科のデイケアに通ったことはあるけど、自分が包丁で死ぬ妄想話ばかりしてしまうから、他の利用者さんからクレームが入り、通えなくなってしまったということでした。

デイケアというのは精神科の病気を持つ方たちが通うところで、社会的な繋がりを持ったり、色んなプログラムで生活の訓練をするような場所のことです。

確かにそこでお互いしんどいとわかってはいても、有次の包丁で刺されて・・・とか聞かされたら怖いしびっくりします。

そのことがあってから、デイケアや作業所に通う話は出なくなりました。

〇さん自身も環境の変化はしんどいし、家にいるのは気も遣わなくていいし楽だからと家にこもる生活になったようでした。

今はいいけど、お兄さんとの二人暮らしがずっと続くかはわかりません。

もし一人暮らしをしないといけなくなった時、様々な場所や人と繋がってサポートを受けられるようにしておくことは必要なんじゃないかと考えていました。

そのうちそんな話もしていかないとなと思っていたところ、私が退職しないといけないことになりました。

その頃には〇さんはチラ見からだいぶこちらを向いて話してくれるようになっていたので、最後の訪問で率直に自分の思いを話すことにしました。

将来のことを考えると、〇さんにとってずっと家の中で過ごすより、どこかに通うなりしていくことが大切だと思います。

でも次どこかに通うことになったとしても、外で有次の包丁への愛を語るのは、少し我慢した方が良いでしょう。

その理由は、私は長く訪問してたくさん会話をしたので、〇さんが自殺の話をしているのではなく、ただ有次の包丁の素晴らしさを話したいだけだということをわかっているけど、会いたての人にわかってもらうのはなかなか難しいと思うからです。

〇さんの面白さは家の中だけで埋もれさせておくのは惜しいので、自分は出来れば外の世界に出て行ってくれることを願っています。

何を話したら良いか困ったらスヌーピーの話をしてみましょう。きっと 〇さんの好きなものは 〇さんを助けてくれると思います。

〇さんは「わかりました。オラフの後に有次の包丁ですね。」と答えてくれました。

ん？ほんまにわかってる??

〇さんのその後

その後数年経って職場復帰すると、〇さんは別の事業所の担当になっていましたが、現在の担当者が 〇さんの近況を教えてくれました。

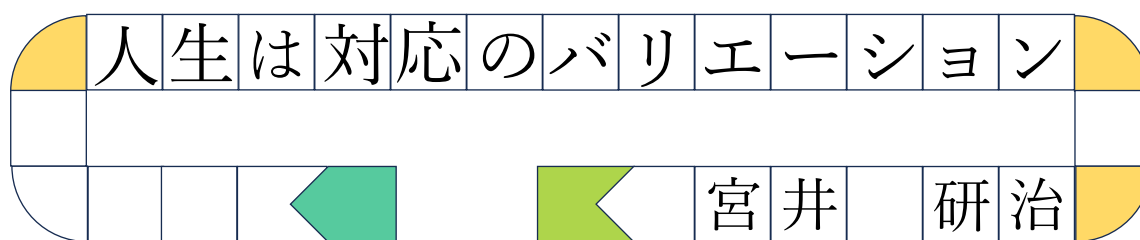
なんと、お弁当作りをする就労支援事業所に通所して、お昼には道でビジネスマンにお弁当販売までしているということでした。

すごすぎる！

もちろん足踏みしたり 2, 3 歩後退してみたり、色んな経過があったようですが、それは当たり前なので、少しずつ前に進んでいることが素晴らしいと思いました。

お弁当の具は有次の包丁で切ってるのかな？笑

これからこっそりOさんを応援していきたいと思います。



-第4話 「No music、No life！」パートⅡ-

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

支援の資源としての音楽について、個人的なことを書かせていただいています。しかし、個人的な経験でありながら、世代や地域、ある時は人種や国家なども飛び越えて存在するのがmusicでありましょう。でも、それが無くても人は死ぬことはないのが音楽でもあるわけです。災害であり、戦争であろうとも、何かあるとどこかで議論になるのが、「こんなときに、音楽が何の助けになる！」「非常時には、エンターテインメントなんてなんの役にも立たん！」なんていう説話です。その通りでもあり、そうではないというのが私の心情というか感覚です。音楽が聴くべき存在であるとか、こういう音楽を聴くべきであるとか、言い出した途端にその魅力や効力は薄れていくのでしょうか。あえて言うのなら、音楽は空気みたいなものではないでしょうか。普段から意識して呼吸している人は、そんなには多くはいないでしょう。でも、人間、空気を取り込まなければ、確実に死にます。次はそんな空気のようなザ・ビートルズの話。

1.音楽はザ・ビートルズである

やはり、なんと言っても音楽における私の中心点はビートルズです。ローリングストーンズでも、ボブ・ディランでもないのです。時代的にストーンズやディランも確かにしびれたアタシでした。しびれたなんて昭和。しかし、どんな音楽もミュージシャンも、ビートルズ以降はビートルズが居てそこを基点として、それぞれをそれぞれとして取り込んできたと思います。不滅の原点です。

ビートルズのすごいところは、懐メロにならないところでしょう。どんな場所でどんな状況で耳に入ってきて、しばし聴いてしまう音楽です。知らず知らずに、わたしの中にある認知と差別化のスイッチを押してくるのです。また、世代間のハードルも軽々と越えてくる音楽だと言えるのではないのでしょうか。音楽における世代間差は、それ自体楽しいわけですが、ビートルズは軽々とそのハードルを越えてくるなと思います。

かつて思春期の只中にあり、話題作りに
も事欠いていた息子との会話。「おまえ、ど
んな音楽すきやねん?」「う〜ん（怪訝ぎみ
に）、オアシスかな。」「（名前ぐらいは知っ
てる、モンスターバンドらしいけど、当時は
聴いたことまだなし）あー、いいよね！イギ
リスのね!」「へー、知ってんの（やや柔和
なかんじへ）第2のビートルズって言われ
てる」「えー、ビートルズ知ってんの!!ビ
ートルズに第1も第2もないと思うけど。
ビートルズのアルバムで聴いたことあるの
は（安心と余裕）?」てな具合です。

ビートルズの衝撃というのは、よく日本
のミュージシャンがビートルズとの出会い
を語るときに最初のギターのアイントロを聴
いた時にカミナリに撃たれたようなとか、
その音楽を聴く前と聴いた後の世界の色合
いが違って見えたとか、割りと同様のこと
を語っているのを見かけます。私はミュー
ジシャンではありませんが（当たり前じゃ）、
同じ体験をした記憶はあります。ちょうど
小学校の卒業前か、中学に上がる前の春休
みあたりかと思うんですが、1971年。
1970年が大阪万博で、そのあたりにビー
トルズも解散してますから、ビートルズを
認知した時には、ビートルズはもういなか
った、でも気配は大いにあった世代でした。
友だちの家で聴いたEP盤のレコード（あ
〜レコードがこんなに復権するなら、処分
するんじゃないか〜）か、家で聴いてたら
ジオからか、定かではありませんが、「All
My Loving」ですわ。「くろ〜じょらい、あ
んだ〜、きすゆ〜」の歌い出しを聴いた瞬間
は、たしかに世界が色を変えました。そこ
が、もしかしたら、私の思春期の始発駅であ
ったのかもしれない。ビートルズの音楽

やビートルズの在り様は、単なる音楽とい
うジャンルを越えて影響を与えてきたのだ
という視点は、執筆者@短信でも取り上げ
た「ビートルズの革命」（NHK『映像の世紀
バタフライエフェクト』）からの受け売りで
すが、決して自分の中になかったものでは
ありません。

ビートルズの影響がなかったら、更にビ
ートルズが存在しなかったら、世の中はど
うなるのか？正確には主人公しかビートル
ズのことを知らない世界に迷い込んだらと
いうパラレルワールドの映画が2019年に
公開された「イエスタデイ」という作品でし
た。映画の作りの細かさと、主人公の歌のう
まさにぐいぐい引き込まれました。なにせ
主人公とあと何人かしかビートルズの存在
を知らないわけで、主人公が覚えているビ
ートルズの曲を彼の作品として、演奏しス
ターダムにのし上がっていくんですが、「ち
がう、これは俺の歌じゃない。ビートルズの
だ!」という葛藤が生まれ...という話だっ
たのですが、ビートルズ好きなら尚更のこと、
あんまり知らなくても、一見の価値あり
です。ビートルズを知らない聴衆がビートル
ズの歌を聴き、ぶったまげる感じが、ちょ
うどビートルズを聴いて雷に打たれた頃の
自分を思い出してしまいました。あと個人
的には映画に出てくるジョン・レノンのそ
っくりさん加減（特殊メイクですが）にこれ
また、たまげてしまいました。

ビートルズの話、ビートルズからの意識
無意識の影響、まつわる友人たち、話し出し
たらきりがないので一旦終了とします。最
後に一つだけ。息子とビートルズの話に触
れたのはもう何年も前のことでした。もち
ろん、それからビートルズについての話を

そんなにした記憶はない。4 年前に私も還暦を迎えたのですが、息子らと娘からのプレゼントに赤いちゃんちゃんこならぬ、ビートルズの刺繍の入った T シャツをもらったときは、なんでビートルズなのと嬉しいより、ちょっとびっくりしてしまいました。親父がビートルズファンなの知ってたんだ、そっちの方が先に来ました。その「アビーロード」というアルバムのジャケットの 4 人をモチーフにした刺繍入りの T シャツは、ちょっと縮んではしまいましたが、大事にタンスにしまってあります。

2. 音楽は派閥である。

「派閥」という言葉の響きは、昨今は特に悪いばかりです。「裏金」「キックバック」「闇献金」、まあ、政治における金のイメージばかりですが、それは置いて、ここでは音楽の好きなジャンル、特定のミュージシャンの話です。今でいう「推し」ですね。自分の好きなジャンル、更には、好きなミュージシャンについて語り合うのは、今も昔も至福の時間であると思います。もっとも、私のように FM ラジオがその最大かつ広域にわたる情報源であった時代と現代の SNS 世代を比べる事すらそもそも問題があるかもしれません。しかしながら、「そうそう」「あれあれ」「おんなじやな～」なんて好きなジャンルの音楽話をしてる時の共有感や、そんな話相手の人格すら“良いやつ”に感じてしまう、これは、今も昔も変わらないような気がします。

で。思い出すが、何でも「三大〇〇」という言い方です。音楽の世界にもありますよね。いったい自分はその三大のうちで何を推すのか、当時はけっこうな選択だった

ように思います。自分のセンス、推した理由、推したことによってどう見られるのか大問題であり楽しみでもあったように今となっては思います。三大ギタリスト(ジャズやクラシック界版もあるでしょうが、ここではロックとします)と言えば、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ジミー・ページとされてます。どうやらこうした命名は、レコード会社の商業戦略の一環だったようですが(ウキペディア調べ)、高校生あたりの自分は他のギター好きの奴との話題はもっぱらこれでした。なんとなく好きでいいのですが、「どこがどのように好きか？」ということを確認に答えられると、そのコミュニティでの評価が爆上がりするのです。今思えばかわいい話ですが、今でも思い出せば楽しい話です。クラプトンでしたね、私は。といってもクラプトン全部を聴いていたわけではなく、「いとしのレイラ」のあのイントロ、たまらんよな～。クラプトンは弾くのが早すぎて見えないから、逆にゆっくりに見えるからスローハンドっていわれるらしい」などと小ネタを挟むと、「あいつは音楽を知っちょる(“わかっている“の大分弁)」と見られるのではと期待していたわけ。実際は、ジミー・ページもジェフ・ベックも好きでした。レッド・ツェッペリンの時代のジミー・ページの切り裂くようでありながら技巧的なリードギター、今でも時々聴きます。かといって昨年お亡くなりになられたジェフさんのギターもいいですよ。ジェフは、ピックは使わず指弾きだったんですね……………(#^_^#)。という具合に、当時は当の音楽を聴かずに何時間でもこんな話ができた記憶があります。

音楽に関しては私には派閥はありません。

何でも聴きます。もちろん、日々のあるいは年間のヘビロテはあります。でもどんなジャンル、どんなミュージシャンの音を聴いても、どこかしら良さを感じられます。それは私の長所だと現在は思い至っています。まあ、節操がないわけです。だから、前回からの話を読んでこられた熱心な私の読者さま（おるんかい！）の中には、宮井さんて音楽好きって言いながら、ビートルズを中心としたロックミュージックが一番好きなのねと思われるかもしれませんが、実際は何でも聴きます。

実はロックより私の身となり血となってきたのは、フォークです。日本のフォークですね。海外ではというとボブ・ディランという方がおられて、この方はビートルズと並びロックともフォークともジャンル分けできない「ボブ・ディラン」というジャンルですからここでは置いておきます。そんな私のフォークの系譜をひとくぐり。

世代論ではないですが、私の世代ってビートルズにしても気づいたときには解散してましたし、フォークについても反戦フォークやカレッジフォークといったブームも過ぎ去りし後といった感じでした。ちょうど1960年代後半から70年代初め、やはり中学校に上がる前でしょうか。友だちの中には岡林信康という人がフォークの第1人者だとかなんかの雑誌から情報を得てきて、アルバムを購入してファンになるのもいたりしてました。一方でチェリッシュとかトワエモアとか可愛げで美しげなディオもいたりして、フォークとは何ぞやと子どもながらに疑問に思う日々もありました。この時に彗星のごとく現れたのが、かの吉田拓郎氏でした。「結婚しようよ」です。「そ

うか、フォークってこんな日常の事歌うんだ」「そうか、髪が伸びたら結婚するんだ」「なんか俺もギター弾きてー」そんなきっかけで親にねだってフォークギターを買ってもらったのが中1の2学期あたりだったと記憶しています（このあたりの時系列はだいたいいい加減ですが、誰にも迷惑をかけていないと思いますのでご容赦を！）吉田氏のすごいファンだったかと言いますとそうでもなくて、同時代の井上陽水の方が当時はファンだったように思います。フォークって言われるものもニューミュージックと呼ばれ、今ではJポップと言われるようになりました。ほんとにたくさんの歌を聴いてきて他にもたくさんのお気に入りはい入るのですが、吉田さんは外せません。

更にもう一人あげるとすれば、中島みゆきでしょう。大学1,2年の時にはまり京都公会館（現ロームシアター）のコンサートに出かけたこともありました。みゆき姉さんにはまるきっかけは、「ホームにて」という楽曲でした。これは中島みゆきの初期の名曲のひとつで、故郷を遠く離れて、帰郷を恋焦がれるけれども、なぜか帰りの列車に乗れない、そこには帰れない理由があるのでしょうか。そんな歌です。当時の私には故郷に帰れない理由もないし、盆暮れには必ず帰っていたのですが、歌の心情に自分を重ねて酔ってみる、そんなことをして主人公になってみるというようなことをしてました。だいたいみゆき姉さんの歌はフラれたときに自虐的に聴きこむといったタイプの曲と、「時代」や「地上の星」といった応援歌タイプの曲の2タイプがあるっていうのは、巷でよく言われていることですよね。私が好きだったのは、初期の中島さんかなと思い

ます。

さて、この両巨頭が共演する楽曲が現れ、ユーチューブで見て、しばらくその動画ばかり見ていたのが「永遠の嘘をついてくれ」です。初めて見たときは鳥肌もんでしたね。御二人とも楽曲提供は、たくさんされているので、中島さんが吉田さんにこの歌を送ったというような裏話にはびっくりはしません。しかし、ライブで同じステージに立つことが想像しにくいぐらい主張的な若かりしときのイメージが御二人にはありましたので、聴き手にはより衝撃的でした。歌唱後の吉田さんのMCにもあったように「お互い歳を取って丸くなったんだね。中島さんも若いときは嫌な奴だったんだ（笑）」というくだりは逆に、同じステージに立つ二人の姿を、たとえYouTubeであろうとも拝見できたことは「生きててよかったなあ」という感慨に結びつくものがありました。

3. 音楽は多様性である。

ジャズも好きなんです。しかし、ジャズについては奥手でした。クラシックと同じように理由は「わからん」という一点。じゃあわかるってどういうことよという話になりますが、要は「難解そうに感じる」という誤解でしょう。一旦刷り込まれたイメージはなかなか改変しがたいものです。ジャズは、わからない、暗い、難しい、ややこしい、といった一方的なイメージを押し付けてずい分遠ざけていた時期がありました。うちの奥さんの方がジャズ好きでその影響から徐々に誤解が取れ、いつの間にか私の方がジャズ好きになっていった次第です。

これほど多様性に富んだ領域はないんじゃないでしょうか？私の理解から言います

と、「ジャズとは、その人がそれがジャズだと思った時点で、それはジャズである」ということです。あくまで私論です。「真夏の夜のジャズ」という第5回目のニューポート・ジャズ・フェスティバルというコンサートのドキュメンタリー映画があります。ジャズ好きならみんな知っているような有名な映画ですが、調べたら1959年公開となっていて、私の生まれた年なので、ずい分古い映画ですが、今見てもおしゃれな映画です。このフェスにチャック・ベリーが登場するんです。チャック・ベリーと言えば有名な（この映画が製作された時点ではどのくらい有名だったのかは知りませんが、後出のビートルズにも多大な影響を与えています）ロックンローラーです。私が知っていて一番有名なのは「ジョニー・B.グッド」です。これも映画「バックツアーズ・ザ・フューチャー」の主人公であるマイケル・J・フォックスがダンスパーティーのステージでガンガンにギターを弾きまくるあれです。だから、ロックンロールなんです。その当時は若造であるチャックを登場させても、ジャズというフィールドは痛くも痒くもないけんねという懐の深さを感じました。その見解はいまに至っても変わりません。

もう一つジャズのいいところは、スタンダードと言われる曲を手を変え品を変えいろんなミュージシャンが演奏することが多いということ。同じテーマでも演奏家によって全く違う、その違いを楽しむけど、もと歌も知っている。これは驚きと安心感の両方を差し出される感じで、すごくいい。これってクラシックにも言えることですが。ジャズの場合、同じバンドですってというのはなくて、いろんなメンツで入れ替わり立

ち代わり演奏するのが普通なわけです。セッションと言ったりジャムと言ったり、まさに多様性の音楽だと思います。ビートルズのジョン・レノンはソロになってから「イマジン」という楽曲で「夢想する先に平和な世界がある」と歌いましたが、ジャズが至る所で演奏される世界はきっと今より平和だと思います。そういう意味では、ジャの衰退が言われている近年は世の中は不穏になっているといえるのかもしれませんが。

4. レクイエム

音楽を聴いていると「また、亡くなった人の歌を聴いてる！」と娘から陰口を叩かれることがあります。実際亡くなったのをきっかけに、聴きなおし、そのまま聴きこむことはよくあります。亡くなったミュージシャンなら誰でも聴くというわけではありませんが、一応チェックはします。昨年から今年にかけては特に多くのミュージシャンがなくなったように思います。生前はそれほど聴いていなかったのに、昨年からずっと聴いているのが KAN ちゃんです。もちろん「愛は勝つ」という大ヒットのあるミュージシャンですから生前から知ってはいたわけです。なぜ、他の楽曲をもっと聴いてこなかったのか、残念でなりません。歌はもちろんですが、ピアノのうまさ、クラシックの素養を感じずにはられません。ビートルズやビリー・ジョエル、スティーヴィー・ワンダー風というのではなく、そのものをパクりながら絶妙にアレンジして、自分の楽曲に取り込んでみせるということもいとも簡単にやっておられます（音楽理論的なことにも精通されていたんではと素人ながら思います）。何より KAN ちゃん自身が大の

音楽好きだったんだろうなというのが垣間見れてそこが嬉しくなるのです。詩の内容は基本的にはラブソングですが、切り取る風景が独特で、おしゃれでありながら普遍性を持っている気がします。そんな中で「世界でいちばん好きな人」という歌があります。ラブソングですが、よくできた反戦歌だと思います。自分と彼女との平和な普通の日々と、遠くの戦争を対比させながら、漠然とした不安の中で「せめて僕らは互いを許し生きよう」と穏やかなメロディに乗せて歌ってくれます。さらっと聴くとラブソングにしか聴こえませんが、普通の人々の深い祈りや願いが込められているような気がします。いまこの世情不安が顕在化している世の中でこそ聴かれるべき歌だと思います。

音楽視聴の第二黄金期を迎え、昨年は自分史上一番コンサートを見に行った年になったように思います。ジャクソン・ブラウン（歌声が少しも古びてないのでびっくりした！）を皮切りに、南佳孝（京都文化博物館での弾き語り、特にギターと南さんのボーカルとホールの音響が相まって至福の時間でした！）、そして難波ブルースフェスでは、お馴染みののキーボー（上田正樹）や木村さん（憂歌団の木村充輝）はもちろんのこと、ComplianS の佐藤タイジと KenKen には新たなファンとなりました。そのコンサートでの出来事です。三宅伸治が Spoonful というバンドを率いて演奏始めました。三宅さんは、あの我が永遠のロックアイコン忌野清志郎のバックで長らくリードギターを弾いていたミュージシャンなんです。当然、清志郎の楽曲もやってくれるのは織り込み済みだったのですが、

「JUMP」の特徴的なギターのイントロ、その後続く「夜から朝に変わるいつもの時間に～」と三宅さんが歌い始めると、涙が流れてきたんですわ。音楽を聴いて感極まることはあっても、涙が自然と流れるなんてことは、初めての経験とっていいかもしれません。その時は、よくわからなかったけど、清志郎のことを思い出したというより、「今この場でこの音楽を聴けて、更にはこうやって生きててよかったよな、オレ」というような高揚感であったような気がします。

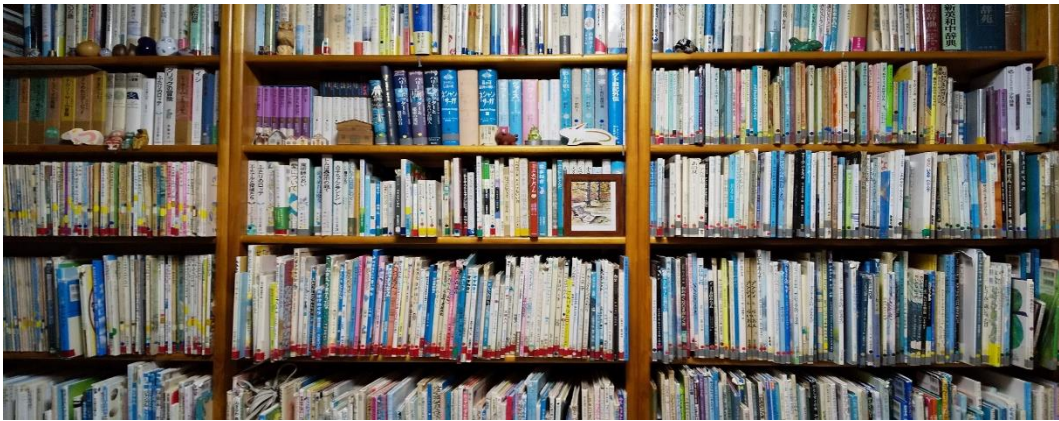
これからも、息をするように音楽を聴き、勇気づけられながら、生きていくのでしょ。完。



けふばあちゃんからの手紙

—その1— あなたへ

じゃりんこ文庫 乾 京子



2024年元旦、お正月のお祝いの後、自宅へ帰っていく長男家族を見送って、うつらうつらしている時にグラグラッ、ゆらゆら。「地震だ！地震だぞ！！どこだ？」とたどたつと夫が二階から下りてきてテレビをつけました。

「能登で震度7の地震。津波が来ます、逃げてください！命を守る行動をしてください！逃げてください！津波が来ます！！」

大変な幕開けとなってしまいました。そろそろ一か月が経とうとしています。落ち着いてきてからの能登の皆さんの日常を思うと、また心が痛みます。

お元気ですか？改めてちいさな日常のありがたさを思っています。そして、それも危ういものなのだということも、だからこそ日々大切にしたいものだとも思っています。

あっ、ごめんなさい。初めてのお便りになります。1994年4月から「じゃりんこ文庫」という家庭文庫を自宅を開いています。毎週木曜日、近所の子どもたちやその知り合い、お母さんと一緒にやってきたり、子どもたちだけでやってきたりしています。折り紙や工作、新聞紙でちゃんばらもあります。おはなしおばちゃんのストーリーテリングを聞いたり、けふばあちゃんの絵本の読み聞かせもあって、帰りに思い思い数冊の絵本や児童書を抱えて帰っていきます。

そんないつものふつう文庫。春には近くの相模川源流への遠足や夏休みのかがくあそび、クリスマスお楽しみ会、コンサートや人形劇、石川の水野スウさんにも来ていただいたり、松本のちいおばさんの人形劇、お琴やアイリッシュハープのコンサートなどの特別な日の「おたのしみ会」。まあ、30年の間には、いろんなことがあったり、いろんな子どもたちもいて、小さな事件もありました。

300 冊ほどの自前の本から始まって、今では 3000 冊くらいの絵本に児童書。大人向けの本も少々。そんな本たちと子どもたちとおとなたち、わいわいがやがや、どってん、ばったんと賑やかだった「じゃりんこ文庫」も今は、数組の親子さんと小学生数人がやってきます。以前のことを思えば静かなものです。以前は、男の子の取っ組み合いにも負けないほどの元気もあつたけふばあちゃんも最近では、「ヨッコラショ。おばちゃんもおばあさんになってきて、すぐには動けないがねえ」と言えば、4 年生の女の子が「けふばあちゃん！ だけど、おばあさんじゃないよ。文庫まだ辞めたらあかんよ。わたし、たのしみなんだもん。行くところなくなるもん。けふばあちゃん、元気でいてよ！」と。

「まあ、うれしいこと。もうちょっと元気でいなあかなあ。」

「黒い画用紙とピンクの画用紙ある？」「はさみと…セロテープと…」

勝手知ったるなんとやら、文房具入れから鋏を出して、テレビの後ろからセロテープも持ってきて、チョコチョコ、……「あつ、そうだ。輪ゴムもほしいなあ」

「けふばあちゃん、見て！ こんなのできた。」、ヘアバンド風猫の耳。ズボンに挟んだピンクのリボンをつけた猫のしっぽ。腕を丸めて、「ニヤ〜ン！」

この子の横で、もくもくと手を動かしていた T ちゃんは、「パチンコだよ。手裏剣もできた！！」

「あつ、5 時半だ。帰らなくちゃ。この本、借りてくね。カード、書いといたよ。」

「私、今日は6時までいいって、ママが言ったよ。もう少しいい？」

30年経った「じゃりんこ文庫」の^{いま}現在の日常です。その日、その日の記録の日記も、No.13になりました。ところどころに写真やお楽しみ会のチラシも挟まれています。パラパラッとめくっていったら、なつかしい子どもたちの顔が浮かんできました。（おおきくなっただろうなあ、どうしているかなあ）

（そうだ！ お手紙を書いてみよう！！）

こうして『けふばあちゃんからの手紙』を始めたいと思います。次回は、まず、はるこちゃんから。来週もきっと抱っこ紐に三番目の子を抱えて、二人の子どもの手を引いてやってくることでしょう。

*「じゃりんこ文庫」日記から、出来事は拾います。でも、名前は皆、私の考えた偽名です。

↓「どうぞおはいりください」 ↓ ふつつ文庫



↓ 宿題やったり、読み聞かせしたりの
ふつつ文庫



じゃりんこ文庫日記と
「じゃりんこ通信」→



編集後記

編集長(ダン シロウ)

●新年早々に能登半島で大きな地震災害が起きた。長くマガジンを発行してきた故の巡り合わせで、「えっまた!」と思った。東日本大震災はマガジン第4号の発行直前のことだった。

原発被災地をのぞけば、被災各地が生活拠点として新しい姿になるのに6~7年かかっていたように思う。

能登各地の回復にもそれくらいかかるのだろう。当然、高齢化の進んでいる地域の被災という面が大きく影響してくるだろうが、それでも人はそこから立ち上がる。それを手伝えることが対人援助学マガジンの枠内にもあるだろう。

時間がかかるのは避けられないから、その中で出来ることを模索するのが非被災地に暮らす者の責務だろう。いろんなメニューが考えられればと思う。

●今回の執筆者短信欄は、高名さん、水野さん、馬渡さんと被災地石川在住の執筆者からの報告から始まっている。是非、ご覧下さい。

●そして今号からの新連載は乾京子さん。子ども文庫活動を長年している人。私の生活圈、ご近所住民でもある。サトウタツヤさんは久々の復活だ。長く続いている「場」は、人が来たり、去ったりしながら、在り続ける。

編集員(チバ アキオ)

社会福祉領域が災害時に担う役割が定着している。全国にある都道府県レベル、市町村レベルの社会福祉協議会のボランティアセンターの運営を代表に有事には福祉人材が各所で活動し、被災地以外からの応援も行われている。国家資格社会福祉士の養成カリキュラムには「災害支援ソーシャルワーク」と銘打ち、1章分学習することが始まり数年たった。私が担当する科目では「避難所の設営」を学生とともに経験する機会を得た。熊本地震での被災地支援、避難所運営経験がある佐藤嘉洋先生(京都光華女子大)が主導し、先生の学生、

地元消防団、地域住民、地元消防署の方とミックスで行なった。実際に開催したのは当初の予定通り2024年1月。その1月に能登で地震があった。地元消防署員の方は、能登への派遣から帰宅後、数日でこの日に私たちのために駆けつけてくださった。「体育館は実際とても寒くて3時間いるだけで耐えられない気持ちになった。同時に、今能登で避難している方たちや今まで震災で避難した経験がある人達はもっと長い間、資源が少ない状態で過ごしているのかと思った。」「率先して行動してくれる人にすべてを任せっきりではいけないという言葉も印象的。被災地では自分にできることを見つけて協力しあうことが最重要だとわかった。生理用品や性被害について、世間ではあまり触れられることがない話題も取り上げてくださって、考えさせられる時間であった。」「実際に避難所は様々な工夫がされている事を学んだ。」「実際に避難所へ行ったことが無いので、今回体育館でシュミレーションしてみて避難所について知ることができた。地域の人たちと考えたりとか、ダンボールのベッドを作って座ってみたりテントを組み立てたり、普段経験出来ないことをすることが出来た。ボランティアについて調べてみたい。」「元々避難所についてほとんど知らなかったのも、実際に現場に行かれている方からお話を聞かせていただいたり、学生などみんなで考えることができて勉強になりました。避難所の中の配置計画では、お年寄りの方は入口に近いところにしたり、体調を崩した際にもすぐに対応できるように休める場所を近くにしたりと工夫が必要だと分かりました。また物資の配布についても、個数が人数より多かった場合や少なかった場合は、優先順位を決めたりすることが大切だと分かりました。もし一人の方が、友達の分までもらうというのは、確認が取れずに混乱してしまい、結果として平等にならないこともあると思います。避難するみんなが少しでも安心して生活できるようにルールを作ることはとても必要だと思います。また生理用品についても、配布の基準が難しいこともあると分かりました。生理用品だけでなく、女性が中心になって動くこともとても大切で、避難所での女性の視点を考えることが必要な時も多いため、私も実際に災害ボランティアに参加したいと思う。特に避難所に避難することになったときは積極的に取り組みたい。」「避難所を運営するのに、こんなにも準備から普段の運営まで人が必要ですることも多くて判断しないといけないことも多くて大変だと思いました。不審者とか、何

か困ったことがあった時に責任を取るのも、ボランティアだと誰がするって話にもなると思う。」「実際避難所開設準備を行って、必要なものを集めることや、各スペースの配置などすることが多く、大変な作業だと感じました。」「福祉避難所の説明を聞いて、どこの場所に何が必要なのかや、一人分の範囲や段ボールベッドの仕組み、必要なものが置いてある倉庫の場所など必要なことをたくさん知りました。大学在学中に大きな災害が起こった時に私は、この体育館に避難することになる気がするので、今日学んだことを忘れないように、もしもの時は、生かせるようにしたい。」代表的なコメントを取りまとめた。現実には当然この経験以上であることは言うまでもない。言葉に簡単にはできない経験も、実生活で、一度にたくさんの方が経験している。また、対人援助学会として、対人援助学マガジンの機能も生かして、できることをしていきたい。その時は皆様も一部を担ってください。

編集員(オオタニ タカシ)

56号の編集会議は過去最速で、その場で各原稿のページ数が確定し、後は目次作りと原稿のページ入れを残すだけとなりました。その後は今の仕事のこと、社会のこと、次の大会のこと、マガジンのことなど、話は尽きません。

その話題のひとつが、メジャーリーガーの大谷選手のこと。話題性と老若男女を問わない知名度は本当にすごいです。私自身は同じ苗字であることもあって、その知名度と人気の高さをほかの人よりも強く感じているかもしれません。その一つが、保育園や幼稚園など、子どものいる場に行った時のことです。見知らぬ大人が園内にいると「誰のお父さん？」「誰ー？」と聞かれるのは定番のやりとりです。ここで「大谷です」と自己紹介をすると…子どもたちは「SHOHEI?」「オオターニサーン！」と口々に盛り上がり、私もちゃっかりその人気にあやかっただけで子どもとの関係作りを助けられています。

もうひとつ、能登半島の震災のことも話題にあがりました。団編集長からの具体的なご提案もあり、マガジンでも何かできることがないか、模索していく方向で検討が進みました。マガジンという仕組みがあるからこそできることをする。このような可能性が開かれていることに、まずは感謝します。

対人援助学マガジン

通巻56号

第14巻 第4号

2024年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

第57号は2024年6月15日

発刊の予定です。

原稿締切2024年5月25日！

執筆希望者、常に募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。ページ制限なしの連載誌です。必要な回数、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。執筆資格は学会員であること。現在非会員で書いていただく事になった方には、本誌は学会ニュースレターの位置づけですので、対人援助学会への入会をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&fax学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

こういう趣向は目先が変わって一寸いいと思ってたまにやるのだが、漫画家仲間からはたいてい馬鹿にされる。ソフトに組み込まれた柄なんかを使って…ということらしい。

センスがいいと思ってやっているわけではなく、でも面白いジャンなんて思うのだ。その結果、レギュラーの表紙ラインナップからも浮いてしまうのだが。

2024/3/15

編集長から号外

京都の私の仕事場と背中合わせのビルの一階に、長く店を構えていたスペイン料理屋があった。25年前、独立したての私は、連日のようにランチに通っていた。美味しかったからだ。店は今、すぐ近くの古民家に移転している。その店主が木下さんで、時々、パエリア・バスの事はSNSでみていた。そして能登震災被災地へのこんな活動を知った。直近では3月27日能登町でパエリアの炊き出しをするそうだ。(団士郎)



次回3回目の炊き出しパエリアの場所が決まりました
〒927-0553 石川県鳳珠郡能登町小木
2024年3月27日11:00
詳しく内容は追ってお知らせします
小木のみなさん 楽しみに待っていてくださいネ



(ご本人SNSより転載)

京都のスペイン料理店が巨大鍋持ち込みパエリア 能登の被災地で炊き出し支援

3/6(水) 10:32

京都新聞



七尾市の支援拠点でパエリアを作る木下さん(1月14日、難民ナウ提供)

🔍 ボタンをタップするとハイライトができます

京都市で難民問題をラジオ発信している団体「難民ナウ」(左京区)と、スペイン料理店(中京区)の店主が、能登半島地震の被災者のための炊き出し活動をしている。――「魚を食べ

(京都新聞記事からの転載)

この活動の応援カンパは下記に

三井住友銀行京都支店

普通預金 口座番号 9733090

名義「一般社団法人難民ナウ」